

「貨幣資本と現実資本」(『資本論』第3部第30-32章)の草稿について : 第3部第1稿の第5章から

OTANI, Teinosuke / 大谷, 禎之介

(出版者 / Publisher)

法政大学経済学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

経済志林 / The Hosei University Economic Review

(巻 / Volume)

64

(号 / Number)

4

(開始ページ / Start Page)

51

(終了ページ / End Page)

308

(発行年 / Year)

1997-03-25

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00008626>

Teinosuke Otani: On the Manuscript for Chap. XXX-XXXII of Book III of "Capital" by Karl Marx: "Monied Capital and Real Capital"
 KEIZAI-SHIRIN (The Hosei University Economic Review), Vol.64, No.4
 Hosei University, Tokyo, Japan, 1997

「貨幣資本と現実資本」(『資本論』第3部 第30-32章)の草稿について

——第3部第1稿の第5章から——

大谷 禎之介

目 次

はじめに

1. 「貨幣資本と現実資本」の三つの章についてのエンゲルスの説明
2. 第3部 MEGA 版での扱いと「混乱」についての編集者の考証
3. 若干の基本的なタームについて
 - (1) 貨幣資本 (monied capital)
 - (2) 貨幣資本 (monied capital) と利子生み資本
 - (3) 貨幣資本 (monied capital) と貨幣資本 (Geldcapital)
 - (4) 貸付可能な資本あるいは貸付可能な貨幣資本
 - (5) 現実資本, 実物資本, 再生産的資本, 再生産過程
 - (6) 貨幣の量
 - (7) 商業信用と貨幣信用
 - (8) 信用システムと信用制度
 - (9) 残された問題
- 【補論】 三宅義夫氏の「大谷批判の一部について」
 ——小野朝男氏による「大谷氏の泣き所」——
4. 第30-32章の草稿, それとエンゲルス版との相違

はじめに

本稿が取り扱うのは、マルクスの第3部第1稿の「第5章 利子と企業利得（産業利潤または商業利潤）への利潤の分裂。利子生み資本」のうち、エンゲルス版第3部の「第30章 貨幣資本と現実資本・Ⅰ」,「第31章 貨幣資本と現実資本・Ⅱ（続き）」, および「第32章 貨幣資本と現実資本・Ⅲ（結び）」の三つの章に利用された部分（草稿の340-352ページおよび353-360ページ）である。この部分は、草稿第5章の「5）信用。架空資本」のなかでマルクス自身によって「Ⅰ」,「Ⅱ」,「Ⅲ」¹⁾という区分番号が与えられた三つの箇所の中の「Ⅲ」にあたる。エンゲルスはこの「Ⅲ」を第30-32章の三つの章に編成したのであった。

本稿では、草稿のこの部分の内容について若干の検討を行なったのち、第3部第1稿についてのこれまでの一連の拙稿²⁾と同様のしかたで、草稿の訳文を掲げ、それに草稿とエンゲルス版との相違を注記し、さらに、第3部のMEGA版の付属資料の「異文目録」,「訂正目録」,「注解」から、該当する部分を訳出、注記する。

- 1) 以下のものを参照されたい。①「貨幣取扱資本」（『資本論』第3部第19章）の草稿について,『経済志林』第50巻第3・4号,1983年。②「信用と架空資本」（『資本論』第3部第25章）の草稿について（中）,『経済志林』第51巻第3号,1983年。③「資本主義的生産における信用の役割」（『資本論』第3部第27章）の草稿について,『経済志林』第52巻第3・4号,1985年。④「利子生み資本」（『資本論』第3部第21章）の草稿について,『経済志林』第56巻第3号,1988年。⑤「利潤の分割」（『資本論』第3部第22章）の草稿について,『経済志林』第56巻第4号,1989年。⑥「利子と企業者利得」（『資本論』第3部第23章）の草稿について,『経済志林』第57巻第1号,1989年。⑦「資本関係の外面化」（『資本論』第3部第24章）の草稿について,『経済志林』第57巻第2号,1989年。⑧「貨幣資本の蓄積」（『資本論』第3部第26章）の草稿について,『経済志林』第57巻第4号,1990年。⑨

「流通手段と資本」(『資本論』第3部第28章)の草稿について、『経済志林』第61巻第3号、1993年。^⑩「銀行資本の構成部分」(『資本論』第3部第29章)の草稿について、『経済志林』第63巻第1号、1995年。

1. 「貨幣資本と現実資本」の三つの章についての エンゲルスの説明

エンゲルスは、彼が編集した『資本論』第3巻への「序文」のなかで、第5篇がおもな困難をもたらしたことを述べたあと、この篇の草稿の状態と彼によるその編集とについてかなり詳しく説明している。そのなかで、「貨幣資本と現実資本」の三つの章とそのあとの諸章に利用した、草稿の「5) 信用。架空資本」の「Ⅲ」以降の部分について、彼は次のように述べている。

まず、第30章と第31章について。

「第30章から、ほんとうの困難が始まった。ここからは、引用文から成っている材料を正しい順序に置くことだけではなく、たえず挿入文や脱線などに中断されながらまた別の箇所ですばしばまったく付随的に続けられている思想の進行を正しい順序に置くことも必要だった。こうして第30章は入れ替えや削除によってできあがり、この削除されたもののためには別の箇所での使いみちが見いだされた。第31章はふたたびかなりよくまとめて書き上げてあった。」(MEW, Bd. 25, S. 13.)

続いて、このあとに置かれている「混乱」と題する抜萃録について。

「次には、草稿では「混乱」という表題をつけた長い一篇が続き、それは1848年と1857年との恐慌に関する議会報告書からの抜き書きだけから成っていて、そこでは、ことに貨幣と資本、金流出、過度投機などに関する23人の実業家や経済著述家の陳述がまとめてあり、あちこちにユーモラスな短い傍注がつけてある。ここでは、貨幣と資

本との関係について当時行なわれていたほとんどすべての見解が質問者なり答弁者なりによって代表されている。そして、貨幣市場ではなにか貨幣でなにか資本であるかということについてのここで明るみに出てくる「混乱」をマルクスは批判的に風刺的に取り扱おうとしたのである。私は、いろいろやってみたあげくに、この章を組み立てることは不可能だということをさとった。材料のうちでもことにマルクスが傍注をつけているものは、それが関連があると思われた箇所を利用した。」(同前。)

そのあと、第 32 章に利用した部分とそれに続く部分について。

「その次には、私が第 32 章で取り入れたものがかなりよく整理されて続いているが、そのすぐ次にはまた、この篇のなかで触れているありとあらゆる対象に関する議会報告書からとった一団の新しい抜き書きに著者の長短の評言を混ぜたものが続いている。終わりのほうに行くにしたがって抜き書きも傍注もますます貨幣金属と為替相場との運動に集中してゆき、ふたたび各種の補遺的なもので終わっている。」(同前。)

最後に、エンゲルスは、「「混乱」から始まる、そしてすでにそれ以前の箇所で取り入れられなかったかぎりでの、すべてのこれらの材料」から、「第 33 章 信用システムのもとでの流通手段」、「第 34 章 通貨主義とイギリスの銀行立法」、「第 35 章 貴金属と為替相場」の三つの章をつくった、と述べている。

2. 第 3 部 MEGA 版での扱いと「混乱」についての 編集者の考証

『資本論』第 3 部第 1 稿を収めた MEGA 第 2 部第 4 巻第 2 分冊が 1993 年に公刊され、われわれはそれによって、エンゲルスが第 30-35 章に利用したマルクスの草稿を、もとのままの姿で見ることができるようになった。

エンゲルス版で「第5篇」とされた草稿の「第5章」は、「1)」-「6)」の六つの節から成り、そのうちの「5) 信用。架空資本」から、エンゲルスは彼の版の第25-35章をつくった。この「5)」のなかで、その内部をさらに区分する項目番号と見られるのは、ただ、エンゲルス版の第28章の冒頭にあたるところに「I)」, 第29章の冒頭にあたるところに「II)」, 第30章の冒頭にあたるところに「III)」と書かれている、この三つだけであり、表題等はまったく見あたらない。エンゲルスによって「貨幣資本と現実資本・I-III」という表題が与えられたエンゲルス版の第30-32章は、おおむね、マルクスが「III)」とみなしていたのではないかと考えられる部分に対応している。

「5) 信用。架空資本」のうちの「III)」以降の部分は次のようになっている。

- ① まず、エンゲルスが第30-31章に利用した、「III)」という区分番号が記された草稿340ページから352ページまでの部分がある。
- ② 続いて、マルクスが「混乱」という表題を記した352aページから352jページまでの部分がある。
- ③ それに続く、エンゲルスが第32章に利用した草稿353-360ページの部分には、MEGA編集者によって「III) 561ページからの続き」という表題が与えられている。ここで「561ページ」というのは、①の部分の終わりがあるMEGAのページである。
- ④ そのあと、エンゲルスが「この篇のなかで触れているありとあらゆる対象に関する議会報告書からとった一団の新しい抜き書きに著者の長短の表現を混ぜたもの」と書いていた、草稿の360ページから始まり392ページに終わる部分がくるが、MEGA編集者はこの部分をさきの「混乱」の続きと見なして、これに「混乱。583ページの続き」という表題を与えている。「583ページ」というのは、「混乱」の終わりがあるMEGAのページである。

草稿ではこのように、「III)」の本文のあいだに「混乱」が割り込んでい

るかたちになっているのであるが、この「混乱」が書かれた諸ページには、いま記したように、「352a-352j」という独自のページ番号が与えられている。これはなぜなのであろうか。

この点について MEGA の編集者は「付属資料〔Apparat〕」の「成立と来歴」のなかで、このページづけは、「混乱」が本文の 352 ページに続けて書かれたものではなく、すでに本文の執筆と並行してつくられていた抜萃録をあとからここに挟み込んだのだとする、次のような考証を行っている。

「注目に値するのは、項目 I), II), III) での叙述……が、さきに見た経験的・学説史的な記述にもとづいてなされているということ、つまり事実のこの収録・分析はこれらの項目の執筆よりもまえに行なわれたのだ、ということである。このことは、もろもろの理論的説明からわかるだけでなく、さらにまた特定の引用そのものが第 5 章のこのような成立の経過を確認している。たとえば 328 ページ（〔MEGA〕505 ページ）では、トマス・トゥック、ジェイムズ・ウィルソンその他の見解に言及されているが、マルクスが、352a-352j ページで抜萃されていた彼らの文言のことを考えていたことはまったく明白である。330 ページ（〔MEGA〕510 ページ）は、あるリヴァプール銀行理事の証言への関説を含んでいるが、マルクスが、370 ページ（〔MEGA〕617 ページ）で引用されていた証言のことを言っていたことは確かである。結局この材料収録は第 5 章のなかにはめ込まれたのであるが、これは実際のところ、ただ草稿のなかに挟み込んだというだけのことであった。そのさい、「混乱」の表題をもつ、とりあえず「a」から「j」までの記号だけがつけられていたページのそれぞれには、さらに 352 という数字がつけ加えられた。おそらくこの段階で、材料収録のもう一つの部分にも、360 から 392 までのページ番号がつけられたのにちがいない。」（MEGA, II/4.2, S. 923. 拙稿『「資本論」第 3 部第 1 稿の MEGA 版について』、『経済志林』第 62 巻第 2 号、

1994年、305-306ページ。)

これはきわめて興味深い推定である。しかし、この推定は、さらに慎重に検討されなければならない。編集者はここですで、「もろもろの理論的説明からわかる」と言っているが、どんな説明のことなのかまったく述べていない。次に挙げられている、「第5章のこのような成立の経過を確認している」という二つ「特定の引用」のうち、第1のものは、エンゲルス版第28章の冒頭の部分で「トマス・トゥック、ジェイムズ・ウィルソンその他の見解に言及されている」が、そのさいに「マルクスが、352a-352j ページで抜萃されていた彼らの文言のことを考えていたことはまったく明白である」というものである。たしかに、「混乱」には「彼らの文言」が抜萃されている。しかし、マルクスが第28章でトゥックなどに論及したときに彼が「混乱」での抜萃を利用したと言えるのか、疑問なしとしない。第2のものは、同じ第28章で、マルクスが「リヴァプールの銀行理事の証言を見よ」(拙稿「流通手段と資本」の草稿について、『経済志林』第61巻第2号、1993年、230ページ)と書いたときに、彼は「混乱。続き」のなかでの引用部分を目の前に置いていたことは「確かだ」というのであるが、彼がここで引用されている証言を念頭に置いていたとしても、それがすでに抜萃として目の前にあったかどうかについては、「確か」なことは言えないのではないであろうか。しかも、「混乱。続き」は360ページから始まっており、「リヴァプールの銀行理事の証言」があるのは370ページであるから、このとき「混乱。続き」は少なくともすでに10ページは書かれていたのであり、そのようなノートになんらかのページ番号がつけられていなかったとは考えられない。ところが、実際の「混乱。続き」のページ番号は、360ページから始まっているのであって、「混乱」のように、「352a-352j」といった独自のページづけとはなっていないのである。このように見てくると、編集者の推定は、興味深いものではあっても、少なくとも挙げられている論拠はきわめて薄弱なものだと言わざるをえないのである。

さらに、かりに上の編集者の論拠が正しく、352 ページを書いたときよりも前から「混乱」の部分が書き始められていたとしても、はたして「混乱」も「混乱。続き」もすべて書き終えられていて、それらがあとからだそれぞれの箇所にただ挟み込まれたただけだと言えるかどうか問題である。たとえば、マルクスが草稿の 352 ページで、本文のなかに脚注 a) と次の脚注 b) との二つの注記号をつけながら、それらの脚注そのものを書かなかったことは、マルクスがそれらを書かないうちにほかのことにかかり、そのままになってしまったことを示唆しているのではないであろうか。このことは、草稿でこの次にとこに置かれている「混乱」の部分が、これに続いて最初のところから書かれたものでなかったとしても、少なくとも、エンゲルス版の第 31 章部分を書き終えてから第 32 章部分にかかるまでのあいだに、「混乱」に携わるなんらかの作業があったのではないかと推測させるのである。もしそうであったとすれば、少なくとも「混乱」のどこからかあとはこの時点で書かれたということになる。

「混乱。続き」については、それ以上に、そのページづけの状態から見て、本文と並行的に作成されていたノートだったと見ることはかなり難しいのではないかと筆者は考えている。

MEGA 編集者の推定には、以上のような疑問があるのであるが、しかし、いずれにしても、「混乱」の部分が「352a-352j ページ」という独自のページづけをもつ抜萃録であることは明らかであり、この「352a-352j ページ」を除く草稿の 340-360 ページを「Ⅲ」の本文の部分と見なすべきことも確かである。

そこで、本稿では、エンゲルスが第 30-32 章に利用した上記の①と②の部分をもとめて取り扱うことにし、「混乱」は別稿の対象とすることにしたのである。

3. 若干の基本的なタームについて

草稿第5章の「5) 信用。架空資本」の本論は「Ⅰ)」-「Ⅲ)」の部分であるが、このうちの「Ⅲ)」こそはその本論の核心にあたるところであり、したがって、ここでマルクスが、なにをどのように論じているかということとを正確に読み取ることが、マルクスの利子・信用論の理解にとって決定的に重要であることは言うまでもない。

われわれが『資本論』第3部のエンゲルス版しかもたなかったときには、われわれはその第30-32章によってこの「Ⅲ)」に接していたのであるが、ただしエンゲルスによる編集作業というスクリーンを通してであった。MEGA第2部第4巻で公刊されたマルクスの草稿を見ると、そのスクリーンがかなり厚いものであったことがわかる。

それにもかかわらず、これまでもすでに、「Ⅲ)」の全体像はかなり正確にとらえられ、またその個々の内容もかなり立ち入って分析されてきている。たとえば、深町郁彌氏執筆による、『講座・資本論体系』第6巻「利子・信用」(有斐閣、1985年)での「貨幣資本と現実資本」についての「原典解説」(同書、125-162ページ)では、エンゲルス版第30-32章での錯綜した記述のなかから、そこで提起されている問題とマルクスによるそこでの論述の内容が、手際よく、かつ深く掘り下げて解説されており、MEGA版によって草稿そのものを読むことが可能となっただけでも、それは草稿中の「Ⅲ)」の優れた解説としての意義をもっている。また、先年刊行された川波洋一氏の著書『貨幣資本と現実資本』(有斐閣、1995年)は、それ自体としてはすでにMEGA版を使用されたものであるが、その「第1篇「貨幣資本と現実資本」の基本構成」のうちの「第1章「貨幣資本と現実資本」の成立——理論史的考察——」および「第2章 信用論における「貨幣資本と現実資本」——構造的分析——」(同書、3-93ページ)での論述の内容それ自体は、おおむね、氏がMEGA版刊行以前から

なされてきた研究によるものであり、「Ⅲ」の研究としてきわめて水準の高いものである¹⁾。

そこで、ここでは、「Ⅲ」の内容や位置についての筆者の理解を仔細に述べることはせず、われわれが草稿そのものに即したときに直面する若干の基本的なタームを、できるだけ典拠をあげながら見ておくにとどめたい。ここで「概念」と言わずに「ターム」と言うのは、概念の内容だけでなく、まずもってその用語そのものに注目することが必要と考えるからである。このうちの多くは、すでに、拙稿「信用と架空資本」の草稿についての「(上)」,「(下)」, その他で触れたものであるが、ここで改めて整理しておくことにしよう。(なお、マルクスからの引用のなかでの下線はマルクスによる強調であり、太字体と傍点は筆者によるものである。)

- 1) 筆者がここで深町氏と川波氏の業績に言及したのは、それらが「Ⅲ」でのマルクスの記述の意味と内容とを読み取るのに直接に大いに役立つものだと考えているからであって、両氏によるマルクス解釈の個々の内容や両氏の積極的主張に基本的に同意しているからではない。無用の誤解を避けるために一言しておく。

(1) 貨幣資本 (monied Capital)

まず、エンゲルス版の表題にも示されているように、この部分の最も基本的なタームが「貨幣資本」と「現実資本」であることに異論はないであろう。念のために、この部分の冒頭で提起されている問題を確認しておこう。

「これから取り組もうとしている、この信用の件 [Creditgeschichte]¹⁾ 全体のなかでも比類なく困難な問題は、次のようなものである。——第1に、本来の貨幣資本の蓄積。これはどの程度まで、現実の資本蓄積の、すなわち拡大された規模での再生産の指標なのか、またどの程度までそうでないのか？ いわゆる資本のプレトラ（この表現は、つねに貨幣資本 [monied Capital] について用いられるも

のである)、——これは過剰生産と並ぶ一つの特殊な現象をなすものなのか、それとも過剰生産を表現するための一つの特殊な仕方になすぎないのか? 貨幣資本〔monied capital〕の過剰供給は、どの程度まで、停滞している貨幣量(鑄貨\地金または銀行券)と同時に生じ、したがって貨幣量の増大で表現されるのか?」(MEGA, II/4.2, S. 529.)

これらの問題のうちの第1のものは、エンゲルス版第31章の冒頭のとこで、ふたたび、次のように繰り返されている。

「しかし、ここでの問題はそもそも、どの程度まで貨幣資本〔monied Capital〕の過剰が、あるいはもっと適切に言えば、どの程度まで貸付可能な貨幣資本〔loanable monied capital〕の形態での資本の蓄積が、現実の蓄積と同時に生じるのか、ということである。」(MEGA, II/4.2, S. 547.)

つまり、この前の部分では、この問題について、まだ論じ尽くしていないのである。そしてさらに、エンゲルス版第32章の前から3分の1ほどの箇所(MEW版526ページと527ページのあいだ)にあたるところで、マルクスはまたしても、ただし、今度はさきの二つの問題を繰り返し提起している。(この部分は、エンゲルス版では削除されている。)

「さて、二つの問題に答えなければならない。第1に、貨幣資本〔monied Capital〕の相対的な増大または減少は、要するにそれの一時的な、またはもっと継続的な蓄積は、生産的資本の蓄積とどのような関係にあるのか? そして第2に、それは、なんらかの形態で国内にある貨幣量とはどのような関係にあるのか?」(MEGA, II/4.2, S. 588-589.)

ここでも、最初の二つの問題に、まだ「答えなければならない」状態にあることが分かる。

この三度にわたる問題提起を見れば、「Ⅲ」の基本問題が、一貫して、まさにその冒頭で立てられた問題であったことは疑いようがない。

ここで提起されている二つの問題とは、第1に、「本来の貨幣資本の蓄積」と「現実の資本蓄積」との関連を問う問題であり、そのキーワードは「貨幣資本〔monied capital〕」と「現実資本」である。第2に、「貨幣資本の過剰供給」と「停滞している貨幣の量」との関連を問う問題であり、そのキーワードは「貨幣資本〔monied capital〕」と一国にある「貨幣の量」である。要するに、マルクスはこの「Ⅲ」で、「貨幣資本」という独自の資本が、一方で「現実資本」と、他方で「貨幣量」とどのような関連をもっているか、ということの問題にしているのである。ここでの最も基本的なタームが「貨幣資本」という資本であることは明らかである。

そこで、この「貨幣資本」というタームは、この「Ⅲ」のなかで、どのようなかたちで登場しているのだろうか。というのも、エンゲルス版では、第30-32章のなかでは、この「貨幣資本」というタームよりも「貸付資本」というタームのほうが圧倒的であるように見えるからである。じつは、草稿で「貨幣資本〔monied Capital または moneyed Capital〕」となっているところの大部分を、エンゲルスが「貸付資本」に変更したのである。ところが、草稿の「Ⅲ」には、「貸付けられた資本」という表現が二つある（しかもどちらも、銀行から「貸付けられた」という意味ではない！）ほかに、なんと、「貸付資本〔Leihkapital〕」というタームは一度も使われていない²⁹。

それでは、それ以外のタームでこの同じものを表現しているのだろうか。否。最初から最後まで、まさに一貫してほとんど monied Capital または moneyed Capital というタームだけを使っているのである。「Ⅲ」では、この両者が122回使われている。Geldcapital というドイツ語は、同じ monied capital（広義の monied capital）の意味で使われているものと生産的資本の循環形態としての貨幣資本を意味するものとを合わせて13回書かれている。そのほかにやや独自のニュアンスをもって使われている money Capita が2回ある。さらに、「最も基本的なターム」が「貨幣資本」だと言ったのであるが、さらに鮮明に、ここでの最も基本的

なタームは monied Capital または moneyed Capital である、と断言することができる。この両語のあいだにはまったくなんの区別もないから、以後は簡単に、monied capital で両語を代表させることにしよう。

この monied capital の意味については、この「Ⅲ」では、もう自明のこととして説明されていない。というのも、すでに、まず「5) 信用。架空資本」の冒頭の第4パラグラフでそれが明瞭に示され、さらに「Ⅰ」および「Ⅱ」の冒頭で、ふたたびこの語の意味するところを明示していたからである。

①「すでに前章で見たように、商人等々の準備金の保管、貨幣の払い出しや受け取りの技術的諸操作、国際的支払（したがってまた地金取引）は、貨幣取扱業者の手に集中される。貨幣取扱業というこの土台のうえで信用制度の他方の側面が発展し、〔それに〕結びついている、——すなわち、貨幣取扱業者の特殊的機能としての、利子生み資本あるいは貨幣資本〔monied capital〕の管理である。貨幣の貸借が彼らの特殊的業務になる。彼らは貨幣資本〔monied capital〕の現実の貸し手と借り手とのあいだに媒介者としてはいつてくる。一般的に表現すれば、銀行業者の業務は、一方では、貸付可能な貨幣資本〔d. loanable Geldcapital〕を自分の手中に大規模に集中することにより、したがって個々の貸し手に代わって銀行業者がすべての貨幣の貸し手の代表者として再生産的資本家に相対するようになる。彼らは貨幣資本〔monied capital〕の一般的な管理者としてそれを自分の手中に集中する。他方では、彼らは、商業世界全体のために借りるということによって、すべての貸し手に対して借り手を集中する。（彼らの利潤は、一般的に言えば、彼らが貸すときの利子よりも低い利子で借りるということにある。）銀行は、一面では、貨幣資本〔monied capital〕の、貸し手の集中を表わし、多面では借り手の集中を表わしているのである。」(MEGA, II/4.2, S. 471. 拙稿「『信用と架空資本』の草稿について(中)」、『経済志林』第51巻第3号, 1983年, 13ページ。)

②「トゥック、ウィルスン、等々がしている、Circulation と資本との区別は、そしてこの区別をするさいに、貨幣としての流通手段と、貨幣と、貨幣資本と、利子生み資本（英語の意味での moneyed Capital）とのあいだの諸区別が、乱雑に混同されるのであるが、次の二つのことに帰着する。」（MEGA, II/4.2, S. 505. 拙稿「流通手段と資本」の草稿について、『経済志林』第 61 巻第 3 号, 1993 年, 212 ページ。なお、拙稿ではこの部分に誤記があり、それを「銀行資本の構成部分」の草稿について（『経済志林』第 63 巻第 1 号, 1995 年）に付した「正誤表」で訂正しておいた。ここでは、訂正された文を掲げた。）

③「ところが、もっとあとの研究で明らかにするように、そのようにして「貨幣資本〔Geldcapital〕」が「利子生み資本」の意味での「moneyed Capital」と混同されるのであって、前者の意味では資本はつねに、それ自身がとる「商品資本」および「生産的資本」という形態とは区別されたものとしての「貨幣資本〔Geldcapital〕」なのである。」（MEGA, II/4.2, S. 519. 拙稿「銀行資本の構成部分」の草稿について、『経済志林』第 63 巻第 1 号, 1995 年, 14 ページ。）

要するに、「貨幣資本〔monied capital〕」とは、信用制度（Kreditwesen）のもとで、媒介者としての銀行業者³¹の手中に集中し、彼らから利子生み資本として貸し出される、貨幣形態にある資本である。

ここからただちに出てくることは、貨幣資本（monied capital）については、つねに、それが銀行業者のもとにどれだけの量のものとして存在しているのか、ということだけでなく、むしろそのことを規定する諸契機が、すなわち、媒介者としての彼らに、だれが、なぜ、どのようにして自己の貨幣資本（monied capital）を供給するのか、媒介者としての彼らに対して、だれが、なぜ、どのようなかたちで貨幣資本（monied capital）を需要するのか、ということが、本質的な問題になるのだ、ということである。貨幣資本（monied capital）と現実資本との関連を問うと

いうのは、結局のところ、この本質的な問題を、現実資本ないし現実の再生産過程との関連において明らかにする、ということになるであろう。

- 1) Creditgeschichte の Geschichte は「歴史」という意味ではない。「信用の歴史」と誤解し、誤訳しておられる方もあるので、一言しておく。
- 2) そもそも、マルクスは第5章のなかで、Leihkapital というタームをまったく使っていない。草稿でのマルクスの語で、邦訳で「貸付資本」と訳されているものは、すべて verliehenes Capital あるいは geliehenes Capital つまり「貸し付けられた資本」ないし「貸し付けられる資本」である。それらが使われている箇所を見れば、マルクスがこれらの語を、彼の言う「貨幣資本 [monied capital]」と同義で、あるいはその言い換えとして使ったとはどうてい考えられない。エンゲルスが「貨幣資本 [monied capital]」を「貸付資本 [Leihkapital]」で置き換えたことの是非は別として、少なくとも、エンゲルスのこの置き換えが、マルクス自身がやったことを徹底する作業だったのでなく、エンゲルスによる独自の判断による作業であったことは明らかである。
- 3) 銀行業者を「媒介者」として把握する観点は重要である。なぜなら、それは、銀行の本質をどこに見るか、ということに関わる事柄だからである。マルクスが次のように書いていることに注目されたい。

①「遊休している貨幣——すなわち市場に貨幣資本として投じられる貨幣——は貸し付けられ、他人によって借りられるのであって、このこともまた、さまざまな形態(貸付、割引、等々)において貨幣取扱業の特殊的機能として現われる。貨幣取扱業はこうして同時に、貸付可能な資本について、商人が諸商品についてそうであるのと同じもの、つまり貨幣資本の需要・供給を突きあわせ集中させる媒介者 [Vermittler] でもあるのである。」(MEGA, II/3.5, S. 1578.『資本論草稿集』⑧, 59 ページ。)

②「貨幣取扱業というこの土台のうえで信用制度の他方の側面が発展し、[それに] 結びついている、——すなわち、貨幣取扱業者の特殊的機能としての、利子生み資本あるいは貨幣資本 [monied capital] の管理である。貨幣の貸借が彼らの特殊的業務になる。貨幣の貸借が彼らの特殊的業務になる。彼らは貨幣資本 [monied capital] の現実の貸し手と借り手とのあいだに媒介者 [Vermittler] としてはいつてくる。一般的に表現すれば、銀行業者の業務は、一方では、貸付可能な貨幣資本 [d. loanable Geldcapital] を自分の手中に大規模に集中することにあり、したがって個々の貸し手に代わって銀行業者がすべての貨幣の貸し手の代表者として再生産的資本家に相対するようになる。」(MEGA, II/4.2, S. 471. 拙稿

「信用と架空資本」の草稿について（中）, 『経済志林』第51巻第3号, 1983年, 13ページ。）

③「貨幣資本の蓄積を……私的な貸し手であろうと公的な借り手（国家）や再生産的な借り手であろうと、彼らの媒介者〔Vermittler〕としての銀行業者（職業的な貨幣貸付業者〔moneylender〕）の手中にある富の蓄積のことだと解することができるであろう。」（MEGA, II/4.2, S. 531.）

④「それは、産業家や商人が彼らどうしのあいだで再生産過程の循環の内部でなしあう前貸〔Vorschüsse〕でもなくて〔ただしこの点には立ち返らなければならないのだが〕、もっぱら、銀行業者（媒介者〔medium〕としての）によって産業家や商業家にたいしてなされる貨幣貸付〔Geld-loan〕だけを問題にするのである。」（MEGA, II/4.2, S. 532.）

⑤「それは同時に、この資本の処分権はまったく仲介者〔Mittelperson〕としての銀行業者たちの手に握られてしまう、ということを表現している。」（MEGA, II/4.2, S. 585.）

（2）貨幣資本（monied capital）と利子生み資本

ここで、あらためて、そのような「貨幣資本〔monied capital〕」と「利子生み資本」の概念との関連について、一言しておこう。

マルクスは、一見すると、「利子生み資本」と「貨幣資本〔monied capital〕」とを同じものと見ているかのような記述をあちこちで書いている。いま引用したものを含めて、若干のものを挙げよう。

①「いまなお通俗観念では貨幣資本〔monied capital〕, 利子生み資本が、資本そのもの〔Capital als solches〕, 「とりわけすぐれた」資本〔das Capital „κατ' ἐξοχήν“〕と見なされることになる。」（MEGA, II/4.2, S. 447. 草稿「利子と企業者利得」の草稿について, 『経済志林』第57巻第1号, 1989年, 80ページ。）

②「貨幣取扱業というこの土台のうえで信用制度〔Creditwesen〕の他方の側面が発展し、〔それに〕結びついている、——すなわち、貨幣取扱業者の特殊的機能としての、利子生み資本または貨幣資本〔monied capital〕の管理である。」（MEGA, II/4.2, S. 471. 草稿「信用と架空資本」の草稿について（中）, 『経済志林』第51巻第3号,

1989年, 13 ページ。)

③「トック、ウィルスン、等々がしている、Circulation と資本との区別は、そしてこの区別をするさいに、鋳貨としての流通手段と、貨幣と、貨幣資本と、利子生み資本（英語の意味での moneyed Capital）とのあいだの諸区別が、乱雑に混同されるのであるが、次の二つのことに帰着する。」(MEGA, II/4.2, S. 505. 拙稿「流通手段と資本」の草稿について, 『経済志林』第61巻第3号, 1993年, 212 ページ。)

④「ところが、もっとあとの研究で明らかにするように、そのようにして「貨幣資本 [Geldcapital]」が「利子生み資本」の意味での「moneyed Capital」と混同されるのであって、前者の意味では資本はつねに、それ自身がとる「商品資本」および「生産的資本」という形態とは区別されたものとしての「貨幣資本 [Geldcapital]」なのである。」(MEGA, II/4.2, S. 519. 拙稿「銀行資本の構成部分」の草稿について, 『経済志林』第63巻第1号, 1995年, 14 ページ。)

⑤「すべて資本主義的生産の国には、膨大な量のいわゆる利子生み資本または貨幣資本 [das s. g. Zinstragende oder moneyed capital] がこうした形態で存在している。」(MEGA, II/4.2, S. 524. 拙稿, 同前, 32 ページ。)

①では「貨幣資本 [monied capital]」が「利子生み資本」と言い換えられている。②および⑤の「利子生み資本または貨幣資本 [monied capital]」での「または [oder]」は「すなわち」を意味するものと考えてよいであろう。③では、ここで言う「利子生み資本」とは、英語で普通「貨幣資本 [monied capital]」と呼ばれているもののことなのだ、と言っている。④では、「貨幣資本 [monied capital]」とは、資本の循環形態としての「貨幣資本」とは区別される「利子生み資本」のことなのだ、としている。

「利子生み資本」の概念を与えているエンゲルス版第21章にあたる「1」)

でも、なんの断りもなしに、「貨幣資本〔monied capital〕」という語を「利子生み資本」を意味するものとして使っている。

①「資本が貨幣の貸し手によって——貨幣資本〔monied Capital〕の形態で〔——〕商品として手放されるということ、または、彼の自由に使える商品が第三者に資本として手放されるということは、ただこの譲渡という過程によってのみ行なわれるのである。」(MEGA, II/4.2, S. 423. 拙稿「「利子生み資本」の草稿について」、『経済志林』第56巻第3号, 1988年, 53ページ。)

②「それゆえ、価格が商品の価値を表わすように、利子は貨幣資本〔monied capital〕の価値増殖を表わすのであり、だからまた、それにたいして貸し手によって支払われる価格として現われる。」(MEGA, II/4.2, S. 429. 拙稿, 同前, 60ページ。)

③「ところが、貨幣資本〔monied capital〕はそうではない。ここでは競争が法則からの偏倚を規定するのではなく、競争によって強制される法則よりほかには分割の法則は存在しないのである。」(MEGA, II/4.2, S. 430. 拙稿, 同前, 66ページ。)

これらの「貨幣資本〔monied capital〕」が「利子生み資本」にはほかならないことは、その前後から明らかである。

それでは、「利子生み資本」と「貨幣資本〔monied capital〕」とは、マルクスにあっては同じものであったのであろうか。そうであると同時にそうでない、と言わなければならない。

すなわち、マルクスは、もろもろの種類の資本家や実務家や経済学者が「貨幣資本〔monied capital〕」と呼んでいたものの、資本としての最も本質的な規定を概念的に「利子生み資本」として把握した。そのかぎり、「貨幣資本〔monied capital〕」は「利子生み資本」である。マルクスの「利子生み資本」の概念は、まさに「貨幣資本〔monied capital〕」からつかみだされたもの、抽象されたものであった。だからこそ、「利子生み資本」の人格化である資本家は、草稿第5章の冒頭から、一貫して「貨幣

資本家〔monied capitalist〕だったのである。

しかし、資本家や実務家や経済学者が「貨幣資本〔monied capital〕」と呼んでいたものは、信用制度のもとでの貨幣市場に大量の供給として現われ、大量の需要に相対する、資本としての規定性における商品としての貨幣であった。それは、信用制度下の「利子生み資本」の具体的な形態にはかならなかった。だから、「貨幣資本〔monied capital〕」から「利子生み資本」の概念を抽象するとは、信用制度下の「利子生み資本」のとしている具体的諸形態を度外視すること、捨象することであった。

だから、形態規定としての「利子生み資本」を純粹に取り扱うときには、したがって、草稿第5章の「1)」-「4)」（エンゲルス版第21-24章）では、基本的には、それらの具体的諸形態は度外視されているのである。

これにたいして、「5) 信用。架空資本」では、「利子生み資本」の概念はすでに与えられたものとして、すなわち「貨幣資本〔monied capital〕」が「利子生み資本」であることはすでに把握されたものとして、こんどはその「利子生み資本」が信用制度のもとでとっている具体的諸形態としての「貨幣資本〔monied capital〕」そのもののほうに目を移すことになる。

それでは、信用制度のもとでの利子生み資本の特質はどこにあるのか。それは、端的に言って、「信用制度〔Creditwesen〕」の発展とこの発展に結びついた信用制度の集中とが、貸付可能な資本〔loanable Capital〕に一般的社会的な性格を与える」（MEGA, II/4.2, S. 438. 拙稿「「利潤の分割」の草稿について」、『経済志林』第56巻第4号、27ページ）、という点にある。この特質を最もよく述べていると思われるのは、第5章「2)」での次の箇所である。

「貨幣資本（貨幣市場での資本）は現実には次のような姿態〔Gestalt〕をもっている。すなわち、その姿態で貨幣資本は共同的な要素として、その特殊な充用にはかわりなしに、それぞれの特殊の部面の生産上の要求に応じていろいろな部面のあいだに、資本家階級のあいだに、配分されるのである。そのうえに、大工業の発展につれ

てますます貨幣資本は、それが市場に現われるかぎりでは、個別資本家、すなわち市場にある資本のあれこれの断片の所有者によって代表されるのではなくて、集中され組織されて、現実の生産とはまったく違った仕方では、社会的資本を代表する銀行業者の統制のもとに現われる。したがって需要の形態から見れば、この資本には一階級の重みが相対しており、同様に供給から見ても、この資本は、大量にまとまった〔en masse〕貸付可能な資本〔verleihbares Capital〕として〔現われる〕のである。」(MEGA, II/4.2, S. 440-441. 拙稿, 同前, 31-32 ページ。)

「貨幣資本〔monied capital〕」とは、このような姿態をとっている「利子生み資本」にはかならない。このような意味で「貨幣資本〔monied capital〕」と言うときには、この語はすでに、「利子生み資本」の概念そのものを意味するのではなくて、信用制度のもとでの貨幣市場での利子生み資本を意味している。それは、たんなる「利子生み資本」の概念よりももっと豊富な内容をもった概念なのである。

さて、さきに述べたように、草稿第5章の「5) 信用。架空資本」では、「利子生み資本」の概念はすでに与えられており、利子生み資本はこんどは、いま言ったような意味での「貨幣資本〔monied capital〕」として、つまり信用制度のもとでの利子生み資本として現われるのであるが、しかし、そこでの叙述は、いきなり信用制度のもとでの利子生み資本を論じるということになっていない。それを本格的に論じるのは、マルクスが「I)」、「II)」、「III)」という項目番号をつけた部分にはいつてからである。それまでの部分で、マルクスはまず、信用制度について、その仕組みと資本主義的生産におけるその意義とを明らかにする。エンゲルス版第25章の最初の部分と第27章とに利用された草稿部分がそれにあたる。それは、マルクスが「5) 信用。架空資本」の冒頭で、「信用制度〔Creditwesen〕とそれが自分のためにつくりだす信用貨幣などのような諸用具との分析は、われわれの計画の範囲外にある」と明確に断っているように、信用制度の

本格的な分析(「特殊研究」としての「信用論」)ではなくて、信用制度下の利子生み資本を論じるための準備的考察である。「5) 信用。架空資本」では、信用制度下の利子生み資本すなわち貨幣資本(monied capital)を論じる「I)」以降の部分こそが本論であって、第25章および第27章部分での信用制度論は、この本論のための序論と言うべきであろう。このことを理解したときに、マルクスが、第25章および第27章部分でのこの序論が終わったところで書きつけた次の一文の意味がよく分かるのである。

「これまでわれわれは主として信用制度〔Creditwesen〕の発展{そしてそれに含まれている資本所有の潜在的な止揚}を、主として生産的資本に関連して、考察した。いまわれわれは、利子生み資本そのもの{信用制度による利子生み資本への影響、ならびに利子生み資本がとる形態}の考察に移る……。」(MEGA, II/4.2, S.504-505. 拙稿「資本主義的生産における信用の役割」の草稿について、『経済志林』第52巻第3・4号、1985年、(43)-(44)ページ。)

ここで「利子生み資本そのもの……の考察」と言っているものが、利子生み資本の概念的把握のような基礎的考察のことでないことは、誰しも認めるであろう。それは、信用制度のもとでの利子生み資本、すなわち貨幣資本(monied capital)の「考察」なのである。それでは、なぜここで、「利子生み資本そのもの〔als solches〕」と言ったのであろうか。その考察こそ「1)」～「4)」ではなかったのか。このことを理解するためには、第25章および第27章部分では、「利子生み資本そのもの」ではなくて、信用制度が考察の対象であったこと、そこでは信用制度が準備的に考察されていたことを想起する必要があるのである。〈1)-4)で利子生み資本の概念的把握を終えたわれわれは、5)にはいて、いったん考察の対象を利子生み資本から信用制度に移し、信用制度を準備的に考察してきた。その考察が終わったので、こんどは、そのような信用制度のもとでの利子生み資本の考察に、つまり信用制度の考察ではなくて利子生み資本そのものの考察に移るのだ〉、と言っているのである。そして、その「利子生み資本

そのものの考察」の内容として、マルクスは、「信用制度による利子生み資本への影響」ならびに信用制度のもとで「利子生み資本がとる形態」を考察する、と言うのである。この考察が、続く「Ⅰ」-「Ⅲ」で行なわれることになる。ただし、マルクスはいまの文の末尾に、「利子生み資本そのもの……の考察に移るが、そのさい総じて、なお若干のとくに経済学的な論評を行なわなければならない」と書き加えており、この論評が「Ⅰ」となっているのであって、「利子生み資本そのものの考察」は、実際には「Ⅱ」から始まることになっている¹⁾。

「利子生み資本」と「貨幣資本〔monied capital〕」との以上のような同一性と区別とを念頭に置いたときに、一方で、マルクスがあちこちで両者を同じものとして扱っている記述をしながら、他方で、明らかに両者のあいだに抽象度の相違が認められている、ということが理解できるのである。マルクスは、すでに例を挙げたように、最も抽象的な概念としての「利子生み資本」をときとして「貨幣資本〔monied capital〕」と呼んだり、逆に、信用制度下の利子生み資本の姿態である貨幣資本〔monied capital〕を指して「利子生み資本」と呼んだりしている。それぞれの部分だけに目を向けると、読者であるわれわれは、ときとして困惑させられるのであるが、展開全体の流れを把握していれば、それらの部分で述べられていることの意味を、そこでのタームに惑わされないでつかむことができるのである。

- 1) 草稿第5章の構成を、そこでの方法に即してどのように理解すべきか、という点については、これまでの拙稿のなかでさまざまのかたちで拙見を述べてきたが、1994年にこの部分についての「コメンタール」を書く機会があったので、この点についての筆者の解釈を総括的にまとめておいた。「第5篇 利子と企業者利得とへの利潤の分裂 利子生み資本」、『マルクス・エンゲルス・マルクス主義研究』第28/29号、1996年、60-72ページ。（拙稿『『資本論』第3部草稿に見るマルクスの利子生み資本論』、『経済研究年報』（大阪経済法科大学）第14号、1995年、は、この「コメンタール」の内容にもとづく報告の記録である。）

筆者の理解は、三宅義夫氏によって提示され、氏自身によって「ほぼ定説的となってきたように見受けられる」(『マルクス信用論体系』, 日本評論社, 1970年, 4ページ)とされてきた, 「第3部第5篇は大別して第21~第24章では利子生み資本についての一般的説明が与えられ, 第25章以下では信用制度が論じられている」(同前, 3-4ページ)とする氏の理解に異論を唱え, これを批判するものであった。筆者にたいする氏の反批判は, すでに論稿「補論 第3部第5篇の性格について」(『講座・資本論体系』第6巻, 「利子・信用」, 有斐閣, 1985年, 201-224ページ)で実質的に始まっていたが, 筆者がそれに答えぬまま自説を繰り返していたので, ついに, 筆者を名指しにした論稿「『資本論』第3部第5篇の性格——大谷禎之介氏のマルクス草稿解釈にたいする疑問について——」(『立教経済学研究』第45巻第3号, 1991年)を発表された。ここでの筆者への論難は氏の苛立ちが顕わに出たもので, あえて学問的に逐一反論する必要を感じなかったのであるが, 意外なことに, そこでの氏の拙見批判が的を突いたものと受け取られるむきがあることを知った。

小野朝男氏は, 論稿「信用論の再構築に向けて——信用論研究の回顧と展望——(続)」(『経済理論』第261号, 1994年)で, 「大谷禎之介氏の信用論」という項目を設けて, 筆者のこれまでの仕事を, 信用論研究のなかに過大と思えるほどに大きく位置づけてくださったが, それに続く「三宅義夫氏による大谷批判」という項目で, いま言及した三宅氏の論稿での大谷批判の一部を紹介され, 最後に「明らかにこれは, 大谷氏の大きな泣き所を衝いたものといえよう」と評された(同前, 55ページ)。小野氏がそのすぐあとで, 「大谷氏の信用論が結局において, 利子生み資本論に埋没したものであり, 飯田繁氏や「新しい信用論」者の見解と本質的に変わらないもの」(同前, 55ページ)と評しておられるところから見ると, 小野氏は, 三宅氏の大谷批判に基本的に同意されておられるようにも見受けられる。「小野教授でさえも!」というのが, それを読んだときの率直な感想であって, そのとき, さきの三宅氏の論稿での批判にたいして, 基本的な論点についてはきちんとお答えしておかなければならないと感じたのであった。

なお, 三宅氏は1996年10月に, 急速に悪化した病のために亡くなられた。氏は筆者にとってかけがえのない師であったのであり, 氏の永眠は, これまでいわば氏の胸を借り, つねに氏の業績に挑みながら仕事をしてきた筆者に, さまざまの意味で痛切な内省の機会を与えた。その反省のなかには, 氏にたいする筆者の批判を論説のかたちで体系的・明示的にまとめようとしてこなかったこと, だからまた, 筆者にたいする氏の批判にまともなかたちでお答えしてこなかったことへの深い悔いがある。ここで氏の逝去にあらためて哀悼の意を表

わすとともに、〈おそかりし〉ではあるが、いつか必ず、氏にたいする批判と筆者への氏の批判にたいする反批判とを論説のかたちでまとめることをお約束したい。

なお、本稿で草稿第5章の構成について触れたので、とりあえず、小野氏が取り上げられ、評価された三宅氏の大谷批判の部分についてのみ、後に掲げる【補論】で紹介、論評しておくことにする。参照されたい。

(3) 貨幣資本 (monied capital) と貨幣資本 (Geldcapital)

ところで、「利子生み資本」と「貨幣資本 (monied capital)」との区別と同一性は以上のとおりであるが、それでは、同じ「貨幣資本」と邦訳される monied capital と Geldcapital とのあいだには、どのような区別があるのであろうか。

筆者はかつて、マルクスの草稿では、信用制度下の利子生み資本としての貨幣資本には圧倒的に monied capital という英語表現のタームが使われ、それにたいして資本の循環形態としての貨幣資本にはほとんど Geldcapital というドイツ語のタームが使われている、と述べた。つまりこうである。

①資本の循環形態としての貨幣資本→Geldcapital

②信用制度下の利子生み資本としての貨幣資本→monied capital

これに対して川波洋一氏は異論を唱えられている。氏は、次のような区別をされる。

「重要な点は、現行版『資本論』では、貸付可能な貨幣資本と貨幣財産としての貨幣資本との違いが稀薄になっていることである。その大きな理由は、エンゲルスが2つの意味における貨幣資本を「貨幣資本 (Geldkapital)」に統一して編集したことである。だが、マルクスの草稿では、この2つは明確に区別されていた。彼は、利子生み資本あるいは貸付可能な貨幣資本の意味では、概ね moneyed capital という用語を使っている。それに対し、貨幣的財産の意味では Geldkapital という用語を使っている。」(川波洋一『貨幣資本と現実資本』

有斐閣, 1995 年, 91-92 ページ。)

川波氏はここで、マルクスが Geldcapital と言うとき、彼はこの語を、利子生み資本としての貨幣資本 (monied capital) とは区別される「貨幣財産 [Geldvermögen]」としての貨幣資本という意味で使っていることがあるのだ、と主張されている。いま、「ことがある」と書いたのは、よもや氏も、「貨幣資本 [Geldcapital]」が、「生産的資本」および「貨幣資本」と並ぶ資本の循環形態としての「貨幣資本」の意味で使われていることを否定されることはないであろうからである。そこで、氏の言われるところを整理するとこうなる。

①資本の循環形態としての貨幣資本→Geldcapital

②利子生み資本としての貨幣資本→monied capital

③貨幣財産としての貨幣資本→Geldcapital

①と③とがともに Geldcapital という同じタームで表現されているということになる。この点、つまり「貨幣的財産としての貨幣資本の意味で使われる Geldcapital と、本来資本循環の中にある貨幣資本 (Geldcapital) との関係」について、川波氏は次のように言われる。

「Geldcapital を上記の意味で使えば資本の通過形態としての貨幣資本 (Geldcapital) との混同が生じるではないかという疑問が湧いてくる。これについてまずマルクスは、資本の通過形態としての貨幣資本 (Geldcapital) との違いは、本来の利子生み資本 (moneyed capital) の範疇的自立によって明確に認識していた。とすれば、利子生み資本の存在を前提として成り立つ貨幣的財産としての貨幣資本 (Geldcapital) と資本の通過形態としての貨幣資本 (Geldcapital) との違いも認識していたと思われる。」(同前, 93 ページ。)

ここで川波氏が言われるのは、マルクスは①と③という区別されるべき二つのものを同じ Geldcapital というタームで呼んでいるのは、彼自身がこの二つを混同していたのではないかという疑問を抱かせるが、しかし彼自身はこの違いを「認識していたと思われる」、ということである。だが、

そもそも、マルクスが資本の循環形態としての「貨幣資本」と架空資本の累積を含む、氏の言われる「貨幣財産としての貨幣資本」とを区別しなかったとか、混同していた、などということが考えられるであろうか。氏がこのような論外の「疑問」をもたれたのは、マルクスが「貨幣財産としての貨幣資本」を、「利子生み資本としての貨幣資本〔monied capital〕」と区別するの^に、資本の循環形態としての「貨幣資本」と同じ Geldcapital というタームを選んだ、と考えられたからである。

だが、はたしてマルクスは、「貨幣財産としての貨幣資本」を Geldcapital というタームで呼んだのであろうか。あるいは、マルクスが monied capital と言わずに Geldcapital というときには、この語は「貨幣財産としての貨幣資本」を意味していたのであろうか。

川波氏は次のように例示される。

①「こうした用語法の例を1つだけ示そう。「資本主義的生産様式の全ての国においては利子生み資本または貨幣資本 (zinstragenden oder moneyed capital) の巨大な量が、このような形態（紙製の架空の請求権の形態—川波）で存在している。貨幣資本の蓄積 (Accumulation des Geldkapitals) の大きな部分は、『生産に対する請求権』の蓄積やこのような請求権の市場価格（幻想的な市場価格）のほかにはなにも意味しない」(MEGA, II/4.2, S. 524)。Geldkapital を紙製の貨幣的財産すなわち架空な名目的貨幣資本の意味で使う箇所はほかにも散見される。vgl., a.a.O., S. 524, LL. 23–24, S. 525, L. 21, S. 526, L. 13.」(同前, 92 ページ。)

この例では、たしかに「貨幣資本の蓄積」の「大きな部分」が「紙製の貨幣的財産すなわち架空な名目的貨幣資本」から成っていることが言われている。しかし、「大きな部分〔zum grossen Theil〕」と言われていることに注意すれば、ここで「貨幣資本」と言われているものが、直前の「利子生み資本または貨幣資本〔monied capital〕」と異なるものでないことはまったく明らかではないであろうか。よほどなにかの思い込みでも

なければ川波氏のような読み方はできそうもない。

川波氏がそのあとに挙げておられる三つの箇所を見てみよう。氏が「貨幣財産としての貨幣資本」と読まれるのは、筆者が太字にした「貨幣資本」である。

②「〔公債や運河・鉄道株の〕この減価が、生産や鉄道・運河交通の現実の休止とか、現実の企業の見放しとか、なにも生み出すことがなかったような企業への資本の固定とかを表わすものでなかったかぎり、この国民は、この名目的な貨幣資本の破裂によっては、一文も貧しくなっていないのである。」(MEGA, II/4.2, S. 524. 拙稿「銀行資本の構成部分」の草稿について, 『経済志林』第63巻第1号, 1995年, 31ページ。)

③「この場合次のことを忘れてはならない。すなわち、銀行業者の金庫のなかにあるこれらの証券が表わしている、資本の貨幣価値は、その証券が確実な収益にたいする支払指図(公的有価証券の場合のように)であるか、または現実の資本にたいする所有権原(株式の場合のように)であるかぎりでさえも、まったく架空なものであって、それはこれらの証券が表わしている現実の資本の価値からは離れて調整されるということ、あるいは、これらの証券がたんなる収益請求権である(そして資本ではない)場合には、同一の収益にたいする請求権が、たえず変動する架空な貨幣資本で表現されるのだ、ということである。」(MEGA, II/4.2, S. 525. 拙稿, 同前, 35ページ。)

④「利子生み資本および信用制度〔Creditwesen〕の発展につれて、同一の資本が、または同一の債権にすぎないものでさえもが、さまざまな手のなかで、さまざまな仕方でさまざまな形態をとって現われることによって、すべての資本が2倍になるように見え、またところによっては3倍になるように見える。この「貨幣資本」の大部分は純粹に架空なものである。」(MEGA, II/4.2, S. 526. 拙稿, 同前, 38ページ。)

②で「名目的な貨幣資本」、③で「架空な貨幣資本」と言われているものが川波氏の言われる「貨幣財産としての貨幣資本」のことであるとしても、そのことから、ここでの Geldcapital という語がそれ自体として「貨幣財産としての貨幣資本」という意味をもっている、ということができようか。そうではなくて、ここではそのような、つまり「名目的な」あるいは「架空な」貨幣資本について語っているのであって、「貨幣資本 [Geldcapital]」という語そのものが「架空な貨幣資本」という意味をもっているわけではないのである。また④については、さきの①と同じく、「大部分は [der größte Theil]」と言われていることに注目すべきである。ここでの「貨幣資本」の全部が氏の言われる「貨幣財産としての貨幣資本」ではないのである。

それでは、このような「架空な貨幣資本」である「貨幣財産としての貨幣資本」について、なぜ Geldcapital という語が用いられているのであろうか。それは、きわめて単純なこと、すなわちなんらかの意味において貨幣形態にある資本、あるいは貨幣として見られた資本は「貨幣資本 [Geldcapital]」と呼ばれうるのであって、この意味では「貨幣財産としての貨幣資本」も、資本の循環形態であり川波氏のいわれる「資本の通過形態」である「貨幣資本 [Geldcapital]」とまったく同様に、まさに「貨幣資本 [Geldcapital]」にほかならないからである。このような意味では、「貨幣資本 [monied capital]」でさえも「貨幣資本 [Geldcapital]」なのであって、マルクスはしばしば、「貨幣資本 [monied capital]」と言っていいところで「貨幣資本 [Geldcapital]」という語を使っている。ただ、貨幣形態にある資本あるいは貨幣として見られた資本としての「貨幣資本」のうちで、とくに信用制度下の利子生み資本の姿態としてのそれが「貨幣資本 [monied capital]」という独自の名称をもつのであり、マルクスはこの資本を圧倒的にこの名称で呼んだのである。しかも、「貨幣財産としての貨幣資本」も広義では「貨幣資本 [monied capital]」に含められることができる。ただ、「Ⅱ」ですでに架空な請求権の形態としての「架空な

貨幣資本」についての指摘を終え、それを度外視して「貸付可能な貨幣資本」を論じる(Ⅲ)」では、「貨幣資本〔monied capital〕」と言え、基本的には「貸付可能な貨幣資本」を指すことになっているのである。

いま一度整理すれば、こういうことである。一般に、貨幣形態にあるために、あるいは貨幣として見られるために「貨幣資本」と呼ばれるものには、概念的にはっきりと区別されなければならないさまざまなものがあり、しばしばそれらが混同され、同一視される。マルクスはそれらのなかから、まず『資本論』第2部で、資本がその循環のなかでとる形態である「貨幣資本〔Geldcapital〕」を概念的に把握した。さらに、第3部第4章で、貨幣形態で「貨幣取扱資本」のもとに滞留し、遊休している、産業資本や商業資本の準備ファンド、したがってそれらにとっての遊休貨幣資本を概念的に把握した。そして、第5章の「1) - 「4)」で利子生み資本という独自の資本形態を概念的に把握し、「5)」では、まず信用制度下の利子生み資本の独自の姿態を「貨幣資本〔monied capital〕」と呼んだ。そのなかの「Ⅱ)」では、利子生み資本の成立を前提として資本化された「蓄積された、労働にたいする所有の請求権」である「架空の貨幣資本」が概念的に把握された。そして最後に、「Ⅲ)」では、この「架空の貨幣資本」とはとりえず区別される「貸付可能な貨幣資本」が分析の中心的な対象に据えられているのである。これらのものすべてが、最広義では「貨幣資本〔Geldcapital〕」なのであり、マルクスはこの言葉で、あるときは「生産的資本」および「商品資本」から区別される、循環中の貨幣形態にある資本を指し、あるときは貨幣資本(monied capital)を指し、あるときは「貨幣財産としての貨幣資本」を指しているのである。

このように、川波氏が言われるのとは異なり、マルクスが Geldcapital という語を、monied Capital と区別して「貨幣財産としての貨幣資本」という意味で使ったとは、とうてい考えられないのであるが、氏はさらに、その延長線上で、次のように言われている。

「ただ、草稿「第5章」には、マルクスが両者を混同していたので

はないかとの誤解を生むような一節がある。「われわれはのちの研究で次のことをあきらかにするであろう。こうして『貨幣資本 (Geldkapital)』が『利子生み資本』の意味における『貨幣資本 (moneyed capital)』と混同され、他方前者の方の意味では、資本は常に『商品資本』や『生産的資本』の固有の形態とは区別されたものとしての『貨幣資本 (Geldcapital)』なのであるということ。」(MEGA, II/4.2, S. 519.) ここでは、一読すると、Geldcapital は資本の通過形態としての貨幣資本であるとの認識をあたかもマルクスが持っていたかのように見える (たとえば、大谷禎之介『信用と架空資本』下 22 頁を参照)。だが、注意しなければならないのは、マルクスはここで銀行学派の貨幣と資本の区別において利子生み資本 (moneyed capital) と資本の通過形態としての貨幣資本 (Geldcapital) との混同があることを論難しているということである。「前者の方の意味では」以下は、銀行学派の言う意味における Geldcapital は、商品資本や生産的資本とは異なる形態にある貨幣資本 (Geldcapital) であり、それが彼らにあっては利子生み貨幣資本 (moneyed capital) と混同されていることを言おうとしている。決してマルクス自身が、資本の通過形態としての貨幣資本を Geldcapital として積極的に捉えようとしていることを意味するものではない。」(川波、前掲書、93 ページ。)

川波氏は、「一読すると、Geldcapital は資本の通過形態としての貨幣資本であるとの認識をあたかもマルクスが持っていたかのように見える」と書かれたところに、「たとえば、大谷禎之介『信用と架空資本』下 22 頁を参照」と書かれている。氏が挙げられたページで、筆者は、氏が引用されたマルクスのさきの文章に続けて、次のように書いていた。

「すなわち、生産的資本がその循環過程でとる形態としての「貨幣資本」と、資本の循環過程の外部にあって利子生み資本として機能しうる貨幣としての moneyed capital とを区別する必要がある。マルクスは草稿で、前者の意味での「貨幣資本」をほとんどの場合 Geld-

capital, 後者の意味でのそれを圧倒的に monied Capital または moneyed Capital (Capital の c が小文字であることも多い), ときとして money capital, そしてまれに Geldcapital としている。これは、イギリスで実務的にも理論的にもごく普通に用いられている語を意識的にそのまま使ったものと考えられる。ちなみに, money や money market や monied Credit といった語もしばしばこのままで使われている。その意味がマルクス独自のものである場合もあることはもちろんであるが, 多くの場合, イギリスでの通常の用語法をも意識しながら, あるいはそれを重ね合わせにして用いられていることはたしかである。マルクスはときとして, 自分の文章の一部または全部を英語, ときにはフランス語で書いているが, その多くの場合は内容上の必然性があるわけではない。この monied capital のような場合はそれとは区別して読む必要がある。ところがエンゲルスは——ドイツ語での印刷用原稿を作るためにやむをえなかったことではあるが——monied Capital 等々も, ドイツ語 (Geldcapital) に訳して統一した。そのために原文のニュアンスが失われている場合もあるように思われる。」(拙稿「信用と架空資本」の草稿について(下)),『経済志林』第51巻第4号, 1984年, 21-22ページ。)

川波氏は, このなかで筆者が, 「一読すると, Geldcapital は資本の通過形態としての貨幣資本であるとの認識をあたかもマルクスが持っていたかのように見える」ことに惑わされて, 「Geldcapital は資本の通過形態としての貨幣資本であるとの認識」をマルクスがもっていた, と誤認したと言われているわけである。はたしてそうか。

まず, マルクスのこの文章では, もっぱら, 資本の循環形態の一つとしての貨幣資本と利子生み資本としての貨幣資本 (monied capital) との区別が問題になっているのであって, 「貨幣財産としての貨幣資本」はまったく取り上げられていない。

だから, このなかで川波氏が言われていることのうちで, 「マルクスは

ここで銀行学派の貨幣と資本の区別において利子生み資本（moneyed capital）と資本の通過形態としての貨幣資本（Geldcapital）との混同があることを論難しているということ」，そして「前者の方の意味では」以下は，銀行学派の言う意味における Geldcapital は，商品資本や生産的資本とは異なる形態にある貨幣資本（Geldcapital）であり，それが彼らにあっては利子生み貨幣資本（moneyed capital）と混同されていることを言おうとしている」ということ，このことは氏の言われるとおりなのであり，マルクスは要するに，銀行学派は，利子生み資本としての貨幣資本（moneyed capital）と資本の循環形態としての貨幣資本（Geldcapital）とを混同しているが，両者をはっきりと区別しなければならない，と言っているのである。

ところが，奇妙なことに，川波氏は，このようなマルクスの文章について，これは「マルクスが両者〔すなわち「利子生み資本としての貨幣資本」と「貨幣財産としての貨幣資本」〕を混同していたのではないかとの誤解を生むような一節」だと言われる。なぜそのような「誤解」が生まれるのか，理解を絶するのであるが，そのあとで氏が，「一読すると，Geldcapital は資本の通過形態としての貨幣資本であるとの認識をあたかもマルクスが持っていたかのように見える」が，「決してマルクス自身が，資本の通過形態としての貨幣資本を Geldcapital として積極的に捉えようとしていることを意味するものではない」，と言われているところから考えて，氏は次のように言われたいのではないかと推測することができるだけである。すなわち，マルクスの Geldcapital は，「貨幣財産としての貨幣資本」を意味する場合と「資本の通過形態としての貨幣資本」を意味する場合とがあるのであって，マルクスのここでの記述から，Geldcapital という語を後者だけを意味するものと考えるべきではない，と。いま述べたように，「貨幣資本〔Geldcapital〕」という語はそれ自体としては，さまざまな意味で使われるのであって，資本の循環形態としての貨幣資本を意味するだけでないことはたしかである。しかし，マルクスのいまの記述では，「貨

貨幣資本〔Geldcapital〕という語は、明らかに資本の循環形態としての貨幣資本を意味しているのであって、ここではマルクスは、川波氏が言われるのとまさに正反対に、「Geldcapital は資本の通過形態としての貨幣資本であるとの認識」をもっていたのであり、「資本の通過形態としての貨幣資本を Geldcapital として積極的に捉えよう」としていたのである。

読者は、さきに引用した筆者のかつての文章が、ここで述べたことと基本的に同じことであることを認められるであろう。ここでの筆者にたいする川波氏の批判は、なんとも奇妙なものと言わざるをえない。

なお、そこで筆者が、「エンゲルスは……monied Capital 等々も、ドイツ語(Geldcapital)に訳して統一した」と書き、川波氏もまた、筆者のこの記述に引きずられてか、さきに見たように、「エンゲルスが2つの意味における貨幣資本を「貨幣資本〔Geldcapital〕」に統一して編集した」と言われているのであるが、このどちらも、舌足らずないしは不正確であった。というのも、「貨幣資本と現実資本」の三つの章の場合、ここでエンゲルスがやったのは、monied capital を Geldcapital に置き換えることではなくて、monied capital の大部分を「貸付資本〔Leihkapital〕」に変更し、ただ一部を Geldcapital と独訳したのだからである。

(4) 貸付可能な資本あるいは貸付可能な貨幣資本

さきに見た「Ⅲ」での二つの基本的な問題のうち、第1の問題における「貨幣資本〔monied capital〕の蓄積」とは、マルクスにとっては、なによりもまず、銀行業者のもとでの「貸付可能な貨幣資本」の蓄積にはかならなかった。「貸付可能な資本〔loanable Capital〕」、そしてとくに「貸付可能な貨幣資本〔loanable monied Capital〕」も、「Ⅲ」における基本的なタームである。「Ⅲ」のなかで、前者は15回、後者は13回使われている。これらのタームがどのようなかたちで使われているかを見るために、まず、両者のすべてを、短い引用で挙げておこう。

①「国債も株式も、またその他の各種の有価証券も、貸付可能な資

本 [loanable Capital] にとっての、すなわち利子を生むものとなるべく予定されている資本にとっての投下部面である。……この貸付可能な資本 [loanable Capital] の蓄積こそは、われわれがここで取り扱わなければならないものである。しかもまさに、貸付可能な「貨幣」資本 [loanable „monied“ capital] のそれである。」(MEGA, II/4.2, S. 531.)

②「まず明らかなのは、貨幣資本 [moneyed Capital] {貸付可能な資本 [loanable Capital]} の蓄積あるいは増加のどれもが、現実の資本蓄積あるいは再生産過程の拡大を示すわけではない、ということである。」(MEGA, II/4.2, S. 532.)

③「この信用を銀行業者の信用から分離して考察する場合には、それが生産的資本そのものの大きさにつれて増大することは明らかである。貸付可能な資本と再生産的資本 [loanable capital] とはここでは同じものである。」(MEGA, II/4.2, S. 537.)

④「貸付可能な貨幣資本 [loanable moneyed capital] ——有利な投下を求めている遊休している貨幣資本 [monied Capital] ——の量が最大になるのは恐慌のあとであって、再生産過程が縮小し、したがってまた再生産的資本の量が一部分減少し（それが商品在庫の量であるかぎりで）、また固定資本の一部分は完全には充用されていない、等々のときである。」(MEGA, II/4.2, S. 541.)

⑤「労賃の支払で機能する、総じて収入の支出 {それはいまイングランドでは、約 5000 万ポンド・スターリングとなっている} で機能する貨幣の大きな部分でさえ、貸付可能な資本 [loanable capital] に転化する。」(MEGA, II/4.2, S. 541.)

⑥「貨幣資本 [monied capital] の膨張は、銀行制度が普及したために（たとえば、イプスウィッチの例を見れば、そこでは 1857 年までのわずか数年に、借地農業者のもとでの預金が 4 倍にもなった）、つまり以前は私的蓄蔵貨幣であったもの、あるいはまたたんなる鋳貨

準備でもあったものが、一定の期間を限っていつでも貸付可能な資本 [loanable Capital] に転化する、ということからも生じるのであるが、貨幣資本 [monied capital] のこのような膨張を、生産的資本 のなんらかの増大を表現するものだと言うことはできない……。生産規模が同じままであるかぎり、それはただ、生産的資本に比べての貸付可能な貨幣資本 [loanable monied capital] の過剰をもたらすだけである。」(MEGA, II/4.2, S. 541-542.)

⑦「じっさい、この時期こそは、低い利率、したがってまた貸付可能な資本 [loanable Capital] の相対的な豊富さが生産的資本の現実の拡張と同時に生じると言いうる唯一の時点である。大きな商業信用と結びついた還流の順調さは、貸付可能な資本 [loanable Capital] の供給を、それへの需要の増大にもかかわらず、確実にして、それをその水準に維持する。」(MEGA, II/4.2, S. 542.)

⑧「つまり全体として見れば、貨幣資本 [monied Capital] の運動(利率に表現されるそれ)は生産的資本の運動とは逆なのである。利率がその平均的な高さに、すなわちその最低限度からも最高限度からも同じ距離にある中位点に達することが、豊富な貸付可能な資本 [loanable capital] と生産的資本の大膨張とが同時に生じていることを表現する。」(MEGA, II/4.2, S. 542.)

⑨「しかし、ここでの問題はそもそも、どの程度まで貨幣資本 [moneyed Capital] の過剰が、あるいはもっと適切に言えば、どの程度まで貸付可能な貨幣資本 [loanable monied capital] の形態での資本の蓄積が、現実の蓄積と同時に生じるのか、ということである。／貨幣資本 [moneyed capital] (すなわち貸付可能な貨幣資本 [loanable monied Capital]) への貨幣の転化は、生産的資本への貨幣の転化よりもはるかに簡単な事柄 [Geschichte] である。」(MEGA, II/4.2, S. 547.)

⑩「他方、すでに見たように、貨幣資本 [monied capital] の蓄積

は、現実の蓄積にはまったくかわりなく、たんなる銀行制度の拡張や通貨準備〔currency Reserve〕の節約によって、あるいはまた、私人たちの支払手段の準備ファンドの節約によっても行なわれうるのであって、この準備ファンドはこのことによって、いつでも短期間、貸付可能な資本〔loanable capital〕に転化されるのである。この貸付可能な資本〔loanable capital〕が貸し出されるのは短期である〔またじっさい、割引は短期であることが求められる〕が、それはたえず流入・流出している。一人がそれを持ち去れば、別の一人がそれを持ってくる。このようにして、貸付可能な貨幣資本〔loanable monied capital〕の量は〔ここで問題にしているのは、けっして何年間にもわたって投下される貸付ではなく、ただ預金および有価証券のかたちで投下される貸付だけである〕、実際に、現実の蓄積からはまったく独立に増大するのである。」(MEGA, II/4.2, S. 548.)

⑪「この再割引については、また貸付可能な貨幣資本〔loanable monied Capital〕のたんに技術的な増加が信用詐欺にさまざまな便宜を提供することについては、『エコノミスト』からの次の箇所がおもしろい。」(MEGA, II/4.2, S. 549.)

⑫「鉄道等々のような公共事業が一時的に「貸付可能な資本〔loanable capital〕」を増加させることもありうる（「払い込み請求」の結果生じた預金がまだそれらの固有の目的に使われていない中間期間に）ことはすでに見た。」(MEGA, II/4.2, S. 551.)

⑬「……貸付可能な資本〔loanable capital〕の大きさは通貨〔Circulation〕の量とはまったく異なるものであること……を示しておきたい。」(MEGA, II/4.2, S. 553.)

⑭「信用システム〔Creditsystem〕の発展している諸国では、貨幣資本〔moneyed Capital〕は、すなわち貸付として自由に使用できる貨幣資本〔als Loan disponible moneyed Capital〕は、すべて銀行業者および貨幣貸付業者〔money lenders〕のもとに預金の形態で

存在するものと想定することができる。」(MEGA, II/4.2, S. 556.)

⑮「そこで、これらの証券は売り放たれ、こうして公衆の貨幣資本〔moneyed Capital〕の一部分が取り込まれる。持ち続けられる部分は、そのときの価格よりも安く買われたのだから、より高い利子をあげることになる。しかし彼らは、自分が儲けて資本に再転化させる利潤をすべて、まず第1に、貸付可能な「貨幣資本」〔loanable „moneyed Capital“〕に転化させる。つまり、後者の資本の蓄積は、現実の蓄積の所産であるにもかかわらず、それとは区別されるものなので、それは、貨幣資本家〔moneyed capitalist〕たち（銀行業者、等々）そのものだけを考察する場合にも、すでにこの特殊的部類の資本家の蓄積として続いて生じるのである。」(MEGA, II/4.2, S. 557-558.)

⑯「いま、そのほかの諸階級の貨幣蓄積について言えば、われわれは、利子生み証券に投下されてこの形態で蓄積される部分は度外視する。われわれは、ただ、「貨幣」資本\貸付可能な資本〔„moneyed“\loanable Capital〕として市場に投じられる部分だけを考察する。」(MEGA, II/4.2, S. 558.)

⑰「収入を表わしておりたんなる、消費の手段として役立つその同じ貨幣が、たえず、貸付可能な「貨幣資本」〔loanable „monied capital“〕に転化するのである。……それが同時に、一時的には、貸付可能な「貨幣資本」〔loanable „monied capital“〕の機能を、すなわち貸付可能な〔ausleihbar〕貨幣としての機能を遂行するのである。」(MEGA, II/4.2, S. 584.)

⑱「資本家が直接に自分の再生産過程を拡張することができなければ、彼の貨幣資本の一部分は循環のなかでのその機能から遊離して、貸付可能な貨幣資本〔loanable monied capital〕に転化する。」(MEGA, II/4.2, S. 585.)

⑲「ところで、中断が生じ、そのために商人が新しい取引をもっとあとでなければ始められないとすれば、貨幣は彼にとってはただ蓄蔵

貨幣を表わし、遊休資本を表わしているだけである。しかし、同時にそれは直接に貸付可能な「貨幣資本」[loanable „monied Capital“]の蓄積を表わしている。」(MEGA, II/4.2, S. 585.)

㊿「かりに、貨幣貸付業者[moneylenders]がいなくて、現実に機械、原料、等々が貸付業者[lenders]のものであり、彼らがこれらを(今日では家屋をそうしているように)、自分でもこれらの物の一部を所有している生産的資本家に貸し付ける、と想定するなら、貸付可能な「資本」[loanable „Capital“]の需要供給は資本一般[Capital überhaupt]への需要供給と同じものであろう。……このような事情のもとでなら、貸付可能な資本[loanable Capital]の供給は、生産的資本家にとっては生産諸要素の供給と同じものであり、商人にとっては商品の供給と同じものであろう。」(MEGA, II/4.2, S. 596.)

草稿第5章のこれまでのところを振り返って見ると、「貸付可能な資本」という概念は、エンゲルス版の第21章に利用された、草稿の「1」のなかで、脚注でのトランズからの引用にはじめて登場する。

「通貨に適用される価値という術語には三つの意味がある。……第2には、後日受け取られるべき同一額の通貨と比べての、現実に手にしている通貨。この場合には、通貨の価値は利子率によって計られており、また利子率は貸付可能な資本[loanable capital]とそれにたいする需要との割合によって、規定されている。」(MEGA, II/4.2, S. 426. 拙稿「利子生み資本」の草稿について,『経済志林』第56巻第3号, 1988年, 61-62ページ。)(この箇所は、ロンドン・ノート第7冊(1851年)でのトランズの『1844年の銀行特許法の、商業信用に影響するような運用について』からの抜萃に含まれていた(MEGA, IV/8, S. 654)。そしてそこでは、まさにここに引用された部分の欄外に線が引かれている。ただし、このノートでは loanable が liable となっている。)

次いで、第22章に利用された、草稿の「2」利潤の分割。利子率。利子

の自然的な率」のなかで、当面の問題を論じるために不可欠の経済学的な概念として固定されるにいたる。その次第は、次の六つの引用から明瞭に読み取れるであろう。

①「ラムジは利子率を純利潤の率と呼んでいるのであるが、この利子率の規定について、彼は次のように言っている。利子率は、「一部は総利潤の率によって定まり、また一部は総利潤が利子と企業利得〔profit of enterprise〕とに分割される割合によって定まる。この割合は資本の貸し手と借り手とのあいだの競争によって定まる。この競争は、実現されると期待される総利潤の率によって影響されるが、ただそれだけによって規制されるわけではない。競争はただこの原因だけによって規制されるのではないというのは、一方では、生産的な投資をする意図はなにもないのに借りる人も多いからであり、他方では、貸付可能な国民的資本〔national capital to be lent〕の全体の大きさは、総利潤のなんらかの変動にかかわりなく、その国の富の変動につれて変動するからである。」(MEGA, II/4.2, S. 435. 拙稿「利潤の分割」の草稿について,『経済志林』第56巻第4号,1989年,16-17ページ。)

②「通貨と銀行業とに関する1857年と1858年の議会報告書……のなかでなによりもおもしろいことは、イングランド銀行の銀行理事やロンドンの銀行業者や地方の銀行業者や職業的理論家たちが、月並みな文句、たとえば、「貸付可能な資本〔loanable capital〕の使用にたいして支払われる価格は、そのような資本の供給につれて変動するはずだ」とか、……その他このたぐいのきまり文句から一步も出ることなしに、「生みだされた現実の率」についてあれこれとしゃべりまくっているのを聞くことである。」(MEGA, II/4.2, S. 436. 拙稿, 同前, 18-19ページ。)

③「利子はただ平均利潤の一部分でしかない。同じ資本が二重の規定で現われるのである。すなわち、貸し手の手のなかで貸付可能な資

本〔loanable Capital〕として現われ、機能資本家の手のなかでは産業資本または商業資本として現われるのである。しかし、それが機能するのはただ一度だけであり、それ自身で利潤を生み出すのはただ一度だけである。その生産過程そのものでは、資本は貸付可能な資本〔loanable〔capital〕〕としてはなんの役割も演じない。」(MEGA, II/4.2, S. 437. 拙稿, 同前, 19 ページ。)

④「たえず動揺する利子の市場率について言えば、それは、商品の市場価格と同様に、各瞬間に固定的な大きさとしてつねに与えられている。なぜならば、貨幣市場〔money market〕ではすべての貸付可能な資本〔loanable capital〕がつねに総量として機能資本に対立しており、したがって、一方では貸付可能な資本〔loanable Capital〕の供給の割合、他方ではそれにたいする需要が、そのつどの利子率の市場価格を決定するからである。ますますそういうことになってくるのは、信用制度〔Creditwesen〕の発展とそれに結びついたその集中とが貸付可能な資本〔loanable Capital〕に一般的社会的な性格を与えるようになるからである。」(MEGA, II/4.2, S. 438. 拙稿, 同前, 27 ページ。)

⑤「気象報告が気圧計や温度計の示度を記録する正確さも、取引所報告が、あれこれの資本についてではなく、貨幣市場にある資本すなわち貸付可能な資本〔das auf dem Geldmarkt befindliche, d.h. verleihbare Capital〕について利子率の高さを記録する正確さの上には出ないのである。」(MEGA, II/4.2, S. 440. 拙稿, 同前, 30 ページ。)

⑥「貨幣資本（貨幣市場での資本）は現実には次のような姿態をもっている。すなわち、その姿態で貨幣資本は共同的な要素として、その特殊な充用にはかわりなしに、それぞれの特殊的部分の生産上の要求に応じていろいろな部分のあいだに、資本家階級のあいだに、配分されるのである。そのうえに、大工業の発展につれてますます貨幣

資本は、それが市場に現われるかぎりでは、個別資本家、すなわち市場にある資本のあれこれの断片の所有者によって代表されるのではなくて、集中され組織されて、現実の生産とはまったく違った仕方で、社会的資本を代表する銀行業者の統制のもとに現われる。したがって需要の形態から見れば、この資本には一階級の重みが相対しており、同様に供給から見ても、この資本は、大量にまとまった [en masse] 貸付可能な資本 [verleihbares Capital] として〔現われる〕のである。」(MEGA, II/4.2, S. 440-441. 拙稿、同前、31-32 ページ。)

まず、①ラムジからの引用のなかに capital to be lent という表現が現われ、②次には、銀行業者等々の「月並みな文句」のなかに loanable capital というタームがあることが示され、③貨幣資本は、貸し手の手のなかでは「貸付可能な資本」として現われていることが認められ、④そのうえで、利子率は loanable Capital の需給によって決まるのだ、ということが積極的に述べられ、また、⑤「貨幣市場にある資本すなわち貸付可能な資本 [das auf dem Geldmarkt befindliche, d. h. verliehbare Capital] について利子率の高さを記録する正確さ」という句によって、貨幣市場における需給の対象は「貸付可能な資本」と呼ばれるべき資本であることが確認され、そして⑥最後に、「貸付可能な資本」こそ、「貨幣市場での資本」である貨幣資本 (monied capital) が市場に「大量にまとまった」供給として現われるときの姿態であることが示されているのである¹⁾。

このようにすでにエンゲルス版第22章部分で確定されていた「貸付可能な資本」という概念が、エンゲルス版第25章部分での、さきに引用した、「銀行業者の業務」についての説明のなかで「貸付可能な貨幣資本」として、中心的な役割を演じることになる。

「貨幣取扱業というこの土台のうえで信用制度の他方の側面が発展し、〔それに〕結びついている、——すなわち、貨幣取扱業者の特殊的功能としての、利子生み資本あるいは貨幣資本 [monied capital] の管理である。貨幣の貸借が彼らの特殊的業務になる。彼らは貨幣資

本〔monied capital〕の現実の貸し手と借り手とのあいだに媒介者としてはいてくる。一般的に表現すれば、銀行業者の業務は、一方では、貸付可能な貨幣資本〔d. loanable Geldcapital〕を自分の手中に大規模に集中することにあり、したがって個々の貸し手に代わって銀行業者がすべての貨幣の貸し手の代表者として再生産的資本家に相対するようになる。彼らは貨幣資本〔monied capital〕の一般的な管理者としてそれを自分の手中に集中する。他方では、彼らは、商業世界全体のために借りるということによって、すべての貸し手に対して借り手を集中する。他方では、彼らは、商業世界全体のために借りるということによって、すべての貸し手に対して借り手を集中する。……銀行は、一面では貨幣資本〔monied capital〕の、貸し手の集中を表わし、他面では借り手の集中を表わしているのである。／銀行が自由に処分できる貸付可能な資本〔d. loanable Capital〕は二様の仕方で銀行に流れ込む。一方では、生産的資本家たちの出納係として、銀行の手中には、それぞれの生産者や商人が準備ファンドとして保有する貨幣資本〔monied capital〕または彼らのもとに支払金として流れてくる貨幣資本〔monied capital〕が集中する。このファンドは、彼らの手中で、貸付可能な貨幣資本〔monied Capital, das verleihsbar ist〕になる。これによって、商業世界の準備ファンドは、共同の準備ファンドとして集中されるので、必要な最小限度に制限されるのであって、もしそうでなかったならば準備ファンドとして眠っているはずの貨幣資本〔monied capital〕部分が利子生み資本として機能する、つまり貸し出されるのである。ところで他方では、銀行の貸付可能な資本〔loanable Capital〕は、貨幣資本家〔monied Capitalist〕たちの預金によって形成されるのであって、彼らはこの預金の貸出を銀行にまかせるのである。」(MEGA, II/4.2, S. 471-472. 拙稿「信用と架空資本」の草稿について(中)」、『経済志林』第51巻第3号、1983年、13-15ページ。)

「貸付可能 [loanable]」である資本は、特別な場合(たとえば商業信用での商品資本それ自体の「貸付」や固定資本形態での貸付について語られる場合のそれ)を除いて、貨幣形態にある資本だから、それは「貸付可能な貨幣資本 [loanable monied capital]」にほかならない。そのかぎりでは、「貨幣資本 [monied capital]」は類ないし上位概念であり、「貸付可能な貨幣資本 [loanable monied capital]」はその種であり下位概念のほゞである。

たしかに、たとえば、次のような場合、「貨幣資本 [monied capital]」は明らかに「貸付可能な貨幣資本 [loanable monied capital]」よりも外延の広い概念である。

①「生産的資本家たちの出納係として、銀行の手中には、それぞれの生産者や商人が準備ファンドとして保有する貨幣資本 [monied capital] または彼らのもとに支払金として流れてくる貨幣資本 [monied capital] が集中する。このファンドは、彼らの手中で、貸付可能な貨幣資本 [monied Capital, das verleihbar ist] になる。これによって、商業世界の準備ファンドは、共同の準備ファンドとして集中されるので、必要な最小限度に制限されるのであって、貨幣資本 [monied capital] のうちの、もしそうでなかったならば準備ファンドとして眠っているはずの部分が利子生み資本として機能する、つまり貸し出されるのである。」(MEGA, II/4.2, S. 471-472. 拙稿, 同前, 15 ページ。)

②「すべてこれらの証券が表わしているのは、実際には、「生産にたいする蓄積された請求権」にすぎないのであって、この請求権の貨幣価値または資本価値は、国債の場合のように資本をまったく表わしていないか、または、それが表わしている現実の資本の価値とは無関係に規制される。／すべて資本主義的生産の国には、膨大な量のいわゆる利子生み資本または貨幣資本 [moneyed Capital] がこうした形態で存在している。そして、貨幣資本の蓄積という言葉で考えられ

ているのは、たいてい、この「生産にたいする請求権」の蓄積、および、これらの請求権の市場価格（幻想的な市場価格）の蓄積のことでしかないのである。」（MEGA, II/4.2, S. 524. 拙稿「銀行資本の構成部分」の草稿について」、『経済志林』第63巻第1号、1995年、32ページ。）

③「貨幣資本 [monied Capital] が存在する形態が、ただ、貨幣の（金銀の、すなわち自己の材料が価値の尺度として役立つ商品の）形態だけだと仮定しても、この貨幣資本 [monied Capital] の大きな一部分は、つねに必然的にたんに架空なものである、すなわち価値への権原 [Titel] である（価値章標と同様に）。A は彼の商品または彼の労働を売り、それと引き換えに G を、貨幣 [money] を受け取る。この貨幣 [money] が資本の変態のなかで機能しなければならないかぎり、それは貨幣資本 [monied Capital] に転化するのではなく、その所持者によって再生産の諸要素と交換される。それがただちに収入の実現のために役立つかぎりでは、それは通貨 [currency] として支払われてしまうのであり、したがってまた、貨幣資本 [monied Capital] に転化することはできない（少なくともその所持者にとってはできない）。しかし、それが貨幣資本 [monied Capital] に転化して、同じ貨幣が繰り返し貨幣資本 [monied Capital] を表わすかぎりでは、明らかに、それはただ一つの点で金属貨幣 [metallic money] として存在するだけであって、他のすべての点では、それはただ資本への請求権 [claim] というかたちで存在するだけである。これらの請求権 [claim] の蓄積は、前提によれば、現実の蓄積から、すなわち商品資本等々の価値が貨幣に転化することから、生じる。とはいえ、これらの請求権 [claim] そのものの蓄積は、その源泉である現実の蓄積とも違うし、貨幣の貸出によって媒介される将来の蓄積（生産過程）とも違うのである。」（MEGA, II/4.2, S. 587-588.）

①では、生産者や商人が保有する準備ファンドがそれ自体として「貨幣

資本〔monied capital〕」であって、これが銀行の手中で「貸付可能な貨幣資本」に転化する、と言われている。②および③での「貨幣資本〔monied capital〕」が「貸付可能な貨幣資本」よりもはるかに広い外延をもつ概念であることは論を待たないであろう。

「貸付可能な貨幣資本〔loanable monied capital〕」とは、このような広義での「貨幣資本〔monied capital〕」のうち、とくに、貨幣市場で需要に対する供給として現われ、したがってまたその量(供給量)が利子率に作用する、という姿態をとっている貨幣資本(monied capital)である。そのかぎりでは、「貨幣資本〔monied capital〕」一般ではないと言うことはできる。

けれども、「Ⅲ」で、「貨幣資本」の量の増減と「現実資本」の拡大・停滞との関連を問題にするさいの「貨幣資本」の量とは、まさにこのような意味での「貸付可能な貨幣資本」のことである。だから、ここで簡単に「貨幣資本〔monied capital〕」と言われているものは、大部分、実際には「貸付可能な貨幣資本」のことだと考えてよいのである²⁾。

- 1) 『資本論』第3部第5章の「1) および「2) 利潤の分割。利子率。……」での以上のような記述を見ると、あたかもここでの記述を進めるなかで「貸付可能な資本」の概念が次第に確定されていったかのようにも見えるが、この概念は、すでに『1861-1863年草稿』のなかで確立されていた。

まず、「利子生み資本」を論じた箇所で、次のように述べていたのであって、さきの「2) 利潤の分割。利子率。利子の自然的な率」での⑤および⑥は、これを見ながら書かれたものであることがわかる。

①「気象報告が気圧計の示度を記録する正確さも、取引所報告が、あれこれの資本についてではなく、貨幣市場にある資本すなわち貸付可能な資本〔das auf dem Geldmarkt befindliche, d. h. verleihbare Capital〕について利子率の高さを記録する正確さの上には出ないのである。／ここは、一般的利潤率のより捉えにくい形態に対立し、またそれとは区別される、貸付可能な資本にとっての利子率のこのようなより大きな固定性と一様性とはどこから生じるのか、ということを議論すべき場所ではない。そのような議論は、信用に関する項目〔Abschnitt〕でなされるべきものである。」

(MEGA, II/3.4, S. 1461-1462.『資本論草稿集』⑦, 419 ページ。)

②「貨幣資本（貨幣市場での資本）は現実には次のような姿態をもっている。すなわち、その姿態で貨幣資本は共同的な要素として、その特殊な充用にはかわりなしに、それぞれの特殊の部面の生産上の要求に応じていろいろな部面のあいだに、資本家階級のあいだに、配分されるのである。そのうえに、大工業の発展につれてますます貨幣資本は、それが市場に現われるかぎりでは、個別資本家、すなわち市場にある資本のあれこれの断片の所有者によって代表されるのではなくて、集中され組織されて、現実の生産とはまったく違った仕方では、資本を代表する銀行業者の統制〔のもとに〕現われる。したがって需要の形態から見れば、この資本には一階級の重みが相対しており、同様に供給から見ても、この資本は、大量にまとまった〔en masse〕貸付可能な資本〔verleihbares Capital〕として、わずかばかりの貯水池に集中された社会の貸付可能な資本〔das verliehbare Capital〕として現われるのである。」(MEGA, II/3.4, S. 1461-1463. 同前, 421 ページ。)

③「一言で言えばこうである。——貨幣資本〔moneyed Capital〕、貸付可能な貨幣資本〔das verliehbare Geldcapital〕においてはじめて、資本は商品になったのであって、自己自身を価値増殖するというこの商品の質が、利子としてそのつどつけられている固定価格をもつのである。」(MEGA, II/3.4, S. 1464. 同前, 422 ページ。)

さらに、「商業資本。貨幣取扱業に従事する資本」のところでは、次のように述べられていた。

①「蓄蔵貨幣は、鋳貨、支払手段および世界貨幣の準備ファンドとして機能しないかぎり、蓄蔵貨幣そのものであり、自己の第1の変態で凝固し自立化し保存された商品であった。しかし、資本にとっては、それは、遊休資本——資本のうちの、直接に自己自身の事業で価値増殖できない貨幣の形態で遊休している部分——である。貨幣蓄蔵者と妄想をともにしない資本家にとっては、また貨幣が価値をもつのが商品の絶対的形態としてではなく資本の——自己増殖し機能しつつある価値の——絶対的形態としてでしかないような資本家にとっては、資本のこの遊休形態は不生産的資本であり、彼自身はそれを、利潤をもたらす資本として使う必要がなければ、少なくとも利子生み資本に転化されるべき貸付可能な資本である。つまり彼にとっては、それは貨幣資本として市場にある貨幣なのである。」(MEGA, II/3.5, S. 1576.『資本論草稿集』⑧, 56 ページ。)

②「遊休している貨幣——すなわち市場に貨幣資本として投じられる貨

幣——は貸し付けられ、他人によって借りられるのであって、このこともまた、さまざまな形態(貸付、割引、等々)において貨幣取扱業の特殊的機能として現われる。貨幣取扱業はこうして同時に、貸付可能な資本について、商人が諸商品についてそうであるのと同じもの、つまり貨幣資本の需要・供給を突きあわせ集中させる媒介者でもあるのである。」(MEGA, II/3.5, S. 1578. 同前, 59 ページ。)

③「資本家は、貨幣を自分自身の事業に投下できないあいだは、この遊休蓄蔵貨幣を利子生み資本として価値増殖させよう、貸し付けようと努める。貨幣取扱業者はこのことを資本家階級全体のために行なうのである。貸借が、支払や収納と同じように、貨幣取扱業に従事する資本の特殊的機能——資本の再生産過程そのものから生じる機能——になる。以前には蓄蔵貨幣貯水池の集中として現われたものが、今では同時に、資本として貸付可能な貨幣の集中として現われる。」(MEGA, II/3.5, S. 1699-1700. 同前, 242 ページ。)

④「これら〔消費ファンド(本来の貨幣準備)〕はすべて、貸付可能な資本として貨幣取扱業者のもとに集中する。そのうえ、彼はみずから貨幣を貸し付けるのであり、また、いつでも支払うことができるように、一定のファンドを手持ちしていなければならない。彼の特殊的資本の機能は、ただ、資本の再生産過程(利潤の資本への転化)から、また一部は流通の形態から、つまり新たな資本が貨幣の形態で登場することから出てくる諸過程が自立化した形態でしかない。彼は、階級全体のために貸し借りする、というよりもむしろ階級全体の貸借を遂行するのである。」(MEGA, II/3.5, S. 1700. 同前, 243 ページ。)

『1861-1863 年草稿』では、最後に、ラムジのところで、さきに見たエンゲルス版第22章部分の①で引用されていたラムジの文章が引用されていた(MEGA, II/3.5, S. 1798)。(この箇所は、ロンドン・ノート第9冊(1851年)でのラムジの『富の分配に関する一論』からの抜萃に含まれていた(MEGA, IV/8, S. 654)。)

『1861-1863 年草稿』での以上の記述を見れば、『資本論』第3部第22章部分での「貸付可能な資本」についての叙述は、『1861-1863 年草稿』での到達点を踏まえて、それを整理しながら書かれたものであったことがわかる。

- 2) なお、「貸付可能な貨幣資本」については、川波洋一氏が、マルクスが「貸付可能な貨幣資本」という概念を確定するさいにジェイムズ・ウィルソンの「流動資本の固定化説」との格闘が重要な契機になったとする研究を発表されている。『貨幣資本と現実資本』、有斐閣、1996年、39-55ページ、参照。

(5) 現実資本、実物資本、再生産的資本、再生産過程

さきに見た「Ⅲ」での二つの問題うちの第1の問題では、貨幣資本 (monied capital) の蓄積と現実資本の蓄積との関連が問われていた。エンゲルス版の表題「貨幣資本と現実資本 [wirkliches Kapital]」に明示されている「現実資本」がこの部分の基本的なタームであることは言うまでもない。

ところが、草稿では、wirkliches Capital というタームは、次の2箇所に出てくるだけである。

①「会社事業、鉄道、等々にたいするもろもろの所有権原は、事実、現実資本にたいする権原ではある。とはいえそれらは、この資本にたいする処分権を与えるものではない。この資本は引きあげることができない。それらの所有権原は、ただ、この現実資本によって生産される剰余価値の一部分にたいする権原にすぎないのである。ところが、これらの権原がこれまた現実資本の紙製の複製になる（まるで積荷証券が、積荷とは別個に、また積荷と同時に、ある価値を与えられるかのように）。それらは、存在していない資本の名目的代表物になる。というのも、現実資本はそれらとは別個に存在していて、これらの複製が持ち手を換えることによってはけっして持ち手を換えないからである。……それらは、それ自身商品として取引できるものでありしたがってまたそれ自身資本価値として流通する複製としては、幻想的なものであって、それらの価値額は、それらを権原としている現実資本とはまったく無関係に増減することができる。」(MEGA, II/4.2, S. 530-531.)

②「架空資本である利子生み証券についても、それら自身が貨幣資本として取引所で流通するかぎりでは、同じことが言える。利子が上昇するにつれて……利子生み証券の価格は下落する。……これらの有価証券の貨幣名が減少するということは、それらの所有者たちの支払能力には大いに関係があるとしても、現実資本とはなんの関係もな

い。」(MEGA, II/4.2, S. 546.)

見られるように、ここでは「現実資本」は、いずれも「架空資本である利子生み証券」に対置されているわけである。

「Ⅲ」での「貨幣資本と現実資本」における「貨幣資本」とは、「架空資本である利子生み証券」だけではない。それどころか、むしろ、冒頭の問題提起のすぐあとで、これについてはすでに「Ⅱ」で述べたのであって、ここではこのような「貨幣資本」は「当面の考察から除いておく」(MEGA, II/4.2, S. 531), と明言されている。「貨幣資本と現実資本」における「貨幣資本」とは、すでに見たように、媒介者としての銀行業者の手中に蓄積される貸付可能な貨幣資本である。

それでは、草稿の「Ⅲ」では、このような意味での「貨幣資本」すなわち「貨幣資本 [monied capital]」に対してなにが対置されているのであろうか。あるいは、「貨幣資本 [monied capital]」との関連が問われているものは、どのようなタームで呼ばれているのであろうか。

まず、どのような資本が対置されているのか。

「現実資本」に近いものとしては、「実物資本」というタームが2回出てくる。

①「他方では、貨幣逼迫のさい、この逼迫はどの程度まで実物資本 [real capital] の欠乏を表現しているのか？ それはどの程度まで貨幣そのものの欠乏、支払手段の欠乏と同時に生じるのか？」(MEGA, II/4.2, S. 529-530.)

②「逼迫 [pressure] の場合には、貨幣資本 [monied capital] にたいする需要は支払手段にたいする需要であって、それ以外のなにものでもない（購買手段としての貨幣にたいする需要ではない）のであり、またそのさい利子率は、実物資本 [reales Capital] が過剰であろうと欠乏しようとして、非常に高くなることがありうる。」(MEGA, II/4.2, S. 593.)

エンゲルスは、後者を第32章に利用するさい、「実物資本」のあとに

「——生産的資本および商品資本——」という説明を挿入した。マルクスが「実物資本」と呼んだのは、たしかに「生産的資本および商品資本」であったであろう。そしてそれは、引用①では「貨幣の欠乏」と、引用②では「貨幣資本〔monied capital〕」と対比されている。実務的・経験的世界でも経済評論家の世界でも「貨幣資本」と「実物資本」が対比されるのはごく普通のことであるが、その「実物資本」は、英語では real capital であり、それに対応するドイツ語が reales Kapital であり、またその言い換えとしての wirkliches Kapital である。マルクスが「Ⅲ）」でやろうとしていたのは、そのような日常の競争の世界での表象で「貨幣資本と実物資本」というタームで語られているものを、その奥に秘められている内的関連から展開し説明することなのである。だから、その意味では、「Ⅲ）」の全体に「貨幣資本と実物資本」、あるいはむしろ „monied capital and real capital“ というタイトルを与えることが適当であろう。エンゲルスによる表題 „Geldkapital und wirkliches Kapital“ もそのように読まれるべきものであろう。

ちなみに、エンゲルスは、どういう理由からか、real という語を使うことをできるだけ避けるようにしていたように思われる。外来語の real や reell を使うことを避けたかったのかもしれない。エンゲルス版第 26 章では、草稿の「実物資本」を、一箇所では「物的資本〔sachliches Kapital〕」に、二つの箇所では「現実資本〔wirkliches Kapital〕」に変え、「実物的生産」を「産業的生産〔industrielle Produktion〕」に、「実物的な膨張」を「現実の産業膨張〔wirkliche industrielle Expansion〕」に変えている。これらの箇所では、real capital と monied capital との対比がきわめて明瞭に示されているので、挙げておこう。

①「実物資本〔real capital〕の供給と貨幣資本〔monied capital〕の供給とのあいだに目に見えない結びつきがあること、このことは疑いないし、また同様に、貨幣資本〔moneyed Capital〕にたいする生産的資本家の需要が現実の生産の事情によって規定されているという

ことも疑いない!」(MEGA, II/4.2, S. 484. 草稿「『貨幣資本の蓄積』の草稿について」,『経済志林』第57巻第4号,1990年,146ページ。)

②「こやつ〔オウヴェストン〕は、一方の側ではこのような非常な再生産過程の拡張,つまり実物資本〔real capital〕の蓄積が行なわれ、他方の側には「これほど巨大な貿易増加を処理するための莫大な……需要」が向かっていった「資本」があった、と思い込んでいるのか!……このことは、言い換えれば、実物的生産〔reale Production〕が拡大するにつれてこの生産の運営が信用システムの基礎の上で拡大されたということに帰着する。信用システムなしには、実物的膨張〔reale Expansion〕が「融通」にたいする需要の増大と一緒に生じるはずがないのであり、そしてこのことこそは、明らかに、「莫大な需要」ということでこの銀行家が考えているものである。」(MEGA, II/4.2, S. 488. 草稿, 同前, 158-159 ページ。)

③「この需要〔貨幣資本 (monied capital) にたいする需要〕は利潤率には全然かわりのない諸原因から増大することもありうるのであって、彼〔オウヴェストン〕自身も1847年に、実物資本〔real capital〕の減少の結果この需要が増大したことを実例として挙げている。彼は一方の意味では実物資本〔real capital〕の価値を云々し、他方の意味では貨幣資本〔monied capital〕の価値を云々しているのである。」(MEGA, II/4.2, S. 488-489. 草稿, 同前, 161 ページ。)

さて、「Ⅲ」ではこのように「実物資本」というタームは2回出てくるだけであるが、それではそれはそれ以外のどのようなタームで呼ばれているのか。それは、いまエンゲルスの説明にあるように、なによりもまず、「生産的資本」および「商品資本」である。この「Ⅲ」では、貨幣資本 (monied capital) に対比されているのは、まず圧倒的に「生産的資本〔productives Capital〕」であり(約30回)、続いて「商品資本」である(約10回)。

エンゲルス版では、草稿での「生産的資本」の約3分の2を「産業資本」

に変更した。マルクスは「Ⅲ」で、「産業資本家」あるいは「産業家〔der Industrielle〕」というタームは使っているけれども、「産業資本」というタームはまったく使っていなかった。確かに、マルクスが「生産的資本」というタームを使うとき、生産過程で価値増殖しつつある資本という産業資本の特定の循環形態を指している場合と、生産過程での価値増殖を規定的な契機としながら、貨幣資本・生産的資本・商品資本という形態をたえず取って運動する資本すなわち産業資本そのものを指している場合とがある。エンゲルスはこの両者を「生産的資本」と「産業資本」という二つのタームではっきりと区別しなかったのであろう。しかし、草稿を読めば明らかなように、マルクスが「生産的資本」というタームを使っている多くの場合に、両者に共通の意味内容が含まれていて、それらをすべてこの二つのどちらかに分けることができるかどうか、疑問なしとしない。

この「実物資本」すなわち「生産的資本」および「商品資本」はまた、次のように、「再生産的資本」とも呼ばれている。

①「この信用〔商業信用〕を銀行業者の信用から分離して考察する場合には、それが生産的資本そのものの大きさにつれて増大することは明らかである。貸付可能な資本と再生産的資本とはここでは同じものである。」(MEGA, II/4.2, S. 537.)

②「貸付可能な貨幣資本〔loanable moneyed capital〕——有利な投下を求めている遊休している貨幣資本〔monied Capital〕——の量が最大になるのは恐慌のあとであって、再生産過程が縮小し、したがってまた再生産的資本の量が一部分減少し（それが商品在庫の量であるかぎりで）、また固定資本の一部分は完全には充用されていない、等々のときである。」(MEGA, II/4.2, S. 541.)

③「すでに見たように生産的資本家が行なう実体的な〔real〕蓄積は再生産的資本の諸要素そのもので行なわれるのにたいして、すべての貨幣資本家〔moneyed capitalist〕が行なう蓄積は直接にはつねに貨幣形態で行なわれる。」(MEGA, II/4.2, S. 557.)

④「このように資本に再転化する大量の貨幣は、大量的な再生産過程の結果であるが、そのものとして見れば、つまり貨幣資本〔mon-eyed Capital〕としては、それ自身は大量の再生産的資本ではない。」(MEGA, II/4.2, S. 584.)

⑤「貨幣資本〔monied Capital〕の蓄積は、一部は、次の事実のほかにはなにも表わしてはいない。すなわち、再生産的資本の実体的な〔real〕諸要因の直接的な交換を度外視すれば、再生産的資本がその過程でとる形態である貨幣は、すべて、再生産する人々〔die Reproduktiven〕が前貸する貨幣ではなくて彼らが借りる貨幣という形態をとるのであり、実際には、再生産過程で行なわれなければならない貨幣の前貸が借りられた貨幣の前貸として現われる、という事実である。」(MEGA, II/4.2, S. 584.)

以上の「資本」は、それぞれ資本としての運動を行なうのであって、生産的資本は生産過程で剰余価値を生産し、商品資本はそのなかに含まれている剰余価値もろとも実現されなければならない。だから、貨幣資本(monied capital)と「実物資本」ないし「再生産的資本」との関連とは、貨幣資本(monied capital)と、「実物資本」ないし「再生産的資本」が経ていく過程との関連にはかならない。

そこで、「Ⅲ」では、貨幣資本(monied capital)と「再生産過程」, 「現実の再生産過程」との関連が問われることになる。この「再生産過程」というタームは約30回使われている。

この再生産過程が拡大していく過程が「資本の蓄積過程」であるから、貨幣資本(monied capital)またはその蓄積と「現実の蓄積」, 「現実の蓄積過程」との区別と関連とが問題になる。これらのタームも30回弱使われている。冒頭の問題提起、すなわち「本来の貨幣資本の蓄積。これはどの程度まで、現実の資本蓄積の、すなわち拡大された規模での再生産の指標なのか、またどの程度までそうでないのか？」というのもこのケースに含めることができる。

この再生産過程は、二つの過程を含んでいる。すなわち、生産過程と流過程である。流過程 $G—W—G$ のうちで決定的なものは $W—G$ であるから、資本にとって再生産過程で基本的な問題となるのは、生産過程と商品資本の実現の過程である。前者は産業資本特有の問題であるが、後者の過程は圧倒的に商業資本が担うことになる。そこで、「実物資本」が経る過程は、当然に、産業資本が生産した商品を商業資本が産業資本および最終の個人的消費者に販売する過程 $W—G$ を含むことになる。

さらに、産業資本の循環では、可変資本として前貸される資本部分は労働者の賃金となるのであって、労働者が賃金のすべてを生活手段の購買に当てるとしても、この $W(A)—G—W$ も「現実の再生産過程」の一部を形成する。

社会的な再生産過程を念頭に置けば、貨幣資本 (monied capital) が取り込むことができる富は、結局のところ、年々生みだされる剰余価値の一部でしかありえない。移転・保存される不変資本の価値を別として、たえず労働者の抽象的労働から対象化される新価値の量とそのなかに含まれている剰余価値の量とは、貨幣資本 (monied capital) の運動がどのように「実物資本」の増殖に影響を及ぼすかということを度外視すれば、「実物資本」の運動の結果として、つねに貨幣資本 (monied capital) にとって与えられたものである。このことの別の表現が、〈利子率は利潤率によって限界づけられているのであって、貨幣資本 (monied capital) がどれだけの富をわがものとするかということは、それが総産業資本の生産する総利潤のうちのどれだけのわがものとするかということにほかならない〉、ということなのである。

ところで、このような資本の再生産過程の現実の運動は「産業循環」という形態をとらないではない。産業循環 (industrieller Zyklus) とは、産業の循環すなわち産業資本の循環的運動にほかならないのである。その意味では、産業循環とは、まさに再生産的資本の運動を現実の時間的経過のなかで見たものである。回復 (活気の増大)、中位の活況、繁栄、過剰

生産と過剰取引、恐慌、停滞、沈静、といった産業循環の諸局面とは、じつは、基本的には、すべて再生産的資本の状態を言い表わすものにほかならない。だから、貨幣資本(monied capital)と再生産的資本との関連を、現実の資本の運動のなかでとらえようとすれば、それは否応なしに、産業循環の諸局面における現実資本の蓄積ないしその停滞と貨幣資本(monied capital)の増減との関連を明らかにすることとならざるをえない。だからこそ、「Ⅲ」では産業循環とその諸局面とを取り上げないわけにはいかないのである。けれども、このことは、この「Ⅲ」で産業循環そのものが分析の対象になっていることを意味しない。ここでは、再生産的資本の運動と貨幣資本(monied capital)の運動との関連を明らかにするために必要なかぎり、産業循環が取り上げられているのである。

以上のところで明らかにしたのは、貨幣資本(monied capital)と「現実資本」との関連とは、貨幣資本(monied capital)と「実物資本」ないし「再生産的資本」との関連であり、さらに貨幣資本(monied capital)と再生産過程および現実の蓄積過程との関連であり、それはさらに貨幣資本(monied capital)と産業資本および商業資本の運動との関連であり、最後にそれは貨幣資本(monied capital)の変動と産業循環との関連である、ということであった。この「Ⅲ」で問題となっているのは、なによりもまず、こういうことなのである。

(6) 貨幣の量

さて、「Ⅲ」の冒頭で提起されている第2の問題では、貨幣資本(monied capital)と、最も一般的な表現を使えば、「貨幣の量」との関連が問われている。「貨幣の量」もまた「Ⅲ」の基本的なタームとなっているはずである。

ところが実際には、この「Ⅲ」で「貨幣の量」について触れている箇所はごくわずかである。さらに、貨幣資本(monied capital)と貨幣量との関連について立ち入って論じている箇所には、ほとんど存在

しないと言わなければならない。つまり、マルクスは冒頭で、貨幣資本（monied capital）と貨幣量との関連について問題を立てながら、それについて未解答のままこの「Ⅲ」を終えているのである。

エンゲルスが第30-32章に、「貨幣資本と現実資本」という、冒頭の二つの問題のうちの前者、すなわち貨幣資本（monied capital）と現実資本との関連に関わるタイトルをつけたのは、「Ⅲ」の実際の内容に即したものであった。エンゲルスは、彼の第30-32章では残されたままになっている後者の問題、つまり貨幣資本（monied capital）と貨幣量との関連の問題についても論じられなければならないと考えたのであろう。彼は、「混乱」および「[混乱。続き]」のなかから彼がそれに関わると判断した部分を集め、それにこの「Ⅲ」から抜き出したわずかの部分を加えて「第33章 信用システムのもとでの流通手段」および「第34章 通貨主義と1844年のイギリスの銀行立法」の二つの章をまとめたのであった。

さて、一口に「貨幣の量」と言っても、さまざまな貨幣量が考えられる。広義の流通手段として、具体的には鋳貨の準備ファンドおよび支払手段の準備ファンドとして、民間に存在している貨幣の量のことか、それとも蓄蔵貨幣として生産者や商人の手もとに、あるいは銀行の金庫に遊休している貨幣の量のことか、それともこれらのすべてを合わせた一国にある一切の貨幣の量のことか。

さらに、これらの貨幣の量も、イングランド銀行が発券部と銀行部とに分割されていることを前提にすれば、さらに具体的に見る必要も生じるであろう。すなわち、イングランド銀行の発券部では、一方で地金準備があり、他方ではこの地金準備の額に1400万ポンド・スターリングの保証準備発行額を加えた額の銀行券発行高が計上されている。銀行部は、発券部からこの発行銀行券を受け取り、これを準備として銀行業務を行なうのであって、その結果、発行銀行券から銀行部に準備として残っている準備銀行券を除いた額の銀行券が流通銀行券として民間で手持ちされているということになる。

マルクスの言う「貨幣の量」とはこれらのうちのどの部分を指すものだったのか。

マルクスは、最初の問題設定のところで、そしてのちにもう一度問題を繰り返しているところで、次のように言っている。

①「貨幣資本〔monied capital〕の過剰供給は、どの程度まで、停滞しているもろもろの貨幣量（鋳貨\地金または銀行券）と同時に生じ、したがって貨幣の量〔Quantität von Geld〕の増大で表現されるのか？」(MEGA, II/4.2, S. 529.)

②「貨幣逼迫のさい、この逼迫は……どの程度まで貨幣そのものの欠乏、支払手段の欠乏と同時に生じるのか？」(MEGA, II/4.2, S. 529-530.)

③「貨幣資本〔monied Capital〕の相対的な増大または減少は、要するにそれの一時的な、またはもっと継続的な蓄積は、……なんらかの形態で国内にある貨幣量〔die Masse der in irgendeiner Form im Land vorhandenen Geldmasse〕とはどのような関係にあるのか？」(MEGA, II/4.2, S. 589.)

貨幣資本（monied capital）の変動と対比されているのは、①では、「停滞しているもろもろの貨幣量〔stagnante Geldmassen〕」であるが、それが「鋳貨\地金または銀行券」だと言われている。③では、「なんらかの形態で国内にある貨幣量」と言って、ここでも事実上、「鋳貨\地金または銀行券」のどの形態にあらうと、一国内にある全貨幣量を問題にしていることがわかる。要するに、この①と③について言うかぎりでは、貨幣資本（monied capital）の増減と一国内の全貨幣量の増減との関連が問われているのである。

②では、「貨幣逼迫」すなわち貨幣資本（monied capital）への需要超過は、どの程度まで、第1に「貨幣そのものの」、第2に「支払手段」の不足、欠乏と同時に生じるのか、という問題を提示しているが、これは別言すれば、貨幣資本（monied capital）の供給の減少ないしそれへの需

要の増大が、どの程度まで、「貨幣そのもの」または「支払手段」の供給の減少ないしそれらへの需要の増大によるものか、ということである。「貨幣そのもの」について言えば、これは①および③での問題を別の形態で述べているものと見るができるが、「支払手段」について言うときには、①および③の問題をさらに限定したかたちで提起していると言うことができるであろう。

のちに「通貨〔Circulation〕」の量が、一方では、貸付可能な貨幣資本に対置され、他方では、貸付可能な貨幣資本はすべて預金の形態で存在するものと想定できるとして、今度はその預金の量と対置されているが、このどちらの場合にも、「通貨〔Circulation〕」は、すべての地金、鑄貨、銀行券を含めたものとされている。

①「貸付可能な資本〔loanable capital〕の大きさは通貨〔Circulation〕の量とはまったく異なるものであること {この量の一部分は、銀行業者の準備であり、この準備は変動している。ここで通貨〔Circulation〕の量と言うのは、すべての銀行券と地金のことである、等々} ……を示しておきたい。」(MEGA, II/4.2, S. 553.)

②「この貨幣資本〔monied capital〕の量は通貨〔Circulation〕の量とは異なるものであり、またそれから独立したものである。／……信用システムの発展している諸国では、貨幣資本〔monied capital〕は、すなわち貸付として自由に使用できる貨幣資本〔monied capital〕は、すべて銀行業者および貨幣貸付業者のもとに預金の形態で存在するものと想定することができる。……／通貨〔Circulation〕{地金および鑄貨を含めて}の量が相対的に少ないのに預金が大きいということの可能性だけであれば、それはまったく次のことにかかっている。……」(MEGA, II/4.2, S. 556.)

さて、一国にある総貨幣量のうちの、流通手段または支払手段として流通する貨幣（広義の流通手段）は、実際には、鑄貨の準備ファンドまたは支払手段の準備ファンドとして公衆によって手持ちされている貨幣であっ

て、この部分の大きさは、流通する商品の総価格を流通手段として流通する貨幣の流通速度で除した額に、支払われるべき債務の総額を支払手段として流通する貨幣の流通速度で除した額を加え、ここから両方の機能で流通する貨幣の量を差し引いたものである。

マルクスは、草稿 348 ページのはじめの部分(本稿、228 ページ下から 12-9 行)で、このことを再確認したのちに、『銀行法委員会報告』から、1844-1857 年に公衆によって手持ちされていたイングランド銀行券の三つの部類(5-10 ポンド券、20-100 ポンド券、200-1000 ポンド券)の年平均額の表を引用し、それにコメントを加えている。またそれに続けて、モリスン・ディロン商会の 1856 年中の受取と支払をまとめた表(マルクスが興味深い表として繰り返し引用しているもの)を掲げ、受取と支払のどちらでも、イングランド銀行券および金銀の形態でなされたものがごくわずかであることを指摘している(MEGA, II/4.2, S.551-553)。エンゲルスはこの部分を、手を加えて、彼の「第 33 章 信用システムのもとでの流通手段」に移したのであったが、ここでは、流通貨幣の量、とくに流通している銀行券の量それ自体について述べられてはいるが、それと貸付可能な貨幣資本の量との関連についてはまったく触れられていないことは明らかである。

いま触れたように、流通する貨幣の量は貨幣の流通速度によって影響されるが、この流通速度は信用によって高められる。マルクスは、草稿 341 ページのはじめの部分(本稿、165 ページ下から 7 行-166 ページ最終行)で、「通貨〔currency〕の速度の調節者としての信用」という小見出しをつけて『通貨理論論評』から一つの引用をしたのちに、これについてコメントを加えている。またその箇所に脚注をつけ、そこで『銀行法委員会報告』から「各種の銀行券〔すなわち 5 ポンド券、10 ポンド券、20-100 ポンド券、200-500 ポンド券、1000 ポンド券〕が流通にとどまる平均日数」についての表を掲げ、「通貨の平均量」が変わらなくても「通貨の活動」が大きくなれば、銀行券が「流通にとどまる平均日数」が短くなる、と述

べている記述を引用している (MEGA, II/4.2, S. 533-534)。エンゲルスはこの部分を、彼の「第 33 章 信用システムのもとでの流通手段」の最初のところに移した。ここでも、信用と貨幣の流通速度、そして流通速度と銀行券が流通内にとどまる期間との関連が述べられてはいるが、それと貸付可能な貨幣資本の量との関連についてはまったく触れられていない。

さて、以上に挙げた諸種の記述を除いてしまうと、この「Ⅲ」のなかでもそもそも、なんらかの意味でさきに挙げたような貨幣の量にかかわると見られる記述は、次に挙げるものだけである。

①「商品価格が下がり取引量が減り労賃に投じられる資本が小さくなるにつれて、流通手段の必要が少なくなるということ、他方では、対外債務が一部は地金流出により一部は破産によって清算されてしまえば、「世界貨幣」としての貨幣は必要ではないということ、そして、手形割引（等々）がこの手形そのものの枚数および大きさの減少につれて減るということ、これは自明である。つまり、流通手段としてであろうと、支払手段としてであろうと、「新たに」投下される資本の形態としてであろうと、貨幣資本〔monied capital〕への需要は減退し、したがってまたそれが相対的に過剰〔redundant〕になること、これは自明である。」(MEGA, II/4.2, S. 532.)

②「第 1664 号。「現在（〔18〕47 年の恐慌のあと）、取引の減少と貨幣の非常な過剰があります。」（『商業的窮境』。1847-48 年。）」(MEGA, II/4.2, S. 532, Fn.)

③「ふだんは商業的割引に向けられている貨幣が諸々の貨幣センターに溜まっている。価格は下落し、労働者の雇用状態は悪い。したがって流通する媒介物〔das circulirende Medium〕の量は減少する。」(MEGA, II/4.2, S. 541.)

④「「パニックのあとでは、取引は停滞している。ふだんは商業的割引に向けられている貨幣が諸々の貨幣センターに溜まっている。」」(MEGA, II/4.2, S. 541, Fn.)

⑤「(1864年におけるオウヴァストンの動き〔motion〕を主眼に『報告〔Return〕』(1865年?)を見よ。)総じてこの報告は、預金の量をこの時期の通貨〔circulation〕の量と比較するために調べてみなければならない。(この預金だけでも、もしかすると、イングランド銀行の銀行券流通高の3倍もあるかもしれない。)」(MEGA, II/4.2, S. 555.)

⑥「いま述べた例外を別とすれば、貨幣資本〔moneyed capital〕の蓄積は、たとえば1852年と1853年に、オーストラリアとカリフォルニアの〔金鉱の〕発見の結果として生じたような、異常な地金流入によって〔生じる〕こともありうる。〔それらは〕イングランド銀行に預金された。そのかわりに銀行券が受け取られたが、金の所有者であった人びとは、この銀行券をすぐに銀行業者のもとに預金することをしなかった。そのために異常な通貨〔Circulation〕〔量が生じた〕。イングランド銀行は、割引率を2%に下げることによって、この保管物〔deposits〕を価値増殖させようとした。」(MEGA, II/4.2, S. 557.)

⑦「〔利率はただ、投下を求めている遊休資本の量の一指標にすぎません〕(同前、第271号)。のちには、この「遊休資本」は「浮動資本〔floating capital〕」(第485号)と呼ばれるようになり、また次のものであることがわかるのである〔turn out to be〕。すなわち、「イングランド銀行券〔準備の状態にある〔in reserve〕〕、……地方銀行の通貨〔country banks circulation〕、国内にある鑄貨の量」(第502号)であり、また後には「地金」(同前)〔銀行のなかにある〕もこれにはいる。こうして同じウェゲリンは、「われわれが事実上遊休資本の大部分の所持者である」(第1198号)時期には、イングランド銀行は利率に大きな影響を及ぼす、と言うのである。」(MEGA, II/4.2, S. 597.)

この六つの記述のなかで、貸付可能な貨幣資本と貨幣の量との関連について積極的に述べているのは、ただ、⑥での「貨幣資本〔moneyed capi-

tal] の蓄積は……異常な地金流入によって生じることもありうる」という部分だけである。

このように、「Ⅲ」では、マルクスは貨幣資本 (monied capital) と貨幣の量との関連を問う問題提起を行ないながら、実際にはこの問題そのものに取り組むことをしなかった。この問題は残されたままであった。それが、この「Ⅲ」のあいだに挿入されている「混乱」およびそのあとに置かれている「[混乱。続き]」で解決されているかどうかは、それらの内容そのものに即して慎重に確かめられなければならない。

(7) 商業信用と貨幣信用

以上で、「Ⅲ」の冒頭で提起されている「この信用の件 [Creditgeschichte] 全体のなかでも比類なく困難な問題」に直接かかわるタームについて見てきた。今度は、これらの問題を論じるさいに、その「信用」についてマルクスはどのように触れていたのか、ということを見ておきたい。というのも、それによって、この「Ⅲ」での考察の対象が「信用制度」そのものであるのか、それとも「信用制度のもとでの利子生み資本である貨幣資本 [monied capital]」であるのか、ということが、さらに明瞭になってくるものと考えられるからである。

「Ⅲ」でたんに「信用」というタームが使われるとき、それは、①商業信用を意味する場合、②銀行業者の信用を意味する場合、③これら全体を総括的に指す場合、の三つの場合がある。とくに、この「Ⅲ」では、草稿 341-343 ページ (MEGA, II/4.2, S. 535, Z. 23-S. 539, Z. 22) に頻出する「信用」はすべて「商業信用」を意味している。

マルクスが、草稿第 5 章で、「商業信用 [commercieller Credit]」というタームをどのように使っているかということ、そしてそれにたいする銀行業者の信用が「銀行信用」というタームでなく、「貨幣信用 [monied Credit, monetary credit]」というタームで呼ばれていることについては、すでに以前の拙稿¹⁾で明らかにしたが、「商業信用」についてはじめて本

格的に論じているこの「Ⅲ」)を見ることで、あらためて注目されるべき点を述べておこう。

エンゲルス版では、第25章の冒頭のパラグラフで、「われわれはただ商業・銀行業者信用〔der kommerzielle und Bankier-Kredit〕だけを取り扱う」となっており、また第30-32章で商業信用に対比されている銀行業者の信用は、「銀行業者信用〔Bankierkredit〕」または「銀行信用〔Bankkredit〕」となっている。そこで、一般に、マルクスは第25章の冒頭のところですでにこの二つのタームを確定していて、それを第30章以降で詳論したのだ、と考えられてきた。そして、このような把握を基礎にして、「信用」の二つの基本形態を「商業信用」と「銀行信用」というタームで呼んできた。

ところが、第1に、エンゲルス版第25章冒頭のパラグラフは、草稿では「われわれはただ商業信用〔d. commerciale Credit〕だけを取り扱う」となっており、ここでの「商業信用」は、第30章でのそれとは異なり、「公信用」とは区別される「私的信用」一般を指していたと考えられるのであって、エンゲルスは第30章での展開を念頭においてこの「商業信用」を「商業・銀行業者信用」という語に置き換えたものと見られる。

第2に、マルクスの草稿では、「5)」の「Ⅲ」)にいたるまで、実際には「Ⅲ」)で「商業信用〔commercieller Credit〕」と呼ぶことになる信用について述べているところでも、この語を使っていない。第25章冒頭でこのタームを使ったのち、エンゲルス版第30章にいたるまで、このタームをまったく使っていないのである。このことから考えられるのは、マルクスは彼の第5章の冒頭からこの「Ⅲ」)までのどこかで、「再生産で仕事をしている資本家が互いに与え合う信用」⁹⁾を「商業信用〔commercieller Credit〕」と呼ぶことにし、そしてここではじめて実際に、この語をその意味で使うことを、次のように書きつけたのだということである。

「商業信用 {すなわち再生産で仕事をしている資本家が互いに与え合う信用} は、信用システムの土台をなしている。」(MEGA, II/4.2,

S. 535.)

第3に、エンゲルス版で、この「商業信用」と区別される銀行業者の信用が「銀行業者信用」または「銀行信用」となっている箇所は、マルクスの草稿では、すべて「貨幣信用〔monied Credit, moneyed Credit, monied credit, monetary credit〕」となっているのであって、マルクスの場合には、「商業信用」に対比される銀行業者の信用はこの「貨幣信用」というタームで呼ばれていたのである。しかも、この両者は、「Ⅲ」にはいると、まず、「産業家や商人が彼らどうしのあいだで再生産過程の循環の内部でなしあう前貸」および「銀行業者（媒介者としての）によって産業家や商業家にたいしてなされる貨幣貸付」というタームで呼ばれ、そのあと、いま見た一文をもって「商業信用」について論じ始めてからは、それにたいする銀行業者の信用は、次のように、まずそのまま「銀行業者の信用」と表現されている。

①「さしあたりは、本質的に違った別の契機をなす銀行業者の信用〔Banker's Credit〕はまったく度外視しよう。」(MEGA, II/4.2, S. 535.)

②「この信用〔商業信用〕を銀行業者の信用〔bankers credit〕から分離して考察する場合には、それが生産的資本そのものの大きさにつれて増大することは明らかである。」(MEGA, II/4.2, S. 537.)

③「再生産的な循環の内部での信用（銀行業者の信用〔banker's credit〕は別として）が多いということは、貸付のために提供されて有利な投下を求めている遊休資本が多いということではなくて、再生産過程で資本が大いに充用されているということである。」(MEGA, II/4.2, S. 538.)

そして、商業信用につけ加わる銀行業者の信用を論じ始める、まさにそのときにはじめて、マルクスは「貨幣信用」という語を次のように書きつけるのである。

「ところが、この商業信用に本来の貨幣信用〔monied Credit〕が

つけ加わる。産業家や商業家どうしのあいだの前貸が、彼らにたいして銀行業者や貨幣貸付業者からなされる貨幣の前貸と混ぜ合わされる。」(MEGA, II/4.2, S. 540.)

そしてこのあと、次のようにこのタームを使う。

①「大きな商業信用と結びついた還流の順調さは、貸付可能な資本〔loanable Capital〕の供給を、それへの需要の増大にもかかわらず、確実にして、それをその水準に維持する。他方では、いまやようやく、準備資本なしに、もしくは資本なしに事業をやる、したがってまたまったく貨幣信用〔moneyed Credit〕だけに頼って操作をする騎乗者たちが、目につく程度に入ってくる。」(MEGA, II/4.2, S. 542.)

②「「好転」に伴う低い利子率は、商業信用がわずかな度合いでしか貨幣信用〔moneyed Credit〕を必要とせず、まだ自立していることを表現している。」(MEGA, II/4.2, S. 542)

③「すでに見たように、生産的な蓄積とはただ相対的にしか関連しないような、すなわちそれと反比例しているような、貨幣資本〔monied Capital〕の蓄積(過剰)が生じることがありうる。それは産業循環の2つの局面でのことである。すなわち、生産的資本が収縮している局面(恐慌のあとの循環の発端)、そして続いて、好転は始まってはいるがまだ商業信用が貨幣信用〔monied credit〕をほとんど促進していない局面である。第1の場合には、以前は稼ぎのある事業〔active business〕で充用されていた貨幣資本が遊休した貨幣資本〔unemployed monied Capital〕として現われ、第2の場合には、それが非常に低い利子率で充用されるものとして現われる。なぜなら、いまは生産的資本家が貨幣資本家〔moneyed one〕に条件を指定する〔dictate〕からである。貨幣資本〔monied capital〕の過剰は、第1の場合には生産的資本の停滞を表現しており、第2の場合には、商業信用が貨幣信用〔monied Credit〕から相対的に独立していることを表現している。」(MEGA, II/4.2, S. 547.)

このあと、エンゲルス版で「第 35 章 貴金属と為替相場」に利用された部分でも次のように書いている。

①「これは貨幣市場の状況次第である。もし貨幣がより安く借りられるとすれば、それはただ、商業信用が、貨幣信用〔monetary credit〕がそれに及ぼす影響が平素よりも少ない、という状態にあるからである。」(MEGA, II/4.2, S. 636.) (「貨幣信用がそれに及ぼす影響〔the influence on it of monetary credit〕」は「それが貨幣信用に及ぼす影響〔the influence of it on monetary credit〕」の誤記か?)

②「そのような状況では、商業家が産業家から借りることはまえよりも容易であろう。このように商業信用が容易になっているために、産業家はまえほど貨幣信用〔monetary credit〕を必要としない。それだから利子率は低くなるのである。」(MEGA, II/4.2, S. 636.)

③「このことは状況次第である。輸入商品の在庫過剰が、総じて在庫があるならば、利子率は上がるかもしれない、すなわち、商品を市場に投げ出さずにもっているための貨幣資本〔moneyed capital〕への需要が増大するかもしれない。あるいは、商業信用が貨幣信用〔moneyed Credit〕への需要に比べて大きいので、利子率は下がるかもしれない。」(MEGA, II/4.2, S. 638.)

これらを見れば、「Ⅲ」でのさきの箇所以降で、マルクスが「商業信用」にたいして、銀行業者が与える信用を「貨幣信用」というタームで呼んでいたことが明らかである。

これにたいして、マルクスが「銀行信用〔Bankcredit〕」というタームを使った稀有のケースは、エンゲルス版第 25 章、草稿 318 ページにある次のものであって、ここでは「銀行信用」はけっして銀行業者の信用すなわち銀行業者が与える信用ではなくて、預金という銀行業者が受ける信用のことである。

「ところで、銀行業者が与える信用はさまざまな形態で、たとえば、銀行業者手形、銀行信用〔Bankcredits〕、小切手、等々で、最後に

銀行券で、与えられることができる。」(MEGA, II/4.2, S. 473. 草稿「信用と架空資本」の草稿について(中)),『経済志林』第51巻第3号, 1983年, 21ページ。)

ここでは、これまで一般に「商業信用」にたいして「銀行信用」と呼ばれてきているものが、すなわち「銀行業者が与える信用」がとる諸形態の一つとして、銀行業者が受ける信用つまり預金が挙げられている。同じ「銀行信用」というタームがまったく逆のものを指すことになっているのである。

筆者は、事情がこのようである以上、「Ⅲ」でのマルクスの二つの信用の区別と関連について語る場合には、「商業信用」と「貨幣信用」というタームを用いるべきだと考える。

- 1) 「信用と架空資本」の草稿について(下),『経済志林』第51巻第4号, 1984年, 49-64ページ。この箇所ですべたことについては、ぜひとも、今回の「Ⅲ」の内容と対比しつつ、その妥当性をあらためて検討されたい。
- 2) なお、「再生産で仕事をしている資本家が互いに与え合う信用」である「商業信用 [commercieller Credit]」については、この「Ⅲ」で、さらに次のような表現が見られる。

- ①「信用が再生産過程で直接的役割を演じる」(MEGA, II/4.2, S. 531.)
- ②「産業家や商人が彼らどうしのあいだで再生産過程の循環の内部でなしあう前貸 [Vorschüsse]」(MEGA, II/4.2, S. 531.)
- ③「生産者や商人等々が互いのあいだで与え合う信用」(MEGA, II/4.2, S. 534.)
- ④「純粋に商業的な信用 [rein commercieller Credit]」(MEGA, II/4.2, S. 536.)
- ⑤「再生産的な循環 [d. reproductive circle] の内部での信用」(MEGA, II/4.2, S. 538.)
- ⑥「産業家や商業家どうしのあいだの前貸 [d. Vorschüssen]」(MEGA, II/4.2, S. 540.)
- ⑦「再生産的資本家たちが互いに与え合う信用」(MEGA, II/4.2, S. 587.)

これらの表現を見ただけでもすぐに確認できることは、「商業信用」は徹頭徹尾、再生産過程の内部での現実資本相互の関わりであり、貨幣資本 (mon-

ied capital) にたいする現実資本の運動に属するものであること、「純粋に商業的な」という語は、けっして「生産的」または「産業的」にたいするものではなく、「貨幣的 [monied]」にたいするものである、ということである。この場合の「前貸」は、それ自体としてはけっして利子生み資本の運動形態としての「貸付」を意味するものではないのである。

(8) 信用システムと信用制度

本稿では、ここまでのところですでに、断ることなしに、マルクスの Creditsystem を「信用システム」、Creditwesen を「信用制度」と訳し分けてきた。これまで筆者は、この両者を「信用制度 [Creditsystem]」および「信用制度 [Creditwesen]」として区別してきたのであるが、本稿からは、この両者をそれぞれ「信用システム」および「信用制度」という別のタームで呼ぶことにした。というのも、すでに立ち入って論じたように¹⁾、マルクスにあっては、この両語には、ほとんど区別が見られないような場合もあるけれども、ある場合には明らかに異なったニュアンスをもって使われているのであって、訳文ではまずもって両語を見分けられるようにすべきだと考えられるからである。Creditsystem を「信用システム」とするのは、最近では、システムという外来語を使うことがごく普通になりつつあって、筆者もこの語を「体制」、「制度」、等々とせずに、たんに「システム」と書き、あるいは訳すようになってきたからである。

マルクスにおける両語のニュアンスの違いについて、筆者はかつて、次のように書いた。

「マルクスは Creditsystem と Creditwesen という語をほとんど同義に使っていることが多いように思われる。……それにもかかわらず、両語にたいするマルクスの語感は微妙に異なっていて、両者を使いわけているのではないかと思われるところもある。……一般的に言って、貨幣による System に対比して、あるいは発展した Geldsystem として、「信用制度」を表象するときには Creditsystem が使われているように感じられる。これにたいして、産業資本が創造する、銀行な

どの信用機関をそなえた一つの全体としての「信用制度」を表象するときには Creditwesen が用いられているように思われる。」(「信用と架空資本」の草稿について(下)」、『経済志林』第51巻第4号、1984年、12ページ。)

このような区別があることを念頭に置いて、「Ⅲ」)のなかでこの両語がどのように使われているかを見ていこう。まず「信用システム」というタームが使われている箇所を見よう。

①「とにかく、債務の蓄積が資本の蓄積として現われうるというこの事実こそは、信用システムにおいて生じる歪曲の完成を示すものである。」(MEGA, II/4.2, S. 530.)

②「貨幣資本の蓄積を……私的な貸し手であろうと公的な借り手(国家)や再生産的な借り手であろうと、彼らの媒介者としての銀行業者(職業的な貨幣貸付業者)の手中にある富の蓄積のことだと解することができるであろう。というのも、信用システムの膨大な拡張の全体が——総じて信用が——、彼らによって彼らの私的資本として利用しつくされるのだからである。」(MEGA, II/4.2, S. 531.)

③「商業信用〔すなわち再生産で仕事をしている資本家が互いに与え合う信用〕は、信用システムの土台をなしている。」(MEGA, II/4.2, S. 535.)

④「〔商業信用という〕この信用システムは、現金支払をする必要をなくしてしまうものではない。」(MEGA, II/4.2, S. 536.)

⑤「信用システムの発展している諸国では、貨幣資本〔moneyed Capital〕は、すなわち貸付として自由に使用できる貨幣資本〔moneyed Capital〕は、すべて銀行業者および貨幣貸付業者のもとに預金の形態で存在するものと想定することができる。」(MEGA, II/4.2, S. 556.)

⑥「まず第1に、もっと長い目で見れば、実体的富の増大につれて、貨幣資本家の階級が増大する。というのは、利子で生活する引退した

greengrocer の数が増加し、第2には、信用システムの発展〔が見られ〕、それとともにまた銀行業者、等々〔が増加する〕からである。」(MEGA, II/4.2, S. 589.)

ここでぜひとも注目をしていただきたいのは、③では、商業信用が「信用システムの土台をなしている」と言い、④では、商業信用を「この信用システム」と呼んでいることである。この二つの記述は矛盾しているように見えるが、そうではないのであって、この両者の関係をクリアに把握するためには、マルクスにおける「信用システム」と「信用制度」との違いをはっきりと意識する必要があるのである。

マルクスは草稿第5章「5) 信用。架空資本」の冒頭の部分、エンゲルス版第25章の初めの約4分の1のところで、信用制度(Kreditwesen)とはどういうものか、ということを簡潔に述べている。そこで信用制度(Kreditwesen)の二つの側面とそれぞれの基礎が明らかにされていることは、エンゲルス版でも容易に読み取れることであった。これにたいしてさまざまな対立する解釈が生じたのは、そのうちの第1の側面とその基礎とをどのように理解するのか、それと信用制度そのものの関わりをどのように理解するのか、という点であった。エンゲルス版での文章の細部を無視して、最も肝心な筋をかなり正確に読み取っていた論者も確実にあったが、しかしエンゲルス版によるかぎり、それらの論者の主張は一つの可能な解釈と受け止められるのもやむをえなかった。だが、エンゲルスによる手入れを取り除いてマルクスの草稿を読むと、この問題の点については、マルクスの論旨がくっきりと見えてくるのである。

マルクスは、信用制度(Kreditwesen)の第1の側面の基礎を明らかにするために、まず、貨幣に支払手段としての機能を与える掛売買のさいに形成される、商品所持者間の債権・債務関係について述べ、これが「信用システムの自然発生的な基礎[Grundlage]」なのだとする。

「私は前に、どのようにして単純な商品流通から支払手段としての貨幣の機能が形成され、それとともにまた商品生産者や商品取扱業者

のあいだに債権者と債務者との関係が形成されるか、を明らかにした。商業が発展し、ただ流通だけを考えて生産を行なう資本主義的生産様式が発展するにつれて、信用システムのこの自然発生的な基礎は拡大され、一般化され、仕上げられていく。だいたいにおいて貨幣はここではただ支払手段としてのみ機能する。」(MEGA, II/4.2, S. 469. 拙稿「信用と架空資本」の草稿について(中)、『経済志林』第51巻第3号, 1983年, 6ページ。)

そして、このうちの最初の文に、『経済学批判。第1分冊』のページを注記している。そのなかには、次の記述が含まれていた。

「販売の両極が時間的に分離して存在するような掛売りが単純な商品流通から自然発生的に生じることが、詳細な証明を必要としない。……こうして商品所持者たちのあいだに債権者と債務者との関係が成立する。この関係は、たしかに信用システムの自然発生的な基礎[Grundlage]をなすのであるが、しかしこのシステムが存在するよりも以前に、十分に発展していることがありうる。」(MEGA, II/2, S. 202-205. 『資本論草稿集』③, 367-368ページ。)

ここで「信用システムの自然発生的な基礎」と言っているのは、信用システムがこの基礎から自然発生的に生じるという意味ではなくて、この基礎そのものの形成が自然発生的だとしていることは明らかである。そしてマルクスはいまの注記のあとに『通貨理論論評』から次の一文を引用して、「商品所持者たちのあいだに債権者と債務者との関係」がなぜ「信用システム」の基礎であるのか、ということを示唆している。

「貨幣での即時払いによって処理されるのでないすべての取引は、厳密には、信用取引または掛売買[a credit or time bargain]である。」(MEGA, II/4.2, S. 469. 前掲拙稿, 7ページ。)

つまり、商品所持者間の債権・債務関係は信用関係にほかならず、ここでの信用こそが信用システムの基礎だ、と言うのである。

ここで言う「信用システム」とは、「信用」が現実の価値である貨幣に

代わって機能しているシステムである。単純商品流通における掛売買のもとでも、手形が貨幣に代わって流通するのであって、これは信用による貨幣の代位である。この手形流通を基礎にしてはじめて、銀行制度のもとで銀行券等々の信用貨幣が貨幣に代位して流通しうるのであり、さらに、預金の振替によって預金という信用が貨幣に代わって「通貨」として機能しうるのである。このことは、いま見ている箇所につけられた脚注での引用から明瞭に読み取られるところである。

けれども、この信用システムは、貨幣システム（Geldsystem）の上に築かれて、それが十全に機能しているときには貨幣システムに対立して貨幣システムにとって代わるようにさえ見えるが、しかし結局のところ、それは発展した貨幣システムにはかならないのであって、けっして貨幣システムから自らを解き離すことができない。恐慌期にはこのことが、すなわち「プロテスタンティズムがカトリシズムの諸基礎〔Grundlagen〕から解放されないように、信用システム〔信用主義, Creditsystem〕は貨幣システム〔重金主義, Monetarsystem〕という土台〔Basis〕から解放されない」（MEGA, II/4.2, S. 646）ことが、「信用システム〔信用主義, Creditsystem〕の貨幣システム〔重金主義, Monetarsystem〕への突然の急変〔Umschlagen〕」（MEGA, II/2, S. 208; II/4.2, S. 625; II/5, S. 94）というかたちで露呈することになる。

「信用システム」がこのようなものであるとすれば、さきの一見矛盾する③および④の記述の意味は容易に理解できるものとなる。③では商業信用が「信用システムの土台をなしている」とし、④では商業信用を「この信用システム」と呼んでいたが、商業信用が、第1に、それ自身信用システムの重要な構成部分をなしていること、しかも第2に、この部分こそが信用システムの全体の土台となっていること、このことを前提すれば、両者の記述は完全に理解できる。要するに、商業信用そのものが信用システムの基礎的部分をなしているということである。

さて、マルクスは「5）信用。架空資本」の冒頭で、商品所持者間の掛

売買における信用関係が、商業の発展と資本主義的生産様式の発展とに伴って「拡大され、一般化され、仕上げられ」ていくことを述べたあと、続いて次のように言う。

「生産者や商人のあいだで行なわれるこれらの相互的な前貸が信用制度〔Creditwesen〕の本来の基礎〔d. eigentliche Grundlage〕をなしているように、彼らの流通用具である手形が本来の信用貨幣、銀行券流通、等々の基礎をなしているのであって、これらのものの土台は貨幣流通（金属貨幣であろうと国家紙幣であろうと）ではなくて、手形流通なのである。」（MEGA, II/4.2, S. 470-471. 前掲拙稿，6 ページ。）

ここでは、そのように「拡大され、一般化され、仕上げられ」た信用関係が「生産者や商人のあいだで行なわれる相互的な前貸」として、すなわちのちに「Ⅲ」での「商業信用」としてとらえられ、この商業信用が「信用制度〔Creditwesen〕の本来の基礎」だと言われているのである。

ここでの「信用制度」は、さきの「信用システム」そのものからははっきりと区別されなければならない。それは、「一方ではすべての死蔵されている貨幣準備を集中してそれを貨幣市場に投じることによって高利資本からその独占を奪い取り、他方では信用貨幣の創造によって貴金属の独占そのものを制限する」ものとして形成された「近代的銀行制度〔das moderne Bankwesen〕」（MEGA, II/4.2, S. 655）であり、「形態的な組織化と集中という点から見ればおよそ資本主義的生産様式がもたらす最も人工的で最も発展した産物」である「銀行システム〔Banksystem〕」（MEGA, II/4.2, S. 661）であり、要するに「信用・銀行制度〔das Credit- und Bankwesen〕」（MEGA, II/4.2, S. 661）である。

「信用貨幣の創造によって貴金属の独占そのものを制限する」この信用制度が、基本的に、現実の価値としての貨幣に代わるさまざまな信用によりながら、しかも「どこまでも貨幣（貴金属の形態での）が基盤〔Unterlage〕であり、この基盤から信用制度は事柄の本質上げて離脱できな

い」(MEGA, II/4.2, S. 661) のであって、最終的には貨幣から離れることができないシステムであることは明らかである。その意味で、信用制度はまさに「信用システム」である²⁾。ただし、正確には、信用制度は信用システムの一部である、と言わなければならない。というのは、信用システムはそれ自身のうちに重要な基礎的構成部分として商業信用を含んでいるのにたいして、信用制度は、実物資本相互間の信用である商業信用を基礎としながら、それとは独立に、その上に聳え立つものだからである。だから、商業信用が「信用制度の本来の基礎」だというのは、それが信用システムの基礎的部分だという意味で「信用システムの土台」と言われるのとは異なり、商業信用は、信用制度の外にあってそれが立脚する土台となっているのだ、ということを意味しているのである。信用制度の第1の側面は、まさにこの土台のうえに成立し、展開されるものである。

信用制度の第2の側面が「利子生み資本の管理」であり、貨幣取扱業がその土台をなしていることは、エンゲルス版からも容易に読み取られることであった。これにたいして信用制度の「第1の側面」は、草稿でもこの言葉を使って書かれていないので、われわれが読み取らなければならないのであるが、しかし草稿によれば、この側面が、信用制度の信用システムとしての側面、信用制度が本質的に「信用での取引」[Handel in credit] (MEGA, II/4.2, S. 391) であるという側面であること、そして商業信用がその土台をなしていることがよくわかるのである。信用制度が信用で取引をすることについては、マルクス自身が次のように書いている。

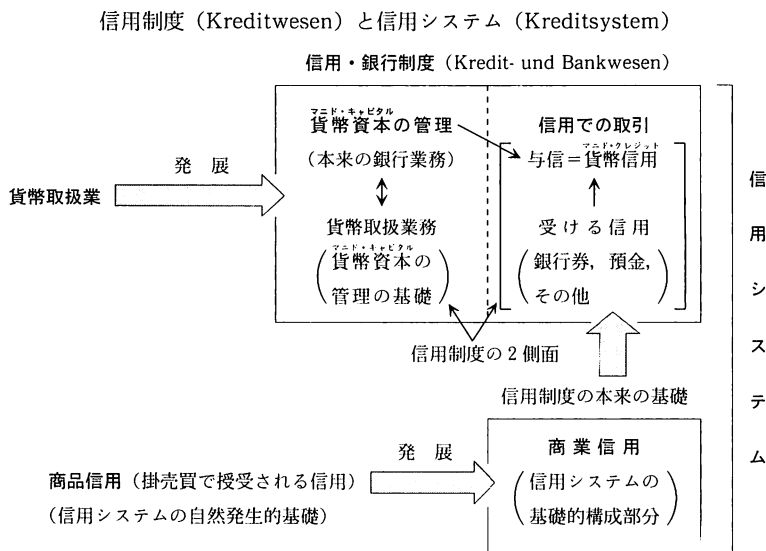
「ところで、銀行業者が与える信用はさまざまな形態で、たとえば、銀行業者手形、銀行信用 [Bankcredits]、小切手、等々で、最後に銀行券で、与えられることができる。銀行券は、持参人払いの、また銀行業者が個人手形と置き換える、その銀行業者あての手形にはほかならない。この最後の信用形態はしろうとには、とくに目につく重要なものとして現われる。なぜならば、第1には、信用貨幣のこの形態はたんなる商業流通から出て一般的流通にはいり、ここで貨幣として機

能しており、また、たいていの国では銀行券を発行する主要銀行は、国立銀行と私立銀行との奇妙な混合物として事実上その背後に国家信用をもっていて、その銀行券は多かれ少なかれ法貨でもあるからである。なぜならば、第2には、銀行券は流通する信用章標にすぎないので、ここでは、銀行業者が取り扱うものが信用そのものであることが目に見えるようになるからである。しかし、銀行業者はそのほかのあらゆる形態での信用でも取引するのであって、彼が自分に預金された貨幣を現金で前貸する場合でさえもそうである、等々。」(MEGA, II/4.2, S. 473-474. 前掲拙稿, 21-22 ページ。)

ここでは、「銀行業者が与える信用」がじつは、さまざまな形態の彼が受ける信用にほかならないことが述べられている。しかも、銀行業者が「自分に預金された貨幣を現金で前貸する場合」でさえも「信用での取引」であるとされている。銀行業者にとって、預金の形態にある貸付可能な資本は、それが現金で預金されることによって形成されたものであろうとも、他人から受けた信用なのであって、この貸付可能な資本が、現金を含むどのような形態で貸し出されようとも、それはすべて、この他人から受けた信用による取引、すなわち「信用での取引」にほかならない。銀行券の発行も貸付のさいの預金設定もともに、銀行業者が受ける信用の創造である。銀行業者が与える「貨幣信用」とは、本質的に、銀行業者が受ける信用を与えることにほかならない。それが「貨幣信用 [monied credit]」と呼ばれるのは、それはすべて銀行の「貨幣資本 [monied capital]」の貸付であり、つねに貨幣形態でなされる貸付だからである。ここで言う貨幣形態とは、言うまでもなく、あらゆる形態の信用を含むものである。

このような「信用での取引」の外部にあって、その基礎となるものが、信用制度の理論的前提であり、歴史的先行者であって、それ自身は信用制度を前提しない、実物資本相互間の商業信用なのであり、いまの引用で述べられているような、これらの「信用での取引」における「あらゆる形態の信用」の基礎が、商業手形とその流通なのである。

ここで述べてきたことの骨組みは、次のように図示することができるであらう。



さて、信用システムと信用制度との区別と関連を見たところで、ふたたび「Ⅲ」に戻って、こんどは「信用制度 [Creditwesen]」というタームを使っている箇所を見よう。

①「イギリスの経済学の著述家たち {そして 1830 年以來の言うに足りる経済学の文献はおもに通貨、信用制度、恐慌に関する文献に帰する} には次のようなことが特徴的である。」(MEGA, II/4.2, S. 545.)

②「利率の変動 {比較的長い期間に生じる変動、あるいは国の相違による利率の相違は度外視するが、前者は一般的利潤率の変動によって、後者は利潤率と信用制度の発展における相違によって [制約されている]} は、貨幣資本 [moneyed capital] の量の状況に左右される……。」(MEGA, II/4.2, S. 555-556.)

③「生産的資本家が行なう実体的な蓄積は再生産的資本の諸要素そのもので行なわれるのにたいして、すべての貨幣資本家が行なう蓄積

は直接にはつねに貨幣形態で行なわれる。だから、信用制度の発展や貨幣業務の巨大な集積は、それ自体として、貨幣資本〔moneyed Capital〕の蓄積を、現実の蓄積とは異なった形態として促進せざるをえない。」(MEGA, II/4.2, S. 557.)

④「後者の資本の蓄積は、現実の蓄積の所産であるにもかかわらず、それとは区別されるものなので、それは、貨幣資本家たち(銀行業者、等々)そのものだけを考察する場合にも、すでにこの特殊的部類の資本家の蓄積として続いて生じるのである。そしてそれは、再生産過程の現実の拡大に伴って信用制度が拡張されるごとに、それにつれて増大せざるをえないのである。」(MEGA, II/4.2, S. 558.)

⑤「収入として支出されるべき部分はだんだんと消費されて行くが、そのあいだは預金として銀行業者のもとで貨幣資本〔moneyed Capital〕を形成する。だから、利潤のうち収入として支出される部分の増大でさえも、一時的な、しかしたえず繰り返される、貨幣資本〔moneyed Capital〕の蓄積として表現されるのである。〔利潤のうちの〕もう一つの、蓄積に向けられている部分も同様である。だから、信用制度とその組織との発展につれて、収入の(再生産的資本家たちの消費の)増大でさえも、貨幣資本〔moneyed Capital〕の蓄積として表現されるのである。」(MEGA, II/4.2, S. 558.)

⑥「現実の蓄積からは独立していながらもそれに随伴するそのような諸契機によって、貨幣資本〔monied Capital〕の蓄積が膨張させられる、という理由からだけでも、循環の一定の諸局面ではつねにこの貨幣資本〔monied Capital〕のプレトラが生ぜざるをえないのであり、また、信用制度の発展につれて、このプレトラが発展せざるをえないのであり、したがって同時に、生産過程をその資本主義的諸制限を乗り越えて駆り立てることの必然性が——過剰取引、過剰生産、過剰信用が——発展せざるをえないのである。」(MEGA, II/4.2, S. 586.)

⑦「同じ貨幣片が何度貨幣資本〔monied Capital〕として役立ちうるかは、つまり、どれだけの額になるかは、まったく次のことにかかっている。……(2) 諸支払の節約に、信用制度の発展および組織化にかかっている。……」(MEGA, II/4.2, S. 587.)

⑧「信用制度の発展につれて、ロンドンのような集中された貨幣市場が創造され、それが同時に、これらの証券の取引の中心地にもなる。」(MEGA, II/4.2, S. 590.)

なによりもまず目にはいるのは、①での「通貨、信用制度、恐慌に関する文献」という文脈のなかで使われていることを除いて、すべて「信用制度の発展」といったたぐいの表現のなかで使われていることである。②、③、⑥、⑧では「信用制度の発展」、⑦では「信用制度の発展および組織化」、⑤では「信用制度とそれの組織との発展」、そして④では「信用制度の拡張」となっている。このことを念頭において、それぞれの文章を読めば、これらの文章のどれ一つとして、「信用制度〔Creditwesen〕」そのものを対象にし、それ自体を分析しようとしているものでなくて、これらのすべてが、まさに「信用制度による利子生み資本への影響」(MEGA, II/4.2, S. 505, 拙稿「資本主義的生産における信用の役割」の草稿について、『経済志林』第52巻第3・4号、1985年、(44)ページ)について語っていることが明らかとなる。

それでは、信用制度の仕組みそのものについてはマルクスはまとまったかたちでなにも書かなかったのであろうか。そうではなかった。すでにエンゲルス版第25章の最初の約4分の1のところ、それについて述べ、さらにエンゲルス版第27章で、資本主義的生産様式におけるその役割・意義について述べていたのである。ここではそれらを前提にして、信用制度が利子生み資本に、つまり具体的には貨幣資本(monied capital)に及ぼす影響に触れているのであって、ここであらためて信用制度の仕組みやその役割を論じることはまったくしていないのである。

そうである以上、この「Ⅲ」でのマルクスの記述は、なんらかの意味

で「信用制度」にかかわることを論じている、といった曖昧な意味でならば、これは「信用制度論」だと言うことができるであろうが、問題を限定して、この「Ⅲ」では信用制度そのものが論じられているのか、それとも信用制度のもとでの利子生み資本すなわち貨幣資本 (monied capital) が論じられているのか、と問うならば、答はただ一つ、すなわち後者であるほかはない。そして、「Ⅰ」および「Ⅱ」が信用制度そのものを論じていないことは、この「Ⅲ」以上に明らかなのであるから、「Ⅰ」-「Ⅲ」でマルクスが論じようとしたのは、けっして信用制度そのものではなくて、貨幣資本 (monied capital) すなわち信用制度のもとでの利子生み資本であった、と言わなければならないのである³⁾。

- 1) 「信用と架空資本」の草稿について(下)、『経済志林』第51巻第4号、1984年、11-19ページ。この箇所ですべてのことについても、ぜひとも、今回の「Ⅲ」の内容と対比しつつ、その妥当性をあらためて検討されたい。
- 2) この点については、次の二つの記述がきわめて重要かつ示唆的である。①は信用システムそのものについて述べたものであり、②は信用システムとしての信用・銀行制度について述べたものである。

①「重金主義〔貨幣システム, Monetarsystem〕は本質的にカトリック的であり、信用主義〔信用システム, Credisystem〕は本質的にプロテスタント的である。「スコットランド人は金を嫌う。」紙幣としては、諸商品の貨幣定在がもつのはたんに社会的でしかない定在である。救いにあずからせるものは信仰である。諸商品の内在的な精霊としての貨幣価値にたいする信仰、生産様式とそれの予定秩序とにたいする信仰、自己自身を増殖する資本のたんなる人格化としての個々の生産当事者にたいする信仰。しかし、プロテスタンティズムがカトリシズムの諸基礎から解放されないように、信用システム〔信用主義, Creditsystem〕は貨幣システム〔重金主義, Monetarsystem〕という土台から解放されないのである。」(MEGA, II/4.2, S. 646.)

②「それ〔銀行制度〕は、さまざまな形態の流通する信用を貨幣に代位させることによって、貨幣は実際には労働とそれの生産物との社会的な性格の一つの特殊的表現にほかならないということ、しかしこの社会的な性格は、私的生産という土台〔Basis〕に対立するものとして、つねに結局

は一つの物として、他の諸商品と並ぶ特殊的商品として、現われざるをえないということを示している。」(MEGA, II/4.2, S.662.)

- 3) エンゲルス版第25-35章を、信用制度そのものを対象とする「信用制度論」として理解しなければならないとする立場から、筆者を批判された三宅義夫氏の議論については、後出の【補論】を参照されたい。

(9) 残された問題

以上、「Ⅲ)」で考察されていることの内容を追うのではなくて、ただ、ここに登場する基本的なタームを見るだけにとどめた。この限定的な解題がこのあとの草稿の部分を読まれるさいに役立つことを願っている。

最後に、この「Ⅲ)」でのマルクスの論述の完成度について一言しておきたい。

すでに見たように、冒頭で立てられた問題のうち、貨幣資本 (monied capital) と貨幣の量との関連との問題は、この「Ⅲ)」の範囲内では本格的に論じられておらず、したがってもちろんその答も与えられていないが、いま一つの問題、すなわち貨幣資本 [monied capital] の増減と実物資本の蓄積およびその停滞との関連の問題については、この「Ⅲ)」のなかでどこまで論じられているのであろうか。この点についても、草稿355ページに次のような、エンゲルス版では削除された、問題の再提起があることに注目すべきであろう。

「さて、二つの問題に答えなければならない。第1に、貨幣資本 [monied Capital] の相対的な増大または減少は、要するにその一時的な、またはもっと継続的な蓄積は、生産的資本の蓄積とどのような関係にあるのか？ そして第2に、それは、なんらかの形態で国内にある貨幣量とはどのような関係にあるのか？」(MEGA, II/4.2, S. 588-589.)

問題がここでこのようなかたちで再提起されているということは、マルクス自身は、ここまでのところではまだこの二つの問題に答えて(答え切つて)いない、と考えていたことを示すものであろう。それでは、この再提

起以降のところではどうであろうか。第2の問題について解答が出されていると見ることはできないことはすでに述べたとおりである。それでは、第1の問題についてはどうか。このあとの部分では、貨幣資本〔monied capital〕への需要の変動と商品資本の需要供給の変動との関連について述べられているところと、オウヴァストンへのややまとまった批判を与えている部分とを除くと、議会報告書などからの引用があるだけである。貨幣資本〔monied capital〕への需要の変動と商品資本の需要供給の変動との関連について述べているところでも、再提起された問題に総括的に答えているような文章はまったく存在しない。マルクス自身は、エンゲルス版第32章にあたる部分を書き終えたところでも、第2の問題ばかりでなく第1の問題についても、答え終えた、答え切った、と考えていなかったのではないであろうか。その意味では、この「Ⅲ）」あるいはエンゲルス版第30-32章の「貨幣資本と現実資本」では、この問題について最終的な解答が出されていないと見るべきではないであろうか。この部分を書き終えたのちに、マルクスは「[混乱。続き]」で、『銀行法委員会報告』等々からの大部の抜萃を行なっているが、これは本文に補足するための材料を集めるというよりも、彼が提起した二つの問題について考え続ける作業であったのではないかとも思われるのである。

このように、提起した問題にさえ総括的なまとめも与えずに終わっているということは、著書『資本論』のための作業としてはこの部分がきわめて未完成のものであることを意味している¹⁾。われわれは、マルクスのこの作業のなかからマルクスが成し遂げた貴重な分析の成果を読み取るだけでなく、マルクスが残した問題をも読み取って、それを解決する努力をすべきであろう。

筆者は、マルクスが「5) 信用。架空資本」の執筆中に、ここでの諸問題を最終的に解くためにまだ十分に準備ができていないと感じ続けていた事柄のなかで最も大きかったのは、第2部で論じられるべき諸問題であったのではないかと考えている。マルクスは、第3部第1稿の執筆を中断し

て、第2部第1稿を書いたが、彼はここで、解明すべききわめて多くの問題を自覚しながら、それを解くところまではいかないまま、ふたたび第3部の執筆に戻ったのではないであろうか。それは、第1稿の三つの部分、すなわち「資本の循環」、「資本の回転」、「流通と再生産」のいずれについても言えることである。マルクスは、『資本論』第1部を刊行したのちも第2部の全体を書き直す努力を続け、第8稿にいたるまでの膨大な草稿を書き続けたのである。第3部第1稿の第5章は、これらの仕事のまえに終えられたものであり、その成果を反映していない。現行版（エンゲルス版）の第2部はすべて第3部第1稿の執筆後に書かれたものなのである。

だから、第3部第1稿の第5章の到達点と限界を知るためには、どうしても、第2部第1稿以後に、マルクスがそれ以降の第2部草稿のなかでどのような問題をどのように解決したか、ということを正確に把握する必要がある。これを通じて、第3部第1稿執筆時にマルクスがまだ解決しきれていなかった事柄を知り、それが第5章の分析にどのように反映しているかを見ることによって、本稿で見る「Ⅲ」の部分で残された問題をどのように展開すべきかについて手がかりを得ることができるであろう。そのさいとりわけ、のちの諸草稿でマルクスが、循環、回転、再生産の全体を通じて、貨幣の問題に苦闘していることに留意されるべきであろう。そのなかには、再生産過程における貨幣の規定性（流通手段および蓄蔵貨幣）の転換の問題、蓄積ファンドの積立と投下、固定資本の償却と更新、可変資本前貸における貨幣還流の独自性などの、のちの草稿ではじめて十分に論じられた諸問題があり、また産業循環との関連では、蓄積率の変動に伴う実物資本の需給の変動が貨幣資本〔monied capital〕への需要に及ぼす影響の問題などもある。

ところで、すでに述べたように「5）信用。架空資本」の本論は「貨幣資本〔monied capital〕論」すなわち「信用制度下の利子生み資本論」であって、けっして、信用制度そのものを詳細に分析する「信用制度論」ではなかった。この「5）」の序論部分ではたしかに信用制度そのものにつ

いて述べられてはいるが、これは概説にすぎない。マルクス自身が『資本論』の外に残されていると考えていた「信用」についての「特殊研究」でこそ、「貨幣資本〔monied capital〕論」を含む『資本論』での「利子生み資本論」を理論的前提にして、信用・銀行制度そのものの立ち入った研究が行なわれうるのである。本稿で見る「Ⅲ」)では、すでに「Ⅱ」)で「銀行資本の構成部分」についてある程度踏み込んだ説明が与えられているにもかかわらず、貨幣資本〔monied capital〕の動きについては、個別銀行の勘定科目に反映する個々の動きについてはほとんど述べられていないことに注目しなければならない。これは考察の不足ではなくて、対象の限定からくるものである。そのような分析こそ、『資本論』の外部に残された「特殊研究」としての「信用論」においてなされるべきものであろう。

- 1) 西村閑也氏は、エンゲルス版の「第33章 信用システムのもとでの流通手段」の原典解説のなかで、この章の内容に関連して、次のように書かれている。

「マルクスは、第25章で「事実上、銀行券は卸売業の鋳貨をなすにすぎず、銀行で主要事として重きをなすのは常に預金である」〔MEW, Bd. 25, S. 417〕といっておきながら、ここで預金創造のメカニズムを信用造出の一つの方法としてあげていないのは、不思議なことである。これも、第33章のノートとしての性格を示すことなのではないであろうか。」(『講座・資本論体系』第6巻、「利子・信用」、有斐閣、1985年、174ページ。)

また、松本久雄氏も、「5)」の全体について次のように述べられている。

「マルクスは、架空の預金を創設するという方法での貸し付けがあることはよく知っており、それを「帳簿信用」(bookcredit)とよんでいるが、それが銀行が与える信用の支配的な形態とは認めなかったようである。その原因としては、マルクスが見ていた時期のイギリスの銀行ではなお、「預金は鋳貨かイングランド銀行券またはそれらにたいする指図証券でなされる」のが普通だったのだろうとしか考えられない。」(「信用制度下の利子生み資本論の展開」、『金沢大学経済学部論集』第16巻第2号、1996年、16ページ。)

これにたいして、川波洋一氏は、「Ⅲ」)でマルクスが預金設定での貸付について触れていないことについて、次のように書かれている。

「銀行による貸付があたかも現実の貨幣の形態でなされるような想定を

したのは、貸付可能な貨幣資本の乖離をもっとも原基的な次元で論証しようという意図があったからである。」(『現実資本と貨幣資本』、有斐閣、1995年。)

マルクスが「5) 信用。架空資本」で、銀行の預金設定による貸付にきわめてわずかししか触れていないことは、3氏の指摘されるとおりである。川波氏が言われるように、銀行からの貨幣資本〔monied capital〕の貸付を論じるさいに、まずもって現金による貸付を想定して論じる、というのはたしかに方法的に十分に理由のあることであろう。けれども、それを論じたのちに、今度は預金設定を想定して考察を一步進める必要がないとは言えないであろう。なぜマルクスがそうしなかったのかについては、松本氏が推測を行なわれているが、その当否は別としても、西村氏が言われるように、草稿第5章の完成度が低いこと、あるいは草稿性の高いことと無関係ではないであろう。

———— * ——— * ——— *

【補論】 三宅義夫氏の大谷批判の一部について

——小野朝男氏による「大谷氏の泣き所」——

小野朝男氏は、論稿「信用論の再構築に向けて——信用論研究の回顧と展望——(続)」(『経済理論』第261号、1994年)で、「大谷禎之介氏の信用論」という項目で、筆者のこれまでの仕事をとりあげて論評され、それをわが国における信用論研究のなかに位置づけてくださったが、それに続く「三宅義夫氏による大谷批判」という項目で、三宅氏の論稿『資本論』第3部第5篇の性格——大谷禎之介氏のマルクス草稿解釈にたいする疑問について——(『立教経済学研究』第45巻第3号、1991年)での大谷批判の一部を紹介され、最後に「明らかにこれは、大谷氏の大きな泣き所を衝いたものといえよう」と評されている(小野、同前、55ページ)。

小野氏は、まず、次のように言われる。

「三宅〔氏〕は、大谷氏が現行『資本論』第3巻第5篇について「この部分の内容は『利子生み資本が信用制度のもとでとる諸姿態の

分析』〔である、と主張されている〕と要約され、その中の第25章と第27章で「信用制度の分析」はあるにしても、それは「利子生み資本が信用制度のもとでとる諸姿態の分析」をする本論のための「準備過程」にすぎないと主張される点を衝いて、次のように批判される。」（小野、同前、54ページ。〔 〕のなかは大谷による補足。）

ここでの拙見についての要約は、やや不正確である。というのも、筆者が「利子生み資本が信用制度のもとでとる諸姿態の分析」としたのは、第3部第5章の全体でなく、そのうちの第25-35章だからである。それはともかく、ここで小野氏が引用される三宅氏の文章は次のとおりである。

「〔大谷〕氏は、現行版第25～第35章の部分の本論を……、第21～第24章につづく『利子生み資本論』と見るべきであるとして、これを『信用制度論』だと見る見解に反対する主張をしているのであるが、氏がこうした主張をしているのは、要するに、氏の言う『利子生み資本が信用制度のもとでとる諸姿態の分析』なるもの自体が信用制度論であることに気付かないでいる、そのことが分からないでおられる、というあっけないほど簡単な事情のためなのである。」（三宅、前掲稿、111ページ。）

筆者は、たしかに、第25-35章の部分のうちの本論にあたる「Ⅰ）」-「Ⅲ）」では、「信用制度」が対象となっているのではなくて、信用制度下での利子生み資本すなわち貨幣資本（monied capital）が対象となっているのであり、そこでは「利子生み資本が信用制度のもとでとる諸姿態の分析」が行なわれている、と主張した。この主張にたいして、三宅氏はここで、「利子生み資本が信用制度のもとでとる諸姿態の分析」とは信用制度論にはかならないのであって、そのことに大谷は気付いていないだけのことなのだ、と言われているわけである。

かりに、なんであろうと信用制度にかかわることを論じることをもって「信用制度論」だと呼ぶのであれば、「利子生み資本が信用制度のもとでと

る諸姿態の分析」はまさに信用制度にかかわる事柄であるから、「信用制度論」であるということになる。たしかにマルクスも、おそらくはそのような意味で、「Ⅰ」-「Ⅲ」の部分指着して、「信用」にかかわる部分だとしてもいる。たとえば、「Ⅲ」冒頭のところでの、「これから取組もうとしている、この信用の件〔Creditgeschichte〕全体のなかでも比類なく困難な問題」(MEGA, II/4.2, S. 529) という表現、あるいは、「2」の冒頭での、「この§の対象（ならびに、のちに、信用について言うべきすべてのこと）」(MEGA, II/4.2, S. 431. 拙稿「「利潤の分割」の草稿について」、『経済志林』第56巻第4号、1989年、5ページ）という表現はそのようなものである。このような意味でなら、『資本論』第3部第5章でのマルクスの「利子・信用論」と呼ぶことは完全に可能である。しかし、筆者が問題にしたのは、そのような、ある意味ではどうでもよいような事柄ではなかった。

筆者は、三宅氏の第3部第5篇が①「利子生み資本論」（第21-24章）と②「信用制度論」（第25-36章）の2部分からなるという2部分構成説を、氏の名を挙げて直接に批判したことはなかったが、しかし、筆者が繰り返して実質的にこの2部分構成説を批判してきたことは事実である。

その批判のポイントは、一つは、第25-36章のうちの第36章（草稿の「6」）は、それまでの二つの部分にたいして独自の考察の領域をなしているものであって、草稿第5章の全体は、①第21-24章部分（草稿の「1」-「4」）、②第25-35章部分（草稿の「5」）、③第36章部分（草稿の「6」）の3部分から成っているのだということ、もう一つは、この3部分のそれぞれは、①利子生み資本の概念的把握、②信用制度下での利子生み資本すなわち貨幣資本（monied capital）の分析、③利子生み資本の歴史的生成の考察、という内容から成っているものであって、この3つの部分が、「資本の一般的分析」である『資本論〔Das Kapital〕』のなかで「利子生み資本」という独自の資本を分析の対象としている「利子生み資本論」を構成しているのだということ、この二つのことであった。

三宅氏が第21-24章を「利子生み資本論」だとされるときに、氏の「利子生み資本」の概念には独特のものがあった。それは、およそどんな資本でも利子を生むものとして妥当する、そのようなものこそが真の意味で「利子生み資本」の名に値するのであって、第24章までの展開で、そのような利子生み資本の概念が完全に与えられている、という把握である。貸し付けられて貸し手に利子をもたらす資本のことを利子生み資本だと考えるのは間違っているというわけである。このように考えるとところから、第25章以下では、もはや利子生み資本が対象になっているなどということはいえないということになる。氏が第25-36章を「信用制度論」だとされたのは、たんに、そこでは「信用制度」が対象とされている、ということからだったのではなかったのである。そうではなくて、氏によれば、第25章以降でも「利子生み資本」が考察されていると考えるのは、利子生み資本の概念をきちんと理解していない証拠なのであり、したがってまた、同じ利子生み資本が、第21-24章では抽象的に、第25章以降では具体的に考察されているなどとするのは途方もない誤りなのである。それでは第25章以降ではなにが対象となっているのか、と言え、それが「信用制度」だ、というわけである。(マルクスが「5)信用。架空資本」のなかで「利子生み資本」という概念を三宅氏の言われるような意味で使っていたのかどうかについては、筆者は、拙稿「利子生み資本」の草稿について、『経済志林』第56巻第3号、1988年、の「3. 利子生み資本」で、マルクスの記述をもとに検討したので、参照されたい。)

このような、かねてからの氏の本来の主張から見れば、さきの拙論批判での、大谷は「利子生み資本が信用制度のもとでとる諸姿態の分析」が信用制度論にほかならないことがわかっていないだけのことだ、という文章は、まことに奇異なものに響く。なによりもまず、三宅氏が本当にそのように考えておられるのであれば、氏は、第25-35章部分で「利子生み資本が信用制度のもとでとる諸姿態の分析」が行なわれていることを認められたうえで、そのような分析が「信用制度論」にほかならないのだ、と言わ

れていることになる。そうだとすると、「利子生み資本が信用制度のもとでとる諸姿態の分析」が「利子生み資本」を考察するものであることはあまりにも明らかなことであるから、氏は、ここで事実上、「信用制度論」はけっして利子生み資本の考察ではないのだ、というかねてからの主張を引っ込めてしまっておられるのである。あるいは、こうも表現できるであろう。「信用を利子生み資本そのものとの関連のなかで考察する、すなわち信用が利子生み資本に及ぼす影響を、またそのさい信用がとる形態をも考察する」（エンゲルス版）ということと、「利子生み資本そのもの {信用制度による利子生み資本への影響、ならびに利子生み資本がとる形態} の考察」（草稿でのマルクス）とは、どちらも結局のところ信用制度論だという点で同じことなのであって、大谷はそのことに気付かなかっただけなのだ、と。それでは、いったいどうして、「利子生み資本が信用制度のもとでとる諸姿態の分析」が信用制度論にほかならない、などと言えるのか、と問えば、そこで、小野氏が次に引用されている三宅氏の文章が登場することになる。

小野氏は言われる。

「三宅氏にしてみれば、「信用制度の仕組みについて述べるには、多くの場合、そこで貨幣資本がどういう動きを演じるのかということをおきにして述べることはできない」のである。氏は、それを次のような例示をもって展開される。／「たとえば、銀行が現金準備——支払準備——を基礎として借り手の預金口座に預金の設定をするという銀行信用の供与について語る場合、その現金準備はその銀行の手に集った貨幣資本であり、借り手の預金口座に設定した預金額はその貨幣資本にほかならない。そして銀行は借り手に資金の形で貨幣資本を供給すると同時に、借り手にたいして一定の期日にそれに見合う貨幣資本の返済、利子の支払いという請求権をもつことになる。というように、そこでの貨幣資本の動きをおきにして銀行信用の供与について語ることはできない。これはほんの一例であるが、簡単にいえば、信用制度

を『信用制度』として述べ、そのあとで『貨幣資本』について述べるといったことは、そもそもできる事柄ではないのである。信用制度について多少とも基礎的知識をもっている人であれば、こんなことは説明するまでもないことであるが。」とさえいわれるのである。」(小野, 同前, 55 ページ。)

ここでは、一転して、第25章および第27章で信用制度の準備的考察が行なわれ、第28章での「若干のとくに経済学的な論評」を経て、第29-35章で信用制度下の利子生み資本つまり貨幣資本(monied capital)を対象とする本論が展開される、という筆者の主張にたいして、まず「信用制度」について述べ、次に「貨幣資本」について述べるなどということは「そもそもできる事柄ではない」と批判されているわけである。なぜできないかと言えば、「信用制度の仕組みについて述べるには、多くの場合、そこで貨幣資本がどういう動きを演じるのかということを抜きにして述べることはできない」からであり、その例示として、「そこでの貨幣資本の動きを抜きにして銀行信用の供与について語ることはできない」ことを挙げられるのである。

この議論は、拙見にたいする批判としては、まことに奇妙かつ拙劣なものだと言わざるをえない。なぜなら、まず第1に、筆者は、第25章の最初の4分の1ほどのところで信用制度について考察されていることを、草稿の第25章部分の全体を、エンゲルス版との相違を注記しながら紹介し、そのうえで、草稿にもとづいて、そこでなにがどのように論じられているかということを中心に詳細に論じていたのであって、まず「信用制度」について述べ、次に「貨幣資本」について述べるなどということは「そもそもできる事柄ではない」と言われるのであれば、まずなによりも、拙稿での紹介した第25章部分でのマルクスの叙述が信用制度を論じたものでないことを積極的に示されなければならなかったはずだからである。また第2に、筆者はどこでも、信用制度を論じるときには貨幣資本(monied capital)の動きについて語るべきでなく、貨幣資本(monied capital)に

について論じるときには信用制度について語るべきではない、などと主張したことはないのであって、拙見があたかもそのようなものであるかのようと言われるのは、たんなるレトリックとしても、あまり上等なものとは言えないからである。

筆者が言う序論としての信用制度論では、もちろん三宅氏の言われる「信用制度の仕組み」の説明に当たって、銀行に集中する貨幣資本 (monied capital) がその中軸をなしているのであって、これへの言及なしに「信用制度の仕組み」を説明できるはずがない。だが、問題は、それへの言及があるかないかではなくて、そこで「信用制度の仕組み」が論じられているのか、それともそれ以外のことが論じられているのか、ということである。三宅氏はこのことに答えるべきだったのである。

また、筆者が言う本論としての貨幣資本 (monied capital) 論では、対象が信用制度下の利子生み資本であり、その諸姿態なのであるから、信用制度の仕組みへの言及なしに、それを論じることができるはずがない。ただ、そこではたして「信用制度の仕組み」そのものが論じられているかどうか、ということが問題なのである。たとえば、三宅氏は、エンゲルス版の3つの章からなる「貨幣資本と現実資本」のどこで「信用制度の仕組み」そのものが論じられていると言われるのであろうか。預金設定での貸付のさいにどのように「貨幣資本」が供給されるか、といったことが、「貨幣資本と現実資本」のどこで論じられているのであろうか。マルクスにあっては、預金設定での貸付それ自体がまったく取り上げられていないことは別としても、この部分で論じられている問題は、そのような取引のさいの銀行の貸借対照表上の動きのような個別の事象ではまったくないのである。しかも、「貨幣資本と現実資本」のところで「信用制度の仕組み」の説明をする必要がなかったのは、すでに第25章と第27章でそれについて基本的なことを述べていたからであることは、あまりにも明らかなことではないであろうか。

このような議論をされたうえで、三宅氏が「信用制度について多少とも

基礎的知識をもっている人であれば、こんなことは説明するまでもないことであるが」、と付け加えられているところを見れば、拙見にたいする三宅氏の批判の性質——すなわち、どのような性質の批判であるか、ということ——が、さらにあからさまに見えてくるというものである。

小野氏が紹介された三宅氏の大谷批判は以上に尽きるのであるが、小野氏がこの全体にたいして、「明らかにこれは、大谷氏の大きな泣き所を衝いたものといえよう」、と論評されているのは、おそらくは、小野氏には、三宅氏の、利子生み資本論を含む、かねてからの議論の本質的な部分について見過ごされているところがあり、その結果、三宅氏におけるそれと三宅氏の拙論への批判との著しい乖離にまったく気付かれなかったためではないかと考えられる。

なお、一つだけつけ加えておく。筆者は、拙稿「『経済学批判』体系プランと信用論」(『資本論体系』第6巻、「利子・信用」、有斐閣、1985年)で、「この「5)」は、事実上きわめて多角的に、しかもある程度まではその動態において、信用制度を論じたものとなっている。後年……マルクスは第5章の内容を、「利子と企業利得とへの利潤の分裂。利子生み資本。信用制度」と要約しているが、ここで最後に「信用制度」とつけ加えたのは、彼の手もとにあった第1稿中の第5章の内容を念頭に置いてのことであったと考えられる」(同前、272-273ページ)と書いた。その後、1985年10月の信用理論研究会秋季大会での報告で、その質疑応答のなかで、「第5篇全体を利子生み資本論として統一的にとらえることが重要になってきていると考えるので、第25章以降を「信用制度論」とすることに批判的にならざるをえない」、と述べた(『信用理論研究』第3号、1986年、70ページ)。『信用理論研究』に収めるさいに、筆者はこの部分に下線をほどこして強調した。三宅氏は、拙見批判のなかで、この二つの記述について、「同一人の見解とは思われない。つまり、言葉を換えていえば、大谷氏の二つの発言は支離滅裂であるとするほかはないのである」、と評されている(三宅、同前、114ページ)。筆者は、『資本論体系』での拙論を

書いたのちに、草稿第5章の「5) 信用。架空資本」の部分の内容のとらえかたに不徹底なところがあったことを感じ、そのことを信用理論研究学会の大会で述べたのであって、したがって、それは拙見の訂正であった。だからこそ、活字にするさいに、そこをとくに下線で強調したのである。そしてそのことは、口頭で三宅氏に説明しただけでなく、さらに拙稿「利子生み資本」の草稿について」(『経済志林』第56巻第2号、1988年)のなかで、「この第2の部分〔つまり「5) 信用。架空資本」〕は端的に「貨幣資本〔monied capital〕論」と呼ぶことができるであろう」と述べ、それに次のように注記しておいた。「第2の部分についての以上の特徴づけは、かつて拙稿で、この部分では「信用制度と信用制度下の利子生み資本の諸形態」が考察されている、としたのを、さらに明確に表現しようとしたものである(「『経済学批判』体系プランと信用論」、講座『資本論体系』第6巻、「利子・信用」、有斐閣、1985年、所収、269ページ)。」

筆者がこのような拙見を訂正したことを知られていたはずの三宅氏が、「大谷氏の二つの発言は支離滅裂であると見るほかはない」と書かれたのは、批判の気持が先走り、それとともに筆の方もいささか走りすぎたのであろう。三宅氏は、『講座・信用理論体系』第1巻(日本評論社、1956年)の「概説—信用理論の体系」を書かれ、その後、それに手を入れられて著書『マルクス信用論体系』の「第1章 マルクス信用論の体系」とされたのであるが、そのうちの「2 第3部第5篇の信用論の構成」の「まえがき」の部分を見ると、明らかに前者とは基本的なところで大きく異なった見解を述べられている。氏はそのことについて、第1章の冒頭に置かれたまえおきのところで、「かなり大幅な改訂となった」と記されている。もし、読者にして、この断り書きを無視して、前著での叙述とこの書での叙述とがまったく違って、「同一人の見解とは思われない」、この「二つの発言は支離滅裂であると見るほかはないのである」と評する者があったとしたら、三宅氏は、「人の書いたものをきちんと読めないようでは、手のつけようがないですね」、と言われたのではないであろうか。

———— * ———— * ———— * —————

4. 第30-32章の草稿、それとエンゲルス版との相違

本節では、第3部第30-32章に用いられたマルクスの草稿を見る。これまでと同様に、草稿からの訳文をにかけて、それに、第1に、MEGA版（MEGA, II/4.2）の「付属資料〔Apparat〕」におさめられた「異文目録」，「訂正目録」，「注解」のなかから該当する部分を注記し，第2に，エンゲルス版（MEW版，また必要に応じて，エンゲルス自身の手にかかる唯一の版である1894年のマイスナー版——「1894年版」と略称する——）におけるエンゲルスの手入れを注記する。注記する手入れ（相違）の範囲や用いる記号類は，これまでの拙稿でのものと同じである。なお訳文には，岡崎次郎氏の訳（大月書店刊の諸版）を土台として使わせていただいたが，ほとんどそのままとなっているところもあれば，大きく手を加えたところもある。いずれにせよ訳文は，エンゲルス版との相違を示す必要に制約されていることをご理解いただきたい。

草稿本文中の { } はマルクスによる角括弧，[] による挿入はMEGAの編集者によるもの，〔 〕による挿入は筆者によるものである。下線による強調は，とくに注記しないかぎり，すべてマルクスの草稿における，1本の下線による強調であり，MEGAではイタリックによって示されている。エンゲルス版ではこの強調は原則として省かれた。エンゲルス版で強調されている部分（1894年版では隔字体，MEW版ではイタリック体）は，そのつど注記する。

草稿ページは次の記号で示す。MEGA版では，草稿ページの表示があるだけであるが，本稿では，草稿ページの上半部と下半部とをそれぞれ区別して示した。（以下の数字および語句はもちろん例示のためのものである。）

|342 上| 手形で... ここから 342 ページの上半部が始まる。

/342 上/ 手形で... ここから 342 ページの上半部の中途のある部分が始まる。

...ある。| ここまでのページ（の上半部または下半部）が終わる。

...ある。/ ページ（の上半部または下半部）の途中でいったん切れることを示す。つまり、草稿のこのページには、このあとにさらに別のなんらかの記述があることを示す。

草稿のうち本稿に収めた部分は MEGA 版では「テキストの部」の 529 ページ 27 行-561 ページ 15 行、および、584 ページ 1 行目-597 ページ 29 行であるが、この MEGA 版のページはその最初のところに 530 のように記した。ただし、原注については、途中でページが変わる場合以外には、MEGA 版のページを記載しなかったが、本文のなかの注番号のあるページの下部に脚注として収められている。

草稿についても MEGA 版についても、ページの変わり目が文の中途である場合には、あとのページの最初の語の直前をその変わり目とみなす。

テキストへの注記にかんする約束事は、次のとおりである。

マルクス自身の注は、筆者の注と区別できるようにするため、その注番号をゴシック体にし、またそのまえに「【**原注**】」と記す。

MEGA 版の「付属資料」による注記は、パラグラフごとに、本文中の該当箇所の直前に丸つき数字の注番号をつけ、パラグラフのあとに一括して掲げた。そのさい、それぞれの注番号のあとに、「異文目録」からのものには「**〔異文〕**」, 「訂正目録」からのものには「**〔訂正〕**」, 「注解」からのものには「**〔注解〕**」と記した。異文注では、MEGA での記載にならって、最初にテキストにあるものを掲げ、それがどのように変更されてきたものかを示す、という仕方をとった。たとえば、「A←B←C」となっている場合には、草稿テキストで A となっている部分が B を訂正したものであり、

BがさらにまたCを訂正したものであることを示しているわけである。書き加えおよび削除については、いちいちその旨を記した。

筆者による、エンゲルス版との相違その他についての注記では、MEGA版による注記とは異なり、原則として、該当箇所の直後に片バーレンつき数字の注番号をつけ、MEGA版による注のあとに一括して掲げた。なお、注番号は該当箇所の先頭につけた場合もある。

注のなかでは、草稿とエンゲルス版との相違は、草稿訳文の該当部分をまず掲げ、次にそれがエンゲルス版でどのようになっているかを記す、というしかたで示す。すなわち、「A→B」は、草稿中のAがエンゲルス版ではBに変えられていることを示し、「A——削除」は、草稿中のAがエンゲルス版では削除されていることを、「挿入——A」は、エンゲルス版ではここにAが挿入されていることを示す。意味の変化をもたらさない語句の変更(外国語のドイツ語への変更、文体上の統一や改善——とエンゲルスには思われたもの——のための変更、等々)については、誤解が生じないかぎり、訳文中の訳語の直後に原語を〔 〕に入れて示した(このような場合でなくても、原語を示したほうがいいと判断した場合には、それを〔 〕に入れて示している)。場合によっては、注のなかで、訳語を掲げたあとに、原語で「A→B」とする仕方で示した。これらの変更の記載は、煩瑣をさけるために、網羅的ではなく適宜取捨選択してある。

注記のさいに、エンゲルス版とは異なる、草稿でのマルクスの原文をなるべく示すことを原則とする。エンゲルスの手入れは、訳文でも変更が生じるものばかりでなく、同じ意味の別の単語で置き換えた場合、文章構造の変更、括弧類の変更、なども注記する。しかし、次のようなものは煩瑣になるだけだと思われるので、原則として取らないことにする。——正書法上の変更、語順の局部的な変更、人称変化・格変化の訂正、定冠詞の削除・挿入、前置詞などの文体上の反復挿入、同じ動作名詞の-ung形と-en形との交換、意味にほとんど変更をもたらさない句読点の変更、語句の局部的変更、等々。

なお、「貨幣資本」ないし「貨幣資本家」の原語が monied capital ないし monied capitalist である場合には、必ずそれを〔 〕に入れて示しているので、この語がない場合には、原語は Geldcapital ないし Geldcapitalist となっているわけである。

----- * ----- * ----- *

〔エンゲルス版「第 30 章 貨幣資本と現実資本・Ⅰ」〕

〔529〕 | 340 上 | Ⅲ)¹²⁾ これから取り組もうとしている、この信用の件〔Creditgeschichte〕全体のなかでも比類なく困難な問題³⁾は、次のようなものである。——⁴⁾ 第 1 に⁵⁾、本来の貨幣資本の蓄積。これはどの程度まで、現実の資本蓄積の、すなわち拡大された規模での再生産の指標⁶⁾なのか、またどの程度までそうでないのか？ いわゆる「資本のプレトラ」⁷⁾この表現は、つねに⁸⁾ 貨幣資本〔monied Capital〕⁹⁾について用いられるものである⁷⁾、——これは¹⁰⁾ 過剰生産²⁾と並ぶ一つの特的な現象をなすものなのか、それとも過剰生産を表現するための一つの特的な仕方すぎないのか¹¹⁾？ 貨幣資本〔monied capital〕の過剰供給は、どの程度まで¹²⁾、停滞しているもろもろの貨幣量（铸貨、地金¹³⁾ または銀行券¹⁴⁾）¹⁵⁾と同時に生じ、したがって貨幣の量の増大で表現される¹⁶⁾のか？

① 〔注解〕「資本のプレトラ」——マルクスは「資本のプレトラ」についての見解を『1861—1863 年草稿』で述べていた。カール・マルクス『経済学批判 〈1861—1863 年草稿〉』を見よ。(MEGA², 第 2 部第 3 巻第 3 分冊, 1119 ページ 38 行—1122 ページ 36 行 [『資本論草稿集』⑥, 698 ページ上段 16 行—703 ページ上段 5 行])

② 〔異文〕「と並ぶ」——あとから書き加えられている。

1) 「Ⅲ」——削除。

2) 挿入——「第 30 章 貨幣資本と現実資本・Ⅰ」(表題) ここから、エンゲ

ルス版で「第30章 貨幣資本と現実資本・I」に利用された部分が始まる。

- 3) 「これから〔nun〕取り組もうとしている、この信用の件〔Creditgeschichte〕全体のなかでも比類なく困難な問題」→「信用制度〔Kreditwesen〕に関連していま〔jetzt〕取り組もうとしている比類なく困難な問題」
- 4) エンゲルス版では、ここで改行されている。
- 5) 「第1に」——エンゲルス版でも強調されている。
- 6) 「指標」——indicativ→Anzeichen indicativ は indicator とでもあるべきところであろう。
- 7) 「() および「」」——削除。
- 8) 挿入——「ただ」
- 9) 「貨幣資本〔monied Capital〕」→「利子生み資本すなわち貨幣資本〔Geldkapital〕」
- 10) 「これは」——草稿では es となっているが、エンゲルス版でのように sie とあるべきところである。
- 11) 「過剰生産と並ぶ一つの特異的な現象をなすものなのか、それとも過剰生産を表現するための一つの特異的な仕方にすぎないのか」→「産業的過剰生産を表現するための一つの特異的な仕方にすぎないのか、それとも産業的過剰生産と並ぶ一つの特異的な現象をなすものなのか」
- 12) 「貨幣資本〔monied capital〕の過剰供給は、どの程度まで」→「貨幣資本〔Geldkapital〕のこのプレトラ、この過剰供給は」
- 13) 「鋳貨・地金」——MEGA はこのような仕方、「鋳貨」という語の上に「地金」という語が書き加えられていることを示している。MEGA は、マルクスがときおり行なっているこのような書き方を、coin\bullion という仕方で示している。(この表記法には問題がないわけではない。coin\bullion というような簡単な場合はいいのであるが、下の語が二つ以上であったり、上の語が二つ以上であったりした場合には、下の語の始まるところがどこか、上の語の終わるところがどこか明示できないからである。)
- 14) 「鋳貨・地金〔coin\bullion〕または銀行券」→「地金〔Barren〕、金貨幣、銀行券」
- 15) 挿入——「の現存と」
- 16) 「貨幣の量の増大で表現される」→「この現実の貨幣の過剰は、あの貸付資本のプレトラの表現であり、現象形態である」

他方では¹⁾、貨幣逼迫のさい、この逼迫は²⁾どの程度まで実物〔530〕資本³⁾の欠乏を表現しているのか？ それは⁴⁾どの程度まで貨幣そのものの欠

乏、支払手段⁵⁾の欠乏と同時に生じるのか？

- 1) 「他方では」→「そして、第2に」
- 2) 「貨幣逼迫のさい、この逼迫は」→「貨幣逼迫すなわち貸付資本の欠乏は」
- 3) 「実物資本〔real capital〕」→「現実資本（商品資本と生産的資本）」
- 4) 挿入——「他方で」
- 5) 「支払手段」→「流通手段」

われわれがこれまで¹⁾ 貨幣財産²⁾の蓄積の独自の形態を考察してきたかぎりでは、それは「蓄積された、労働にたいする所有の請求権」^①というもろもろの蓄積³⁾に帰着する。²⁾国債という資本の蓄積が意味するものは、⁴⁾国家の債務者の増大、だからまた、⁵⁾ 租税にたいしてある金額を先取りする権利をもつ⁶⁾、国家の債権者という一階級の増大以外のなものでもない。a) ⁽⁷⁾とにかく、⁸⁾ 債務の蓄積⁹⁾が資本の蓄積として現われうというこの事実こそは、信用システム〔Creditsystem〕において生じる歪曲の完成を示すものである¹⁰⁾。{この点については^③もっとさきで立ち返らなければならない。}¹¹⁾⁷⁾とにかく、¹²⁾ 最初に借り入れられて¹³⁾ 支出されてしまった資本のために発行されたこれらの債務証書が、つまり消滅してしまっている資本のこれらの^④紙製の複製が、売ることのできる商品であり、したがってまた資本に再転化させられることができるかぎり、私人にとっては¹⁴⁾ それらが資本として機能するのである。/

- ①〔異文〕ここに、「および……から切り離された……それらの貨幣表現」と書いたのち消している。
- ②〔異文〕「国債という資本の蓄積が」←「国債という資本——この資本の蓄積——が」
- ③〔注解〕「もっとさきで」——178 ページ 18 行-25 行への注解を見よ。[この注解の内容は次のとおりである。『『要綱』には、マルクスの「資本」の部のためのプランが含まれているが、この部を彼は、資本一般、競争、信用および株式資本という四つの篇に編成しようとしていた（MEGA[®]、第1部第1巻第1分冊、187 ページおよび 199 ページ〔『資本論草稿集』①、310-311 ページおよ

び329ページ)を見よ)。——マルクスからエンゲルスへの手紙, 1858年4月2日。——カール・マルクス『経済学批判。第1分冊』, MEGA[®], 第2部第2巻, 99ページ [『資本論草稿集』③, 203ページ], をも見よ。長年にわたる自己了解の過程の中心にあったのは, 一方では第1篇であって, 純粋な姿態における価値および剰余価値についてこの篇で述べられたことが, 最終的に『資本論』をつくりあげたのであり, 他方では, 平均利潤と生産価格の理論であって, 『1861-1863年草稿』でのその仕上げがマルクスに, なによりも, 「資本一般」と諸資本の「実在的な」運動——競争と信用——とのあいだの徹底した分離をとりやめる気にさせたのである。この運動の基本的なものは『資本論』に取り入れられたが, それよりも具体的なものは別個の特殊な諸論究に留保されるはずであった。これらの論究は書かれなかった。」(MEGA, II/4.2, S. 1231.)

④〔異文〕「紙製の」——あとから書き加えられている。

1) 挿入——「貨幣資本[Geldkapital]と」

2) 挿入——「一般」

3) 「蓄積された, 労働にたいする所有の請求権」^①というもろもろの蓄積[accumulations „accumulated claims of property upon labour“] → 「労働にたいする所有の請求権の蓄積」 なお, accumulationsの語末のsは複数語尾と見るほかはなく, したがってマルクスはこの語を, 英語の単語のつもりで書いたものと考えられる。MEGAがこの語をAccumulationsと大文字にしているのは不適切であろう。

4) 挿入——「すでに明らかにしたように」

5) 「国家の債務者の増大, だからまた,」——削除。「債務者[Staatsschuldner]」は「債務[Staatsschulden]」の誤記ではないかと思われる。エンゲルスがこの句を省いたのは, 「債務者」ではおかしい, と考えたからであろう。

6) 「先取りする権利をもつ(ont a prélever)」→ 「先取りする権利を与えられた[für sich vorwegzunehmen berechtigt]」ここでフランス語が使われていることは, マルクスが, この文に付けられた脚注でのシスモンディを想起しながらこの文を書いたことを示している。

7) 「(」および「)」——削除。

8) 「とにかく[indeß],」——削除。

9) 挿入——「でさえも」

10) 「事実こそは……を示すものである」→ 「事実のなかに……が示されている」

11) 「{この点についてはもっとさきで立ち返らなければならない。}」——削除。

- 12) 「とにかく [indeß],」——削除。
 13) 挿入——「とくに」
 14) 「私人にとっては」→「その所持者にとっては」

【原注】 | 340 下 | a) ¹⁾「公債は、歳入のうちから債務の支払にあてられる部分を表わしている仮構の資本 [le capital imaginaire] 以外のなにもでもない。それと同額の資本がすでに費消されてしまっているのであって、公債の名付け親の役を果たすのはこの資本だが、しかし公債が表わしているのはこの資本ではない。なぜなら、この資本はもはやどこにも存在しないのだからである。にもかかわらず、労働と産業とから新たな富が必ず生じてくる。毎年この富の一部分²⁾は、あらかじめ、かの失なわれてしまった富を貸した人びとに割り当てられて²⁾いる。この部分は、富を生産する人びとへの課税によって取り上げられて、国家の債権者に与えられるであろう。そして、この国での通常の、資本と利子との比率に基づいて、債権者たちが受け取るべき年々の賃料を生み出すことのできる資本と同額の一つの仮構の資本 [un capital imaginaire] が想定されるのである。」
 (シスモンディ『新経済学原理』, 第2巻, [229,] 230 ページ。)【原注 a) 終り】 |

① 【注解】 この引用での強調はマルクスによるものである。

- 1) 「部分 [portion]」——MEGA では protion と誤植されている。
 2) 「割り当てられて [assignee]」——MEGA では assignee と誤植されている。

/340 上/ 会社事業、鉄道、¹⁾等々にたいするもろもろの所有権原は、²⁾事実、現実^①資本にたいする権原ではある。とはいえそれらは、この資本にたいする処分権を与えるものではない。この資本は引きあげることができない。それらの所有権原は、ただ、この現実資本によって生産される³⁾ 剰余価値の一部分にたいする権原^②にすぎないのである。ところが、これら

の権原がこれまた現実資本の紙製の複製になる(5)まるで積荷証券が、積荷とは別個に、また積荷と同時に、ある価値を与えられるかのように(6)5)。それらは、存在していない資本の名目的代表物になる。というのも、現実資本はそれらとは別個に存在していて、これらの複製が持ち手を換えることによってはけっして持ち手を換えないからである。それらは利子生み資本の形態になる。なぜならば、それがいくらかの収益を保証する⁷⁾だけではなく、⁸⁾売却によって資本価値としてのその返済を受けることができるからである。これらの紙券の蓄積が鉄道、鉱山、⁹⁾等々の蓄積を表現しているかぎりでは、この蓄積は現実の再生産過程の拡大を表現しているのであって、それは¹⁰⁾、たとえば¹¹⁾動産所有にたいする課税表の拡大がこの動産所有¹¹⁾の拡大を示しているようなものである。しかしそれらは、それ自身商品として取引できるものでありしたがってまたそれ自身資本価値として流通する複製としては、幻想的なものであって、それらの価値額は、531 それらを権原としている現実資本¹²⁾とはまったく無関係に増減することができる。利子率の低下が、貨幣資本(monied capital)のもろもろの特有な運動にはかわり¹³⁾なく、利潤率の傾向的低下の¹³⁾結果であるかぎり、それらの価値額は、¹⁴⁾この利子率の低下につれて必然的に上昇する傾向がある。したがって、この仮構の[imaginär]富は価値表現から見れば(¹⁵⁾特定の¹⁶⁾当初の名目価値をもっているその可除部分のそれぞれが¹⁵⁾、¹⁶⁾資本主義的生産様式¹⁷⁾の発展の歩みのなかで膨張していくのである。¹⁸⁾

① [異文]「資本」←「所有[Eigenthum]」

② [異文]「動産所有[mobiliar property]」←「実現された所有[realized property]」

③ [異文] ここに、「ないかぎり、必然的に信用の結果である。」と書いたのち消している。

④ [異文]「当初の」——あとから書き加えられている。

- 1) 挿入——「鉱山」
- 2) 挿入——「やはりすでに見たように、たしかに」
- 3) 「生産される」→「獲得されるべき」
- 4) 「権原〔Titel〕」→「請求権〔Rechtsansprüche〕」
- 5) 「() および ()」——削除。
- 6) 「かのように〔als wenn〕」→「場合のように〔wie wenn〕」
- 7) 挿入——「から」
- 8) 挿入——「また」
- 9) 挿入——「汽船」
- 10) 挿入——「まったく」
- 11) 「動産所有」→「動産」
- 12) 挿入——「の価値運動」
- 13) 挿入——「たんなる」
- 14) 挿入——「すなわち取引所での相場づけは」
- 15) 「() および ()」——削除。
- 16) 挿入——「すでにごうした理由からも」
- 17) 「生産様式」→「生産」
- 18) エンゲルス版では、ここに、草稿 346 ページ冒頭の 1 パラグラフ (MEGA 546 ページ 39 行-547 ページ 4 行、本稿、210 ページ下から 3 行-211 ページ 7 行) が、脚注として組み込まれている。

この所有権原の獲得・喪失も集積も¹⁾、事柄の性質上、ますます賭けの結果になる (2) この賭けが、労働に代わって資本所有の元来の獲得方法として現われ^①、また直接的強力にとって代わりもする²⁾。この種の仮構の〔imaginär〕貨幣財産は、私人の貨幣財産の一部分³⁾をなすばかりでなくて、すでに述べた⁴⁾ように、銀行業者の資本〔banker's Capital〕のうちの大きな部分を⁵⁾なしているのである。

① 〔異文〕ここに、「る)」と書いたのち消している。

- 1) 「この所有権原の獲得・喪失も集積も」→「この所有権原の価格変動による損得も、鉄道王等々の手へのその集中も」
- 2) 「() および ()」——削除。
- 3) 「一部分」→「非常に大きな部分」

- 4) 「述べた [gezeigt]」→「言及した [erwähnt]」
- 5) 「大きな部分を」→「非常に大きな部分をも」

貨幣資本の蓄積を——当面の考察から除いておくために¹⁾述べるだけであるが——私的な貸し手であろうと公的な借り手(国家)や再生産的な借り手であろうと、彼らの²⁾媒介者 [Vermittler] としての銀行業者(職業的な貨幣貸付業者 [moneylender])の手中にある富の蓄積のことだと解することが³⁾できるであろう。というのも、信用システム [Creditsystem]の膨大な拡張の全体が——総じて信用⁴⁾が——、彼らによって彼らの私的資本として利用しつくされるのだからである。この連中はいつでもその¹⁾資本とその収入とを、貨幣形態で、または貨幣にたいするもろもろの直接的請求権のかたちでもっている。この階級の財産の蓄積は、それが現実の蓄積とともにきわめてさまざまな方向⁵⁾を取りうる⁶⁾にせよ、いずれにしても、彼らが⁷⁾現実の蓄積のかなりの部分を取り込んでしまうことを証明しているのである。|

① [異文] 「資本」←「貨幣」

- 1) 「当面の考察から除いておくために [to discard it from our consideration]」→「急いで片づけるために」 MEGA では、discard が discord と誤植されている。
- 2) 「私的な貸し手であろうと公的な借り手(国家)や再生産的な借り手であろうと、彼らの」→「一方の私的な貨幣資本家と他方の国家や自治体や再生産する借り手とのあいだの」
- 3) 「が」→「も」
- 4) 挿入——「の全体」
- 5) 「方向」—— Direction → Richtung
- 6) 「を取りうる」→「で行なわれうる」
- 7) 「彼らが」→「この階級が」

| [340a]¹⁾ 上 | 当面の問題をもっと狭い限界のなかに限定する²⁾ ために

〔次のことを述べておく〕。——³⁾

国債も株式も、またその他各種の¹⁾ 有価証券も、貸付可能な資本〔loanable Capital〕にとつての、すなわち利子を生むものとなるべく予定されている資本にとつての投下部面である。国債や株式は、この資本を貸し出すための（投下するための）⁵⁾ 形態である。しかし国債も株式も、⁶⁾ それらの形態で投下される貨幣資本〔moneyed Capital〕⁷⁾ ではない。他方、信用が再生産過程で直接的役割を演じるかぎりでは、産業家や商人が手形割引や貸付〔loan〕を受けたいと思うとき、彼が必要とするものは、株式でも国債証券でもない。彼が欲するものは⁸⁾、貨幣〔money〕である。⁹⁾ ¹⁰⁾ ほかのどんなやり方でも貨幣〔money〕を調達することができない場合には、むしろ¹¹⁾ 彼はそれらの有価証券を質に入れたり安く売ったりする¹²⁾ ののである。⁹⁾ この貸付可能な資本〔loanable Capital〕¹³⁾ の蓄積こそは、われわれがここで取り扱わなければならないものである。¹⁴⁾ しかもまさに¹⁵⁾、貸付可能な「貨幣」資本〔loanable „monied“ capital〕のそれである。ここで問題にするのは、家屋や機械等々の、つまり固定資本の貸付〔loan〕¹⁶⁾ ではない。それは、産業家や商人が彼らどうしのあいだで¹⁷⁾ 再生産過程の循環の内部でなしあう前貸〔Vorschüsse〕でもなくて¹⁸⁾ {¹⁹⁾ ただしこの点には立ち返らなければならない²⁰⁾ のだが}¹⁹⁾、もっぱら、銀行業者^①（媒介者〔medium〕としての）によって²¹⁾ 産業家や商業家²²⁾ にたいしてなされる貨幣 532 貸付〔Geldloan〕だけを問題にするのである。²³⁾

① 〔異文〕「（媒介者としての）」——あとから書き加えられている。

1) 「[340a]」——草稿の 340 ページの次のページにはノンブルがないので、MEGA 編集者がつけたもの。

2) 「限定する〔circumscribe〕」→「戻す〔zurückführen〕」

3) エンゲルス版では、ここで改行されていない。

4) 「各種の〔jeder Art〕」→「すべての種類の〔aller Art〕」

5) 「（投下するための〔to invest〕）」——削除。

6) 挿入——「それ自身は、」

- 7) 「貨幣資本 [moneyed Capital]」→「貸付資本」
- 8) 「彼が欲するものは [what he wants]」→「彼が必要とするものは [was er braucht]」
- 9) 「(」および「)」——削除。
- 10) 挿入——「だから、」
- 11) 「むしろ」——削除。
- 12) 「安く売ったりする [verklopfen]」→「売ったりする [verkaufen]」
- 13) 「この貸付可能な資本 [loanable Capital]」→「この貸付資本 [Leihkapital]」
エンゲルス版では、「この」が強調されている。
- 14) 「ある。」→「あり、」
- 15) 「まさに [directly]」→「とくに [speziell]」
- 16) 「家屋や機械等々の、つまり固定資本の貸付 [loan]」→「家屋や機械やその他の固定資本の貸付」
- 17) 挿入——「商品のかたちで [in Waren]、また」
- 18) 「なくて」→「ない。」
- 19) 「{」および「}」——削除。
- 20) 「この点には立ち返らなければならない」→「この点もあらかじめもっと詳しく研究しなければならない」
- 21) 「銀行業者 (媒介者 [medium] としての) によって」→「媒介者 [Vermittler] としての銀行業者によって」
- 22) 「商業家 [Commercielle]」→「商人 [Kaufleute]」
- 23) エンゲルス版では、このあとに横線を引いたうえで、草稿 341-344 ページ (MEGA, 535 ページ 23 行-541 ページ 2 行; 本稿, 171 ページ下から 12 行-188 ページ 8 行) をもってきている。

¹³²⁾まず明らかなのは、³⁾ 貨幣資本 [moneyed Capital] {貸付可能な資本 [loanable Capital]} の蓄積あるいは増加のどれもが⁴⁾、現実の資本蓄積あるいは再生産過程の拡大を示すわけではない、ということである⁵⁾。再生産過程の攪乱はいずれも {恐慌の崩落 [clash] が過ぎ去れば}、貨幣資本 [monied capital] への需要を減少させ、かくしてそれを相対的に過剰 [redundant] にするだけではなく、同時にその供給を、したがってまたその絶対量を増大させる。⁶⁾ だからこそ、⁷⁾ 再生産過程が縮小した⁸⁾ {⁹⁾たとえば¹⁰⁾ イギリスの工業地帯の生産は ¹⁾1847 年の恐慌のあとでは 3 分

の1ほど縮小していた} ⁹⁾ どの恐慌のあとにも, ¹¹⁾ 商品の価格は ^② その最も低い点にまで下がっており, 企業精神は麻痺してしまっていて, 利子率の水準が低い ¹²⁾ ののであるが, 利子率のこの低い水準がここで示しているものは, ¹³⁾ 生産的資本 ¹⁴⁾ の収縮 ^③ と麻痺 ¹⁵⁾ とによる貨幣資本 [moneyed capital] ¹⁶⁾ の増加にほかならないのである。商品価格が下がり取引量が減り ¹⁷⁾ 労賃に投じられる資本が小さくなるにつれて, 流通手段 の必要が少なくなるということ, 他方では, 対外債務が一部は地金流出 ¹⁸⁾ により一部は破産によって清算されてしま ^④ えば, 「世界貨幣」としての貨幣 ¹⁹⁾ は必要ではないということ, そして, ²⁰⁾ 手形割引 (等々) ²¹⁾ がこの手形そのものの枚数 ^⑤ および大きさ ²²⁾ の減少につれて減るということ, これは自明である ²³⁾。つまり, 流通手段としてであろうと, 支払手段として ²⁴⁾ であろうと, 「新たに」投下される資本の形態としてであろうと, ²⁵⁾ 貨幣資本 [monied capital] ²⁶⁾ への需要は減退し, したがってまた ^⑥ それが相対的に過剰 [redundant] ²⁷⁾ になること, これは自明である ²⁸⁾。a) しかし ²⁹⁾ このような事情のもとでは, 貨幣資本 [moneyed Capital] ³⁰⁾ の供給も確実に増加するのである。|

- ① 【注解】「1847年の恐慌」——[MEGA] 473 ページ 32 行への注解を見よ。
〔ここで MEGA 編集者が指示している注解は 1844 年の銀行法についてのものであって, その実質的な内容は, エンゲルス版「第 34 章 通貨主義と 1844 年のイギリスの銀行立法」のなかでこの銀行法についてエンゲルスが書き込んだ部分 (MEW, Bd.25, S. 569-571) の引用である。たしかにここでも 1847 年の恐慌に言及しているが, それはこの銀行法の停止についてにすぎず, 編集者がこの箇所を指示するつもりだったとはとうてい考えられない。おそらく, 他の箇所を指示するつもりで誤ってこのページを挙げてしまったものであろう。その他の箇所とは, 「1847 年の恐慌」について説明している, 434 ページ 3 行への注解ではないかと考えられる。そこでは次のように書いている。「40 年代の中葉に凶作という事態が生じたのちに, ブリテンの食糧輸入は増加し, イングランド銀行からの金流出が始まった。1847 年 4 月には貨幣市場でのパニックが生じるにいたった。同時に, あちこちの穀物市場の過剰が貨幣と信用とへの大需要を呼び起こした。1846 年〔これは 1847 年の誤植〕10 月に, 恐慌は頂

点に達した。1844年のピール銀行法の停止によって、イングランド銀行は裁量による行動の余地を得たので、恐慌の本来の原因である過剰生産は残ったままであったが、貨幣恐慌は急速に乗り越えられることができた。」(MEGA, II/4.2, S. 1270.))

- ② [異文] 「その最も低い点にまで下がっており」←「その最も低い点にまで下がり」←「その最小限に [……]」
- ③ [異文] 「と麻痺」——あとから書き加えられている。
- ④ [異文] 「えば」←「うので」
- ⑤ [異文] 「および大きさ」——あとから書き加えられている。
- ⑥ [異文] 「それが」——あとから書き加えられている。

- 1) エンゲルス版では、以下の部分は、155ページの注23)に記した、草稿341-344ページ(MEGA, 535ページ23行-541ページ2行; 本稿, 171ページ下から12行-188ページ8行)のあとに、横線を引いたうえで、続けられている。
- 2) 挿入——「ここで貨幣資本の蓄積に帰ろう。」
- 3) 「まず明らかなのは、」——削除。
- 4) 「貨幣資本 [moneyed Capital] {貸付可能な資本 [loanable Capital]} の蓄積あるいは増加のどれもが」→「貸付可能な貨幣資本の増加のどれもが」
- 5) 「, ということである」——削除。
- 6) 「再生産過程の攪乱はいずれも {恐慌の崩落 [clash] が過ぎ去れば}, 貨幣資本 [monied capital] への需要を減少させ, かくしてそれを相対的に過剰 [redundant] にするだけでなく、同時にその供給を、したがってまたその絶対量を増大させる。」→「このことは、産業循環のなかでは、恐慌を切り抜けた直後に貸付資本が大量に遊休している段階で最も明瞭に現われる。」
- 7) 「だからこそ、」→「このような瞬間には」
- 8) 「縮小した」→「縮小しており」
- 9) 「{ } および { } 」→「() および () 」
- 10) 「たとえば」——削除。
- 11) 「どの恐慌のあとにも、」——削除。
- 12) 「利子率の水準が低い」→「利子率の低い水準が優勢な」
- 13) 挿入——「まさに」
- 14) 「生産的資本」→「産業資本」
- 15) 「麻痺」—— Paralysis → Lähmung
- 16) 「貨幣資本 [moneyed capital]」→「貸付可能な資本」
- 17) 「取引量が減り [verminderte Masse d. Transactionen]」→「取引が減り

〔verminderte Umsätze〕

- 18) 「地金流出〔Bullion drain〕」→「金流出〔Goldabfluß〕」
- 19) 「『世界貨幣』としての貨幣」→「世界貨幣としての機能のための追加貨幣」
- 20) 「そして、」→「最後に、」
- 21) 「手形割引（等々）」→「手形割引業務の大きさ」
- 22) 「大きさ〔Umfang〕」→「金額〔Beträge〕」
- 23) 「これは自明である〔ist self evident〕」→「すべてこれらのことは一見して明らかである」
- 24) 「として」→「のため」
- 25) 「『新たに』投下される資本の形態としてであろうと、」→「（新たな投資はまだ問題にならない）」
- 26) 「貨幣資本〔monied capital〕」→「貸付可能な貨幣資本」
- 27) 「過剰〔redundant〕」→「豊富〔reichlich〕」
- 28) 「こと、これは自明である」——削除。
- 29) 挿入——「あとで明らかになるように、」
- 30) 「貨幣資本〔moneyed Capital〕」→「貸付可能な貨幣資本」

【原注】¹⁾/〔340a〕下/²⁾①a) ²⁾第 1664 号。「³⁾現在（¹⁾〔18〕47 年の恐慌のあと）、取引の減少と貨幣の非常な過剰があります。」（『商業的窮境』。1847-48 年。）³⁾ 利子率は、「商業がほとんどまったくだめになり、貨幣を使う手段¹⁾がほとんどまったくなかった」ために、非常に低かった。（同前、45 ページ。A. ホジスン（ロイヤル・リヴァプール・バンクの重役）の証言。）〔 〕⁵⁾⁶⁾

① 〔異文〕 この脚注〔a〕〕は 340a ページの下方で始まり、その続きが 341 ページの下方に書かれている。

② 〔注解〕（『商業的窮境にかんする報告書』からの）この引用は、〔マルクスの〕「ロンドン・ノート、1850-1853 年」、第 7 冊から取られている。（MEGA²、第 4 部第 8 巻、259 ページ 25-26 行。）

③ 〔注解〕「現在……があります」——『商業的窮境にかんする報告書』では次のようになっている。「現在の状況は、取引の減少……です。」——括弧内の注記はマルクスによるもの。

④ 〔注解〕「〔18〕47 年の恐慌」——〔MEGA〕473 ページ 32 行への注解を見

よ。[同じページを指示している前出156ページの注解注①への筆者の付記を見よ。ここでも、編集者が指示しようとしたのは「1847年の恐慌」についての434ページ3行への注解だったのであろう。]

- 1) エンゲルス版では、この原注の全文が、脚注ではなく、直前のパラグラフのあとに続く本文とされている。
- 2) [340a]ページの下半部のこの前には、先頭に(+)というしるしがつけられた1パラグラフがあるが、マルクスは339ページの末尾に「この点についての続きは、2頁後の(+)のところを見よ。」と書いて、このパラグラフへの指示を行なっている。このパラグラフは、これをマルクスの指示に従って第29章の末尾(MEW, Bd. 25, S. 492)に置いているエンゲルス版と同様に、拙稿「銀行資本の構成部分」(『資本論』第3部第29章)の草稿について」の末尾(『経済志林』第63巻第1号、1995年、50-51ページ)に組み入れた。
- 3) 「第1664号。『現在([18]47年の恐慌のあと)、取引の減少と貨幣の非常な過剰があります。』(『商業的窮境』。1847-48年。)」→「このようにして1847年の恐慌のあとでは「取引の減少と貨幣の非常な過剰」が一般的だった。(『商業的窮境』, 1847-48年, 証言第1664号。)」
- 4) 「貨幣を使う手段 [means of employing money]」→「貨幣を投下する可能性」
- 5) 「〔 〕」——MEGAでも欠けている。
- 6) エンゲルス版では、ここで改行されていない。

¹⁾これらの諸氏がどんなたわごと²⁾を並べたてるか(しかもホジソンはまだしも最良な者の一人なのである)は、たとえば³⁾次の文句からも知ることができる。^{1,2}「この逼迫(1847年)⁴⁾はこの国の貨幣資本[moneyed capital]の実際の減少から生じたもので、一部は、世界のあらゆる地方からの輸入にたいして金で支払う必要によって、また一部は、浮動資本[floating]⁵⁾の固定資本への吸収[absorption]⁶⁾によって、引き起こされたものでした。」「[同前、63ページ。]」どうして「⁷⁾浮動資本の固定資本への吸収⁸⁾」⁷⁾が「⁹⁾この国の貨幣資本[moneyed capital]」⁹⁾を減らすことになるというのか、理解できない。というのは、たとえば当問題となっていた¹⁰⁾鉄道を見ても、¹¹⁾軌条のために金^{きん}や紙幣が消費されるわけではなく、また鉄道株に投じられた貨幣は、それがたんに払込請求¹²⁾に備えて

預託されたかぎりでは、銀行業者¹³⁾に預金されたすべての他の貨幣と¹⁴⁾同じように機能した¹⁵⁾ {¹⁶⁾それどころか、¹⁷⁾のちに述べるように¹⁸⁾、¹⁹⁾貨幣資本 [moneyed capital]²⁰⁾を増やし²¹⁾た¹⁶⁾の²²⁾であり、²³⁾現実に建設に支出された²⁴⁾貨幣は国内で購買手段および支払手段として流通したのだから²⁵⁾である。ただ、固定資本が輸出可能な財貨ではなく、したがってその輸出²⁶⁾ともども⁴⁾利用可能な資本(代金還流がもたらすそれ)²⁷⁾も {²⁸⁾²⁹⁾また地金³⁰⁾での代金還流も²⁸⁾なくなってしまう、というかぎりでは、³¹⁾貨幣資本 [monied capital] が影響を受けることもありうるであろう。しかし当時、イギリスの輸出品は³²⁾外国市場を供給過剰にしていた³³⁾。⁵⁾自分の平常の資本³⁴⁾の一部分を鉄道株に {そうしたものへの貸付にも}³⁵⁾くくりつけ [festgeritten]、⁶⁾そのために自分の事業を営むのに借入資本³⁶⁾に依存していた、マンチェスター等々の商人や製造業者にとっては、事実、彼らの「³⁷⁾浮動資本 [floating capital]」³⁷⁾が固定されていた³⁸⁾。しかし、かりに、彼らが自分の事業に使われていた資本を引き上げて、それを鉄道にではなくてたとえば、生産物(鉄、石炭、等々)³⁹⁾そのものが⁴⁰⁾「⁴¹⁾浮⁵³³動資本 [floating capital]」⁴¹⁾であるような鉱山業に投じたとしても、同じことだったのである。⁴²⁾ {⁴³⁾流動資本 [circulirendes Capital]⁴⁴⁾が穀物や綿花の不足⁴⁵⁾によって現実に減少したということは、もちろん、鉄道詐欺とはなんの関係もない出来事だったのである。⁴³⁾「ほとんどすべての商社が、鉄道に投資するために、多かれ少なかれ自分の事業を飢えさせ始めていました。」[(同前, 42 ページ)] ⁷⁾「もろもろの商社が鉄道投資のために行なった借入がこのように大きかったので、これらの商社はあまりにも多く手形割引をつうじて株式銀行や私営銀行に頼るようになり、またそれによって自分の商業活動を持ちこたえるようになりました。」(同じホジスン, 同前, 67 ページ。) ⁸⁾第 4884 号, 同前 (R. ガードナ, マンチェスターの紡績業者, 製造業者かつ商人) ——¹⁶⁾ ⁸⁾「マンチェスターでは鉄道投機のために莫大な損失が生じました。」

- ①〔注解〕『『商業的窮境にかんする報告書』からの〕この引用は、〔マルクスの〕「ロンドン・ノート、1850-1853年」、第7冊から取られている。(MEGA², 第4部第8巻, 251 ページ 17-20 行。)
- ②〔注解〕以下の部分は『『商業的窮境にかんする報告書』では次のようになっている。「この逼迫が国内の貨幣資本〔moneyed capital〕の実際の減少によるものだ、というご主張だと当委員会が考えるのは正しいでしょうか?——はい。……国内のあの貨幣資本〔money capital〕の減少は、一部は……必要から生じたものでした。」
- ③〔異文〕「や紙」——あとから書き加えられている。
- ④〔異文〕「利用可能な資本」←「貨幣」
- ⑤〔異文〕「自分の平常の資本の一部分」←「自分の資〔本〕」
- ⑥〔異文〕ここに、「そのために自分の事業を〔……〕に」と書いたのち消している。
- ⑦〔注解〕『『商業的窮境にかんする報告書』からの〕この引用は、〔マルクスの〕「ロンドン・ノート、1850-1853年」、第7冊から取られている。(MEGA², 第4部第8巻, 251 ページ 29-32 行。)
- ⑧〔訂正〕「第4884号」——手稿では「第4877号」と誤記されている。
- ⑨〔注解〕以下の部分は『『商業的窮境にかんする報告書』では次のようになっている。「鉄道への投機の結果、著しい損失が生じていたのですか?——巨大な損失でした。私は、以前マンチェスターと取引していたある人を知っていますが、……」——この引用は、〔マルクスの〕「ロンドン・ノート、1850-1853年」、第7冊から取られている。(MEGA², 第4部第8巻, 266 ページ 24-25 行。)
- 1) 挿入——「このことを説明するために、」
- 2) 「たわごと」—— Blödsinn → Unsinn
- 3) 「たとえば」——削除。
- 4) 「(1847年)」——マルクスの挿入。
- 5) 「浮動資本〔floating capital〕」→「流動資本(浮動資本〔floating capital〕)」
MEGA では、floating が floation と誤植されている。
- 6) 「吸収〔absorption〕」→「転化」
- 7) 「「」および「」」——削除。
- 8) 「吸収」→「転化」
- 9) 「「」および「」」——削除。
- 10) 「問題となっていた」→「おもに資本が固定されていた」

- 11) 挿入——「陸橋や」
- 12) 「払込請求〔calls〕」→「払込〔Einzahlungen〕」
- 13) 「銀行業者」→「銀行」
- 14) 挿入——「まったく」
- 15) 「機能した」—— functionirte → fungierte
- 16) 「{ } および { } 」——削除。
- 17) 「それどころか〔ja〕,」——削除。
- 18) 「のちに述べるように」→「すでに前にも述べたように」 この変更は、エンゲルスが草稿の一部を前にもっていったことに対応させようとしたものである。
- 19) 挿入——「一時的には,」
- 20) 「貨幣資本〔moneyed capital〕」→「貸付可能な貨幣資本」
- 21) 挿入——「さえもし」
- 22) 挿入——「だから」
- 23) 挿入——「また, その貨幣が」
- 24) 挿入——「かぎりでは, その」
- 25) 「だから」——削除。
- 26) 挿入——「の不可能性」
- 27) 「利用可能な資本（代金還流がもたらすそれ）」→「輸出品の代金還流によって調達される利用可能な資本」
- 28) 「{ } および { } 」——削除。
- 29) 挿入——「だから」
- 30) 「地金〔bullion〕」→「金塊や地金〔bar oder Barren〕」
- 31) 挿入——「ただそのかぎりでは」
- 32) 「は」→「も」
- 33) 「外国市場を供給過剰にしていた〔overstocked〕」→「大量に売れずに外国市場に横たわっていた」
- 34) 「資本」→「営業資本」
- 35) 「{ そうしたもののへの貸付にも } 」——削除。
- 36) 「借入資本」—— gepumptes Capital → Borgkapital
- 37) 「{ } および { } 」——削除。
- 38) 挿入——「のであって, その結果は彼らが自分で背負わなければならなかった」
- 39) 「生産物（鉄, 石炭, 等々）」→「鉄, 石炭, 等々という生産物」
- 40) 挿入——「これまた」

- 41) 「「」及び「」」——削除。
- 42) 挿入——「——」
- 43) 「{ } および「」」——削除。
- 44) 「流動資本 [circulirendes Capital]」→「利用可能な貨幣資本」
- 45) 「穀物や綿花の不足」→「不作や穀物輸入や金輸出」
- 46) 「第4884号、同前(R. ガードナ、マンチェスターの紡績業者、製造業者かつ商人)——」→「(第1部第13章第3節cやその他の箇所たびたび引用したR. ガードナ、証言番号第4884号、同前。)」 エンゲルス版では、この出典は、引用のあとに置かれている。

対東インド取引では、この取引に見られたそのほかの膨大な詐欺^①および過剰取引(同時に生じた)を別としても、非常に富裕な諸商社でさえも倒産した。ⁱ⁾——^②「彼らは豊富な資力をもっていました^③が、それを利用することができませんでした^②」。^③彼らの全資本がモーリシャス島の地所や、インディゴ工場や、砂糖工場に固定されていたのです。彼らが50万から60万ポンド・スターリングの債務を背負い込んだとき、彼らは自分の手形の支払をするために使える^③資産をもっておらず、結局明らかになったのは、彼らは自分の手形の支払をするためのにもっぱら自分の信用に頼るほかはないのだ、ということでした。」[同前、第730号(Ch. ターナ、リヴァプールの対東インド^④商人)。]

① [異文] 「および過剰取引」——あとから書き加えられている。

② [注解] この引用は、[マルクスの]「ロンドン・ノート、1850-1853年」、第7冊から取られている。(MEGA^②、第4部第8巻、255ページ1-5行。)

③ [注解] 「彼らの全資本 [ihr ganzes Capital]」——『商業的窮境にかんする報告書』では「彼らの資本の全部 [The whole of their capital]」となっている。

1) 「対東インド取引では、この取引に見られたそのほかの膨大な詐欺および過剰取引(同時に生じた)を別としても、非常に富裕な諸商社でさえも倒産した。」→「1847年の恐慌のおもな原因の一つは、市場の膨大な供給過剰と対東インド商品取引での無際限な詐欺だった。しかし、そのほかの事情によっても、こ

の部門の非常に富裕な諸商社が倒産した。」

- 2) 「利用することができませんでした〔not available〕」→「流動化することができませんでした〔nicht flüssig machen〕」
- 3) 「使える〔available〕」→「流動〔flüssig〕」
- 4) 挿入——「大」

次に¹⁾、^①第 4872 号。^②(ガードナ)^②——「中国条約の直後には、この国にとって中国との貿易が大いに拡張されるという見込みが大きくなったので、おもに中国市場向けと考えられる種類の綿織物を製造するために、多くの大工場がもっぱらこの取引のために建設されて、これらの工場がこの国のすべての既存の工場に付け加えられました。第 4874 号。その事業はどのような結果になったのですか？——なんとも言いようのないほどひどく破滅的でした。1844 年と 1845 年の中国に向けて送り出された船荷全体のうちで 3 分の 2 よりも多い金額が返されてきたとは私には思えません。茶は主要な返り荷品〔article of repayment〕でもあり、また期待をもたされていまして、私たち製造業者は茶関税の大幅引き下げをすっかりあてにしていました。」そこで次にくるのは、イギリスの製造業者の 1/341 下/特徴的な信条を素朴に言い表わした言葉である。——^③「ある外国市場と私たちとの取引は、その外国市場の商品購買力によって制限されているのではなく、それはこの国内で、私たちが自分たちの工業製品の返り荷として〔in return〕受け取る商品を消費する私たちの能力によって制限されているのです。〔J〕（イギリスが取引相手にする比較的貧しい諸国は、もちろん、どれだけのイギリス商品^③の代価でも支払うことができる^④が、^⑤富裕なイギリスが返り荷〔d. returns〕を消化することができないというわけである。）第 4876 号。〔「私は最初いくらかの商品を送りだしました。そして、約 15%の損をしてそれを売ったのですが、それは、私の代理店が茶を買うことができた価格が、この国で、あちらでの商品の販売での欠損を埋め合わせるだけの大きさの利潤を残してくれるだろうと完全に確信していたからでした。ところが、利潤をあげるところか、場

合によっては私は 25%から 50%もの損をしたのです。」第 4877 号。「製造業者たちは自分の計算で輸出したのですか?——おもにそうでした。商人たちには、これではなんにもならないことがすぐにわかったらしくて、彼らは製造業者たちに、自分で手を出すよりも、むしろそれらを委託販売するように勧めました。」これに対して、1857 年には、おもに商人たちが払わなければ(すなわち破産しなければ)ならなかった⁶⁾。というのは、このたびは製造業者が、商人たちに「自分の計算で」もろもろの外国市場の過剰輸入⁷⁾をするように委ねたからである。【原注 a) 終り】/

①〔注解〕この〔パラグラフでの〕引用は、〔マルクスの〕「ロンドン・ノート、1850-1853 年」、第 7 冊から取られている。(MEGA²、第 4 部第 8 巻、266 ページ 3-24 行。)

②〔異文〕「(ガードナ)」——あとから書き加えられている。

③〔注解〕このパラグラフでの以下の部分の強調はマルクスによるもの。

1) 「次に [dann]」→「さらに」

2) 「第 4872 号。(ガードナ)」→「ガードナ (第 4872 号、同前)」

3) 「商品 [commodities]」→「製品 [Fabrikate]」

4) 挿入——「しそれを消費することができる」

5) 挿入——「残念ながら、」

6) 「払わなければ(すなわち破産しなければ)ならなかった」→「損失を出して破産した」

7) 「過剰輸入 [Overimportiren]」→「輸送 [Überführung]」

533 | 341 上 | ¹⁾{通貨 [currency] の速度の調節者としての信用。^{2)①}

「通貨 [Circulation] の速度の大きな調節者は信用であって、³⁾ このことから、なぜ貨幣市場での激しい逼迫が、通例、潤沢な流通高 [a full circulation] と同時に生じるのかということが説明される。」(『通貨理論論評』⁴⁾。

²⁾ (65 ページ。) このことは、二様に解されなければならない。一方では、通貨 [Circulation] を節約するすべての方法⁵⁾ が信用にもとづいている⁶⁾。しかし第 2 に、たとえば 1 枚の 500 ポンド銀行券をとってみよう。A は

今日、手形⁷⁾の支払でこれをBに支払い、Bはそれを同じ日に取引銀行業者に預金し、この銀行業者は今日⁸⁾この500ポンド銀行券でCの手形を割引きしてやり、Cはそれを取引銀行業者⁹⁾に支払い、³⁾この銀行業者¹⁰⁾はそれをビル・ブローカーに請求払いで〔on call〕¹¹⁾前貸する、等々。この場合に銀行券が流通する速度、すなわちもろもろの購買または支払に役立つ速度は、ここでは、¹²⁾それがたえず繰り返し預金の形態でだれかのところに帰り、また貸付の形態で〔534〕ふたたび別のだれかのところに行く¹³⁾速度によって媒介されている。¹⁴⁾たんなる節約が最高の形態で¹⁵⁾現われるのは、⁴⁾手形交換所において、すなわち¹⁶⁾手形のたんなる交換において、言い換えれば^{17) 18)}支払手段としての貨幣の機能の優勢においてである。しかし、これらの手形の存在は、¹⁹⁾生産者²⁰⁾や商人等々²¹⁾が互いのあいだで与え合う信用にもとづいている。この信用が減少すれば、手形⁵⁾(²²⁾ことに長期手形)²²⁾の数が減少し、したがって振替²³⁾というこの方法の効果もまた減少する。そして、この節約はもろもろの取引で貨幣を取り除くこと〔suppression〕にもとづいており²⁴⁾、完全に支払手段としての貨幣の機能にもとづいており、この機能はこれまた信用にもとづいている {²⁵⁾これらの支払の集中等々²⁶⁾における技術の高低度²⁷⁾は別として}²⁵⁾のであるが、この節約にはただ2つの種類だけがありうる。すなわち、手形または小切手によって代表される相互的債権が同じ銀行業者のもとで相殺されて、この銀行業者がただ一方の人の勘定から他方の人の勘定に債権を書き替える²⁸⁾だけであるか、または、²⁹⁾銀行業者どうしのあいだで相殺が行なわれるかである。a) 一人のビル・ブローカー、たとえば〔オーヴァレンド・〕ガーニ商会の手に800万-1000万〔ポンド・スターリング〕の手形が集中するということは、ある地方でこの相殺の規模を拡大する主要な手段の一つである。この節約³⁰⁾によってたんなる差額決済のために必要な通貨〔currency〕³¹⁾の量が少なくなるかぎり、その効果が高められるのである。³²⁾/

- ①〔注解〕 この引用は、『通貨理論論評』では次のようになっている。「通貨〔currency〕の速度の大きな調節者は信用なのであって、……われわれは、貨幣市場での激しい逼迫が、通例、潤沢な流通高〔a full circulation〕と同時に生じるといふ、見かけ上の謎をわれわれは解いているであろう。」「〔強調は原典のもの。〕
 - ②〔訂正〕「」——手稿では欠けている。
 - ③〔異文〕ここに、「この後者はそれをもって〔……〕生産し」と書いたのち消し、さらに「等々」と書いたのち消している。
 - ④〔注解〕「手形交換所」——〔MEGA〕470 ページ 41-42 行への注解を見よ。〔ここで指示されている注解には次のように書かれている。「ロンドンのロンバード・ストリートにある手形交換所〔Clearing-House〕は 1775 年に設立された。それには、イングランド銀行とロンドンの最も大きな銀行会社が加盟していた。その仕事は、手形、小切手その他から成る相互的な債権を清算することであった。〕」
 - ⑤〔異文〕「(ことに長期手形)」——あとから書き加えられている。
- 1) 草稿の以下の 3 パラグラフは、エンゲルス版では、「第 33 章 信用システムのもとでの流通手段〔Umlaufsmittel〕」の冒頭 (MEW, Bd. 25, S. 536-538) に移されている。ただし、エンゲルス版では、初めの二つのパラグラフが一つのパラグラフとされている。エンゲルス版では、草稿でこの 3 パラグラフを括っている角括弧 { } は削除されている。
 - 2) 「通貨〔currency〕の速度の調節者としての信用。」——削除。
 - 3) 「あつて、」→「ある。」
 - 4) 『通貨理論論評』——手稿でもエンゲルスの 1894 年版でも『通貨問題論評』となっており、MEGA でも『通貨問題論評』となっている。MEW 版では『通貨理論論評』に訂正されている。MEGA では、『通貨理論論評』と訂正したうえで「訂正目録」でその旨を記すべきところであった。
 - 5) 「通貨を節約するすべての方法〔alle economising methods der Circulation〕」→「流通手段を節約するすべての方法〔alle Methoden, die Zirkulationsmittel ersparen〕」
 - 6) 「もとづいている」—— basirt→begründet
 - 7) 「手形」→「ある手形」
 - 8) 「今日」→「その日のうちに」
 - 9) 「銀行業者」→「銀行」
 - 10) 「銀行業者」→「銀行」

- 11) 「請求払いで [on call]」→「前貸として [auf Vorschuß]」
- 12) 「ここでは、」——削除。
- 13) 「行く [kommt]」→「移って行く [übergeht]」
- 14) 挿入——「流通手段の」
- 15) 「最高の形態で」→「最高に発展して」
- 16) 挿入——「満期」
- 17) 「言い換えれば」→「また」
- 18) 挿入——「たんなる残高の決済のための」
- 19) 挿入——「これ自身がまた」
- 20) 「生産者」→「産業家」
- 21) 「等々」——削除。
- 22) 「() および ()」——削除。
- 23) 「振替 [virements]」→「差額決済 [Ausgleichungen]」
- 24) 「にもとづいており [auf ... beruht]」→「なのであり [in ... besteht]」
- 25) 「{ } および { }」→「() → ()」
- 26) 「等々」——削除。
- 27) 「高低度」→「発展度」
- 28) 「書き替える [schreibt]」→「振り替える [überschreibt]」
- 29) 挿入——「別々の」
- 30) 「節約」—— Oekonomie→Ökonomisierung
- 31) 「通貨 [currency]」→「流通手段 [Umlaufsmittel]」
- 32) エンゲルス版では、ここで改行されていない。

【原注】/341 下/a) ②「第 985 号。1831 年には 5 ポンド券は 115 日外部にとどまったが、今日ではそれはただ 76 日しか外部にとどまらない。もし通貨 [circulation] の平均量が同じままであるのなら、明らかに、いまは通貨 [circulation] の活動がはるかに大きくなっているのである。」(『銀行法特別委員会』報告』, 1857 年。)¹⁾

① [異文] ここに、「手形交換所」と書いたのち消している。

② [注解] この引用での強調はマルクスによるもの。

1) エンゲルス版では、この引用は削除されている。

「各種の銀行券が流通のなかにとどまる平均日数」¹⁾²⁾

	5 ポンド券	10ポンド券	20-100ポンド券	200-500ポンド券	1000ポンド券
1792	— ³⁾	236	209	31	22
1818	148	137	121	18	13
1831	115	80	44	14	13
1844	82	70	34	13	12
1845	80	72	35	12	9
1846	79	71	34	12	8
1847	74	67	32	10	7
1848	71	64	31	11	10
1849	71	66	32	11	10
1850	75	68	32	11	9
1851	73	66	31	10	9
1852	73	62	28	10	10
1853	75	62	28	10	9
1854	73	63	31	10	8
1855	72	61	30	10	7
1856	70	58	27	9	7

(イングランド銀行出納長マーシャル氏提出の報告書。⁴⁾『〔銀行法特別委員会〕報告』, 1857年, 第2部, 付録, 300ページおよび301ページ, を見よ。) 【原注a) 終り】 |

- 1) エンゲルス版では、この表題の代わりに次のように書かれている。——「1枚の銀行券が流通のなかにとどまっている平均日数は次のようであった。」
- 2) エンゲルス版では、この表のうち、1792, 1818, 1846, 1856の各年の数値だけが残されている。
- 3) 『銀行法特別委員会報告』では「—」, 草稿では「空欄 [vacat.]」, エンゲルス版では「?」となっている。
- 4) MEGA ではこのピリオドが落ちている。

/341上/ 他方、流通手段としての¹⁾貨幣の速度 ²⁾ これによっても貨幣は節約される²⁾ は、まったく、売買の流れに ³⁾ または、支払が貨幣で 535 次々に行なわれる⁴⁾ かぎりでは、また諸支払の連鎖にも³⁾ かかっている。しかし、信用がこの速度⁵⁾ を媒介する⁶⁾ ののである。たとえば、貨幣片 G⁷⁾ の最初の所持者である A が B から買い、B が C から、C が D から、D が E から、E が F から買う場合には、つまり一つの手から別の手

へのその貨幣片の移行⁸⁾が現実の売買⁹⁾によって媒介されている場合には、この貨幣片 G は (10) たんなる流通手段として、信用の介入なしに¹⁰⁾、ただ 5 回の流通 [Umläufe] をもたらしことができるだけである¹¹⁾。ところが、B が¹²⁾ 貨幣を取引銀行業者に預金し、この銀行業者はそれを C の手形の割引¹³⁾で支出し、C が D から買い、D がそれを取引銀行業者に預金し、この銀行業者がそれを E に貸し、E は F から買う、という場合には、たんなる流通手段（購買手段）としての¹⁴⁾ 速度でさえもさまざまな信用操作によって、すなわち、B による取引銀行業者への預金、この銀行業者による C のための割引、D による取引銀行業者への預金、そしてこの銀行業者による E のための割引によって、つまり 4 つの信用操作によって媒介されているのである。もしもこれらの信用操作がなかったならば、この同じ貨幣片は与えられた期間のうちに次々に 5 度の購買を片付けることはなかったであろう。それが現実の売買の媒介なしに——預金として、また割引において——持ち手を換えたということが、この場合には一連の現実の売買¹⁵⁾でのその貨幣片の持ち手変換を速くしたのである。

- 1) 「流通手段としての」→「流通手段として流通する [als Zirkulationsmittel umlaufend]」
- 2) 「{ } および { }」→「() および { }」
- 3) 「() および { }」——削除。
- 4) 「行なわれる」—— geschehn→erfolgen
- 5) 「この速度」→「流通の速度」
- 6) 「する」→「し、また、そうすることによって速度を高める」
- 7) 「貨幣片 G」→「個々の貨幣片」
- 8) 「移行」—— Uebergehen→Übergang
- 9) 挿入——「だけ」
- 10) 「() および { }」→「——」
- 11) 「である」→「で、各個の手のなかでかなり長く静止している」
- 12) 挿入——「A から支払われた」
- 13) 「C の手形の割引」→「C への手形割引」
- 14) 挿入——「その」

15) 「売買」→「販売 [Absätze]」

(¹) さきほど述べたように、同じ銀行券が何人もの銀行業者のもとで預金を形成することができる。²) 同じ銀行券が同じ銀行業者のもとでいくつもの預金を形成することもできる。彼は A が預金した銀行券 G³) で B の手形を割引し、B は C に支払い、C はこの同じ銀行券を同じ銀行業者に預金し、この銀行業者はまたそれを支出した⁴)。つまりこの同じ銀行券が、今では彼のもとで、二つの預金を形成したのである、等々。⁵)¹⁾⁴⁾

① [訂正] 「 } 」——手稿では欠けている。[この「 } 」]は、草稿 341 ページ冒頭の「 { 」に対応するものである。エンゲルス版では削除されている。]

1) 「() および「 } 」」——削除。

2) 挿入——「同様に」

3) 「G」——削除。

4) 「支出した [ausgab]」→「支出する [herausgabt]」

5) 「つまりこの同じ銀行券が、今では彼のもとで、二つの預金を形成したのである、等々。」——削除。

¹⁾^① 商業信用 {すなわち再生産で仕事をしている [in d. Reproduction beschäftigt] 資本家が互いに与え合う信用} は、信用システム [Creditsystem] の土台をなしている。²) この信用を代表するものが、手形、³) 債務証書 (⁴) 延払証券 [document of deferred payment])⁴⁾ である。人はそれぞれ一方の手で信用を与え、他方の手で信用を受ける。²) さしあたりは、本質的に違った⁵) 別の契機をなす銀行業者の信用 [Banker's Credit]⁶⁾ はまったく度外視しよう。これらの手形が商人たちのあいだで、次から次への裏書によって (⁷) しかしその間に割引が行なわれることなしに)⁷⁾、それ自身ふたたび支払手段として流通するかぎりでは、それは A から B へ債権を移転すること⁸⁾ にすぎないのであって、³) 関連を変えるものではまったくない。それはただ、ある人を別のある人と取り替えるだけである。⁹⁾ ただし¹⁰⁾、この場合でさえも、決済は貨幣の介入なしに行なわれることが

ありうる。たとえば紡績業者 A は綿花ブローカー B に、B は輸入業者¹¹⁾に、手形の支払をしなければならないでしょう。¹²⁾ 綿花を輸入する同じ輸入業者が¹³⁾ 綿糸を輸出する場合には {あるいは、同じことになるが、綿糸の輸出業者がアメリカの支払場所で綿花の輸入業者あての手形を受け取る場合には}¹⁴⁾、綿糸の輸出業者は紡績業者に綿花の輸入業者あての Ⅱ 342 上 | 手形で支払うことができ、綿花の輸入業者は綿糸の輸出業者に綿花ブローカーあての手形で支払うことができるのであって、彼らの相互的な債権が等しいなら、綿花ブローカーと紡績業者とは自分たちの手形を互 536 に交換することができ、彼らの^④相互的な債権が等しくないなら、差額が一方の側に支払われなければならない。¹⁵⁾ この場合には、この取引全体がただ綿花と綿糸との交換を媒介しているだけである。輸出業者は紡績業者を代理し、綿花ブローカーは綿花栽培者を代理しているだけである。)⁹⁾

① [異文] ここに、次のように書いたのち、消している。——「われわれは、紡績業者 B が綿花ブローカー A から綿花を 500 ポンド・スターリングで、手形で買う、と仮定しよう。」

② [異文] この文は、はじめ「さしあたりは、銀行業者の信用 [Banker's Credit] はまったく度外視しよう。」と書いたのちに、末尾のピリオドをコンマに変え、そのあとに「本質的に違った別の一契機をなす」という句を付け加えたものである。

③ [異文] 「関連を」←「手形が [……] するさいの最終の方法を」←「それを」

④ [異文] 「相互的な」——あとから書き加えられている。

1) エンゲルス版では、横線を挿入したのち、ここからふたたび第 30 章の続きが始まる。

2) 「商業信用 {すなわち再生産で仕事をしている [in d. Reproduction beschäftigt] 資本家が互いに与え合う信用) は、信用システム [Creditsystem] の土台をなしている。」→「そこでまず第 1 に、商業信用を、すなわち再生産に携わっている資本家たちが互いに与え合う信用を分析しよう。それは信用システム [Kreditsystem] の土台をなしている。」

3) 挿入——「確定支払期限のある」

4) 「(」および「)」——削除。

- 5) 挿入——「まったく」
- 6) 「銀行業者の信用 [Banker's Credit]」→「銀行業者信用 [Bankiercredit]」
- 7) 「(」および「)」——削除。
- 8) 「A から B へ債権を移転すること」→「A から B への債権の移転」
- 9) 「(」および「)」——削除。
- 10) 「ただし」→「そして」
- 11) 挿入——「C」
- 12) 挿入——「ところで、よく見受けられるように、」
- 13) 「綿花を輸入する同じ輸入業者が」→「C が同じく」
- 14) 「{あるいは、同じことになるが、綿糸の輸出業者がアメリカの支払場所で綿花の輸入業者あての手形を受け取る場合には}」——削除。
- 15) 「綿糸の輸出業者は紡績業者に綿花の輸入業者あての手形で支払うことができ、綿花の輸入業者は綿糸の輸出業者に綿花ブローカーあての手形で支払うことができるのであって、彼らの相互的な債権が等しいなら、綿花ブローカーと紡績業者とは自分たちの手形を互いに交換することができ、彼らの相互的な債権が等しくないなら、差額が一方の側に支払われなければならない。」→「C は綿糸を A から手形で買うことができるのであり、また紡績業者 A はブローカー B に、C からの支払で受け取った B 自身の手形で支払をすすめることができるのであって、この場合にはせいぜい差額だけを貨幣で支払えばよい。」

ところで、この純粋に商業的な信用の循環については¹⁾、次の二つのことを言っておかなければならない。

- 1) 「については [für]」→「の場合には [bei]」

第1に¹⁾。これらの²⁾相互的な債権の決済は資本の還流に、すなわち W—G にかかっているが、これはただ延期されているだけのものである³⁾。紡績業者が織物業者³⁾の手形を受け取った場合には、織物業者⁴⁾がその支払をすることができるのは、彼が市場に出している織物⁵⁾がその間に売れているときのことであり、⁶⁾穀物相場師が手形を取引相手のブローカーあてに振り出した場合には、ブローカーが貨幣を支払うことができるのは、その間に穀物が期待された価格で売れているときのことである、等々⁷⁾。

つまり、これらの支払は、再生産の、すなわち生産過程および消費過程⁸⁾の流動性にかかっているのである。しかし、これらの信用は相互的だから、各人の支払能力は同時に他の各人⁹⁾の支払能力にかかっている。というのは各人は、自分が手形を振り出したときには、自分自身の事業での資本の還流をあてにしていたか、またはその間に彼に手形の支払をしなければならぬ第三者の事業での資本の¹⁰⁾ 還流をあてにしていたか、このどちらかでありうるからである。還流の見込みを別とすれば、支払はもっぱら、手形振出人が還流の遅れたときに自分の債務を履行するために処分できる準備資本にかかっている¹¹⁾のである。

① [異文] 「相互的な」——あとから書き加えられている。

1) 「第1に」——エンゲルス版でも強調されている。

2) 「W—G にかかっているが、これはただ延期されているだけのものである」
→「ただ延期されているだけの W—G にかかっている」

3) 「織物業者〔clothier〕」→「綿布製造業者〔Kattunfabrikant〕」

4) 「織物業者」→「綿布製造業者」

5) 「織物」→「綿布」

6) 「であり、」→「である。」

7) 「、等々」——削除。

8) 「生産過程および消費過程〔Produktions- und Consumtionsprocesses〕」
——MEGA では、Produktions- のハイフンが欠けている。

9) 「他の各人」→「だれか他の各人」

10) 「資本の」——削除。

11) 「にかかっている」→「よってのみ、可能になることができる」

第2に¹⁾。この信用システム〔Creditsystem〕は、現金支払をする²⁾ 必要をなくしてしまうものではない。まず、³⁾ 大きな一部分、すなわち労賃、租税、等々は、いつでも現金で支払わなければならない。次にまた、⁴⁾ C から手形を支払場所で受け取った B は、この手形が満期になる前に⁵⁾ D への⁶⁾ 手形の支払をしなければならない、等々⁷⁾。さらに、手形の相殺は、再生産のこうした循環では（とくに本来の生産者たちのそれでは）いたる

ところで⁸⁾ 中断され^①ざるをえないのである。^②再生産過程のところ⁹⁾ で見たように、不変資本の生産者たちは、部分的に不変資本を相互に交換する。このような場合には、手形はプラスとマイナスとで¹⁰⁾ 相殺されることができる。下から上に向かっての¹¹⁾ 線においても、すなわち、綿花ブローカーは紡績業者に、紡績業者は製造業者¹²⁾ に、この製造業者は輸出業者に、輸出業者は輸入業者（もしかするとふたび綿花の輸入業者）に、等々、¹³⁾ 手形を振り出さなければならない場合にも、同じことである。しかし、どこででも¹⁴⁾ 取引の循環が、したがってまた諸債権¹⁵⁾ の反転が生じるわけではない。たとえば、石炭供給業者にたいする紡績業者と機械製造業者とのあいだではそういうことは生じない¹⁶⁾。紡績業者は自分の事業では機械製造業者にたいする反対債権をもつことはない。なぜならば、彼の生産物¹⁷⁾ が機械製造業者の再生産過程にその要素としてはいることはけっしてないからである。紡績業者あての機械製造業者の手形は、現金で支払われなければならないのである¹⁸⁾。

① 〔異文〕「ざるをえない」←「ることもありうる」

② 〔注解〕「再生産過程のところで見たとように」——カール・マルクス『資本論〈経済学草稿, 1863-1865年〉』, 第2部〈第1草稿〉, を見よ。所収: MEGA^②, 第2部第4巻第1分冊, 301-343 ページ〔中峯・大谷他訳『資本の流通過程』, 大月書店, 1982年, 199-251 ページ〕。

1) 「第2に」——エンゲルス版でも強調されている。

2) 「をする」→「の」

3) 挿入——「支出の」

4) 挿入——「たとえば」

5) 挿入——「自分自身が」

6) 挿入——「満期」

7) 「, 等々」→「のであって, またそのためには彼は現金をもっていなければならない」

8) 「さらに, 手形の相殺は, 再生産のこうした循環では(とくに本来の生産者たちのそれでは) いたるところで」→「前に綿花栽培者から綿糸紡績業者まで行き, またその反対の道をたどるものとして前提されたような, 再生産の完全

な循環は、一つの例外でしかありえないのであって、つねに多くの箇所で」

- 9) 挿入——「(第2部第3篇)」
- 10) 「プラスとマイナスとで〔+ -〕」→「多かれ少なかれ」
- 11) 挿入——「生産の」
- 12) 「製造業者」→「綿布製造業者」
- 13) 「等々、」——削除。
- 14) 「どこでも」→「それと同時に」
- 15) 「諸債権」→「債権系列」
- 16) 「石炭供給業者にたいする紡績業者と機械製造業者とのあいだではそういうことは生じない」→「繊維業者にたいする紡績業者の債権は、機械製造業者にたいする石炭供給業者の債権によっては決済されない。」
- 17) 挿入——「である綿布」
- 18) 「紡績業者あての機械製造業者の手形は、現金で支払われなければならないのである」→「それゆえ、このような債権は貨幣によって決済されなければならないのである」

この商業信用にとっての限界は、それ自体として見れば、(1)生産者¹⁾や商人の[537]富、すなわち還流が遅れた場合の彼らの準備資本処分力であり、(2)この還流そのものである。この還流は時間的に遅れるかもしれないし、その間に商品の価格が変化し、²⁾下がったり³⁾するかもしれないし、あるいは市場の停滞のために商品が一時売れなくなるかもしれない。手形が長期であればあるほど、まず第1に、必要な⁴⁾準備資本がそれだけ大きくなければならない、またそれだけ^①その間の価格の変動の機会が多くなり、市場の供給過剰の機会もそれだけ大きくなる⁵⁾。というのも、この過剰が現われるものそれだけ遅くなるのだからである。⁶⁾他方では、商品価格の騰落をあてこんだ投機がもとの取引にはいることが多くなればなるほど、回収はそれだけますます不確実になる。⁷⁾ところが、労働の生産力が発展し、したがってまた大規模生産が発展するにつれて、(1)諸市場が広がって生産地から遠くなり、(2)したがって信用が長期化されざるをえなくなり、⁸⁾また(3)投機的要素がますます取引を支配するようにならざるをえないということは、明らかである。大規模な⁹⁾生産はその全生産物を商業の手

に投げ入れるのであって、¹⁰⁾ 商業自身が自分の資本で全国の生産物を¹¹⁾ 売ることができるように、国の資本が倍になれば、などということは不可能である。だから、ここでは信用が不可欠なのであって、¹²⁾ 信用は、量的には生産の価値量の増大につれて増大し、時間的には諸市場が広がり遠くなる¹³⁾ につれて〔長くなる〕。ここでは相互作用が生じる。生産過程の発展は信用を拡大し、信用は生産¹⁴⁾ や商業の操作の拡大をもたらすのである。

①〔異文〕ここに、「St〔……〕が不確かになり」〔マルクスがStのところにどのような語を書こうとしたのか推測できない〕と書いたのち消している。

- 1) 「生産者」→「産業家」
- 2) 「変化し、」——削除。
- 3) 「下がったり〔fallen etc.〕」→「下がる〔fallen〕」
- 4) 「必要な」——削除。
- 5) 「またそれだけその間の価格の変動の機会が多くなり、市場の供給過剰の機会もそれだけ大きくなる」→「また価格の下落や市場の供給過剰による還流の減少または遅延の可能性がそれだけ大きくなる。」
- 6) 「というのも、この過剰が現われるものそれだけ遅くなるのだからである。」——削除。
- 7) 「他方では、商品価格の騰落をあてこんだ投機がもとの取引にはいることが多くなればなるほど、回収はそれだけますます不確実になる。」→「さらに、もとの取引が商品価格の騰落をあてこんだ投機によってひき起こされたのであれば、回収はますます不確実である。」
- 8) 挿入——「だから」
- 9) 挿入——「そして遠隔地向けの」
- 10) 「投げ入れるのであって、」→「投げ入れる。しかし、」
- 11) 挿入——「買い占めてふたたびそれを」
- 12) 「なのであって、」→「である。」
- 13) 「広がり遠くなる」→「ますます遠くなる」
- 14) 「生産」→「産業」

この信用を銀行業者の信用¹⁾ から分離して考察する場合には、それが生産的資本²⁾ そのものの大きさにつれて増大することは明らかである。貸付

可能な資本³⁾と再生産的資本⁴⁾とはここでは同じものである。というのは、貸される資本は、最終消費⁵⁾に向けられている商品資本であるか、または⁶⁾生産的諸資本の不変部分の諸要素としてはなるべく（それらを補填するべく）⁶⁾ 予定されている商品資本であるか、そのどちらかだからである。⁷⁾ この場合に貸された資本として現われるものは、つねに、再生産過程の || 343 上 | 一定の段階にある資本であるが、それが⁸⁾ 一方の手から他方の手に移るのであって、最終的な売買によって媒介されることがないのである⁹⁾。たとえば、綿花は手形と引き換えに紡績業者の手に渡って、そこでただちに綿糸に紡がれ、¹⁰⁾ 綿糸は手形と引き換えに織物業者¹¹⁾の手に渡り、織物¹²⁾は手形と引き換えに商人の手に渡り、この織物は¹³⁾ 手形と引き換えに小売業者または¹⁴⁾ 輸出業者の手に渡り、輸出業者の手から手形と引き換えに東インド¹⁵⁾の商人の手に渡る、等々。¹⁶⁾ この商人については、彼はそれを売ってそのかわりにインディゴを買う、等々、と想定しよう。¹⁷⁾ 一つの手から別の手に移って行くあいだに、綿花は織物¹⁸⁾への転化をなしとげ、最後に織物¹⁹⁾は²⁰⁾ インディゴと交換され、このインディゴは²¹⁾ ふたたび再生産にはいって行く。この場合には、再 [538] 生産過程のさまざまな段階が、紡績業者は綿花にたいして、製造業者²²⁾は綿糸にたいして、商人は織物²³⁾にたいして、等々、その代金を支払っていないのに、信用によって媒介されている。この経過²⁴⁾の第1の²⁵⁾行為では、綿花という商品がそのさまざまな生産段階を通るのであって、この移行が信用によって媒介されている。しかし、この綿花が²⁵⁾ 商品としての最終形態を受け取ってしまう、それに続く変換は、ただ、同じ商品資本がさまざまな商人の手を通って行く変換にすぎないのであって、²⁶⁾ 商人が²⁷⁾ 最終的に²⁸⁾ その商品を消費者に売ってそのかわりに別の商品を買入れ、この商品が消費に入るかまたは再生産過程に入るのである。ここには、二つの段階のあいだの区別がある。²⁸⁾ 第1の段階では、信用は同一の財貨の現実の連続的な生産諸段階²⁹⁾を媒介するが、第2の段階では、信用はただ、³⁰⁾ 商人の手から別の手への³¹⁾ 移行、つまり W—G という行為を媒介するだけである。しかし、

ここでは³²⁾、商品は少なくともつねに流通行為のなかに、つまり再生産過程の一段階にあるのである。

① [異文] 「生産的」←「再生産的」

② [異文] 「行為」←「部分」

③ [異文] 「その商品を [sie]」←「その綿花を [es]」

1) 「銀行業者の信用 [bankers credit]」→「銀行業者信用 [Bankierkredit]」

2) 「生産的資本」→「産業資本」

3) 「貸付可能な資本 [loanable capital]」→「貸付資本 [Leihkapital]」

4) 「再生産的資本」→「産業資本」

5) 「最終消費」→「最終の個人的消費」

6) 「生産的諸資本の不变部分の諸要素としてはいるべく(それらを補填するべく)」→「生産的資本の不变要素の補填に」

7) 挿入——「つまり、」

8) 挿入——「売買によって」

9) 「最終的な売買によって媒介されることがないのである」→「それにたいする等価はのちに約束の期限がきてからはじめて買い手に〔よって〕支払われるのである」 エンゲルス版での「買い手に〔よって〕」の部分は、1894年版では「買い手に」となっていた。

10) 「そこでただちに綿糸に紡がれ、」——削除。

11) 「織物業者」→「綿布製造業者」

12) 「織物」→「綿布」

13) 「この織物は」→「その手から」

14) 「小売業者または」——削除。

15) 「東インド」→「インド」

16) 「渡る、等々。」→「渡り、」

17) 「この商人については、彼はそれを売ってそのかわりにインディゴを買う、等々、と想定しよう。」→「この商人はそれを売ってそのかわりにインディゴを買う、等々。」

18) 「織物」→「綿布」

19) 「織物」→「綿布」

20) 挿入——「インドに送られて」

21) 挿入——「ヨーロッパに船で送られてそこで」

22) 「製造業者」→「綿布製造業者」

- 23) 「織物」→「綿布」
 24) 「経過」—— progress → Vorgang
 25) 挿入——「生産のなかで」
 26) 「それに続く変換は、ただ、同じ商品資本がさまざまな商人の手を通して行く変換にすぎないのであって、」→「その商品資本はたださまざまな商人の手を通るだけであり、これらの商人は遠隔の市場への輸送を媒介するのであって、」
 27) 「商人が」〔この関係代名詞 der は、先行詞は複数なのに単数となっている。〕
 →「そのうちの最後の商人が」
 28) 「ここには、二つの段階〔Phase〕のあいだの区別がある。」→「だから、この場合には二つの区切り〔Abschnitt〕を区別しなければならない。」
 29) 「同一の財貨の現実の連続的な生産諸段階」→「同一の財貨の生産における現実の連続的な諸段階」
 30) 挿入——「輸送を含む」
 31) 「別の手への」→「別の商人の手への」
 32) 「ここでは」→「ここでも」

だから¹⁾、この場合に貸されるものは、けっして遊休資本〔unbeschäftigtes Capital〕ではなく、その所持者の手のなかでその形態を変えなければならない資本であり、その所持者にとってはたんなる商品資本であるという形態で存在する資本、すなわち、再転化させられなければならない、すなわち貨幣に転化されなければならない²⁾ 資本である。^{34)} ここで信用によって媒介されるものは、商品の変態である⁵⁾ ⁽⁶⁾ W—G だけでなく、また G—W および現実の生産過程もそうである⁶⁾ ⁽¹⁾ ³⁷⁾

① 〔訂正〕「}」——手稿では欠けている。

- 1) 「だから〔also〕」→「それだから〔demnach〕」
 2) 「すなわち貨幣に転化され〔verwandelt〕なければならない」→「しかも少なくともまず貨幣に転換され〔umgesetzt〕なければならない」
 3) 「{ } および { }」——削除。
 4) 挿入——「したがって〔somit〕」
 5) 「である」→「であり、」
 6) 「() および ()」——削除。

7) エンゲルス版では、ここで改行されていない。

再生産的な循環¹⁾の内部での信用²⁾銀行業者の信用³⁾は別として²⁾が多い⁴⁾ということは、貸付のために提供されて⁵⁾有利な投下を求めている遊休資本が多いということではなくて、再生産過程で資本が大いに充用されている⁶⁾ということである。⁴⁾この場合に信用が媒介するものは、(1)生産的資本家⁵⁾が問題になるかぎりでは、一つの段階から別の段階への²⁾生産的資本⁶⁾の移行、³⁾互いに噛み合い食い込み合っている⁷⁾生産諸部門の関連であり、(2)商人が問題になるかぎりでは、商品が貨幣と引き換えに最終的に売られるかまたは他の商品と交換されるかするまでの、一つの手から別の手へのその商品の⁸⁾移行である。

①〔異文〕「有利な」——あとから書き加えられている。

②〔異文〕「生産的」——あとから書き加えられている。

③〔異文〕ここに、「(2)」と書いたのち消している。

1)「循環」—— cercle → Kreislauf

2)「(」および「)」→「——」

3)「銀行業者の信用 (banker's credit)」→「銀行業者信用 (Bankierkredit)」

4) 挿入——「だから、」

5)「生産的資本家」→「産業資本家」

6)「生産的資本」→「産業資本」

7)「互いに噛み合い食い込み合っている [zu einander und in einander greifend]」→「互いに属し合い互いに食い込み合っている [zueinander gehörig und ineinander eingreifend]」

8) 挿入——「輸送と」

{⁴⁾以前に見たように、生産に充用されても消費されない固定資本は別としても、消費者はけっして、生産に投下された資本の全体を補填する必要はない。というのは、不変資本の一部分は現物で補填され、他の一部分は不変資本の生産者たちのあいだでの交換によって補填されるのだからである。しかし、彼らの収入と彼らの可変資本とを表わしている部分が、²⁾も

はや彼らの資本の生産的消費者たち——この生産的消費者たち自身の取引が消費者への販売にかかっている——への販売によって補填されなくなれば、もちろん彼らのあいだでのこの過程そのものが行き詰まることになる。}」¹⁾

① 〔注解〕「以前に見たように」——536 ページ 30-32 行への注解〔前出 175 ページの注解注②〕を見よ。〔MEGA では、この注解を 538 ページ 32 行へのものとしているが、これは 538 ページ 31 行とあるべきところである。〕

② 〔異文〕「もはや」——あとから書き加えられている。

1) このパラグラフは、エンゲルス版では削除されている。

^①「¹⁾信用の最大限度は、この場合、生 [539] 産的資本²⁾の目一杯の充用、すなわち消費の限界をまったく³⁾無視しての潜在的な再生産力⁴⁾の極度の充用⁵⁾とイコールである。この消費限界⁶⁾は、再生産過程そのものの緊張によって拡張される。というのは、⁷⁾一方では労働者および再生産的資本家による収入の消費が増大するからであり⁸⁾、他方では再生産過程の緊張は生産的消費〔の緊張〕と同じことだから⁹⁾である。}」¹⁾

① 〔訂正〕「{」——手稿では欠けている。

1) 「{」および「}」——削除。

2) 「生産的資本」→「産業資本」

3) 「まったく」——削除。

4) 「潜在的な再生産力 [the latent reproductive power]」→「再生産力 [Reproduktionskraft]」

5) 「充用 [employment]」→「緊張 [Anspannung]」

6) 「この消費限界 [diese limit of consumption]」→「これらの消費限界 [diese Grenzen der Konsumtion]」

7) 「というのは、」——削除。

8) 「労働者および再生産的資本家による収入の消費が増大するからであり」→「再生産過程の緊張は労働者および資本家による収入の消費を増大させるのであり」

9) 「だから」——削除。

再生産過程が引き続き流動的であり、したがって還流が確保されているあいだは、この信用は持続し膨張するのであって、その膨張は再生産過程そのものの膨張にもとづいている。還流が遅れ市場が供給過剰になって価格が下落したために停滞が現われれば生産的資本¹⁾の過剰があるのであるが、しかしそれは、生産的資本²⁾がその諸機能³⁾を果たすことができないという形態での過剰である。売ることができない大量の商品資本がある。大量の固定資本がある。しかし、商品資本は売ることができない。他方で固定資本は、再生産の停滞に伴って、一部は遊休している。⁴⁾信用は収縮するが、その原因は、(1)この資本が「⁵⁾充用されていない」⁶⁾から、すなわち一つの⁷⁾再生産段階に停滞していて、その変態を成し遂げることができない⁸⁾からであり、(2)再生産過程の流動性への信頼が破られているからであり、(3)この商業信用にたいする需要が減少するからである。⁹⁾織物業者¹⁰⁾は、生産を制限しており大量の売れない織物¹¹⁾を背負い込んでいる¹²⁾ので、綿糸を信用で買う必要はないし、商人は¹³⁾織物¹⁴⁾を信用で買う必要はない、等々¹⁵⁾。|

① [異文] 「再生産段階」←「生産段階」

② [異文] 「織物業者 [clothier]」←「紡績業者 [Spinner]」

1) 「生産的資本」→「産業資本」

2) 「生産的資本」→「産業資本」

3) 「諸機能」→「機能」(単数)

4) 「売ることができない大量の商品資本がある。大量の固定資本がある。しかし、商品資本は売ることができない。他方で固定資本は、再生産の停滞に伴って、一部は遊休している。」→「大量の商品資本があるが、売ることができない。大量の固定資本があるが、再生産の停滞のために大部分は遊休している。」

5) 「「」および「」」——削除。

6) 「一つの再生産段階に停滞していて、その変態を成し遂げることができない」→「その変態を成し遂げることができないために一つの再生産段階に停滞している」

7) 「織物業者 [clothier]」→「紡績業者」

- 8) 「織物 [cloth]」→「綿糸」
- 9) 「背負い込んでいる [auf den Hals hat]」→「在庫させている [auf Lager hat]」
- 10) 挿入——「すでにありあまる商品を抱えているので、」
- 11) 「織物」→「商品」
- 12) 「, 等々」——削除。

| 344 上 |¹⁾ 再生産過程のこのような緊張や膨張のなかで攪乱が生じれば²⁾、一方ではもちろん信用欠乏が生じる³⁾ のであって、掛買いするのが困難になる⁴⁾ {⁵⁾⁶⁾ 現金払を要求するのは、つまり慎重に売るのは⁷⁾、^①産業循環のうちのパニック⁸⁾ のあとにくる局面を特徴づけるものなのではあるが⁹⁾ }⁵⁾。しかしとりわけ、¹⁰⁾ だれもが売らなければならないのに売ることができず、¹¹⁾ 支払うために売らなければならないのだから、遊休していて投下を求めている資本の量ではなく自己の再生産過程のなかでせき止められている資本の量は、まさに、信用欠乏が¹²⁾ 最大であるとき（だからまた¹³⁾ 割引率が最高であるとき）にこそ、最大なのである。そのようなときには、再生産過程がせき止められている¹⁴⁾ のだから、¹⁵⁾ 資本は実際に¹⁶⁾ 大量に遊休している。工場は休止し、原料は倉庫に^②貯蔵され¹⁷⁾、完成生産物は商品として市場に^③とどまり続けている¹⁸⁾。だから、このような状態を生産的資本の欠乏のせいにする以上にはまちがったことはない。このようなときに¹⁹⁾ 生産的資本の過剰があるのである。すなわち、それは、一部は再生産の現実の²⁰⁾ 規模、この場合には²¹⁾ 収縮している規模から見て過剰なのであり、一部は麻痺している消費から見て過剰なのである。²²⁾ {²³⁾ 全社会がただ生産的資本家と賃労働者だけから構成されているものと想定すれば、²⁴⁾²⁵⁾ 資本²⁶⁾ の大きな諸部分がそれらの平均的な割合で補填されることを妨げるような、また、540 とりわけ信用制度 [Creditwesen]²⁷⁾ が発展させる、再生産過程全体の一般的な関連のもとではつねに、一時的には²⁸⁾ 一般的なもろもろの停滞を引き起こさざるをえないような価格変動を度外視すれば、²⁹⁾ また³⁰⁾、信用制度 [Creditwesen] が促進する空取引³¹⁾

や投機的取引³²⁾も度外視すれば、³³⁾³⁴⁾あらゆる³⁵⁾恐慌は、ただ、さまざまな部門の生産における³⁶⁾不均衡と、資本家たち自身の消費と彼らの蓄積とのあいだにある不均衡とからしか、説明できないであろう。ところが実際にはそうではないのであって³⁷⁾、彼らの資本³⁸⁾の補填は、その多くが〔grossentheils〕不生産的な諸階級の消費能力にかかっており、他方では、労働者たちの消費能力は、一部は労賃の諸法則によって、一部は、彼らが資本家階級のために利潤をあげるように充用されうるかぎりでしか充用されない、ということによって、制限されているのである。^④すべての現実の恐慌の究極の原因は、どこまでも、一方では大衆の窮乏、他方では^⑤生産諸力を、その限界をなすものがあたかも社会の絶対的な消費能力でもあるかのように発展させようとする、資本主義的生産様式の衝動なのである。^{39) } 23)}

- ①〔異文〕「産業循環のうちのパニックのあとにくる局面」←「再生産のうちの〔……〕局面」
- ②〔異文〕「貯蔵され〔lagern〕」←「堆積し〔liegen〕」
- ③〔異文〕「とどまり続けている〔verharren〕」←「ある〔sind〕」
- ④〔異文〕ここに、「}」と書いたのち消している。
- ⑤〔異文〕ここに、「〔……〕の規模で〔im Maßstab d.〕」と書いたのち消している。

- 1) 挿入——「だから〔also〕,」
- 2) 「再生産過程のこのような緊張や膨張のなかで攪乱が生じれば」→「再生産過程のこのような膨張に攪乱が生じれば、またはただその正常な緊張に攪乱が生じただけでも」
- 3) 「一方ではもちろん信用欠乏〔Discredit〕が生じる」→「それとともにまた信用欠乏〔Kreditmangel〕も生じる」
- 4) 「掛買いするのが困難になる〔es wird schwerer gepumpt〕」→「商品を用で手に入れることはいっそう困難になる」
- 5) 「{ } および { }」——削除。
- 6) 挿入——「しかし、ことに,」
- 7) 「現金払いを要求するのは、つまり慎重に〔vorsichtig〕売るのは」→「現

金払いへの要求や信用売りの警戒〔Vorsicht〕は」

- 8) 「パニック〔Panic〕」→「崩落〔Krach〕」
- 9) 「を特徴づけるものなのではあるが」→「にとって特徴的である」
- 10) 「しかしとりわけ、」→「恐慌のさなかには、」
- 11) 挿入——「それでも〔doch〕」
- 12) 「が」→「も」
- 13) 挿入——「銀行業者信用では」
- 14) 「せき止められている〔gehemmt〕」→「停滞している〔stockt〕」
- 15) 挿入——「すでに投下されている」
- 16) 「実際に」—— faktisch → in der Tat
- 17) 「倉庫に貯蔵され」→「堆積し」
- 18) 「とどまり続けている」→「あふれている」
- 19) 挿入——「こそ」
- 20) 「現実の」→「正常な」
- 21) 「この場合には」→「といってもさしあたりは」
- 22) エンゲルス版では、ここで改行されている。
- 23) 「{ } および { } 」——削除。
- 24) 「すれば、」→「しよう。」
- 25) 挿入——「さらに」
- 26) 「資本」→「総資本」
- 27) 「信用制度〔Creditwesen〕」→「信用」
- 28) 「一時的には〔momentan〕」→「一時的な〔zeitweilig〕」
- 29) 「すれば、」→「しよう。」
- 30) 「また」—— und → ebenfalls
- 31) 「空取引」—— Scheintransactionen → Scheingeschäften
- 32) 「取引」—— Transactionen → Umsätze
- 33) 「すれば、」→「しよう。」
- 34) 挿入——「そうすれば、」
- 35) 「あらゆる〔jeder〕」——削除。
- 36) 「における」→「の」
- 37) 「ところが実際にはそうではないのであって」—— so aber → wie aber die Dinge liegen
- 38) 「彼らの資本」→「生産に投下されている資本」
- 39) 「一方では大衆の窮乏、他方では生産諸力を、その限界をなすものがあたかも社会の絶対的な消費能力でもあるかのように発展させようとする、資本主

義的生産様式の衝動なのである。」→「生産諸力を、その限界をなすものがあるかとも社会の絶対的な消費能力でもあるかのように発展させようとする、資本主義的生産の衝動に対比しての大衆の窮乏と消費制限なのである。」

^①生産的資本の現実の不足について云々できるのは (¹) 少なくとも資本主義的に発展した諸国の場合には¹⁾、^②主要な食糧なり主要な工業原料なりの一般的不作の場合だけである。

①〔異文〕ここに、「現実の不足は」と書いたのち消している。

②〔異文〕「主要な食糧 (Hauptnahrungsmittel)」←「主要な生活手段 (Hauptlebensmittel)」

1) 「() および 「 」」——削除。

ところが、この商業信用に本来の貨幣信用〔monied Credit〕がつけ加わる。産業家や商業家¹⁾ どうしのあいだの前貸が、彼らにたいして銀行業者や貨幣貸付業者²⁾ からなされる貨幣の前貸と混ぜ合わされる。^①手形の割引によって〔行なわれる場合に〕は³⁾、前貸はただ名目的でしかない。A⁴⁾ が自分の糸⁵⁾ を手形と引き換えに売るが⁶⁾、彼はこの手形を⁷⁾ 割引きさせる。実際には、彼は⁸⁾ 取引銀行業者の信用を前貸するのであり、この銀行業者はまた自分の預金者たちの^②貨幣資本を彼に前貸するのであって、この預金者は、産業家や商業家⁹⁾ 自身から、しかしまた労働者からも(貯蓄銀行¹⁰⁾)、地代取得者やその他の不生産的な諸階級からも成っているのである。こうして、一方では、^③各個人にとって個別的に、準備資本が回避される。他方では、現実の還流への依存〔が回避される〕。¹¹⁾¹²⁾ 他方では、一方では¹³⁾¹⁴⁾ 融通手形の使用によって、また他方では¹⁵⁾ 手形を振り出すことを目的とした商品の販売¹⁶⁾ によって、事柄¹⁷⁾ の全体が非常に複雑にされるので、実際には還流が、¹⁸⁾ もはや一部はべてんにかかった¹⁹⁾ 貨幣貸付業者の、一部はべてんにかかった²⁰⁾ 生産者の犠牲で行なわれているにすぎないようになったのちにも、事業が非常に堅実で還流は順調であるような外

観が長く存在する²¹⁾ こともありうるのである。だからこそ、いつでも事業は、まさに崩落〔clash〕の寸前にこそ、並はずれて²²⁾ 健全であるように見えるのである。最良の証明を与えているのは、たとえば 1857 年²³⁾ の銀行法に関する報告であって、ここでは、なんと恐慌が爆発する 1 か月前²⁴⁾ (25) 1857 年 8 月²⁵⁾ に、すべての銀行重役、商業家²⁶⁾、等々²⁷⁾ が、要するに全委員²⁸⁾ が互いに事業の繁栄と健全とを祝福し合ったのである。a) 祝賀者たちの先頭に立っていたのは、1857 年の委員会で証言を行なった証人の 541 一人であったオウヴァストン卿である。²⁹⁾/

- ①〔異文〕ここに、「彼らが〔前〕貸するのは〔Sie schiessen〕」と書いたのち消している。
- ②〔異文〕「貨幣資本」←「資本」
- ③〔異文〕「各人にとって個別的に、」——あとから書き加えられている。

- 1) 「商業家〔die Commercielle〕」→「商人」
- 2) 「貨幣貸付業者」—— moneylender → Geldverleiher
- 3) 「によって〔行なわれる場合に〕は〔durch〕」→「の場合には〔bei〕」
- 4) 「A」→「ある製造業者」
- 5) 「糸」→「生産物」
- 6) 「売るが」→「売り」
- 7) 挿入——「あるビルブローカーに」
- 8) 挿入——「ただ」
- 9) 「商業家〔die Commercielle〕」→「商人」
- 10) 挿入——「を通して」
- 11) 「一方では、各個人にとって個別的に、準備資本が回避される。他方では、現実の還流への依存〔が回避される〕。」→「各個の製造業者や商人にとって、多額の準備資本の必要が避けられ、また現実の還流への依存も避けられる。」
- 12) 挿入——「しかし、」
- 13) 「一方では」→「一部は」
- 14) 挿入——「ただの」
- 15) 「他方では」→「一部は」
- 16) 「手形を振り出すことを目的とした商品の販売」→「ただ手形づくりを目的とする商品取引」

- 17) 「事柄 [Geschichte]」→「過程」
- 18) 挿入——「もうずっと前から」
- 19) 「べてんにかかった」—— beschissen → geprellt
- 20) 「べてんにかかった」—— beschissen → geprellt
- 21) 「長く存在する」→「まだ静かに存在し続けている」
- 22) 「並はずれて [exceedingly]」→「ほとんど過度にまで [fast bertrieben]」
- 23) 挿入——「および 1858 年」〔エンゲルスのこの挿入は、この文に付された脚注の最初に、1858 年の『銀行法特別委員会報告』からの引用があることを考慮して行なわれたものであろう。〕
- 24) 挿入——「の」
- 25) 「(」および「)」——削除。
- 26) 「商業家 [die Commercienne]」→「商人」
- 27) 「, 等々」——削除。
- 28) 「全委員」→「オーヴァストウン卿をはじめすべての喚問された専門家」
- 29) 「祝賀者たちの先頭に立っていたのは、1857 年の委員会で証言を行なった証人の一人であったオウヴァストン卿である。」——削除。

【原注】 | 344 下 | a) ケイリ氏によって提出された報告, 第 11 号。「事業 [trade] は、昨年^①(1857 年) の 541 証人たちによって議論の余地なく健全なもの [sound] と考えられていた。」(『銀行法特別委員会報告……』, 1858 年。) ^{1)2)②}ちなみに³⁾, 奇妙なことに, トウクは彼の『物価史』のなかで、この幻想をいま一度、⁴⁾歴史記述者として体験している。突然危急の叫びが響きわたる⁵⁾までは、事業はいつでも健全⁶⁾であり、市況は引き続き繁栄をきわめているのである。【原注 a) 終り】 |

① 【注解】 「(1857 年)」——マルクスの挿入。

② 【注解】 以下の記述はとくに、トマス・トウク著『……物価史』, 第 2 巻, ロンドン, 1838 年, 241-242 ページでの次の論述に関わっている。「そこで、この委員会の審問の結果得られた知識の中身は、いかなるものであったか。下院のこの委員会の動議を提出した人たちの陳述からは全般的な破産に瀕するほどの産業界の一般的窮境が推論され得たかもしれないが、きわめて確かな証言にもとづいて明らかになったことは、それとは違って、この国の事業 [trade] と製造業 [manufactures] が著しく健全で健康な [sound and healthy] 状

態にあり、適正な資本と妥当な収益をもって運営されており、輸出品も輸入品も大きな主要商品のすべてについて市場の改善の見込みにたいする一般の信頼が見られた、ということであった。」〔藤塚知義訳『物価史』第2巻、東洋経済新報社、1979年、224ページ。〕——マルクスはすでに、「1849年の『エコノミスト』からのメモ」のなかで、恐慌の前には事業はきわめて健全であるように見える、というトゥックの見解を次のように記録していた。「……この国の事業と製造業は(トゥック〔の言うところでは〕)著しく健全で健康な状態にあった。等々、等々。」(MEGA², 第4部第7巻, 9ページ。)

- 1) 「ケイリ氏によって提出された報告, 第11号。『事業〔trade〕は, 昨年(1857年)の証人たちによって議論の余地なく健全なもの〔sound〕と考えられていた。』(『銀行法特別委員会報告……』, 1858年。)」——削除。
- 2) エンゲルス版では、この脚注の以下の部分は、本文の直前のパラグラフの末尾に組み込まれている。
- 3) 「ちなみに」→「そして」
- 4) 挿入——「それぞれの恐慌の」
- 5) 「危急の叫びが響きわたる〔d. Alarmruf ertönt〕」→「崩壊が起こる〔der Zusammenbruch erfolgt〕」
- 6) 「健全〔sound〕」→「いたって健全〔kerngesund〕」

/344 上/¹⁾貸付可能な貨幣資本〔loanable moneyed capital〕——有利な投下を求めている遊休している貨幣資本〔monied Capital〕——の量が最大になるのは恐慌のあとであって、²⁾再生産過程が縮小し、したがってまた再生産的資本の量が一部分減少し(それが商品在庫の量であるかぎり)、また固定資本の一部分は完全には充用されていない、等々のときである。ふだんは商業的割引に向けられている貨幣が諸々の貨幣センターに溜まっている。価格は下落し、労働者の雇用状態は悪い。したがって流通する媒介物〔das circulirende Medium〕の量は減少する。³⁾低い価格と企業精神の欠如とが輸入を麻痺させるので、外部からの還流が、一部は地金の形態で、少しずつはいつてくる。だからこの場合には、だれも、〔生産的〕資本が過剰なのだから利子が低い、と言うことはできない。ここにあるのは生産的資本の収縮であり、生産的資本にたいする貨幣形態

〔moneyed Form〕にある資本の、一部は相対的な拡張であり、一部は絶対的な拡張である。|

①〔異文〕「再生産過程」←「生産過程」

②〔異文〕ここに、「利子率」と書いたのち消している。

1) エンゲルス版では、以下のパラグラフは削除されている。

| 345 上 |¹⁾ 労賃の支払で機能する、総じて収入の支出 {それはいまイングランドでは、約 5000 万ポンド・スターリングとなっている} で機能する貨幣の大きな部分でさえ、貸付可能な資本〔loanable capital〕に転化する。地金の還流のうち、平時にはけっして西方諸国の貨幣蓄蔵にははいらず、もっぱらアジアの生産物との交換で、たえず生産源から西方の工業諸国²⁾を通して東方に向かう旅をしている部分も同様である。さらに、そうでなくとも縮小している事業が、慎重にかつ短期手形で営まれるのだから、割引や貸付のための機会がどんなに少なくとも、通常の事業の還流は順調にはいつてくる。

①〔異文〕「を通して」←「へ」

1) エンゲルス版では、以下のパラグラフは削除されている。

¹⁾さらに、²⁾ 貨幣資本〔monied capital〕の膨張は、銀行制度が普及したために（たとえば、³⁾⁴⁾ イプスウィッチの例を見れば、そこでは 1857 年 a) ⁵⁾までのわずか数年に⁶⁾、借地農業者のもとでの⁷⁾ 預金が 542 4 倍にもなった）、つまり⁸⁾ 以前は私的蓄蔵貨幣であったもの、あるいは⁹⁾ またたんなる⁹⁾ 鑄貨準備でも¹⁰⁾ あったものが、一定の期間を限っていつでも 貸付可能な資本〔loanable Capital〕に転化する、ということからも生じるのであるが、貨幣資本〔monied capital〕のこのような膨張を、生産的資本のなんらかの増大を表現するものと言うことはできない（それは、預金に利子をつけるようになったために生じたロンドンの株式諸銀行での預金

の増大〔をそう言うことができないの〕と同様である)。¹¹⁾ 生産規模が同じままであるかぎり、それは¹²⁾ ただ、生産的資本に比べての貸付可能な貨幣資本 [loanable money capital] の過剰¹³⁾ をもたらすだけである。だからこそ利子率が低いのである。/

① 〔注解〕「イプスウィッチの例を見れば」——〔MEGA〕548 ページ 40 行-549 ページ 18 行〔本稿、後出、219 ページ下から 8 行-220 ページ 13 行〕を見よ。

② 〔異文〕「また」——あとから書き加えられている。

1) 草稿の 345-347 ページの以下に続く部分（本稿、209 ページ下から 10 行までは、エンゲルス版では、おおむね、「第 30 章 貨幣資本と現実資本・I」の最後の部分（MEW, Bd. 25, S. 505-510）に収められている。

2) 「さらに、」——削除。

3) 「たとえば、」——削除。

4) 挿入——「あとで述べる」

5) 「a)」——削除。

6) 「までのわずか数年に」→「直前わずか数年のうちに」

7) 「のもとでの」→「の」

8) 「つまり [also]」——削除。

9) 「たんなる」——削除。

10) 「また……も」——削除。

11) 「膨張を、生産的資本のなんらかの増大を表現するものだと言うことはできない（それは、預金に利子をつけるようになったために生じたロンドンの株式諸銀行での預金の増大〔をそう言うことができないの〕と同様である）。」→「膨張が生産的資本の増大を表現するものでないことは、ロンドンの株式諸銀行が預金に利子を支払い始めたときのこれらの銀行での預金の増大が生産的資本の増大を表現していないのと同様である。」

12) 「それは [es]」→「この膨張は」草稿での es は、エンゲルスが置き換えたように、「この膨張 [Expansion]」を意味するものであろう。

13) 「過剰 [superabundance]」→「豊かさ [Reichlichkeit]」

【原注】 | 345 下 | a) ¹¹⁾ 「パニックのあとでは、取引は停滞している。

ふだんは商業的割引に向けられている貨幣が諸々の貨幣センターに溜まっ

ている [accumulate]。労働の雇用状態がよいことから価格は下落する。利子率は2%、あるいはことによると1 1/2%にまで下がる。この低い率は同時に、次第に冒険者や貨幣所有者——借り手や貸し手——の強欲を誘い出す。あらゆる種類の国内企業が労働を雇用する。失業は減少し²⁾、賃金は上昇する。消費は拡大され、価格は上がる。これは、繁栄の時期であり、雇用者にとっては利潤の時期であり、労働者にとっては豊かさの時期である。価格の上昇は輸入を助長し、それと同時にそれが冒険者たちのあいだでの競争を刺激し、また貨幣……の価値は比例的に上がるが、しかしまだ利潤にとって高すぎるほどではない。しかし価格のこの上昇は輸出取引に水をさし、輸出は減退する。貿易差額は逆調になり、金は出ていく。ねじが逆転する。割引は困難であるり、信頼は動揺する。逼迫はパニックに一転し、つづいて虚脱状態 [collapse] がくる。」【原注 a) 終り】 /

①〔注解〕以下の引用の出典は不明である。〔エンゲルスがこの引用を彼の版に取り入れなかったのも、彼がこれの出典を見いだすことができなかったからではないかと考えられる。筆者も、かねてから折に触れて、これの出典を探す努力をしてきたが、これまでのところ徒労に終わっている。〕

- 1) エンゲルス版では、以下の引用は削除されている。
- 2) 草稿でも MEGA でも unemployment increases となっているが, unemployment decreases あるいは employment increases とあるべきところである。

/355 上/ 再生産過程がふたたびその繁栄の状態（これは過度緊張の状態に先行する）¹⁾に達したならば、商業信用は非常に大きくなる²⁾のであるが、その場合にはこの信用には、実際にこれまた、順調な³⁾還流⁴⁾と拡大された生産という「健全な」土台がある。この状態では、利子率は、その最低限度よりは高くなるとはいえ、やはりまだ低い。じっさい、この時期こそは、低い利子率、したがってまた貸付可能な資本 [loanable Capital] の相対的な豊富さが生産的資本⁴⁾の現実の拡張と同時に生じると言いうる唯一の⁵⁾時点である。大きな⁶⁾商業信用と結びついた還流の順調さ⁷⁾は、

貸付可能な資本〔loanable Capital〕⁸⁾の供給を、それへの需要の増大にもかかわらず、確実にして、それをその水準に維持する⁹⁾。他方では、いまやようやく、準備資本なしに、¹²⁾もしくは¹⁰⁾資本なしに事業をやる、したがってまたまったく貨幣信用〔moneyed Credit〕だけに頼って操作をする騎乗者たちが、目につく程度に入ってくる。いまではまた、あらゆる形態での固定資本の大拡張や、新しい¹¹⁾企業の¹²⁾開業が加わってくる、等々¹³⁾。いまや、利子はその平均の高さにまで上がる。¹⁴⁾

①〔異文〕「と拡大された生産」——あとから書き加えられている。

②〔異文〕「もしくは〔respektive〕」←「たいていは〔meist〕」

1)「その繁栄の状態（これは過度緊張の状態に先行する）」→「過度緊張の状態に先行する、繁栄の状態」

2)「大きくなる」→「大きく膨張する」

3)「順調な〔flüssig〕」→「容易にやってくる〔leicht eingehend〕」

4)「生産的資本」→「産業資本」

5)「唯一の」——エンゲルス版では強調されている。

6)「大きな」→「拡大した」

7)「順調さ」→「容易さと規則正しさ」

8)「貸付可能な資本〔loanable Capital〕」→「貸付資本」

9)「それをその水準に維持する」→「利子率の水準が上がるのを妨げる」

10) 挿入——「およそ」

11) 挿入——「広範囲にわたる〔weitreichend〕」

12) 挿入——「大量の」

13)「、等々」——削除。

14) エンゲルス版では、ここで改行されていない。

利子がふたたびその最高限度に達するのは、¹⁾再生産過程が麻痺して、前に述べたようないくつかの例外はあるが、遊休している〔unbeschäftigt〕生産的資本²⁾の過剰の³⁾〔現われる〕ときである。

1) 挿入——「新しい恐慌が襲ってきて、信用が突然とだえ、支払がとどこおり、」

2)「生産的資本」→「産業資本」

3) 挿入——「現われる」

つまり全体として見れば、貨幣資本〔monied Capital〕の運動（利子率に表現されるそれ）¹⁾は生産的資本²⁾の運動とは逆な³⁾のである。利子率はその平均的な高さに、すなわちその最低限度からも最高限度からも同じ距離にある中位点に達することが、豊富な貸付可能な資本〔loanable capital〕と生産的資本の大膨張とが同時に生じていることを表現する。「好転」および「信頼の増大」と同時に生じる、低いとはいえ最低限度よりも高い利子率も同じことを表現する。⁴⁾しかし、産業循環の発端では、低い利子率が生産的資本の収縮と同時に生じ、⁵⁾終りには高い利子率が生産的資本⁶⁾の過剰と同時に生じる。「好転」に伴う低い利子率は、商業信用がわずかな度合いでしか貨幣信用〔moneyed Credit〕⁷⁾を必要とせず、まだ自立している⁸⁾ことを表現している。⁹⁾

①〔異文〕ここに、「b)」〔注記号〕と書いたのち消している。

- 1) 「貨幣資本〔monied Capital〕の運動（利子率に表現されるそれ）」→「利子率に表現される貸付資本の運動」
- 2) 「生産的資本」→「産業資本」
- 3) 「逆な」→「逆の方向に進む」
- 4) 「利子率とその平均的な高さに、すなわちその最低限度からも最高限度からも同じ距離にある中位点に達することが、豊富な貸付可能な資本〔loanable capital〕と生産的資本の大膨張とが同時に生じていることを表現する。「好転」および「信頼の増大」と同時に生じる、低いとはいえ最低限度よりも高い利子率も同じことを表現する。」→「まだ低いとはいえ最低限度よりも高い利子率が恐慌後の「好転」および信頼の増大と同時に生じる段階、またとくに、利子率とその平均的な高さに、すなわちその最低限度からも最高限度からも同じ距離にある中位点に達する段階、ただこの二つの時期だけが、豊富な貸付資本と産業資本の大膨張とが同時に生じる場合を表現する。」
- 5) 挿入——「循環の」
- 6) 「生産的資本」→「産業資本」
- 7) 「貨幣信用〔moneyed Credit〕」→「銀行信用〔Bankkredit〕」

- 8) 「商業信用がただわずかな度合いでしか貨幣信用〔moneyed Credit〕を必要とせず、まだ自立している」→「商業信用がまだ自立しているのでわずかな度合いでしか銀行信用〔Bankkredit〕を必要としない」

この¹⁾循環については、ひとたび最初の衝撃²⁾が与えられたのちには、同じ事柄〔Geschichte〕³⁾が周期的に再生産されざるをえない、というような事情になっている。⁴⁾沈静〔quiescence〕⁵⁾の状態では、生産は、それが以前の循環中に到達した規模、そして、いまではそのための実体的〔real〕⁶⁾土台が置かれているような規模よりも下に下がる。繁〔543〕栄〔prosperity〕⁽⁷⁾中位〔d. Mitte〕⁸⁾のときには、生産はこの土台のうえでさらに発展する。過剰取引の時期には、生産は生産諸力を極度に働かせて、生産過程の資本主義的諸制限をも越えさせるまでに駆り立てるのである。⁹⁾

1) 挿入——「産業」

2) 「衝撃」Stoss → Anstoß

3) 「事柄〔Geschichte〕」→「循環〔Kreislauf〕」

4) エンゲルス版では、ここに、エンゲルスによることを明記した次の長い脚注がつけられている。——「私がすでに別の箇所でも述べておいたように、この点では最近の大きな一般的恐慌以来一つの転換が現われてきた。従来は循環周期が10年だった周期的過程の急性的形態は、相対的に短くて弱い景気好転と相対的に長くて決定的でない不況との、より慢性的な、より長く引き伸ばされた、いろいろな工業国に別々の時期に分かれて現われる交替に変わったように見える。しかし、たぶん問題はただ循環周期が長くなったということだけであろう。世界貿易の幼年期だった1815-1847年には、ほぼ5年ごとの恐慌〔1894年版による〕を指摘することができる。1847-1867年には循環周期は明確に10年である。われわれは、前代未聞の激しさの新しい世界恐慌の準備期にあるのだろうか？ いろいろなことがそれを暗示しているように思われる。1867年の最近の一般的恐慌以来大きな変化が現われている。交通機関の非常な拡張——大洋汽船や鉄道や電信やスエズ運河——は、世界市場をはじめて現実につくりだした。それまでは工業を独占していたイギリスと並んで、互いに競争するいくつかの工業国が現われた。ヨーロッパの過剰資本の投下のためには、どの

大陸でも無限により大きくより多様な領域が開かれているので、この資本はより広く分散されて、局地的な過度の投機はより容易に克服される。すべてこれらのことによって、以前からの、恐慌の根源や恐慌の発生の機会、たいていは除かれているかまたは非常に弱められている。それとともに、国内市場での競争はカルテルやトラストの出現によって後退し、他方、外国市場での競争はイギリス以外のすべての大工業国が張りめぐらしている保護関税によって制限される。しかし、この保護関税そのものが、世界市場での支配権を決定すべき終局的な一般産業戦のための武装にほかならないのである。こうして、古い恐慌の再現を妨げようとする諸要素の一つ一つが、はるかに激烈な将来の恐慌の萌芽を宿しているのである。——F. エンゲルス」

- 5) 「沈静〔quiescence〕」→「弛緩〔Abspannung〕」
- 6) 「実体的〔real〕」→「技術的」
- 7) 「() および 「 」」→「——」
- 8) 「中位〔Mitte〕」→「中位期〔Mittelperiode〕」
- 9) 「過剰取引の時期には、生産は生産諸力を極度に働かせて、生産過程の資本主義的諸制限をも越えさせるまでに駆り立てるのである。」→「過剰生産と眩惑の時期には、生産は生産諸力を最高度に緊張させて、ついには生産過程の資本主義的諸制限をも越えさせてしまうのである。」

恐慌の時期に「¹⁾ 支払手段」が欠乏していることは自明である。手形の〔貨幣への〕転換可能性〔Convertibility〕が商品の変態そのものにとって代わったのであって、しかもまさにこのような時点²⁾ でこそ、³⁾ 一部がただ信用だけに頼って仕事をするのが多くなればなるほど、それだけますますそうなるのである。恣意的な銀行立法（1844-45年のそのような）⁴⁾ がこの貨幣恐慌をさらに重くすることもありうる。しかし、どんな種類の銀行立法でも恐慌をなくしてしまうことはできない。⁵⁾ 全過程⁶⁾ が信用にもとづいているところでは⁷⁾、ひとたび信用が⁸⁾ とだえて現金払しか通用しなくなれば、信用恐慌と支払手段の欠乏とが生じることは自明であり、⁹⁾ ¹⁰⁾ だからまた、全恐慌が、一見したところでは〔prima facie〕、信用恐慌および貨幣恐慌として現われざるをえないことは自明である¹⁰⁾。しかし¹¹⁾ 実際に問題となっているのは、手形の貨幣への「¹²⁾ 転換可能性」¹²⁾ だけではない¹³⁾。¹⁴⁾ 膨大な額のこうした手形が表わしているのは、たんなる

詐欺取引¹⁵⁾であり、¹⁶⁾失敗に終わった、また他人の資本でやられた¹⁷⁾投機であり、最後に減価している¹⁸⁾商品資本、あるいはもはやけってなされない¹⁹⁾還流であって、それらがいまや爆発したのであり、明るみになる²⁰⁾のである。もちろん、再生産過程の強力的な拡張のこの人為的なシステムの全体を、いま、ある銀行⁽²¹⁾たとえばイングランド銀行⁽²¹⁾が⁽²²⁾紙券ですべての山師に彼らに⁽²³⁾不足している資本を与え、すべての⁽²⁴⁾商品を以前の名目価値で買い取る、というようなことによって治癒させることはできない。とにかく、⁽²⁵⁾すべてがねじ曲げられて現われるのである。というのは、この紙の世界ではどこにも実体的な価格やその実体的な諸契機は現われないのであって、現われるのは⁽²⁶⁾地金や⁽²⁷⁾銀行券や手形〔貨幣への〕転換可能性⁽³⁾や⁽²⁸⁾有価証券なのだからである。ことに、国内の全貨幣取引が集中する中心地⁽²⁹⁾たとえばロンドン等々⁽³⁰⁾⁽²⁹⁾では、このような転倒⁽³¹⁾〔が現われる〕。⁽³²⁾生産の中心地ではそれほどでもないが。⁽⁴⁾ |

①〔異文〕ここに、「だからまた、信用恐慌が」と書いたのち消している。

②〔異文〕「商品資本」←「資本」

③〔異文〕ここに、「a) ロドウェル」と書いたのち消している〔「ロドウェル」には下線が引かれているが、MEGAではこの強調が落ちている〕。〔はじめ、脚注a)をここに書く予定で、「ロドウェル」と書いていたが、その後、書き進めてきた本文の最後の部分がこの脚注の前に書き切れなくなったので、この脚注を消して、本文の以下の部分を書いたのである。〕

④〔異文〕ここに++という〔筆者には#に見えた〕連結記号がある。

1) 「「」および「」」——削除。

2) 「このような時点〔dieser Augenblick〕」→「そのような時期〔solche Zeit〕」

3) 挿入——「商社の」

4) 「恣意的な〔willkürlich〕銀行立法（1844-45年のそのような）」→「1844-45年のそのような無知でまちがった〔unwissend und verkehrt〕銀行立法」

5) エンゲルス版では、ここで改行されている。

6) 「全過程」→「再生産過程の全関連」

7) 「ところでは」→「ような生産システムでは」

- 8) 挿入——「突然」
- 9) 「信用恐慌と支払手段の欠乏とが生じることは自明であり、」→「明らかに、
恐慌が、つまり支払手段を求めての力ずくの殺到が、起こらざるをえない。」
- 10) 「現われざるをえないことは自明である」→「のみ現われる」
- 11) 「しかし」→「そして、」
- 12) 「「」および「」」——削除。
- 13) 「ではない」→「なのである」
- 14) 挿入——「しかし、これらの手形はたいてい現実の売買を表わしているので
あって、この売買が社会的欲求をはるかに越えて膨張することが結局は全恐慌
の基礎になっているのである。しかしまた、それと並んで、」
- 15) 「詐欺取引」—— Schwindeltransactionen → Schwindelgeschäfte
- 16) 挿入——「さらに、」
- 17) 「失敗に終わった、また他人の資本でやられた」→「他人の資本でやられたが
失敗に終わった」
- 18) 挿入——「か、全然売れなくなった」
- 19) 「けっしてなされえない」→「けっしてはいってることがありえない」
- 20) 「爆発したのであり、明るみになる」→「明るみになるのであり、破裂する」
- 21) 「（」および「）」——削除。
- 22) 挿入——「自分の」
- 23) 「彼らに」——削除。
- 24) 挿入——「減価した」
- 25) 挿入——「ここでは、」
- 26) 挿入——「ただ」
- 27) 挿入——「硬貨や」
- 28) 「手形（〔貨幣への〕転換可能性）や」——削除。
- 29) 「（」および「）」——削除。
- 30) 「等々」——削除。
- 31) 挿入——「が現われる」
- 32) 挿入——「全過程がわけのわからないものになる。」

/345 下/⁽³²⁾ なお、¹⁾生産的資本²⁾の過剰については、次のことを述べなければならぬ。商品資本は³⁾同時に貨幣資本、すなわち、商品の価格で表わされた一定の価値額、あるいは、商品の交換価値を表現している貨幣額⁴⁾である。使用価値としてはそれは⁵⁾一定の分量であって、それが⁶⁾過

剰に存在しているのである。しかし、貨幣資本⁷⁾としては、⁸⁾それは不断の膨張収縮を免れない。恐慌に直接に先行する月々⁹⁾にも、恐慌の最中にも、商品資本は貨幣資本としては¹⁰⁾収縮している。つまり¹¹⁾それは、その所持者やこの所持者の債権者にとっては¹²⁾また手形および貸付の担保としては¹³⁾¹²⁾、売買が¹³⁾(またこの売買にもとづいて行なわれた割引や貸付が)約定されたとき¹⁴⁾よりも少ない貨幣資本を表わしている。このような意味で、一国の貨幣資本は逼迫の時期には「¹⁵⁾減少」¹⁵⁾している、と言うのであれば¹⁶⁾、これはただ、諸商品の価格が低落したということと同じことでしかない。¹⁷⁾このような物価の崩落こそが、以前の物価の膨張を相殺するのである。¹⁸⁾¹⁷⁾¹⁹⁾{²⁰⁾不生産的な諸階級や定収入によって生活する諸階級の[544]収入は、過剰生産や過剰取引²¹⁾と同時に²²⁾進行する物価の膨張²³⁾のあいだも、大部分は固定したままにとどまっている。それだから、彼らの消費能力は相対的に減少し、²⁴⁾また、総生産のうち通常は彼らの消費にはいって行くはずの部分を経営者が補填する能力も相対的に減少する。彼らの需要が名目的には同じである場合にさえも、それは相対的に²⁵⁾減少するのである。恐慌が実際に続いて起これば、(1)生産の縮小、(2)物価の下落〔が生じる〕。生産の抑制はそれに続いて商品資本の量を減少させ、物価の下落は、同じ量の使用価値にたいする市場を拡大する。²⁶⁾²⁷⁾輸出入について述べなければならないのは、次々にすべての国に順番がくるのだ²⁸⁾ということ、また、²⁹⁾すべての国が(³⁰⁾³¹⁾例外はあるが)³⁰⁾多すぎる輸出入をしており、したがって支払差額はどの国にとっても逆であり³²⁾、したがって問題はじつは支払差額にあるのではないということがわかってくる、ということである。たとえば、イギリスでは地金の流出³³⁾〔があるとしよう〕。イギリスは輸入しすぎたのである。ところが、同時に³⁴⁾どの国もイギリス商品で供給過剰となっている。つまり、これらの国々も、輸入をしすぎた³⁴⁾か、または過度の輸入をやらされている³⁵⁾のである。³⁶⁾もちろん、信用で輸出する国と、信用では輸出しないかまたはわずかの信用と引き換えに輸出する³⁷⁾国々とのあいだには、ある違いが現われる。し

かしその場合には、あとのほうの国々は信用で輸入するのである。たしかに、委託販売で輸出される場合にはそうではないが。³⁸⁾ ³⁶⁾ 恐慌は、まずイギリスで、すなわち信用を最も多く与え最も少なく受けるこの国で、起こるかもしれない。なぜなら、³⁹⁾ 貿易差額はイギリスにとって順⁴⁰⁾ であっても、支払差額⁴¹⁾ はイギリスにとって逆⁴²⁾ だからである。([貿易差額がイギリスに取って順であるのは] 一部はイギリスの信用のためであり、一部は外国への資本の貸付のためであって、その結果本来の貿易返り荷以外に大量の還流がイギリスに流れてくるのである⁴³⁾ ⁴⁴⁾)。

① [異文] ここから [MEGA] 546 ページ 38 行 [本稿, 210 ページ下から 10 行目] までの部分は、あとから書き加えられている。——テキストのこの補足は、[草稿の] 345 ページの脚注 a) のあとから始まっている。その続きは、346 ページおよび 347 ページの下方の部分に書かれている。マルクスによる ++ という [筆者には # に見えた] 記号でこの箇所が指示されている。

② [異文] ここに ++ という [筆者には # に見えた] 連結記号がある。

③ [異文] ここに、「貸付等々において [in loans etc.]」と書いたのち消している [このうち in は「確かな解釈ではない」とされている]。

④ [異文] 「か、または過度の輸入をやらされている」——あとから書き加えられている。

⑤ [訂正] 「)」——手稿では欠けている。

⑥ [異文] ここに、「このことを度外視すれば」と書いたのち消している。

1) 挿入——「恐慌のときに明るみに出てくる」

2) 「生産的資本」→「産業資本」

3) 挿入——「それ自体として [an sich]」

4) 「, あるいは, 商品の交換価値を表現している貨幣額」——削除。

5) 挿入——「一定の使用対象の」

6) 挿入——「恐慌の時点では」

7) 挿入——「それ自体 [an sich]」

8) 挿入——「潜勢的な貨幣資本としては,」

9) 「恐慌に直接に先行する月々」→「恐慌の前夜」

10) 「貨幣資本としては [qua]」→「潜勢的な貨幣資本としての属性では」

11) 「つまり」——削除。

- 12) 「{ } および { }」 → 「() および { }」
- 13) 「は」 → 「も」
- 14) 「売買が（またこの売買にもとづいて行なわれた割引や貸付が）約定されたとき」 → 「それが購入されたとき、またそれにもとづいて割引や担保貸付が約定されたとき」
- 15) 「{ } および { }」 —— 削除。
- 16) 「このような意味で、……、と言うのであれば」 → 「これが、……という主張の意味だと言うのであれば」
- 17) 「{ } および { }」 —— 削除。
- 18) 「このような物価の崩落 [collapse] こそが、以前の物価の膨張 [inflation] を相殺するのである。」 → 「ちなみに、このような物価の崩落 [Zusammenbruch] は、ただ、以前の物価の膨張 [Aufblähung] を相殺するだけである。」
- 19) エンゲルス版では、ここで改行されている。
- 20) 「{ } —— 削除。草稿では、この「{ }」に対応する「{ }」は見当たらない。MEGA でも同様である。
- 21) 「過剰取引 [overtrade]」 → 「過剰投機」
- 22) 「と同時に」 → 「に伴って」
- 23) 「物価の膨張」 —— Inflation of prices → Preisaufblähung
- 24) 挿入 —— 「したがって」
- 25) 「相対的に」 → 「現実には」
- 26) 「恐慌が実際に続いて起これば、(1)生産の縮小、(2)物価の下落 [が生じる]。生産の抑制はそれに続いて商品資本の量を減少させ、物価の下落は、同じ量の使用価値にたいする市場を拡大する。」 —— 削除。
- 27) エンゲルス版では、ここで改行されている。
- 28) 「に順番がくるのだ」 → 「が恐慌に巻き込まれて行く」
- 29) 挿入 —— 「その場合には」
- 30) 「() および { }」 —— 削除。
- 31) 挿入 —— 「わずかの」
- 32) 「支払差額はどの国にとっても逆であり」 —— エンゲルス版でも強調されている。
- 33) 「では地金の流出 [があるとしよう]」 → 「が金の流出に悩んでいるとしよう」
- 34) 挿入 —— 「ほかの」
- 35) 「やらされている」 → 「やらされた」
- 36) 「{ } および { }」 → 「() および { }」
- 37) 「信用では輸出しないかまたはわずかの信用と引き換えに輸出する」 → 「信

用では輸出しないかまたはわずかしか輸出しない」

38) 「たしかに、委託販売で輸出される場合にはそうではないが。」→「そうでないのは、商品がその国に委託販売で送られてくる場合だけである。」

39) 挿入——「一般的な」

40) 「イギリスにとって順」——エンゲルス版では強調されている。

41) 挿入——「すなわちすぐに決済されなければならない満期になった収支差額」

42) 「イギリスにとって逆」——エンゲルス版では強調されている。

43) 「((貿易差額がイギリスにとって順であるのは) 一部はイギリスの信用のためであり、一部は外国への資本の貸付のためであって、その結果本来の貿易返り荷以外に大量の還流がイギリスに流れてくるのである。)」→「一般的な貿易差額がイギリスにとって順だということは、一部はイギリスが与えている信用から説明がつき、一部は、大量の資本が外国に貸してあるので本来の貿易返り荷のほかにかんがりの量での商品での還流がイギリスにはいつてくるということから説明がつく。」

44) エンゲルス版ではここで改行されていない。MEGA では改行されているが、草稿では次の行がページの左端から始まっており、改行かどうか、一義的には判断できない。

{¹⁾しかし、恐慌はまた、まずアメリカで、すなわちイギリスから貿易信用²⁾や資本信用を最も多く受けているこの国で起こることもありうる³⁾。}¹⁾イギリスでの崩壊³⁾は(地金の流出がこれに先立ち、またこれに随伴する)⁴⁾、イギリスにとって順の⁵⁾ 12) 支払差額を、一部はイギリスの輸入業者の破産によって清算し(これについてはもっとあとを見よ⁶⁾)、一部はイギリスの商品資本の一部分を安い価格で外国に投げ出すことによって、また一部は外国有価証券の売却やイギリス有価証券の購入、等々によって清算する。そこで今度は別の国の番になる。支払差額は一時はこの国にとって順だった。⁷⁾今や、支払差額と貿易差額との⁸⁾ 期限差〔Termin〕が、恐慌のためになくなってしまいうか、⁹⁾短縮されている。¹⁰⁾同じことが¹¹⁾繰り返される。イギリスには || 346 下 | 今では地金が流入し¹²⁾、他方〔の国〕からは地金¹³⁾が流出する、等々。一方の国で過剰輸入として現われるものは、他方の国では過剰輸出として現われ、一方の国で過剰輸出として現われる

ものは、他方の国では過剰輸入として現われる¹⁴⁾。ところが、すべての国で過剰輸入と過剰輸出とが起る¹⁵⁾ {¹⁶⁾ ここで言っているのは飢饉等々のことではなくて一般的な諸恐慌¹⁷⁾ のことである }¹⁶⁾、すなわち一般的な過剰生産が、¹⁸⁾ 信用 [545] とそれに伴う全般的な物価の膨張¹⁹⁾ とによって助長された過剰生産が起こるのである。²⁰⁾ 恐慌はまず、さしあたり支払差額が逆の国で爆発する {支払差額は貿易差額とは区別されるのであって、それはただ、ただちに一定期限のうちに清算されなければならない、貿易差額の直接的な状態にすぎない}。この国は、普通の事情のもとでは、イギリスまた合衆国であるだろう。すなわち、最も多くの信用を与えていて最も少ない信用を受けている国か、または、最も多くの信用を受けていて最も少ない信用を与えている国であろう。ここでは恐慌は同時に生じるのであり、直接的な支払差額を清算する。この場合、「支払差額」という信号が他の一国のために与えられており、この国で同じ諸現象、つまり地金の流出、等々が繰り返される。恐慌がまさきに爆発した国での逼迫は（イギリスあるいはアメリカの貨幣市場、信用、および商品量一般の状態が全世界市場に及ぼす²¹⁾ 影響を別としても）他の国にとっての支払差額の期間を早める²²⁾ のであり、そこから恐慌が生じる。平時には、正常な状態にある支払差額と貿易差額²³⁾ とは、さまざまな国にとって別々になっているのにたいして、いまや、それらが同じ期限のうちに押し込められるのであって、それは、恐慌が起こっている国の内部で、今や突然にすべての支払が同時になされなければならないのとまったく同様である。

① [異文] 「や資本信用」——あとから書き加えられている。

② [異文] 「支払差額」←「貿易差額」

③ [異文] ここに、「一般的」と書いたのち消している。

④ [異文] はじめここにピリオドを打って文を終えたが、それをコンマに変えて、次の部分を書き継いだ。

1) 「{ } および 「 」 」 → 「() および 「 」 」

2) 「起こることもありうる」 → 「起こったこともある」

- 3) 「崩壊 [Kladderatsch]」→「崩落 [Krach]」
- 4) 「(地金の流出がこれに先立ち、またこれに随伴する)」→「金の流出から始まり、またこの流出を伴うのであるが、」
- 5) 「にとって順の」→「の」
- 6) 「もっとあとを見よ」→「もっとあとで」
- 7) 挿入——「ところが」
- 8) 挿入——「平素は認められている」
- 9) 挿入——「または少なくとも [oder doch]」
- 10) 挿入——「すべての支払が一時に決済されなければならない。」
- 11) 挿入——「今度はこの国で」
- 12) 「地金が流入し」→「金が還流し」
- 13) 「地金」→「金」
- 14) 「一方の国で過剰輸出として現われるものは、他方の国では過剰輸入として現われる」→「またその逆である」
- 15) 「起こる」→「起こった」
- 16) 「{ } および 「 」」→「() および 「 」」
- 17) 「一般的諸恐慌」→「一般的恐慌」[単数]
- 18) 「一般的過剰生産が、」——削除。
- 19) 「物価の膨張」—— inflation of prices → Aufblähung der Preise
- 20) ここからこのパラグラフの終りまでは、エンゲルス版では削除されている。
- 21) 「支払差額と貿易差額 [Zahlungs- und Handelsbilanz]」——MEGA では、Zahlungs- のハイフンが欠落している。

1857年には恐慌は合衆国で起こった。イギリスからアメリカへの地金¹⁾の流出²⁾ [が生じた]。しかし、アメリカで恐慌³⁾ が破裂すると、イギリスで恐慌 [が起こって]、アメリカからイギリスへの地金⁴⁾ の流出⁵⁾ [が生じた]。イギリスとヨーロッパ大陸とのあいだでも同じだった。支払差額は、一般的恐慌の時期にはどの国にとっても⁶⁾ 少なくとも商業上の影響力の大きい⁷⁾ 諸国にとっては⁸⁾ 逆であるが、しかし⁹⁾ 小銃の一斉射撃 [feu de mousqueterie]¹⁰⁾ のように順々に、支払差額が自分のところにくる¹¹⁾ とそのようになるのであり、また、たとえばイギリスでの恐慌¹²⁾ がこれらの期限¹³⁾ をまったく短い期間のなかに¹⁴⁾ 押し込んでしまうのである。このときに明らかになるのは、これらの国のすべてが過剰輸出した (だから過剰

生産した)と同時に過剰輸入した(だから過剰取引した)のだということ、どの国でも物価が膨張し¹⁴⁾信用が緊張しすぎた〔overstrain〕のだということである。そして、どの国でも同じ崩壊〔collapse〕が起きる。¹⁵⁾地金¹⁶⁾の輸出という現象だけでも、それは¹⁷⁾どの国にも順々にやってきて、まさにその一般性によって次のことを示す。すなわち、(1)地金¹⁸⁾の輸出は、恐慌のたんなる現象であってその原因ではないということ、(2)金の輸出がさまざまな国に起こる順序は、ただ、総決算をする順番がいつそれらの国にまわってきたか、恐慌の期限がいつそれらの国にやってきたか、そして恐慌の潜在的な諸要素がいつ¹⁹⁾爆発するか、を示しているだけだ、ということである。

①〔異文〕「押し込んでしまう〔drängt〕」←「速めてしまう〔beschleunigt〕」

1)「地金」→「金」

2) 挿入——「がその結果生じた」

3)「恐慌」→「膨張」

4)「地金」→「金」

5) 挿入——「が生じた」

6)「() および「) 」——削除。

7)「商業上の影響力の大きい」→「商業の発展している」

8)「諸国にとっては」→「どの国にとっても」

9) 挿入——「いつでも」

10)「小銃の一斉射撃〔feu de mousqueterie〕」——エンゲルスはこのフランス語を Rottenfeuer というドイツ語に置き換えた。MEGA の注解でも、このフランス語にこの同じドイツ語を等置している (MEGA, II/4.2, S.1304)。Rottenfeuer という語は、Flügel-Schmidt-Tanger, Wörterbuch der Englischen und Deutschen Sprache では、dropping fire, volley-firing という語義が与えられている。dropping fire とは、「不規則間隔小銃射撃 (不規則な間隔を置いて行なう小銃の連続発射)」(研究社新英和大辞典)、volley とは、「各個射 (volley fire) (各砲各個に射撃する)」(小学館ランダムハウス英和辞典)のことでさうであるから、敷衍して言えば、分割された複数の集団が間隔を置いて次々に一斉射撃する、ということなのであろう。岡崎訳の「連続発射」および長谷部訳の「各伍発射」という訳語は、こうしたニュアンスを伝えている

ものと言えるであろう。feu de mousqueterie というフランス語自体は (Grand Larousse, 等によると), 小銃 (またはマスカット銃) の一斉射撃と
いうことでしかなく, 連続して, あるいは間隔を置いて, といった意味は含ん
でいないようなので, ここの訳語は「小銃の一斉射撃」としておいたが, も
しかすると, マルクスもこの語を Rottenfeuer の意味を込めて使ったのかも
しれない。

- 11) 「支払差額が自分のところにくる」→「支払の順番がまわってくると」
- 12) 「イギリスでの恐慌」→「ひとたび, たとえばイギリスで, 起こった恐慌」
- 13) 挿入——「の列」
- 14) 「膨張し」—— inflate → auftreiben
- 15) 挿入——「それから,」
- 16) 「地金」→「金」
- 17) 「だけでも, それは」→「が」
- 18) 「地金」→「金」
- 19) 挿入——「それらの国で」

イギリスの経済学の著述家たち {¹⁾そして²⁾1830 年以來の言うに足りる
経済学の文献はおもに通貨, 信用制度 [Creditwesen]³⁾, 恐慌に関する文
献に帰する⁴⁾ }¹⁾には次のようなことが特徴的である。すなわち, 彼らは地
金の輸出等々を, 要するに恐慌時に生じる為替相場の転換を³⁾, ただイギ
リスの立場⁴⁾だけから, つまり純粹に一國的な現象として考察しているので
あって, もし彼らの銀行が恐慌時に利子率を引き上げれば, すべての他の
³⁾ヨーロッパの銀行も同じことをやるのだ, という事実⁵⁾にたいしては, ま
た, きょう彼らの国で地金流出⁴⁾のために大騒ぎがあれば⁵⁾, それはあし
たは合衆国⁶⁾で, あさってはドイツとフランスで鳴り響く, 等々⁷⁾という
事実⁶⁾にたいしては, 固く目を閉 [546] じているのである。

① [異文] 「1830 年以來の」←「近 [年] の [in den letzten]」

② [訂正] 「}」——手稿では欠けている。

③ [異文] 「ヨーロッパの」——あとから書き加えられている。

1) 「{」および「}」→「——」

2) 「信用制度 [Creditwesen]」→「信用」

- 3) 「地金の輸出等々を、要するに恐慌時に生じる為替相場の転換〔turning〕を」→「恐慌時に為替相場の転換〔Wandel〕にもかかわらず生じる貴金属の輸出を」 エンゲルスのこの書き換えによって文中の「為替相場の転換」の意味が逆になったが、これは、彼が草稿の kurz（要するに）という語を trotz（にもかかわらず）と読み誤ったことから生じたのであろう。
- 4) 「地金流出」→「金流出」
- 5) 「大騒ぎ〔Hallo〕があれば」→「救難信号が鳴れば」
- 6) 「合衆国」→「アメリカ」
- 7) 「等々」——削除。

第 1218 号。¹⁾ 1847 年には——¹⁾ 「イギリスの負っている債務〔 〕」（その大きな部分が穀物のためのものだった）〔 〕が返済されなければなりませんでした。不幸にも、1847 年には、その大部分が破産によって果たされました。〔 〕（金持ちのイギリスが大陸の諸国の破産によって餌食を手に入れたのである。）〔 〕しかし、その債務が破産によって決済されなかった部分については、それは地金の輸出によって果たされました。」（『銀行法委員会報告……』, 1857 年。）つまり、銀行立法によってイギリスの恐慌が激化されるかぎりでは、この銀行立法は、飢饉の時期に穀物を輸出する諸国民からまずその食糧²⁾をだまし取り次に自分の食糧³⁾のための貨幣をだまし取るための手段なのである。だから、このような時期に穀物輸出を禁止するということは、自分自身が多かれ少なかれ飢饉⁴⁾のもとで悩んでいる諸国民⁵⁾にとっては、穀物輸入のための「債務を破産によって果たす」というイングランド銀行のこのような方策に対抗するための非常に合理的な手段である。その場合、穀物輸出者や栽培者⁶⁾が彼らの利潤の一部分を自国のために失うということは、彼らの資本をイギリスのために失うことよりもずっとましなのである。|

① 〔注解〕 この引用での強調はマルクスによるもの。

1) 「第 1218 号。」——削除。

- 2) 「食糧」→「穀物」
- 3) 「食糧」→「穀物」
- 4) 「飢饉」→「物価騰貴」
- 5) 「諸国民」→「国々」
- 6) 「穀物輸出者や栽培者」→「穀物生産者や投機者」

| 347 下 | ^①さきほど^①述べたことからわかるように、貨幣資本としての〔qua〕商品資本は、恐慌時には（総じて不況〔pressure〕時には）減少させられている^②。架空資本である利子生み証券についても、それら自身が貨幣資本として取引所で流通するかぎりでは、同じことが言える。利子が上昇するにつれて（信用欠乏は別としても^③）^③、利子生み証券の価格は下落する。利子生み証券のこの価格下落は、一部は、証券所有者たちに、貨幣を調達するためにそれらの証券を市場で大量に売りとばすことを強制するものであって、^④それは一部は、支払指図としてのそれらの証券が指図する諸収入の減少にも原因があり（公的証券の場合にはたいていそうである）、最後に一部は、それらの証券が代表している企業の山師的な性格に負っている。^⑤この架空な貨幣資本は恐慌時には甚だしく減少しており、したがってまた、その所有者たち（銀行業者、商人、等々）^⑥がそれに頼って市場で貨幣を調達する力もそうになっている。とはいえ、^⑦これらの有価証券の貨幣名が減少するということは、それらの所有者たちの支払能力には大いに関係があるとしても、現実資本とはなんの関係もない^⑧。

① 【注解】「さきほど述べた」——〔MEGA〕543-544 ページ〔本稿、199-201 ページ〕を見よ。

② 【訂正】「）」——手稿では欠けている。

1) 「さきほど」→「すでに」

2) 「貨幣資本としての〔qua〕商品資本は、恐慌時には（総じて不況〔pressure〕時には）減少させられている」→「商品資本は、潜勢的な貨幣資本を表わしているというその属性を、恐慌時や一般に不況期には大きな度合いで失う」

3) 「(信用欠乏は別としても)」——削除。

4) 「利子生み証券のこの価格下落は、一部は、証券所有者たちに、貨幣を調達

するためにそれらの証券を市場で大量に売りどばすことを強制するものであって、」→「この価格は、さらに、一般的な信用欠乏のために証券所有者たちが市場で証券を大量に売りどばして貨幣を調達せざるをえないということによって、低落する。」

- 5) 「それは一部は、支払指図としてのそれらの証券が指図する諸収入の減少にも原因があり（公的証券の場合にはたいていそうである）、最後に一部は、それらの証券が代表している企業の山師的な性格に負っている。」→「最後に、株式の場合にはその価格は、一部は、その株式を支払指図証とする収入が減少したために、また一部は、その株式が非常にしばしば山師的な性格の企業を代表しているために、低落する。」
- 6) 「（銀行業者、商人、等々）」——削除。
- 7) 挿入——「相場表のなかで」
- 8) 「それらの所有者たちの支払能力には大いに関係があるとしても、現実資本とはなんの関係もない」→「それらが表わしている現実資本とはなんの関係もないのであり、反対にそれらの所有者たちの支払能力には大いに関係がある」

（¹⁾ 第 54 号。「巨額の架空信用が融通手形や無担保信用によって創造されましたが、そのための大きな便宜をもたらしたのは、地方の株式銀行がこのような手形を割引し、それをロンドン市場で手形ブローカーに、ただ銀行の信用によるだけで手形のそのほかの質にはおかまいなしに再割引させる、という慣習でした。」（『銀行法委員会 報告……』、1858 年。〔別付、21 ページ。〕²⁾ ^{1) 3)} |

- 1) この「（」および「）」は、インクで大きく書かれている。MEGA では、大きな点線で表わされている。
- 2) この引用は、エンゲルス版では、「第 31 章 貨幣資本と現実資本・Ⅱ」のなかに組み込まれている（MEW, Bd. 25, S. 514）。本稿 221 ページの注 2 を見よ。
- 3) ここで、++（または #）という記号によってつけ加えられた箇所が終わる。

| 346 上 | 蓄積された¹⁾ 貨幣資本 [moneyed capital] の一部分は、実際に、生産的資本²⁾ の単なる表現である。すなわち、³⁾ たとえばイギリスが 1857 年^①ごろアメリカの^②鉄道企業等々^{④)}に 8000 万ポンド・スターリング

を投資したとき、これらは⁵⁾ほとんどまったくイギリスの生産物の輸出によって支払わ⁵⁴⁷れた⁶⁾のであって、ヤンキー⁷⁾はこれにたいして〔イギリスに〕代金〔Return〕を支払う⁸⁾必要がなかった。この貨幣をアメリカに送るために、彼ら〔イギリスの投資者〕はアメリカあての手形を買ったのであって、この場合には、ヤンキーたちはこの手形にたいして、イギリスで支払う(代金〔Return〕を〔イギリスに〕送る)必要がなかったのである。⁹⁾¹⁰⁾

①〔異文〕「ごろ〔um〕」←「以前に〔vor〕」

②〔異文〕「鉄道企業」←「鉄道」←「証券」

1) 挿入——「貸付可能な」

2) 「生産的資本」→「産業資本」

3) 「すなわち、」——削除。

4) 「鉄道企業等々」→「鉄道企業やその他の企業」

5) 「これらは」→「この投資は」

6) 「支払われた」→「媒介された」

7) 「ヤンキー」→「アメリカ人」

8) 「代金〔Return〕を支払う」→「返済をする」

9) 「この貨幣をアメリカに送るために、彼ら〔イギリスの投資者〕はアメリカあての手形を買ったのであって、この場合には、ヤンキーたちはこの手形にたいして、イギリスで支払う(代金〔Return〕を〔イギリスに〕送る)必要がなかったのである。」→「イギリスの輸出業者はこれらの商品についてアメリカあての手形を振り出し、この手形をイギリス人の株式応募者が買い集めて株式金額の払い込みのためにアメリカに送ったのである。」

10) このパラグラフは、エンゲルス版では、「第30章 貨幣資本と現実資本・I」のなかに、脚注として組み込まれている(MEW, Bd. 25, S. 495)。本稿、前出152ページの注18を見よ。

〔エンゲルス版「第31章 貨幣資本と現実資本・II (続き)」〕

¹⁾しかし、ここでの問題はそもそも、どの程度まで貨幣資本〔moneyed Capital〕の過剰が、あるいはもっと適切に言えば、どの程度まで貸付可

能な貨幣資本 [loanable monied capital] の形態での資本の蓄積が、現実の蓄積と同時に生じるのか、ということである。²⁾

- 1) 挿入——「第 31 章 貨幣資本と現実資本・Ⅱ (続き)」(表題) ここから、エンゲルス版で「第 31 章 貨幣資本と現実資本・Ⅱ (続き)」に利用された部分が始まる。
- 2) 「しかし、ここでの問題はそもそも、どの程度まで貨幣資本 [moneyed Capital] の過剰が、あるいはもっと適切に言えば、どの程度まで貸付可能な貨幣資本 [loanable monied capital] の形態での資本の蓄積が、現実の蓄積と同時に生じるのか、ということである。」→「どの程度まで貸付可能な貨幣資本の形態での資本の蓄積が現実の蓄積すなわち再生産過程の拡張と同時に生じるかという問題については、われわれはまだ結末に達していない。」

貨幣資本 [moneyed capital] (すなわち貸付可能な貨幣資本 [loanable monied Capital])¹⁾ への貨幣の転化は、生産的資本への貨幣の転化よりもはるかに簡単な事柄 [Geschichte] である。しかし、ここでは二つのことを区別しなければならない。——

- (1) たんなる、貨幣資本 [moneyed Capital]²⁾ への貨幣の転化。
- (2) 貨幣資本 [moneyed Capital]³⁾ に転化される貨幣への、資本^①または収入の転化。

① [異文] 「または収入」——あとから書き加えられている。

- 1) 「貨幣資本 [moneyed capital] (すなわち貸付可能な貨幣資本 [loanable monied Capital])」→「貸付可能な貨幣資本」
- 2) 「貨幣資本 [moneyed Capital]」→「貸付資本」
- 3) 「貨幣資本 [moneyed Capital]」→「貸付資本」

^②生産的資本¹⁾ の現実の蓄積と関連するような積極的な貨幣資本 [monied Capital]²⁾ 蓄積を含むことができるのは、ただ後者の点だけである。

³⁾ ^②1 について。⁴⁾ すでに見たように、生産的な蓄積とはただ相対的にしか関連しないような、すなわちそれと反比例しているような、貨幣資本

〔monied Capital〕の蓄積(過剰)⁶⁾が生じることがありうる。それは産業循環の2つの局面でのことである。すなわち、⁶⁾生産的資本が収縮している局面³⁾(恐慌のあとの循環の発端)、⁷⁾そして続いて⁸⁾、好転は始まっているが⁴⁾まだ商業信用が貨幣信用〔monied credit〕⁹⁾をほとんど促進して¹⁰⁾いない局面¹¹⁾である。⁵⁾第1の場合には、以前は稼ぎのある事業〔active business〕で充用されていた¹²⁾貨幣資本が遊休した貨幣資本〔unemployed monied Capital〕¹³⁾として現われ、第2の場合には、それが非常に低い利率で充用されるものとして現われる¹⁴⁾。なぜなら、いまは生産的資本家¹⁵⁾が貨幣資本家〔moneyed one〕に条件を指定する〔dictate〕からである。貨幣資本〔monied capital〕¹⁶⁾の過剰は、第1の場合には生産的資本¹⁷⁾の停滞を表現しており、第2の場合には、商業信用が貨幣¹⁸⁾信用〔monied Credit〕¹⁸⁾から相対的に独立していることを表現している。(19) これは、還流の流動性、¹⁷⁾短期の商業信用²⁰⁾、そして自己資本による営業の優勢にもとづいて〔いる〕。他人の信用資本をあてにしている働き手たち〔Arbeiter〕²¹⁾はまだ動き出していないし、自己資本をもっている働き手たち〔Arbeiter〕²²⁾はまだ、自分の操作をほぼ純粋な信用操作にまで広げることにはしていない²³⁾。) ¹⁹⁾ ¹⁸⁾第1の場合には²⁴⁾、貨幣資本〔monied capital〕²⁵⁾の過剰は¹⁹⁾現実の蓄積の表現とはまさに反対のものである。第2の場合には²⁶⁾、それは²⁰⁾再生産過程の再拡張²⁷⁾と同時に生じ、これに²⁸⁾随伴するものではあるが、³⁰⁾これの原因ではない。³²⁾すでに減少し始めているがまだある貨幣資本〔monied capital〕の過剰は、それへの需要と比べての相対的なものでしかない。²⁹⁾どちらの場合にも、この過剰によって現実の蓄積過程の拡張が促進される。なぜならば、第1の場合には低い価格と、第2の場合には回復しつつある〔improving〕³⁰⁾価格と同時に生じている低い利子が、548 利潤のうちの企業利得³¹⁾に転化する部分を増大させるからである。こういうことがもっと多く生じるのは、繁栄期の頂点で利子がその中位点〔Mittel〕³²⁾に向かって上昇しつつある場合である。このような時期にはたしかに利子は増大するが、しかし利潤に比例してでは

いない。このような事情は現実の蓄積を促進するので、このようにして貨幣資本〔moneyed capital〕の以前には相対的であった過剰が〔すなわち〔oder〕、貨幣蓄積一般であるような、停滞のたんに一時的な表現としてのその増大が〕、もろもろの事情のうちでも、その実質的な増大に到達することとなるような事情と同時に生じることがあるのである。³³⁾

- ① 〔異文〕「生産的」——あとから書き加えられている。
 - ② 〔異文〕「1 について。」——あとから書き加えられている。
 - ③ 〔異文〕ここに、「, そして第 2 に」と書いたのち消している。
 - ④ 〔異文〕ここに、「信用がまだ」と書いたのち消している。
 - ⑤ 〔異文〕ここに、「どちらの場合にも」と書いたのち消している。
 - ⑥ 〔異文〕「信用」←「資本」
 - ⑦ 〔異文〕「短期の商業信用,」——あとから書き加えられている。
 - ⑧ 〔異文〕ここに、「どちらの〔……〕にも〔In beiden〕」と書いたのち消している。
 - ⑨ 〔異文〕「現実の蓄積の表現とは正反対のもの」←「〔……〕過剰とは正反対のもの」
 - ⑩ 〔異文〕「再生産過程」←「生産的〔……〕」
 - ⑪ 〔異文〕ここに、「〔……〕ではない」と書いたのち消し、さらに「steht」と書いたのち消している。
 - ⑫ 〔異文〕「すでに減少し始めている〔schon decreasing〕」←「わずかではある〔gering〕」
- 1) 「生産的資本」→「産業資本」
 - 2) 「貨幣資本〔moneyed Capital〕」→「貸付資本」
 - 3) エンゲルス版では、ここで改行されている。
 - 4) 「1 について。」→「第 1 節 貸付資本への貨幣の転化」(見出し) ここから、エンゲルス版で第 31 章の「第 1 節 貸付資本への貨幣の転化」に利用された部分が始まる。
 - 5) 「生産的な蓄積とはただ相対的にしか関連しないような、すなわちそれと反比例しているような、貨幣資本〔monied Capital〕の蓄積(過剰)」→「生産的蓄積とはただそれと反比例するという関連しかないような、貸付資本の堆積、その過剰豊富」
 - 6) 挿入——「第 1 には」

- 7) 「生産的資本が収縮している局面(恐慌のあとの循環の発端),」→「産業資本が生産的資本と商品資本とのどちらの形態でも収縮している時期,つまり恐慌のあとの発端である。」
- 8) 「続いて」→「第2には」
- 9) 「貨幣信用〔monied credit〕」→「銀行信用」
- 10) 「促進して〔press upon〕」→「要求して〔in Anspruch nehmen〕」
- 11) 「局面」→「時期」
- 12) 「稼ぎのある事業〔active business〕で充用されていた」→「生産や商業で充用されていた」
- 13) 「貨幣資本〔monied Capital〕」→「貸付資本」
- 14) 「それが非常に低い利子率で充用されるものとして現われる」→「それがだんだん大きな度合いで充用されるようになるが,その利子率はまだ非常に低い」
- 15) 「生産的資本家」→「産業資本家や商業資本家」
- 16) 「貨幣資本〔monied capital〕」→「貸付資本」
- 17) 「生産的資本」→「産業資本」
- 18) 「貨幣信用〔monied Credit〕」→「銀行信用」
- 19) 「(」および「)」——削除。
- 20) 「短期の商業信用」→「信用の短期性」
- 21) 「働き手たち〔Arbeiter〕」→「投機者たち」
- 22) 「自己資本をもっている働き手たち〔Arbeiter〕」→「自己資本で営業する〔arbeiten〕人びと」
- 23) 「自分の操作をほぼ純粋な信用操作にまで広げることはしてはいない」→「ほぼ純粋な信用操作からはまだ遠く離れている」
- 24) 「場合には」→「局面では」
- 25) 「貨幣資本〔monied capital〕」→「貸付資本」
- 26) 「場合には」→「局面では」
- 27) 「再拡張〔Wieder-Expansion〕」〔MEGAでは,この語のなかのハイフンが落ちている。〕→「新たな拡張〔erneuter Expansion〕」
- 28) 「これに〔ihn〕」——文法的には「再生産過程」を指すものと考えはかはないが,意味上は,エンゲルス版がsieに変更しているように,「再拡張」を指すものと考えべきであろう。
- 29) 「すでに減少し始めているがまだある貨幣資本〔monied capital〕の過剰は,それへの需要と比べての相対的なものでしかない。」→「貸付資本の過剰はすでに減少しており,もはや需要と比べての相対的なものでしかない。」
- 30) 「回復しつつある〔improving〕」→「ゆっくりと上がって行く」

- 31) 「企業利得」→「企業者利得」
 32) 「中位点〔Mittel〕」→「平均値」
 33) 「このような事情は現実の蓄積を促進するので、このようにして貨幣資本〔moneyed capital〕の以前には相対的であった過剰が〔すなわち〔oder〕、貨幣蓄蔵一般であるような、停滞のたんに一時的な表現としてのその増大が〕、もろもろの事情のうちでも、その実質的な増大に到達することとなるような事情と同時に生じることがあるのである。」——削除。

他方、すでに見たように、貨幣資本〔monied capital〕¹⁾の蓄積は、現実の蓄積にはまったくかわりなく²⁾、たんなる銀行制度の拡張³⁾や通貨準備〔currency Reserve〕⁴⁾の節約によって⁵⁾、あるいはまた、私人たちの支払手段の準備ファンドの節約によっても行なわれうるのであって、この準備ファンドはこのことによって、いつでも短期間、⁶⁾貸付可能な資本〔loanable capital〕⁶⁾に転化されるのである。この貸付可能な資本〔loanable capital〕が貸し出されるのは短期である^{7)/8)/347 上/〔⁹⁾またじっさい、割引は短期であることが求められる〕⁹⁾が、¹⁰⁾それはたえず流入・流出している。一人がそれを持ち去れば、別の一人がそれを持ってくる。このようにして、貸付可能な貨幣資本〔loanable monied capital〕の量は〔¹¹⁾ここで問題にしているのは、けっして何年間にもわたって投下される貸付¹²⁾ではなく、ただ預金および有価証券のかたちで投下される貸付¹³⁾だけである〕¹¹⁾、実際に、現実の蓄積からはまったく独立に増大するのである。/}

①〔異文〕ここに、「貸付可能な資本として」と書いたのち消している。

- 1) 「貨幣資本〔monied capital〕」→「貸付資本」
- 2) 「現実の蓄積にはまったくかわりなく」→「少しも現実の蓄積なしに」
- 3) 「たんなる銀行制度の拡張」→「銀行制度の拡張や集中のようなたんなる技術的手段」
- 4) 「通貨準備」—— currency Reserve → Zirkulationsreserve
- 5) 「によって」——削除。
- 6) 「貸付可能な資本〔loanable capital〕」→「貸付資本」
- 7) 「この貸付可能な資本〔loanable capital〕が貸し出されるのは短期である」

→「この貸付資本は、いつでもただ短期間貸付資本の形態をとっているだけである」

- 8) ここに { } (草稿では角括弧) に入れた長い挿入がある。「それだからこそ浮動〔floating〕資本〔とも呼ばれるのである〕」, という句に続けて、「浮動資本」について語っている『銀行法委員会報告』(1857年)でのウェゲリンの証言からの引用とそれへの論評が書かれている。本稿では、エンゲルス版と同様に、この挿入部分の全体を次のパラグラフとして別掲する。
- 9) 「{ } および { }」→「() および ()」
- 10) 挿入——「それだからこそ浮動資本 (floating capital) とも呼ばれるのであるが」 エンゲルスによるこの挿入は、本稿で次のパラグラフとして別掲した部分の冒頭によるものである。
- 11) 「{ } および { }」→「() および ()」
- 12) 「何年間にもわたって投下される貸付」→「何年間もの貸付」
- 13) 「預金および有価証券のかたちで [in] 投下される貸付」→「手形や預託証券 [Depot] 引当の [gegen] 短期貸付」

/346 上/¹⁾ ①²⁾ それだから浮動〔floating〕資本〔とも呼ばれるのである〕。
 ——³⁾ ②³⁾ ④⁴⁾ 第 501 号。「あなたは「浮動資本〔floating capital〕」という言葉でなにをを考えておられるのですか？」——「それは、〔 〕」(イングランド銀行総裁ウェゲリン氏が言う)「〔 〕 短期の貨幣貸付に向けることができる資本です。第 502 号。イングランド銀行券……地方銀行業者の通貨〔circulation〕, それに国内にある鋳貨額です。」第 503 号。「浮動資本という言葉であなたが現流通高〔active circulation〕のことを言われているのだとすれば、委員会に提出されている報告からは、現流通高の⁵⁾ 非常に大きな変動が見られるとは思えませんが？」(しかし、現流通高が貸付業者によって前貸されているのか、それとも再生産的資本家自身によって前貸されているのか、要するに、だれによってそれが / | 347 上 | 前貸されているのか⁶⁾, ということは、⁷⁾ 大きな区別である。⁸⁾ 浮動資本という言葉であなたが現流通高のことを言われているのだとすれば?⁹⁾ ——「私は浮動資本のなかに、銀行業者の準備を含めているのでありまして、これには顕著な変動が見られます。」(¹⁰⁾ すなわち、つまりは、¹¹⁾ 預金のうち、

銀行業者がふたたび貸し出さないで、大部分が¹²⁾ イングランド銀行の準備として役だっている部分の変動のことなのである。) ¹⁰⁾ { ¹³⁾ 最後に同氏は言う、浮動資本とは、——地金¹⁴⁾である、と(第503号)。⁴⁾ ¹³⁾ 総じて、貨幣市場[money market]のこのようなちんぷんかんぷんな信用談義で、経済学のあらゆる範疇が別の形態をとっている¹⁵⁾さまは、このうえないもの[gottvoll]¹⁶⁾である。そこでは「¹⁷⁾浮動資本」¹⁷⁾は「¹⁸⁾流動資本[circulating capital]」¹⁸⁾を表わす表現であり(もちろんこれはまったく別のものである)¹⁹⁾、貨幣[money]が「²⁰⁾資本」²⁰⁾であり、「²¹⁾地金」²¹⁾が「²²⁾資本」²²⁾であり、銀行券が「²³⁾通貨[circulation]」²³⁾であり、資本が「²⁴⁾一つの商品」²⁴⁾であり、もろもろの「²⁵⁾債務」²⁵⁾が商品であり、「²⁶⁾固定資本」²⁶⁾が、換金しにくい²⁷⁾証券に投下されている貨幣[money]である、等々。²⁸⁾ ²⁾ /

① [異文] 「{」←「(」

② [注解] このパラグラフでの引用は、『銀行法特別委員会報告書……』、第1部[ロンドン、1857年]、からのものである。

③ [注解] このパラグラフでの引用における強調はマルクスによるもの。

④ [訂正] 「}」——手稿では欠けている。

1) 以下のパラグラフは、先行のパラグラフのなかの挿入部分を取り出したものである。エンゲルス版でもそのように取り扱っている。

2) 「{」および「}」——削除。

3) 「それだから浮動[floating]資本[とも呼ばれるのである]。——」——削除。

4) 挿入——『銀行法委員会報告』、1857年。

5) 挿入——「{」つまりイングランド銀行券のそれ「}」

6) 「現流通高が貸付業者によって前貸されているのか、それとも再生産的資本家自身によって前貸されているのか、要するに、だれによってそれが前貸されているのか」→「だれによって現流通高が前貸しされているのか、貨幣貸付業者によってであるか、それとも再生産的資本家自身によってであるか」

7) 挿入——「非常に」

8) 挿入——「——ウェゲリンの答え」

- 9) 「浮動資本という言葉であなたが現流通高のことを言われているのだとすれば？」——削除。
- 10) 「(」および「)」——削除。
- 11) 挿入——「顕著な変動が見られるというのは、」
- 12) 挿入——「彼らの準備として役立っている部分、また彼らの準備が預金されている」
- 13) 「{」および「}」——削除。
- 14) 「地金 [bullion]」→「bullion すなわち地金 [Barren] と硬貨」エンゲルス版でのこの補足は、英語の bullion をドイツ語で説明しているわけである。
- 15) 「別の形態をとっている」→「別の意味と別の形態とを受け取っている」
- 16) 「このうえないもの [gottvoll]」→「おみごと [wundervoll]」
- 17) 「「」および「」」——削除。
- 18) 「「」および「」」——削除。
- 19) 「であり (もちろんこれはまったく別のものである)」→「であるが、これはもちろんまったく別のものである、そして」
- 20) 「「」および「」」——削除。
- 21) 「「」および「」」——削除。
- 22) 「「」および「」」——削除。
- 23) 「「」および「」」——削除。
- 24) 「「」および「」」——削除。
- 25) 「「」および「」」——削除。
- 26) 「「」および「」」——削除。
- 27) 「換金しにくい」→「売れにくい」
- 28) 「、等々。」→「！」

/347 上/^④「8) ……¹⁾ ロンドンの株式諸銀行は……それらの預金を、1847 年の 8,850,774 ポンド・スターリングから 1857 年の 43,100,724 ポンド・スターリングに増加させた。……549当委員会に提供された証拠・証言によって²⁾推論すると、次のようになる。この莫大な金額のうちの大きな一部分は、これまではこの目的のために利用できなかった諸源泉から引き出されたものであった。また、銀行業者のもとに勘定を開いて貨幣を預託する習慣が、以前は自分の資本³⁾(!)をこういう仕方では〔充用することが²⁾ なかった多数の階級にまで普及した。地方私営銀行業者³⁾ 協

会会長で、証言するために当委員会に派遣されたロドウェル氏は次のように述べている。イプスウィッチの近隣では、この習慣は近ごろその地区の借地農業者や小売商人のあいだで4倍にふえた。ほとんどすべての借地農業者が、1年にたった50ポンド・スターリング〔の借地料〕しか支払わない者までが、いまでは銀行業者のもとに預金をもっている。これらの預金の総量が、もちろんそれを事業に充用すべき方法を見いだすのであって、またことに、商業活動の中心地であるロンドンに引き寄せられ、そこでまず第1に手形割引やその他ロンドンの銀行業者の取引先への前貸に使用される。しかし、銀行業者自身が直接の需要をもたない大きな一部分は手形ブローカーの手に渡るのであって、手形ブローカーは、それと引き換えに、自分がすでに一度ロンドンやこの国のさまざまな地方の人びとのために割引した商業手形を銀行業者に渡すのである。』（『銀行法〔委員会〕報告』、1858年。〔別付、5ページ。〕）

- ①〔注解〕 この引用における強調はマルクスによるもの。
- ②〔訂正〕「推論する〔inference〕」——手稿では interference となっている。
- ③〔注解〕「(!)」——マルクスによる挿入。
- 1)「(8) ……」——削除。
- 2)「〔充用することが〕」——MEGA ではこの部分は { } で括られているが、これは編集者による挿入であるから [] で括られるべきところである。
- 3) 挿入——「」{株式銀行と区別しての}「」

つまり、取引がこれらの銀行業者とビル・ブローカーとのあいだで行なわれるかぎりでは、事実上では銀行業者が、ビル・ブローカーによってすでに割引かれた手形を再割引するのであるが、実際には、ビル・ブローカーによって割引された手形の非常に多くが、すでにもともと、彼らによって再割引されたものだったのであって、銀行業者がブローカーの手形を再割引するその貨幣で、ブローカーは別の手形を再割引するのである。¹²⁾

- 1) 「つまり、取引がこれらの銀行業者とビル・ブローカーとのあいだで行なわれるかぎりでは、事実上では銀行業者が、ビル・ブローカーによってすでに割り引かれた手形を再割引するのであるが、実際には、ビル・ブローカーによって割引された手形の非常に多くが、すでにもともと、彼らによって再割引されたものだったのであって、銀行業者がブローカーの手形を再割引するその貨幣で、ブローカーは別の手形を再割引するのである。」→「銀行業者は、ビル・ブローカーがすでに一度割引した手形を引き当てにこのビル・ブローカーに前貸をするのだから、彼は事実上もう一度その手形を再割引するわけである。しかし、現実には、これらの手形の非常に多くがすでにビル・ブローカーによって再割引されているのであって、銀行業者がビル・ブローカーの手形を再割引するその貨幣でビル・ブローカーは新たな手形を再割引するのである。」
- 2) 挿入——「その結果次のようになるのである。」 エンゲルス版では、この挿入のあとに、草稿 347 ページ下部の最後にかかれている、『銀行法委員会報告』、1858 年からの引用(本稿、前出 210 ページ下から 15-10 行)が組み込まれている。エンゲルスのこの処理は、草稿での繋がりを正しく読み取ったものであって、この引用の MEGA での取り扱い、関連を見にくくさせているように思われる。

この再割引については、また貸付可能な貨幣資本 [loanable monied Capital] のたんに技術的な増加が信用詐欺にさまざまな便宜を提供する¹⁾ ことについては、『エコノミスト』からの次の箇所がおもしろい。——

¹⁾「この国のいくつかの地方では、多年にわたって [for many years], 用いられることができる以上に急速に [] (貨幣 [moneyed] !) [] 資本²⁾ が蓄積されたが、他の諸地方では資本そのものよりも [] {貨幣 [moneyed]}³⁾ [] 資本を充用するための手段のほうがより急速に増大した。こうして、純粋に農業的な諸地方の銀行業者には、自分の預金を自分自身の地方で有利かつ安全に⁴⁾ 投下する手段がなかったのに、鉦工業地方⁴⁾ や商業地方の銀行業者には、彼らが充用できたのよりも大きな、資本への需要があった。このように地方によって状況が違っていることの結果として、最近の数年間のうちに、資本の配分を業とする新しい種類の諸商社が設立されて、それらが急速に ||⁵⁾349 上 | 拡大してきた。このような

商社は、普通はビル・ブローカーと呼ばれてはいるが、実際には非常に大きな規模の銀行業者なのである。これらの商社の業務は、余剰資本の充用先のない諸地方の銀行にある余剰資本を、また同じく株式公開会社や拡大された商業会社の [550] 一時的に使われていない資金を、一定の期間と利子とを約定して借り受けて、これらを、より高い利子率で、資本への需要がより大きな諸地方の銀行業者に前貸しすることであって、それは通例、彼らの取引先の手形の再割引によって行なわれる。こうして彼らは、たいていの場合には、申し分のないものとみなされるような有価証券を大量にやりとりする商人になったのである。^{a)} ⁵⁾ こうして⁶⁾ ロンバード・ストリートは、この国の、資本が有効に〔nützlich〕充用できない部分から、それにたいする需要のある別の部分への、「余分な〔spare〕」資本⁶⁾の移転が行なわれる大きな中心地になった。そしてこのことは、さまざまの地方について言えるように、それと同じような状態にあるさまざまの個人のあいだについても言えるのである。最初は、これらの取引は、ほとんどもっぱら、銀行有価証券〔banking securities〕を担保とした貸借に限定されていた。しかし、この国の資本が急速に増大し、また銀行の設立によってますますそれが節約されたのにつれて、これらの割引商社が利用できる財源も増大してきたので、彼らは、まず商品の埠頭倉荷証券〔Dock Warrants of merchandise〕にたいして、そして次には、この国には到着してもいない生産物を表わしている船荷証券にたいしても、それらを保証するものが、通例ではないが往々、商人が取引先のブローカーあてに振り出した手形であったにもかかわらず、前貸をする気にさせられるようになったのである。この慣行はイギリスの商業の全性格をすぐに変化させた。このようにして⁷⁾ ロンバード・ストリートで提供された便宜は、⁸⁾ ミンシング・レインのブローカーに非常に大きな力を与えた。彼らは彼らでまた輸入商人に大きな便宜を与えた。輸入商人がこれによって得たところは非常に大きなもので、25年前には、商人が前貸を受けるときに自分の積荷証券を担保にしたという事実は、あるいは自分の⁷⁾ 埠頭倉荷証券を担保にしたとい

う事実でさえも、彼の信用にとっては致命的であったであろうが、近年ではこの慣行が一般的になったので、25年前とは異なり、それを稀有の例外ではなくて普通の〔common〕ルールになったものとみなすことができるのである。それどころか、このシステムは非常に拡張されていて、遠い植民地でまだ成育中の⁸⁾ 作物を引き当てに振り出された手形を担保にして⁷⁾ ロンバード・ストリートで大きな金額が調達されているほどである。このような便宜の結果は、輸入商人が彼らの対外取引を拡張して、従来は自分の事業の経営にあてていた彼らの「浮動〔floating〕」資本⁹⁾を、すべての有価証券のうちで最もいかがわしいものに、すなわち彼らの統制がほとんどまたはまったくきかなかった外国のプランテーションに、投下したということだった。このように、もろもろの信用の直接的な連鎖が見られるのであって、この連鎖を通じてこの国の「資本」が、わが国の田舎の地方で集められ b)¹⁰⁾、また小額ずつの地方銀行の預金のかたちをとり c)¹¹⁾、そして充用を求めて⁸⁾ ロンバード・ストリートに集中される。この「資本」は、[551] まず第1に、わが国の鉱工業地方での操作を拡張することのためにこれらの地方の銀行あての手形の再割引によって利用できるようにされ、次には、外国生産物の輸入業者にいっそう大きな便宜を与えるために埠頭倉荷証券や積荷証券にたいする前貸によって利用できるようにされ、またこうして、対外取引や植民地取引に従事する諸商社の「正当な」商人資本が遊離させられて外国のプランテーションへの最もいかがわしい前貸をするように仕向けられているのである。]d)¹²⁾¹³⁾¹⁴⁾/

- ① [注解] この引用の原典は次の通り。「資本の配分の変化〔The changed distribution of capital〕」。所収：『エコノミスト』、ロンドン、第221号、1847年11月20日、1334ページ第1欄。——「この国のいくつかの地方では、数年のあいだ〔for some years〕、用いられることができる以上に急速に資本が蓄積されたが、他の諸地方では、資本そのものよりも資本を充用するための手段のほうがより急速に増大した。純粋に農業的な諸地方の銀行業者には、自分の預金を自分自身の地方で有利かつ安全に充用する〔employ〕手段がなかった

のに、大きな商業都市の銀行業者や鉱工業地方の銀行業者には、彼ら自身の資金が供給できたのよりも大きな、資本への需要があった。このように地方によって状況が違っていることの結果として、最近の数年間のうちに、資本の配分を業とする新しい種類の諸商社が設立されて、それらが急速に拡大してきた。このような商社は、普通はビル・ブローカーと呼ばれてはいるが、実際には非常に大きな規模の銀行業者なのである。これらの商社の業務は、余剰資本の充用先のない諸地方の銀行業者の余剰資本を、また同じく株式公開会社や拡大された商業会社の一時的に使われていない金額〔moneys〕を、一定の期間と利子とを約定して借り受けて、これらを、より高い利子率で、資本への需要がより大きな諸地方の銀行業者に、通例彼らの取引先の手形の再割引によって、前貸しすることであり、また同じく、たいていの場合には、申し分のないものとみなされるような有価証券を大量にやりとりする商人たちに前貸しすることである。こうしてロンバード・ストリートは、この国の、資本が有利に〔profitably〕充用できない部分から、それにたいする需要のある別の部分への、余分な資本の移転が行なわれる大きな中心地になった。そしてこのことは、同じような状態にあるさまざまな個人のあいだについても言えるのである。

最初は、これらの取引は、ほとんどもっぱら、銀行有価証券を担保とした貸借に限定されていた。しかし、この国の資本が急速に蓄積され、また銀行の設立によってますますそれが節約されたのにつれて、これらの「割引商社」が利用できる財源も増大してきたので、彼らは、まず商品の埠頭倉荷証券にたいして、そして次には、この国には到着してもいない生産物を表わしている船荷証券にたいしても、それらを保証するものが、通例ではないが往々、商人が取引先のブローカーあてに振り出した手形であったにもかかわらず、前貸をする気にさせられるようになったのである。この慣行はイギリスの商業の全性格を急速に変化させた。このようにしてロンバード・ストリートで提供された便宜は、ミンシング・レインのブローカーに非常に大きな力を与えた。彼らは彼らでまた、自分の事業を拡大するという称揚すべき目的で、輸入商人に大きな便宜を与えた。輸入商人がこれによって得たところは非常に大きなもので、25年前には、商人が前貸を受けるときに自分の積荷証券を担保にしたという事実は、あるいは自分の埠頭倉荷証券を担保にしたという事実でさえも、彼の信用にとっては致命的であったであろうが、近年ではこの慣行が一般的になったので、25年前とは異なり、今ではそれを稀有の例外ではなくて一般的な〔general〕ルールになったものとみなすことができるのである。それどころか、このシステムは非常に拡張されていて、遠い植民地でまだ育成中の作物を引き当てに振り出された手形を担保にしてロンバード・ストリートで大きな金額が調達されてい

るほどである。このような便宜の結果は、輸入商人が彼らの対外取引を拡張して、従来は自分の事業の経営にあてていた彼らの浮動資本を、すべての固定した〔fixed〕有価証券のうちで最もいかがわしいものに——すなわち彼らの統制がほとんどまたはまったくきかなかった外国のプランテーションに——投下したということだった。このように、もろもろの信用の直接的な連鎖が見られるのであって、この連鎖を通じてこの国の資本が、わが国の田舎の地方で集められ、また小額ずつの地方銀行の預金のかたちをとり、そして充用を求めてロンバード・ストリートに集中される。この資本は、まず第1に、わが国の鉱工業地方での操作を拡張することのためにこれらの地方の銀行あての手形の再割引によって利用できるようにされ、次には、外国生産物の輸入業者にいっそう大きな便宜を与えるために埠頭倉荷証券や積荷証券にたいする前貸によって利用できるようにされ、またこうして、対外取引や植民地取引に従事する諸商社の正当な商人資本が遊離させられて外国のプランテーションへの最もいかがわしい前貸をするように仕向けられていのである。」——この引用は、「ロンドン・ノート、1850-1853年」、第6冊から取られている。(MEGA[®]、第4部第7巻、471ページ17行-472ページ31行。)[川波洋一氏は、『エコノミスト』でのこの論説の筆者がジェイムズ・ウィルソンであることを指摘されている。[「貨幣資本と現実資本」の成立]、『講座・資本論体系』第6巻、「利子・信用」、有斐閣、1985年、287ページ。]

- ②〔異文〕「投下する〔anlegen〕」←「充用する〔anwenden〕」
- ③〔異文〕「349ページ」——〔これに先行する〕348ページは、(MEGA) 551ページ12-42行および552ページ1行-553ページ26行〔本稿、228ページ下から12行-235ページ7行〕を見よ。
- ④〔注解〕「ロンバード・ストリート」——〔MEGA〕473ページ13-14行への注解を見よ。〔ここで指示されている注解には次のように書かれている。「ロンドンのロンバード・ストリートは、中世にここに定着したロンバルディア人の貨幣取引業者からその名をとった。ここはブリテンの銀行資本の本拠地となり、ロンドンの世界貨幣取引の同義語になった。〕
- ⑤〔注解〕「ロンバード・ストリート」——前出の注④を見よ。
- ⑥〔注解〕「ミンシング・レイン」——ロンドンの通りであり、植民地からの商品を扱う大商業の中心地である。
- ⑦〔注解〕「ロンバード・ストリート」——前出の注④を見よ。
- ⑧〔注解〕「ロンバード・ストリート」——前出の注④を見よ。

1) 「信用詐欺にさまざまな便宜を提供する」→「信用詐欺を助長する」

- 2) 「(貨幣 [moneyed]!) 資本」→「資本」(すなわち貸付可能な貨幣資本)」
- 3) 「{貨幣 [moneyed]}」——削除。
- 4) 「鉱工業地方 [d. Fabrik- und mining districts]」——MEGA では、Fabrik- のハイフンが落ちている。
- 5) 「こうして彼らは、たいていの場合には、申し分のないものとみなされるような有価証券を大量にやりとりする商人になったのである。a)」→「……」
- 6) 「「余分な [spare]」資本」→「遊休資本」
- 7) 「自分の」——MEGA では eine となっているが、明らかに seine の誤植である。
- 8) 「まだ成育中の」——エンゲルス版でも強調されている。
- 9) 「「浮動 [floating]」資本」→「浮動 (floating) 資本 [schwebendes (floating) Kapital]」
- 10) 「b)」——削除。
- 11) 「c)」——削除。
- 12) 「d)」——削除。
- 13) 挿入——「(『エコノミスト』, 1847 年, 1334 ページ。)」
- 14) エンゲルス版では、ここに、上のパラグラフのなかの脚注 c) の内容（すぐ下の原注 c) を見よ）が組み込まれている。

【原注】 | 349 下 | ¹¹ a) 恐慌時に困難なところは、有価証券の貨幣への転換可能性ではなくて、割引または貸付は貨幣の受け取りをつねに先取りすべきものであるのに、これらの有価証券がこの貨幣を代位する有価証券 [securities für das money] であることをやめてしまっている、という事情である。【原注 a) 終り】

- 1) エンゲルス版では、この脚注は削除されている。

【原注】 ¹¹ b) これを『エコノミスト』が書いたのは 1847 年のことである。1857 年での進歩は、「ロンドンに集められた」云々の余分な [spare] 現金等々をビル・ブローカーや銀行業者たちが自由に処分できるということである。【原注 b) 終り】

- 1) エンゲルス版では、この脚注は削除されている。

【原注】¹⁾ c) これこそは信用²⁾の「みごとな」絡み合いである。「田舎の」云々³⁾は、取引「⁴⁾銀行業者」⁴⁾のもとに預金するのだと⁵⁾思い込んでおり、さらにまた、この銀行業者が貸出をする場合にも [551] 自分の知合いの私人にたいして行なうのだと思い込んでいる。彼は、自分の「⁶⁾預金」⁶⁾をこの銀行業者がロンドンのビル・ブローカーに用立てるのに、彼はこのブローカーに露ほども影響を及ぼすことができない⁷⁾などとは、夢にも思っていないのである。【原注 c) 終り】

- 1) エンゲルス版では、この脚注の内容は、この脚注が付けられた本文のパラグラフの末尾に組み込まれている。本稿、226 ページの注 14 を見よ。
 2) 「信用」(単数) → 「もろもろの信用」
 3) 「「田舎の」云々 („rural“ etc.)」 → 「地方の預金者」
 4) 「「」および「」」——削除。
 5) 挿入——「ばかり」
 6) 「「」および「」」——削除。
 7) 「用立てるのに、彼はこのブローカーに露ほども影響を及ぼすことができない」 → 「用立てて、このビル・ブローカーが預金者も銀行業者もぜんぜん制御できないような操作をすることになる」

【原注】¹⁾ d) 『エコノミ〔スト〕』, 第5巻, 1947年。(1334 ページ。)

【原注 d) 終り】 |

- 1) エンゲルス版では、この出典は、前出の引用の末尾につけられている。

/349 上/¹⁾ 鉄道等々²⁾のような³⁾公共事業が一時的に「貸付可能な資本 [loanable capital]」⁴⁾を増加させることもありうる(「払い込み請求」の結果生じた預金がまだそれらの固有の目的に使われていない中間期間に)こと⁵⁾はすでに見た。(①[草稿] 320 ページ, 「第 207 号」および S. ガーニ, 第 1742 号⁶⁾, を見よ。) |

① 〔注解〕「〔草稿〕320 ページ」——〔MEGA〕477 ページ 19-33 行〔抽稿「信用と架空資本」の草稿について（中）〕、『経済志林』第 51 巻第 3 号、1983 年、36 ページ下から 5 行-37 ページ上から 9 行；MEW, Bd. 25, S. 425〕を見よ。——また、『商業的窮境に関する報告書……1848 年 6 月 8 日』での次の記述を見よ。「第 1742 号「それから商人の信用の状態は改善され、要求される銀行券の量は減少したのですか？——いいえ、なぜなら、ときには信用の非常に高い状態がありましたが、そのようなときに、われわれは大量の銀行券を必要としたのです。」

- 1) 挿入——「たとえば」
- 2) 「等々」——削除。
- 3) 挿入——「大きな」
- 4) 「貸付可能な資本 [loanable capital]」→「貸付資本」
- 5) 「ありうる（「払い込み請求」の結果生じた預金はまだそれらの固有の目的に使われていない中間期間に）こと」→「ありうる。というのは、払い込まれた金額が現実使用されるようになるまではいつでもある期間は銀行の手で自由に利用できるものになっているからであるが、これ」
- 6) 「第 1742 号」——これは「第 1754 号」の誤りである。すでに草稿の 320 ページで誤記している。抽稿「信用と架空資本」の草稿について（中）、『経済志林』第 51 巻第 3 号、1983 年、38 ページ注 4 を見よ。MEGA はこの数字を訂正していない。

| ①348¹⁾ | ²⁾すでに ²⁾単純な貨幣流通を考察したところ³⁾ で論証したように、³⁾現実に流通する貨幣の量は、⁴⁾流通の速度と諸支払の節約とを所与として前提すれば、単純に、⁴⁾諸商品の価格と取引の量、等々⁵⁾ [によって]⁶⁾ 規定されている。同じ法則は銀行券流通の場合にも支配する。

- ① 〔異文〕「348」——この 348 ページを、マルクスは、「挿入部分（次ページの続きはこの次のページに〔あるの〕だから。）」と指定している〔つまり、このような注意書きがここに書かれている〕。内容を考慮して、ここに挿入した。
- ② 〔注解〕「単純な貨幣流通を考察したところで」——カール・マルクス『経済学批判。第 1 分冊』、ベルリン、1859 年、82-85 ページ（MEGA²⁾、第 2 部第 2 巻、171-174 ページ〔『資本論草稿集』②、316-321 ページ。〕。
- ③ 〔異文〕「現実に」——あとから書き加えられている。
- ④ 〔異文〕「流通の」——あとから書き加えられている。

- 1) この348ページは、上から下まで続けて書かれている。
- 2) ここから、草稿の348ページの中途(本稿、234ページ11行)までは、エンゲルス版では、「第33章 信用システムのもとでの流通手段」のなかに組み入れられている(MEW, Bd. 25, S. 538-539)。
- 3) 挿入——「(第1部第3章第2節)」
- 4) 「単純に、」——削除。
- 5) 「, 等々」——削除。
- 6) 「[によって]」——草稿の原文にはこの語を挿入しないと意味が通じないのであり、書き落としと考えるべきところであるが、MEGAでは訂正していない。

公衆のもとにある(イングランド銀行)銀行券の年平均額¹⁾

次の表では、1000以下は除き、ただ100万単位で挙げられている²⁾³⁾。

年	5-10 ポンド券	全流通中 の百分比	20-100 ポンド券	全流通中 の百分比	200-1000 ポンド券	全流通中 の百分比	合 計
1844	9.263	45.7	5.735	28.3	5.253 (第3位)	26	20.241
1845	9.698	46.9	6.082	29.3	4.942	23.8	20.722
1846	9.918	48.9	5.778 ⁴⁾	28.5	4.590	22.6	20.286
1847	9.591	50.1	5.498	28.7	4.066	21.2	19.155
1848	8.732	48.3	5.046	27.9	4.307	23.8	18.085
1849	8.692	47.2	5.234	28.5	4.477 ⁵⁾	24.3	18.403
1850	9.164	47.2	5.587	28.8	4.646	24	19.389
1851	9.362	48.1	5.554	28.5	4.557	23.4	19.473
1852	9.839	45	6.161	28.2	5.856 ×最大	26.8	21.856
1853	10.699 最大	47.3	6.393 最大	28.2	5.541 (第2位)最大のあと ⁶⁾	24.5	22.653
1854	10.565	51	5.910	28.5	4.234	20.5	20.709
1855	10.628	53.6	5.706	28.9	3.459	17.5	19.793
1856	10.680	54.4	5.645	28.7	3.323	16.9	19.648
1857	10.659	54.7	5.567	28.6	3.241	16.7	19.467

(『銀行法〔委員会〕報告』, 1858年, 第69号⁷⁾。)

- 1) エンゲルス版ではこの見出しは削除されている。なお、MEGA では、見出しではなく、一つのパラグラフとされているが、草稿では、左右中央にあり、見出しとして書かれたことは明らかである。次の「次の表では、1000 以下は除き、ただ 100 万単位で挙げられている」という 1 行は、この見出しの左側に書き込まれている。
- 2) 「次の表では、1000 以下は除き、ただ 100 万単位で挙げられている。」→「次の表では、それぞれの年について、公衆の手にあったかぎりでのイングランド銀行券の年間平均金額が、5 ポンド券および 10 ポンド券の金額と 20-100 ポンド券の金額とさらに高額の 200-1000 ポンド券の金額とに分けて記録されており、またこれらの部類のそれぞれが総流通額のうちに占めるパーセンテージも記録されている。金額の単位は 1000 ポンドで下の 3 桁は切り捨てである。」
- 3) 「100 万単位で挙げられている」——MEGA では、奇妙なことに、100 万の桁にプンクト（ドイツ語ではコンマ）がつけられていないので、「100 万単位で挙げられている」という文が意味をなさないことになっている。原典の『報告』ではコンマとなっている。
- 4) 草稿では「5,771」となっており、1894 年版でもそうになっているが、MEW 版で訂正されているように「5,778」が正しい。
- 5) 草稿では「4,777」となっており、1894 年版でもそうになっているが、MEW 版で訂正されているように「4,477」が正しい。
- 6) 「(第 2 位) 最大のあと [(2^{tes}) nach Max.]」——MEGA では、nach が auch となっているが、誤読または誤植である。
- 7) 1894 年版では、ここに「I. II ページ」と書かれている。MEW 版では「XXVI ページ」と訂正されている。なお、1984 年版では、表の体裁はほぼ草稿のとおりで、それぞれの数字の前にはないし % が書かれている。また、エンゲルス版では、草稿にある「(第 3 位)」, 「×最大」, 「最大」, 「(第 2 位) 最大のあと」などの注意書きは削除されている。

552 「銀行券の総量は、1844 年以来、実際に減少してきた。」(同前、第 70 号。)¹⁾²⁾

- 1) 「「銀行券の総量は、1844 年以来、実際に減少してきた。」(同前、第 70 号。)」→「このように、1844 年から 1857 年までに、輸出入によって示された取引額は 2 倍以上になったにもかかわらず、流通銀行券の総額は絶対的に減少した。」
- 2) エンゲルス版ではここで改行されていない。

大部分がこの国の小売取引にはいる¹⁾⁴⁾5ポンド券と10ポンド券という小額銀行券は、上の²⁾表が示すように、1844年の9,263,000ポンド・スターリングから1853年の10,699,000ポンド・スターリング³⁾に増加した。これは、「金流通の増加と同時に生じた」(同上、第4号)。⁴⁾これに反して、高額銀行券は減少した。200ポンド券から1000ポンド券までの銀行券は、1852年には5,856,000⁵⁾ポンド・スターリングであったが、1857年には3,241,000ポンド・スターリングとなった。⁶⁾

① [異文] 「5ポンド券と10ポンド券という」——あとから書き加えられている。

- 1) 「大部分がこの国の小売取引にはいる」——削除。
- 2) 「上の」——削除。
- 3) 「1853年の10,699,000ポンド・スターリング」→「1857年の10,659,000ポンド・スターリング」
- 4) 「これは、「金流通の増加と同時に生じた」(同上、第4号)。」→「そして、この増加は、ちょうどその当時あのように大きかった金流通の増加と同じときのことだった。」
- 5) 「5,856,000」——草稿でもMEGAでも、さらに1894年版でも、「5,865,000」となっているが、MEW版のように「5,866,000」とあるべきところである。
- 6) MEGAではここで改行しており、それに従っておくが、草稿では改行していないように思われる。

減少は次のとおり。

$$\begin{array}{r} 5865 \\ 3241 \\ \hline 2624^{1)} \end{array}$$

- 1) エンゲルス版では、「減少は次のとおり。」とそれに続く計算は削除されている。

2,624,000ポンド・スターリング¹⁾の減少である。これは、次のように説明される。

- 1) 「2,624,000 ポンド・スターリング」→「つまり 250 万ポンド・スターリング以上」

「1854 年 6 月 8 日、ロンドンの個人銀行業者たちは株式銀行を^①手形交換所の取り決めに加わることを認め、その後まもなく、最終の手形交換がイングランド銀行で清算されるようになった。毎日の決済は、それぞれの銀行がイングランド銀行にもっている勘定での移転によって行なわれる。このシステムの採用の結果、以前は銀行業者が自分たちの勘定を決済するために用いていた高額銀行券はもはや不要となった。」(『報告』、同前、第 7 号。〔V ページ。〕)

- ①〔注解〕「手形交換所」——470 ページ 41-42 行への注解を見よ。〔本稿、前出 167 ページの注解注④を見よ。〕

^①イングランド銀行総裁ニーヴ氏。第 947 号。^②「貴行がどんな処置をとられようとも、公衆がもつ銀行券の額は同じまま、つまり約 2000 万ポンド・スターリングのまま、と言われるのですか？——平常な時期には、公衆の使用には約 2000 万ポンド・スターリングが必要とされるように思われます。1 年のうちに周期的に現われるいくつかの特別な時期には、それは 100 万ポンド・スターリングか 150 万ポンド・スターリングぐらゐ多くなります。前に申しましたように、公衆がより多くを必要とすれば、彼らはいつでもそれをイングランド銀行で手に入れることができるであります。」第 948 号。「あなたは、パニックのあいだは、貴行が銀行券の額を減らすことを公衆が許したとらない、と言われましたが、その理由を述べていただきたいのですが？——パニックの時点には公衆は、私の見るところでは、自分で銀行券をなんとかするだけの十分な力を持っています。そして、もちろん、本行が債務を負っているかぎり、公衆は、本行から銀行券を引き出すのにこの債務を用いることができます。」第 949 号。「では、いつでもどこかしらに、約 2000 万ポンド・スターリングの法貨があることが必要とされるように思われますが？——公衆のもとにある 2000 万ポ

ンド・スターリングの銀行券についてですが、これは変動します。それは1850万ポンド・スターリングであったり、1900万ポンド・スターリングであったり、2000万ポンド・スターリングであったり、等々ですが、平均を取れば、1900万から2000万ポンド・スターリングだと言ってよいのです。」(『報告』, ¹¹1858年)³⁾

①〔訂正〕「1858年」——手稿では「1857年?」となっている。

- 1) エンゲルス版では、以下のニーヴの証言は、草稿の前後から切り離されて、同じ「第33章 信用システムのもとでの流通手段」の少しあとの箇所で利用されている(MEW, Bd. 25, S. 540)。
- 2) 「イングランド銀行総裁ニーヴ氏。第947号。」→「1858年の銀行法委員会でイングランド銀行総裁のニーヴ氏は次のように述べている。(問い。)」
- 3) 「(『報告』, 1858年)」——削除。

¹¹スレイタ氏((当時)首都の最大の商会の一つであるモリスン・ディロン商会の)は言う。「現金〔real money〕, すなわちイングランド銀行券および金が、商取引にどんなにわずかしかはいっていかないかを証明するのに、年々数100万〔ポンド・スターリング〕以上にのぼる商取引の一つの継続的な動きの分析を参照することが、興味深くもあり、またこの点について決定的でもあるかもしれないのであって、これはこの国の一般的取引の格好の例だと考えてよい。1856年中について、受取と支払との比率は100万ポンド・スターリングの基準に縮約されており、次のようである。すなわち、

553

受 取	支 払
銀行手形および日付後	日付後払為替手形 ³⁾ £ 302 674
払商業為替手形での 533 596 ²⁾	
一覽払銀行業者宛	
小切手、その他での 357 715	

地方銀行業者銀行券での	9 627	ロンドン銀行業者	
		宛小切手	663 672
	小計	小計	966 346
イングランド銀行券での	68 554	イングランド銀行券	£22 743
金貨での	28 089	金貨	9 427
銀貨および銅貨での	1 486	銀貨および銅貨	1 484
		[小計]	33 654
郵便為替での	933		
	小計		
	99 062		
合計	£1 000 000	[合計]	£1 000 000

(『銀行法〔特別〕委員会〔報告〕』, 1858年, 同上, 前付71ページ。)

- 1) エンゲルス版では、以下のスレイタからの引用のかわりに、次の1パラグラフが置かれている。——「卸売商業での貨幣の使用がどんなにわずかな最小限度まで節減されているかについては、第1部第3章注103に印刷してある表を参照せよ。この表は、一人の小売商人が自分の各種商品の全在庫を仕入れることもできるほどのロンドンの最大の商社の一つであるモリスン・ディロン商会が銀行委員会に提出したものである。」
- 2) 「533,596」——第1部のMEW版では、誤って「553,596」となっている。
- 3) 「為替手形〔Bills of exchange〕」——草稿ではexchangeがexchequerと誤記されており、MEGAでもそのままにしてある。訂正して訂正目録に記載すべきところである。

①これによれば、受取貨幣〔money received〕のうちイングランド銀行券は7%以下であり、金銀は3%に達する。

- ①〔注解〕このパラグラフと次のパラグラフは、『銀行法特別委員会報告書……』では次のようになっている。「ここでは次のことが明らかである。受取貨幣のうち、イングランド銀行券は7%以下であり、金銀は通貨のうちのたった3%にすぎない。なされた支払のうち、イングランド銀行券は2%でしかなく、金

銀は通貨のうちのたったの1%である。他方で、受け取られた支払のうち約90%が、また、なされた支払のうちのほぼ97%が、通貨のうちの取引者たち自身の信用と資本とによって形成された部分によるものであった。」

なされた支払のうち、イングランド銀行券は2%、金銀は1%である。これにたいして、受け取られた支払のうち約90%が、また、なされた支払のうちのほぼ97%が、通貨のうちの取引者たち自身の信用と資本とによって形成された部分によるものであった。(同上。)¹⁾ |

- 1) 以上の、スレイタからの引用とそれへの注意書きは、エンゲルス版では削除されている。

/349上/¹⁾ さて、2〔貨幣資本に転化される貨幣への、資本または収入の転化〕について述べるところに移るまえに、さらに二つのことを、すなわち、a) 貸付可能な資本 [loanable capital] の大きさは通貨 [Circulation] の量とはまったく異なるものであること {この量の一部分は、銀行業者の準備であり、この準備は変動している。ここで通貨 [Circulation] の量と言うのは、²⁾すべての銀行券と地金のことである、等々}、b) どの恐慌期のあと等々でも、その前の産業循環で達成された最高水準が、次の産業循環での土台または³⁾比較的低位の水準となること、を示しておきたい。|

- ① [異文] 「すべての銀行券と地金 [alle Notes und Bullion)」←「金に [……] ところのすべての銀行券 [alle Notes die in Gold)」
② [異文] ここに、「中 [位の] [mitt[lere]]」と書いたのち消している。

- 1) 草稿では、以下の文で示されている「a)」および「b)」の二つの論点については、まず349ページで後者について、次いで350ページで前者について記述している。エンゲルス版では、この二つの部分を、「第31章 貨幣資本と現実資本・Ⅱ」の「第1節 貸付資本への貨幣への転化」の最後に「a)」、「b)」の順序で収めている。どちらも、横線でその前の部分から区切られている。

「a）」および「b）」についての以下の問題提起は、それぞれの部分の冒頭に利用されているが、どちらも大きく書き換えられている。

| 350¹⁾ | ²⁾ ¹⁾ b について。³⁾ ²⁾ 連合王国の農産物ならびに工業製品⁴⁾の実質価値または申告価値の輸出⁵⁾は、繁栄の年である 1824 年には、40,396,300 ポンド・スターリングだった。次いで⁶⁾ この額よりも下がって、⁷⁾ 3500 万³⁾以上⁸⁾と 3900 万とのあいだを動揺している。繁栄の年である⁹⁾ 1834 年には、1824 年の水準¹⁰⁾を越えて 41,649,191 ポンド・スターリングに上がり、そして 1836 年には、53,368,571 ポンド・スターリングという新たな最高限に達している。¹¹⁾

①〔注解〕以下の〔ここから、本稿 241 ページ 1 行までの〕部分については、出典を突き止めることができなかった。これらの数字は、一部は、『『エコノミスト』への補遺。大英帝国の商業』、ロンドン、第 803 号、1859 年 1 月 15 日、2 ページ、で確認された。

②〔異文〕「連合王国の農産物ならびに工業製品の」——あとから書き加えられている。

③〔異文〕「以上」——あとから書き加えられている。

1) この 350 ページは、上から下まで続けて書かれている。

2) 以下の「b について」の部分は、エンゲルス版では、「第 31 章 貨幣資本と現実資本・Ⅱ」の「第 1 節 貸付資本への貨幣への転化」の最後部に組み込まれている。冒頭に、草稿の前パラグラフでの問題提起が、次のように書き換えられて置かれている。——「現実資本すなわち生産的資本および商品資本の蓄積については、輸出入統計が一つの尺度を与える。そして、いつでもそこに示されているのは、10 年の循環周期で運動するイギリス産業の発展期（1815–1870 年）のあいだは、いつでも、恐慌の前の最後の繁栄期の最高限が、次にくる繁栄期の最低限として再現し、それからまたそれよりもずっと高い新たな最高限に上がって行く、ということである。」

3) 「b について。」——削除。

4) 「連合王国の農産物ならびに工業製品」→「大ブリテンおよびアイルランドの輸出生産物」

5) 「の輸出」——削除。

- 6) 挿入——「1825年の恐慌とともに輸出額は」
- 7) 挿入——「年間」
- 8) 「以上」——削除。
- 9) 「繁栄の年である」→「繁栄がふたたびやってきた」
- 10) 「1824年の水準」→「従来のも最高水準」
- 11) エンゲルス版では、ここで改行されていない。

1837年には¹⁾ 4200万²⁾に下がり(1824年よりも高い)³⁾、その後は5000万、5100万、5200万、5300万のあいだを⁴⁾動揺している(だが、この順序ではなくて入り乱れている〔 〕)⁵⁾。1844年には5850万に達し(1836年の最高限を^①はるかに越える)、⁶⁾ 1845年には⁷⁾ 60,111,082ポンド・スターリングに達する。そのあと1846年には5700万^②余に下がり、1847年の⁵⁵⁴5900万(ほとんど5900万)と5200万(1848年はほとんど5300万)とのあいだを動揺し⁸⁾、1849年には6350万に上がり、1853年にはほとんど9900万に達し⁹⁾、1854年には9700万(これよりやや多い)に下がり¹⁰⁾、1855年には9550万¹¹⁾、1856年は115,826,948¹²⁾で、1857年には1億2200万という最高限¹³⁾〔に達している〕。1858年には1億1600万に下がるが、すでに1859年にはふたたび¹⁴⁾ 1億3000万に上がり、1860年には約1億3500万(ほとんど1億3600万)に上がり¹⁵⁾、1861年には1億2500万に〔下がったが〕¹⁶⁾ (1857年におけるのよりも高い)¹⁷⁾、1863年には1億4650万ポンド・スターリング(ほぼ)に上がった¹⁸⁾。

①〔異文〕「はるかに」——あとから書き加えられている。

②〔異文〕「余」——あとから書き加えられている。

1) 挿入——「それはふたたび」

2) 「余」——削除。

3) 「(1824年よりも高い)」→「したがって新たな最低限がすでに以前の最高限よりも高くなっており」

4) 「5000万、5100万、5200万、5300万のあいだを」→「5000万と5300万とのあいだを」

- 5) 「(だが、この順序ではなくて入り乱れている〔 〕)」——削除。なお、草稿で書き落とされている閉じ括弧の「)」は、MEGA でも欠落している。
- 6) 「1844 年には 5850 万に達し (1836 年の最高限をはるかに越える),」→「繁栄の再来は 1844 年の輸出額を 5850 万に高め、これは 1836 年の最高限をすでにふたたびはるかに追い越している。」
- 7) 挿入——「それは」
- 8) 「1847 年の 5900 万 (ほとんど 5900 万) と 5200 万 (1848 年はほとんど 5300 万) とのあいだを動揺し」→「1847 年は約 5900 万、1848 年は約 5300 万であるが」
- 9) 「に達し」——削除。
- 10) 「(これよりやや多い) に下がり」——削除。
- 11) 「9550 万 [95 1/2 Mill.]」——エンゲルス版では誤って「94 1/2 万」とされており、MEW 版でもそのままになっている。三宅義夫氏は「この数字はマルクスの書き誤りである」(『マルクス・エンゲルス イギリス恐慌史論』, 上, 大月書店, 1974 年, 165 ページ) とされているが、そうではなくて、エンゲルス版での誤りである。
- 12) 「115,826,948」→「約 1 億 1400 万」
- 13) 挿入——「に達している」
- 14) 「ふたたび」——削除。
- 15) 「約 1 億 3500 万 (ほとんど 1 億 3600 万) に上がり」→「約 1 億 3600 万で」
- 16) 「に [下がったが]」→「でしかないが」
- 17) 「(1857 年におけるのよりも高い)」→「(ここでふたたび新たな最低限が以前の最高限よりも高くなる)」
- 18) 「(ほぼ) に上がった」→「である。」

¹¹⁾しかし、この法則はむしろ、実質価値ないし ¹²⁾申告価値のかわりに、量だけを示す公的価値を観察するときに明らかとなる。(とりわけ、1844 年以前には、他方の形態では、それほどはっきりとは現われない。)

① [異文] 「申告 [Declared]」←「積算 [Computed]」

- 1) ここから、すぐ次にある二つの表の終りまでは、エンゲルス版では削除されている。

だから、一方の形態では、この法則を 1844 年から実質価値ないし ^①申

告価値で観察し、1827年からは公的価値で観察しよう¹⁾。

① [異文] 「申告 [Declared]」←「積算 [Computed]」

1) 「観察しよう [betrachten wollen]」——草稿では、誤って betrachtet wollen となっている。MEGA では訂正目録に記載せずに betrachten に修正している。

<u>1836 年</u>	最大でその量は	£ <u>53,368,572</u>
<u>1844 年</u>	新たな循環の繁栄の年	<u>58,584,292</u>
<u>1845 年</u>	最高限	<u>60,111,082</u>
<u>1846 年</u>		<u>57,786,876</u>
<u>1847 年</u>		<u>58,842,377</u> (1844 年を越えている)
<u>1848 年</u>	恐慌の翌年	<u>52,849,445</u>
<u>1849 年</u>		<u>63,596,025</u> (すでに <u>1845 年</u> の最高限を超過)
<u>1850 年</u>		<u>71,367,885</u>
<u>1851 年</u>		<u>74,448,722</u>
<u>1852 年</u>		<u>78,076,854</u>
<u>1853 年</u>		<u>98,933,781</u>
<u>1854 年</u>		<u>97,184,726</u>
<u>1855 年</u>		<u>95,688,085</u>
<u>1856 年</u>		<u>115,826,948</u>
<u>1857 年</u>	(恐慌)	<u>122,066,107</u>
<u>1858 年</u>	恐慌の翌年	<u>116,618,756</u> (恐慌の前年を越えている)
<u>1859 年</u>		<u>130,411,529</u>
<u>1860 年</u>		<u>135,842,817</u> ¹⁾

1) MEGA では、この表の数値のコンマはすべて削除されている。

555 もっと前の時期には、この法則はもっと際立っている。なぜなら、実質価値はこの法則を、公的価値ないし数量が示すほどにははっきりと示さないからである。

イギリスおよびアイルランドの農産物および工業製品¹⁾

	<u>公的価値</u>	<u>実質価値</u>	
1824 年	£ 48,735,551	£ 40,396,300	これは 19 世紀を通じてこのときまで最高の輸出（数量で）である。
1825 年	47,166,020	38,877,385	
1826 年	40,965,735	31,536,723 ²⁾	
1827 年	52,219,280	37,181,335	これはすでに（数量に関して）1824 年の最高限をいちじるしく超過しているが、これに続く諸年と比べれば <u>最小</u> である。
1828 年	52,797,455	36,812,756	
1829 年	56,213,041	35,842,623	
1830 年	61,140,864	38,271,597	
1831 年	60,683,933	37,164,372	
1832 年	65,026,702	36,450,594	
1833 年	69,989,939	39,667,347	
1834 年	73,831,559	41,649,191	繁栄の年
1835 年	78,376,631	47,372,270	
1836 年	85,229,837	53,368,571	1824-36 年の局面の <u>最高限</u> (1824 年のほとんど 2 倍に近い)
1837 年	72,548,047	42,070,744	<u>恐慌の年</u> （または翌年）
1838 年	92,459,231	50,060,970	
1839 年	97,402,726	53,233,586	

1840年 102,714,060 51,406,430³⁾

- 1) 草稿では明らかに下表のタイトルとして書かれているが、MEGA では、表の「公的価値」および「実質価値」と並ぶ、右のメモ欄の項目名のようにになっている。
- 2) 「31,536,723」——草稿では、誤って、「31,53,723」となっている。MEGA では、訂正目録に記載せずに訂正している。
- 3) MEGA では、この表の数値のコマはすべて削除されている。

同じことはもちろん輸入についても証明することができるであろう。輸入は市場の拡大を示すものである。ここでは、生産の規模を問題にしているわけである。¹⁾ |

- 1) エンゲルス版では、ここに、エンゲルスによるものであることを明記して、次のように書き加えられている。——「このことはイギリスについては言うまでもなくただ事実上の産業独占の時代だけにあてはまる。しかし、世界市場がまだ膨張を続けているあいだは、一般に、すべての近代的大工業国にあてはまるのである。——F. エンゲルス」

| 351 上 |¹⁾ a について。²⁾ 1857 年 11 月 12 日^①(蔵相書簡発表の日)³⁾,
^{②③}「イングランド銀行の総準備は(ロンドンと同行のすべての支店を含め
 ても)⁴⁾ たったの 580,751 ポンド・スターリングだった。同じときに預金の
 総額は 2250 万ポンド・スターリングで、そのうち約 650 万ポンド・スター
 リングはロンドンの銀行業者たちのものだった。」(『銀行法〔特別委員会〕
 報告』, 1858 年, 前付 57 ページ。)⁵⁾ 1864 年だけでロンドンの九つの銀行
 機関にある預金は 67,377,556 ポンド・スターリングであった(これにた
 いして、準備ファンドは 649,982 ポンド・スターリングであり、払込資本
 は 4,615,695 ポンド・スターリングであった⁶⁾)。 (1864 年におけるオウヴァ
 ストンの動き〔motion〕を主眼に^⑤『報告〔Return〕』(1865 年?^⑥)を見
 よ。)総じてこの報告は、預金の量をこの時期の通貨〔circulation〕の量

と比較するために調べてみなければならない。(この預金だけでも、もしかすると、イングランド銀行の銀行券流通高の3倍もあるかもしれない。)

- ①〔異文〕「〔蔵相書簡発表の日〕」——あとから書き加えられている。
- ②〔注解〕この引用は、『銀行法特別委員会報告……』では次のようになっている。「蔵相書簡発表の日のイングランド銀行の総準備はたったの……であったということ……」
- ③〔注解〕この引用での強調はマルクスによるもの。
- ④〔訂正〕「）」——手稿では欠けている。
- ⑤〔注解〕『報告〔Return〕』(1865年?)」——マルクスがどの報告のことを言っているのか、つきとめることができなかった。
- ⑥〔訂正〕「)」——手稿では欠けている。

1) 以下の「aについて」の部分(本稿, 247 ページ下から10行まで)は、エンゲルス版では、「第31章 貨幣資本と現実資本・Ⅱ」の「第1節 貸付資本への貨幣への転化」の、「bについて」の前出の部分のまゝのところに組み込まれている。冒頭に、草稿の、さきのパラグラフでの問題提起が、次のように書き換えられて置かれている。——「とにかく、貸付資本の量は通貨の量とはまったく別である。われわれがここで通貨の量と言うのは、一国にあるすべての流通銀行券と、貴金属地金を含めてのすべての硬貨との総額のことである。この量の一部分は、その大きさから見てたえず変動している諸銀行の準備をしている。」

- 2) 「aについて。」——削除。
- 3) 「1857年11月12日(蔵相書簡発表の日)」→「1857年11月12日(1844年の銀行法が停止された日)」
- 4) 「(ロンドンと同行のすべての支店を含めても)」→「すべての支店銀行を含めての」
- 5) エンゲルス版では、このパラグラフのこれ以下の部分は削除されている。

利子率の変動^{1} 比較的に長い期間に生じる変動、あるいは国の相違による利子率の相違は度外視するが、前者は一般的利潤率の変動によって、後者は利潤率と信用制度〔Creditwesen〕²⁾の発展とにおける556相違によって³⁾〔制約されている〕¹⁾は、貨幣資本〔moneyed capital〕⁴⁾の量の状況⁴⁾に左右される^{5}信頼⁶⁾等々のようなそのほかのすべての事情が同じまま

だとすれば⁵⁾。すなわち、それ自体として⁷⁾商業信用に媒介されて⁸⁾再生産的当事者たち自身のあいだで貸し付けられる生産的資本⁹⁾とは区別される、鑄貨⁹⁾や銀行券という貨幣の形態で貸し付けられる資本の量の状況に左右される。

① [異文] 「の量」——あとから書き加えられている。

② [異文] 「再生産的」←「生産的」

1) 「{ } および { } 」→「() および () 」

2) 「信用制度 [Creditwesen] 」→「信用」

3) 挿入——「制約されている」

4) 「貨幣資本 [moneyed capital] の量の状況」→「貸付資本の供給」

5) 「{ } および { } 」→「() および () 」

6) 「信頼 [confidence] 」→「信頼の状態 [Stand des Vertrauens] 」

7) 挿入——「, 商品形態で, 」

8) 「生産的資本」→「産業資本」

9) 「鑄貨」→「硬貨」

だがそれにもかかわらず、この貨幣資本 [moneyed capital]¹⁾の量は通貨 [Circulation]²⁾の量とは異なるものであり、またそれからは独立したものである。

1) 「貨幣資本 [moneyed capital] 」→「貸付可能な貨幣資本」

2) 「通貨 [Circulation] 」→「流通している貨幣」

たとえば、20 ポンド・スターリングが1日に5回貸し付けられるとすれば、100 ポンド・スターリングの貨幣資本 [moneyed capital] が貸し付けられたわけであり、このことはまた同時に、この20 ポンド・スターリングがさらに少なくとも4回は(最初の貸し手は除いて)¹⁾購買手段または支払手段²⁾として機能した³⁾ということを含んでいるはずである。というのは、同じ貨幣が、もし購買や支払という媒介なしに5人のあいだで貸し付けられたのだとすれば、したがって⁴⁾それが少なくとも4回は資本

の転化形態（商品、それには労働能力⁵⁾ も含まれる）を表わさなかったのだとすれば、この貨幣は⁶⁾ただ、それぞれ 20 ポンド・スターリングの五つの債権を構成するだけだからである。

- 1) 「(最初の貸し手は除いて)」——削除。
- 2) 「購買手段または支払手段 [Kauf- oder Zahlungsmittel]」——MEGA では、Kauf- のハイフンが欠落している。
- 3) 「機能した」—— functionirt → fungiert
- 4) 「したがって」——削除。
- 5) 「労働能力」→「労働力」
- 6) 挿入——「100 ポンド・スターリングの資本を構成するのではなく、」

信用システム [Creditsystem]¹⁾ の発展している諸国では、貨幣資本 [moneyed Capital] は、すなわち²⁾貸付として³⁾自由に使用できる貨幣資本 [moneyed Capital] は、すべて銀行業者⁴⁾や貨幣貸付業者 [money lenders] のもとに預金の形態で存在するものと想定することができる。少なくとも全体としての事業についてはそうだと言える。{⁵⁾ ついでに、前述したところに付言しておく。⁶⁾ 本来の投機が始まる⁷⁾前の繁栄期⁸⁾には、信用が容易である、すなわち信頼は堅実である。そのようなときには、信用の移転が、銀行券の介入なしに、通貨 [circulation] の機能の大部分を果たすのである。⁹⁾⁵⁾

- 1) 「信用システム [Creditsystem]」→「信用」 筆者のノートでは Credit-system となっているが、MEGA では Creditwesen となっている。手稿による再確認ができていないので、いまのところ、どちらが正しいのか断言できない。
- 2) 「貨幣資本 [moneyed Capital] は、すなわち」——削除。
- 3) 「貸付 [Loan] として」→「貸付のために」 なお、草稿では、Loan が Lohn（賃金）と誤記されており、MEGA でもそのままとなっている。
- 4) 「銀行業者」→「銀行」
- 5) 「{ } および { }」——削除。
- 6) 「ついでに、前述したところに付言しておく。」→「さらに、」

- 7) 「始まる [set in]」→「盛行する [losgelassen werden]」
- 8) 「繁栄期 [Zeit d. prosperity]」→「好況期 [gute Geschäftszeiten]」
- 9) 「信用が容易である, すなわち信頼は堅実である。そのようなときには, 信用の移転が, 銀行券の介入なしに, 通貨 [circulation] の機能の大部分を果たすのである。」→「信用が容易で信頼が増大しているので, 流通機能の大部分は, 金属貨幣や紙幣の介入なしに, 単純な信用移転によって果たされる。」

通貨 [Circulation] {地金および鑄貨を含めて}¹⁾の量が^①相対的に少ないのに預金²⁾が大きいということの可能性だけであれば, それはまったく³⁾次のことにかかっている。⁴⁾(1)同じ貨幣片によって行なわれる購買や支払の度数。⁵⁾そして,⁶⁾(2)^②同じ貨幣片が預金として銀行に帰ってくる⁷⁾度数。したがって, 同じ貨幣片が購買手段および支払手段⁸⁾としての^③機能を繰り返すことが, その預金への転化⁹⁾によって媒介されているのである。たとえば, ある小売商人が毎週 100 ポンド・スターリングの貨幣を¹⁰⁾銀行業者に預金するとしよう。銀行業者はこの貨幣で製造業者の預金の一部分を払い出す。製造業者はそれを労働者たちに支払う。労働者たちはそれで小売商人への支払をし, 小売商人はそれで新たな預金をする, 等々¹¹⁾。小売商人の 100 ポンド・スターリングの預金¹²⁾は, (1)製造業者の預金を払い出すために, (2)労働者に支払うために, (3)その小売商人自身に支払うために, (4)同じ小売商人の貨幣資本 [moneyed capital] の第2のある部分¹³⁾を預金するために, それぞれ役立ったのである。この場合には¹⁴⁾, この小売商人は 20 週間の終りには (¹⁵⁾もし彼自身がこの貨幣を引き当てに手形を振り出さないとすれば)¹⁵⁾¹⁶⁾100 ポンド・スターリングで 2000 ポンド・スターリングを銀行業者のもとに預金したことになるであろう。

- ① [異文] 「相対的に」——あとから書き加えられている。
- ② [異文] ここに, 「[……] ところの貸付の度数 [Anzahl der loans, die]」と書いたのち消している。
- ③ [異文] 「機能を繰り返すこと [wiederholte Function]」←「機能を更新すること [neue Function]」

- 1) 「{地金および鑄貨を含めて}」——削除。
- 2) 挿入——「額」
- 3) 「まったく [ganz]」→「ただ [einzig]」
- 4) エンゲルス版ではここで改行されている。
- 5) エンゲルス版ではここで改行されている。
- 6) 「そして、」——削除。
- 7) 挿入——「その再転化の」
- 8) 「購買手段および支払手段 [Kauf- u. Zahlungsmittel]」——MEGA では、
Kauf- のハイフンが欠落している。
- 9) 挿入——「の更新」
- 10) 「の貨幣を」→「を貨幣で」
- 11) 「、等々」——削除。
- 12) 「小売商人の 100 ポンド・スターリングの預金」→「小売商人が預金した 100
ポンド・スターリング」
- 13) 「第 2 のある部分」→「別のある部分」
- 14) 「この場合には」——MEGA でもエンゲルス版でも denn となっており、草
稿でもそうであるように見えたが、dann とあるべきところか、あるいは
denn であったとしても、その意味が dann に近いものであろうと考えて訳出
しておく。
- 15) 「() および ()」——削除。
- 16) 挿入——「こうして」

この貨幣資本 [moneyed capital] がどの程度まで遊休している [un-
beschäftigt] かは、ただ、銀行業者たちの準備ファンドの流出入に現わ
れるだけである。¹⁾

- 1) 「a)」——削除。

【原注】 | 351 下 | ¹⁾ a) だからこそ、ウェゲリン氏 ⁽²⁾ 1857 年当時イング
ランド銀行総裁³⁾ はイングランド銀行にある地金³⁾ が唯一の「準備資本」⁴⁾
だと結論するのである。⁵⁾

- 1) エンゲルス版では、以下の脚注 a) と、さらにそれに付けられた補足 +a)

の内容は、直前のパラグラフの終りに組み込まれている。

- 2) 「(」および「)」——削除。
- 3) 「地金」→「金」
- 4) 「唯一の「準備資本」」→「「唯一の」準備資本」
- 5) エンゲルス版では、ここで改行されていない。

557 第1258号。⁴⁾「私の考えでは、実際には、割引率は国内にある遊休資本の額によって左右されます。遊休資本の額はイングランド銀行の準備によって代表されますが、これは実際には地金の準備です。ですから、もし地金が引き出されれば、このことは国内の遊休資本の額を減らし、そしてその結果、まだ残っている遊休資本の価値を高くすることになります。」(『銀行法特別委員会 報告』, 1857年。) +a)/

① [注解] この引用での強調はマルクスによるもの。

/351下/+a) ⁴⁾第1364号。¹⁾「イングランド銀行の地金の準備は、実のところ、この国の全取引が行なわれるための基礎である中央準備または蓄蔵貨幣〔hoard of treasure〕です。……この退蔵または貯水池こそ、たえず外国為替相場の影響を受けるものです。」²⁾³⁾【原注 a) 終り】 |

① [異文] この抜き書きは、[草稿の] ページの末尾に、脚注 c) に続けて書かれている。マルクスは +a) という記号で、この箇所を指示している。

- 1) 挿入——「{ニューマーチ : }」
- 2) 挿入——「(『銀行法委員会報告』, 1857年。)」
- 3) エンゲルス版では、ここで、「a) について」書かれた部分として収められた箇所が終わる。

557 /351上/2について。¹⁾²⁾ 商業信用の流れの停滞の表現でもなければ、また通貨³⁾なり再生産的当事者⁴⁾の準備貨幣資本⁵⁾なりの節約の表現でもないかぎりでの、貨幣資本〔moneyed capital〕蓄積⁶⁾。

- 1) 「2について。」(MEGA では強調されていないが、草稿では強調されているように見える。) → 「第2節 貸付資本に転化させられる貨幣への資本または収入の転化」(見出し)
- 2) 挿入——「われわれはここでは貨幣資本の蓄積を考察するのであるが、それは、」
- 3) 「通貨 [currency]」 → 「現実の流通手段 [das wirklich umlaufende Mittel]」
- 4) 「再生産の当事者 [reproductive Agenten]」 → 「再生産に携わる当事者」
- 5) 「準備貨幣資本 [Reserve-Geldcapital]」(MEGA ではハイフンが欠落して、Reserve Geldcapital となっている。) → 「準備資本 [Reservekapital]」
- 6) 挿入——「である」

いま述べた例外を別とすれば¹⁾、貨幣資本 [moneyed capital] の蓄積は、たとえば 1852 年と 1853 年に、オーストラリアとカリフォルニアの²⁾ [金鉱の] 発見の結果として生じたような、異常な地金³⁾ 流入によって⁴⁾ [生じる] こともありうる。[それらは] イングランド銀行に預金された⁵⁾。そのかわりに銀行券が受け取られたが、金の所有者であった人びとは⁶⁾、この銀行券を⁷⁾ すぐに銀行業者のもとに預金することをしなかった。そのために異常な通貨 [Circulation] [量が生じた]⁸⁾。⁹⁾ b) イングランド銀行は、割引率を 2% に下げることによって、この保管物 [deposits] を価値増殖させようとした。¹⁰⁾ [c] ¹¹⁾¹²⁾ |

- 1) 「いま述べた例外を別とすれば」 → 「この二つの場合を別とすれば」
- 2) 挿入——「新たな金鉱の」
- 3) 「地金」 → 「金」
- 4) 挿入——「生じる」
- 5) 「預金された」 —— deposited となっているが、deposited とあるべきところであろう。
- 6) 「そのかわりに銀行券が受け取られたが、金の所有者であった人びとは」 → 「預金者たちはそのかわりに銀行券を受け取ったが」
- 7) 挿入——「また」
- 8) 「そのために異常な通貨 [Circulation] [量が生じた]」 → 「そのために流通

手段は以上に増加した。」

- 9) エンゲルス版では、ここに、脚注 b) の内容が次のように組み込まれている。
——「(ウェゲリンの証言、『銀行法特別委員会』, 1857 年, 第 1329 号。)」
- 10) 「この保管物〔deposits〕を価値増殖させようとした。」→「この預金を利用しようとした。」
- 11) 草稿では、脚注 c) に対応する、本文のなかの注番号 c) が書かれていないが、それはおそらく、ここに付けられるべきであったと考えられる。
- 12) エンゲルス版では、ここに、脚注 c) の内容が、次のように組み込まれている。
——「イングランド銀行に積まれた金量は、1853 年の 6 か月のあいだに 2200 万-2300 万に増大した。」(脚注から引き継がれている「1853 年」は「1852 年」とあるべきところである。脚注 c) への注 1) を見よ。)

【原注】 /351 下/b) 同前 (ウェゲリン), 第 1329 号。【原注 b) 終り】

【原注】 ⁴c) 同前 (ニューマーチ), 第 1353 号。当時, 1853 年¹⁾ の 6 か月のあいだに, イングランド銀行にあった地金は 2200 万-2300 万であった。
【原注 c) 終り】/

① 【注解】 マルクスは c) という脚注番号を本文のなかに書かなかった。

- 1) 「1853 年」——「1852 年」の誤りであろう。これについては、三宅義夫氏が次のように指摘されていた。「この「1853 年」は明らかに「1852 年」の誤りであろう。「1853 年」には……イングランド銀行の金準備は逆に流出し、減少した。」(前出『マルクス・エンゲルス イギリス恐慌史論』, 上, 117 ページ。)

| 352 上 | すでに見たように生産的資本家¹⁾が行なう実体的な²⁾蓄積は³⁾再生産的資本の諸要素そのもので⁴⁾行なわれるのにたいして, ⁵⁾すべての貨幣資本家〔moneyed capitalist〕⁵⁾が行なう蓄積²⁾は⁶⁾直接にはつねに⁷⁾貨幣形態で行なわれる。だから, 信用制度〔Creditwesen〕の発展や⁸⁾貨幣業務⁹⁾の巨大な集積は, それ自体として, ¹⁰⁾貨幣資本〔moneyed Capital〕¹¹⁾の蓄積を, 現実の蓄積とは異なった形態として促進せざるをえない。貨幣資本〔moneyed Capital〕¹²⁾のこうした¹³⁾発展は, つまるところ¹⁴⁾現実の蓄積の³⁾—結果である。というのも, その発展は再生産過程の発展の

結果なのであり、またこれらの貨幣資本家〔moneyed Capitalist〕の④蓄積源泉となる利潤は、ただ、再生産的資本家が手に入れる剰余価値からの一控除分 {¹⁵⁾ 同時に他人の¹⁶⁾ 貯蓄の利子の一部分の取得}¹⁵⁾ でしかないのだからである。それは¹⁷⁾、同時に⁵⁾再生産的資本家諸階級¹⁸⁾の犠牲において蓄積するのである。たとえば¹⁹⁾、産業循環の不況局面²⁰⁾では、利子率が非常に高くなって、しばしば²¹⁾その利潤を一時はすっかり呑み込んでしまうこともあるほどである。^{6)a)}²²⁾それと同時に、国債証券やその他の有価証券の価格が下がる。これは、貨幣資本家〔moneyed capitalist〕たちがこれらの減価した有価証券に大量に投資する²³⁾時期であって、これらの証券はそのあとの局面ではやがてふたたびその正常な高さにまで、またそれ以上に上がる。そこで、これらの証券は売り放たれ、こうして公衆の貨幣資本〔moneyed Capital〕の一部分が取り込まれる。持ち続けられる²⁴⁾部分は、⁷⁾そのときの価格よりも安く買われたのだから、より高い利子をあげることになる。しかし彼ら²⁵⁾は、自分が儲⁵⁵⁸けて資本に再転化させる利潤をすべて、⁸⁾まず第1に、貸付可能な「²⁶⁾貨幣資本」²⁶⁾〔loanable „moneyed Capital“〕に転化させる。つまり、⁹⁾後者の資本の蓄積は、現実の蓄積の所産であるにもかかわらず、それとは区別されるものなので、それは、貨幣資本家〔moneyed capitalist〕たち⁽²⁷⁾銀行業者、等々²⁷⁾そのものだけを考察する場合にも、すでにこの特殊的部類の資本家の蓄積として続いて生じるのである。そしてそれは、再生産過程の現実の拡大に伴って信用制度〔Creditwesen〕が拡張されるごとに、それにつれて増大せざるをえないのである。

①〔異文〕「すべての」——あとから書き加えられている。

②〔異文〕ここに、「(とりわけ〔……〕)」と書いたのち消している。

③〔異文〕「一結果」←「表現」

④〔異文〕「蓄積源泉」←「蓄積ファンド」

⑤〔異文〕「再生産的資本家階級〔Reproductive Capitalistenklasse〕」←「生産的資本家階級〔Productive Capitalistenklasse〕」

- ⑥〔注解〕 脚注 a) をマルクスは仕上げなかった。
- ⑦〔異文〕 ここに、「はるかに」と書いたのち消している。
- ⑧〔異文〕 「まず第1に、」——あとから書き加えられている。
- ⑨〔異文〕 ここに、「既に〔……〕本性からも」と書いたのち消している。
- 1) 「生産的資本家」→「産業資本家」
- 2) 「実体的な〔real〕」→「現実の〔wirklich〕」
- 3) 挿入——「通例は」
- 4) 「再生産的資本の諸要素そのもので」→「再生産的資本の諸要素そのものの増加によって」
- 5) 「貨幣資本家〔moneyed capitalist〕」→「貨幣貸付資本家」
- 6) 挿入——「言うまでもなく」
- 7) 「直接にはつねに」→「つねに直接に」
- 8) 挿入——「大銀行の手中での」
- 9) 「貨幣業務〔moneyed concerns〕」→「貨幣貸付業務」
- 10) 挿入——「すでに」
- 11) 「貨幣資本〔moneyed Capital〕」→「貸付可能な資本」
- 12) 「貨幣資本〔moneyed Capital〕」→「貸付資本」
- 13) 挿入——「急速な」
- 14) 「つまるところ〔also〕」→「それゆえに〔daher〕」
- 15) 「{ } および { } 」→「() および () 」
- 16) 「他人の」——エンゲルス版でも強調されている。
- 17) 「それは」→「貸付資本は」
- 18) 「再生産的資本家諸階級」→「産業資本家と商業資本家と」
- 19) 「たとえば」→「すでに見たように」
- 20) 「不況局面」—— adverse phases → ungünstige Phasen
- 21) 「しばしば」→「個々のとくに不利な状態にある事業部門では」
- 22) 「a) 」——削除。（上の注解注⑥を見よ。）
- 23) 「投資する」→「買い集める」
- 24) 「持ち続けられる」→「売り放たれない」
- 25) 「彼ら」→「貨幣資本家」
- 26) 「{ } および { } 」——削除。
- 27) 「() および () 」——削除。

利子率が低ければ、貨幣資本〔moneyed capital〕の減価はおもに預金

者（彼らの^①預金のうち、株式銀行が最近発展するまでは、その4分の3は、銀行業者のもとでも、ただ^②、つまり無利子だった）^③b)の負担になって銀行^③の負担にはならない。^④

- ① [異文]「預金」——あとから書かれている。
- ② [異文]「、つまり無利子」——あとから書き加えられている。
- ③ [注解] 脚注 b) をマルクスは仕上げなかった。

- 1) 「(彼らの預金のうち、株式銀行が最近発展するまでは、その4分の3は、銀行業者のもとでも、ただ、つまり無利子だった)」——エンゲルス版では、この部分は、前後の括弧をはずし、次の独立の文とされた。——「イギリスでは全銀行預金の4分の3は無利子だった。」
- 2) 「b)」——削除。(上の注解注③を見よ。)
- 3) 「銀行」→「銀行業者」
- 4) 挿入——「今日この銀行預金に利子が支払われる場合にも、その利子は現行利子率よりも少なくとも1%は低い。」

いま、^{①②} そのほかの諸階級の貨幣蓄積について言えば、われわれは、利子生み証券に投下されてこの形態で蓄積される部分は度外視する。われわれは、ただ、「貨幣」資本\貸付可能な資本 [„moneyed“\loanable Capital]^③ として市場に投げられる部分だけを考察する。

- 1) 「いま {nun},」——削除。
- 2) 挿入——「資本家の」
- 3) 「「貨幣」資本\貸付可能な資本 [„moneyed“\loanable Capital]」——MEGA では、草稿で「貨幣」[„moneyed“]のうえに「貸付可能な [loanable]」と書かれていることを、このようにして示している。(草稿では、「貸付可能な」という語だけが上に書かれているのであるが、この表記法では、「貨幣」の上に「貸付可能な」と書かれているのか、それとも「貸付可能な資本」と書かれているのか判然としない。)

まず第1に^①、利潤のうち、収入として支出されないで蓄積に向けられる部分、といっても再生産的資本家^②にとって自分の事業のなかでは直接

の³⁾ 使い途のない部分⁴⁾。この利潤は直接には、^①商品資本のうちに、その価値の一部分として存在している⁵⁾。いま、商品資本⁶⁾ が(商人はここでは⁷⁾ さしあたり度外視しよう⁸⁾、彼らについては別に述べるであろう)(商品資本のうち、当初の資本に等しい価値部分だけでなく、利潤の部分にイコール〔の価値部分〕も)⁹⁾ 自分の¹⁰⁾ 生産諸要素に再転化させられないかぎりには、それは貨幣に実現されて、一時、貨幣の形態で存在しなければならない¹¹⁾。この〔利潤〕量は資本そのものの量とともに増大する(¹²⁾ 利潤率が下がる場合でさえも)¹²⁾。収入として支出されるべき部分はだんだんと¹³⁾ 消費されて行くが、そのあいだは預金として^②銀行業者のもとで貨幣資本〔moneyed Capital〕¹⁴⁾ を形成する。だから、利潤のうち収入として支出される部分の増大でさえも、^③一時的な¹⁵⁾、しかしたえず繰り返される、貨幣資本〔moneyed Capital〕の蓄積として表現されるのである。¹⁶⁾〔利潤のうちの〕もう一つの、蓄積に向けられている部分も同様である。だから、信用制度〔Creditwesen〕とその組織との発展につれて、収入の(^④再生産的資本家たちの消費の)¹⁷⁾ 増大でさえも、貨幣資本〔moneyed Capital〕¹⁸⁾ の蓄積として表現されるのである。そして、このことは、収入がだんだんに消費されて行くかぎりでは、すべての収入にあてはまる。つまり地代、比較的高級な形態¹⁹⁾ の労賃^⑤、不生産的諸階級の収入、等々にもあてはまる。{²⁰⁾ 生産的資本家を度外視すれば、²¹⁾ すべての収入が一時²²⁾、貨幣収入²³⁾ の形態をとるのであり、したがってまた預金に、だからまた貨幣資本〔monied Capital〕²⁴⁾ に転化することができるのである。}²⁰⁾ 収入は、貨幣に転化された、商品資本の一つの価値部分であり、したがってまた現実の蓄積の表現でもあれば結果でもあるが、しかし生産的資本そのものではない、ということは、どんな収入についても、それが消費に向けられていようと蓄積に向けられていようと、²⁵⁾貨幣形態で存在していさえすれば〔561〕²⁶⁾ およそどんな貨幣形態であろうと²⁷⁾、言えることである。ある紡績業者が自分の商品²⁸⁾ を綿花等々²⁹⁾ と交換したが、収入をなす部分は貨幣と交換したとすれば、彼の生産的資本³⁰⁾ の現実の定在は、

織物業者または³¹⁾ 個人的消費³²⁾ の手に (糸の種類に応じて)³³⁾ 移った糸であり、しかもこの糸は、再生産のためのものであろうと消費のためのものであろうと、そのなかに潜んでいる価値³⁴⁾ の定在でもあれば剰余価値の定在でもある。貨幣に転化する剰余価値の大きさは、糸に潜んでいる剰余価値の大きさによって定まる。しかし、糸が貨幣に転化してしまえば、この貨幣はただこの剰余価値の価値定在でしかないのである。そして、このようなものとしてこの貨幣は貨幣資本 [monied capital]³⁵⁾ の契機になる。それがそうなるためには³⁶⁾ もしその所有者自身によって³⁷⁾ 貸し出されていなければ³⁸⁾、それが預金に転化することよりほかにはなにも必要ではない。この貨幣が生産的資本に再転化されるべきであるなら、それが再転化される量、等々は、再生産諸要素の価格や量的規模 [Massenhaftigkeit] にかかっているのである。³⁸⁾ | ³⁹⁾

① [異文] 「商品資本」←「商品」

② [異文] 「銀行業者のもとで」——あとから書き加えられている。

③ [異文] 「一時的な、しかし」——あとから書き加えられている。

④ [異文] ここに、「利子のうち [von Zins]」と書いたのち消している。

⑤ [異文] ここに、「(本来の賃労働者の節約でさえも)」と書いたのち消している。

1) 「まず第1に」→「ここでまず第1にわれわれの前にあるのは」

2) 「再生産的資本家」→「産業資本家」

3) 「直接の」→「さしあたり」

4) 挿入——「である」

5) 「商品資本のうちに、その価値の一部分として存在している」→「それを自分の価値の一部分とする商品資本のうちに、その価値の一部分として存在している」

6) 「商品資本」→「この部分」

7) 「ここでは」——削除。

8) 「しよう」→「する」

9) 「(商品資本のうち、当初の資本に等しい価値部分だけでなく、利潤の部分にイコール [の価値部分] も)」——削除。

- 10) 「自分の」→「商品資本の」
- 11) 「それは貨幣に実現されて、一時、貨幣の形態で存在しなければならない」
→「それはしばらくは貨幣形態のままではないなければならない」
- 12) 「(」および「)」——削除。
- 13) 「だんだんと」——ここでもそうであるが、マルクスは *au fur et à mesure* という語を *à fur et mesure* と書く癖があった。MEGA は、このうちの *mèsure* をすべて *mesure* に修正している。
- 14) 「貨幣資本 [*moneyed Capital*)]」→「貸付資本」
- 15) 「一時的な [*temporär*)]」→「漸次的な」
- 16) 挿入——「そして、」
- 17) 「(再生産的資本家たちの消費の)」→「すなわち産業資本家や商業資本家の消費の」
- 18) 「貨幣資本 [*moneyed Capital*)]」→「貸付資本」
- 19) 「形態」(単数)→「諸形態」
- 20) 「{」および「}」——削除。
- 21) 「生産的資本家を度外視すれば、」——削除。
- 22) 「一時 [*einen Augenblick*)]」→「ある期間 [*für eine gewisse Zeit*)]」
- 23) 「貨幣収入 [*Geldrevenue*)]」——筆者のノートでは「貨幣準備 [*Geldreserve*)]」となっている。手稿にあたって再確認することができていない。エンゲルス版では「貨幣収入」である。
- 24) 「貨幣資本 [*monied Capital*)]」→「貸付資本」
- 25) 挿入——「なんらかの」
- 26) ここで、559-560 ページが飛んでいるのは、559 ページは草稿 352a ページ(「混乱」の最初のページ)のファクシミリ、560 ページはその裏面となっているからである。
- 27) 「(およそどんな貨幣形態であろうと)」——削除。
- 28) 「商品」→「糸」
- 29) 「等々」——削除。
- 30) 「生産的資本」→「産業資本」
- 31) 挿入——「場合によっては [*etwa*)]」
- 32) 「消費」→「消費者」
- 33) 「(糸の種類に応じて)」——削除。
- 34) 「価値」→「資本価値」
- 35) 「貨幣資本 [*monied capital*)]」→「貸付資本」
- 36) 「(」および「)」——削除。

37) 挿入——「すでに」

38) 「この貨幣が生産的資本に再転化されるべきであるなら、それが再転化される量、等々は、再生産諸要素の価格や量的規模〔Massenhaftigkeit〕にかかっているのである。」→「ところが、この貨幣が生産的資本に再転化させられるためには、それはすでに一定の最小限度に達していなければならないのである。」

39) 草稿ではここに、「混乱〔D. Confusion〕」という表題がつけられた抜萃録（352a-352j ページ）が置かれている（MEGA の 561-583 ページ）。この部分は別稿で取り扱うことにし、本稿では省く。

[III) 561 ページの続き]

[エンゲルス版「第 32 章 貨幣資本と現実資本・Ⅲ（結び）」]

[584] | 353 上 | ¹⁾このように資本に再転化する大量の貨幣は、大量的な再生産過程の結果であるが、そのものとして見れば、つまり²⁾貨幣資本〔moneyed Capital〕としては、それ自身は大量の再生産的資本ではない。

1) 挿入——「第 32 章 貨幣資本と現実資本・Ⅲ（結び）」（表題）ここから、エンゲルス版で「第 32 章 貨幣資本と現実資本・Ⅲ（結び）」に利用された部分が始まる。

2) 挿入——「貸付可能な」

これまでに説明したことで最も重要なのは、収入のうち消費に向けられている部分の膨張 {¹⁾この場合労働者は度外視する、なぜなら労働者の収入は可変資本にイコールだからである}¹⁾は²⁾貨幣資本の蓄積として現われるということである。つまり、貨幣資本の蓄積には、生産的資本³⁾の現実の蓄積とは本質的に違った一つの契機はいるのである。というのも、年間生産物のうちで消費に向けられる部分はけっして資本にはならないのだからである。⁴⁾そのうちの一部分は、資本を、すなわち生活手段⁵⁾の生産者たちの不変資本を補填する⁶⁾が、しかし、その部分が現実には資本に転

化するかぎりでは、それは⁷⁾ 不変資本の生産者の収入の現物形態で存在する。⁴⁾収入を表わしておりたんなる、消費の手段⁸⁾として役立つその同じ貨幣が、たえず⁹⁾、貸付可能な「¹⁰⁾貨幣資本」¹⁰⁾ (loanable „monied capital“) に転化するのである。この貨幣が労賃を表わしているかぎりでは、それは同時に可変資本の貨幣形態であり、また、それが生活手段¹¹⁾の生産者の不変資本を補填するかぎりでは、それは彼らの不変資本の¹²⁾ 貨幣形態であって、^①補填されるべき彼らの不変資本の移転〔transfer〕に¹³⁾ 役立つ。しかし、¹⁴⁾ この二つの形態のどちらにあっても、この貨幣は、たとえその量は再生産過程の規模につれて増大するにしても、それ自体としては蓄積を表わしてはいない。しかし、それが同時に、²⁾ 一時的には¹⁵⁾、貸付可能な「貨幣資本」(loanable „monied capital“) の¹⁶⁾ 機能を、すなわち貸付可能な〔ausleihbar〕貨幣としての機能を遂行するのである。だから、この面から見れば、貨幣資本〔monied capital〕の蓄積は、つねに、現実存在するよりも大きな資本蓄積を表現¹⁷⁾ せざるをえないのである。というのは、個人的消費過程は、その媒介と拡大とにおいて、¹⁸⁾ 貨幣資本〔monied Capital〕の蓄積として現われるから、つまり、現実の蓄積のために、新たな資本投下を開始する貨幣のために、貨幣形態を提供するからである。

①〔異文〕「補填されるべき彼らの」←「費消さ[れた]〔aufgezehrt〔ten〕〕」

②〔異文〕「一時的には、」——あとから書き加えられている。

1) 「{ } および { }」→「() および ()」

2) 挿入——「さしあたりは」

3) 「生産的資本」→「産業資本」

4) 「() および ()」——削除。

5) 「生活手段」→「消費手段」

6) 「補填する」——エンゲルス版では強調されている。

7) 挿入——「この」

8) 「手段」→「媒介者」

9) 「たえず」→「通例は、しばらくのあいだ」

- 10) 「「」 および「」」——削除。
- 11) 「生活手段」→「消費手段」
- 12) 「彼らの不変資本の」→「彼らの不変資本が一時的にとる」
- 13) 「移転〔transfer〕に」→「の現物要素を買うのに」
- 14) 「しかし、」——削除。
- 15) 「同時に、一時的には〔temporär〕」→「しばらくは〔zeitweilig〕」
- 16) 「貸付可能な「貨幣資本」〔loanable „monied capital“〕の」→「貸付可能な貨幣の、したがって貨幣資本の」
- 17) 「表現」→「反映」
- 18) 「個人的消費過程は、その媒介と拡大とにおいて、」→「個人的消費の拡大は、貨幣に媒介されていないために、」

⁽¹⁾²⁾ 貨幣資本〔monied Capital〕の蓄積は、一部は、次の事実のほかにはなにも表わしてはいない。すなわち、再生産的資本の実体的な〔real〕諸要因の直接的な交換を度外視すれば、³⁾ 再生産的資本がその過程でとる形態である貨幣⁴⁾ は、すべて、再生産する人々〔die Reproduktiven〕が前貸する貨幣ではなくて⁵⁾ 彼らが借りる⁶⁾ 貨幣という形態をとるのであり、⁷⁾ 実際には、再生産過程で行なわれなければならない貨幣の前貸が借りられた貨幣の前貸として現われる、という事実である。実際には、⁸⁾ 一方の人が他方の人に、彼が再生産過程で必要とする⁹⁾ 貨幣を貸すのである。ところが、このことが、銀行業者が再生産する人々に貨幣を貸す、という形態をとるのであって、これは、再生産する人々が事実上は、彼ら自身もその一人である公衆に、彼らが必要とする貨幣資本〔money capital〕の残高を委ねる、というのと同じことである。585 それは同時に、この資本の処分権はまったく仲介者〔Mittelperson〕としての¹⁰⁾ 銀行業者たちの手に握られてしまう、ということを表現している。¹¹⁾

① 〔異文〕「銀行業者たち〔bankers〕」←「貨幣貸〔付業者たち〕〔money l[enders]]」

1) 「{」および「}」——削除。
2) 挿入——「つまり〔also〕、貸付可能な」

- 3) 「再生産的資本の実体的な〔real〕諸要因の直接的な交換を度外視すれば、」——削除。
- 4) 「再生産的資本がその過程でとる形態である貨幣」→「産業資本がその循環の過程で転化して行く貨幣」
- 5) 「再生産する人々〔die Reproduktiven〕が前貸する貨幣ではなくて」→「再生産する資本家たちが前貸しする貨幣の形態をとるのではなくて」(エンゲルス版では、「前貸しする」が強調されている。)
- 6) 「借りる」—— leihen → borgen エンゲルス版では、この「借りる」は強調されている。
- 7) 挿入——「したがって」
- 8) 挿入——「商業信用の基礎の上では、」
- 9) 「必要とする〔braucht〕」——この語は、インクのしみがあって途中が見えなくなっている。MEGAは、この部分をrauと読んだうえで、解説に確信がもてないとしている。
- 10) 「ところが、このことが、銀行業者が再生産する人々に貨幣を貸す、という形態をとるのであって、これは、再生産する人々が事実上は、彼ら自身もその一人である公衆に、彼らが必要とする貨幣資本〔money capital〕の残高を委ねる、というのと同じことである。それは同時に、この資本の処分権はまったく仲介者としての銀行業者たちの手に握られてしまう、ということを表現している。」→「ところが、今ではこのことが次のような形態をとるのである。すなわち、再生産する人びとの一方の部分から貨幣を借りる銀行業者が、再生産する人びとの他方の部分にその貨幣を貸し、そこで銀行業者が福の神として現われ、それと同時に、この資本の処分権はまったく仲介者としての銀行業者の手に握られてしまう、という形態である。」

{¹⁾ 資本(使命から見て)への収入の再転化とはさらに区別されるべき、貨幣資本の蓄積の二つの形態。²⁾たとえば、原料やその他の生産要素³⁾の価格の下落によって資本が「⁴⁾遊離させ〔liberate〕」⁴⁾られる。資本家⁵⁾が直接に自分の再生産過程を拡張することができなければ、彼の貨幣資本の一部分は循環のなかでのその機能から遊離して⁶⁾、^①貸付可能な貨幣資本〔loanable monied capital〕に転化する。第2に、たとえばことに商人の場合には、金または銀での還流は彼にとって最悪の種類の還流であって、^②というのも、彼は商品での還流の場合にはさらに^③商品の価格に加えら

れた利潤をあげることができるのであって、第1に最初の商品の販売のところで、次には返り荷商品〔Returnware〕の販売のところでそうできるのだが、他方金または銀は、国内貨幣の材料となっている商品であって、いつでもただその価値を実現するだけであり、ただ、一定分量（それ自身の価値の大きさによって規定されている分量）の国内貨幣に転化できるだけだからである。⁷⁾ところで、中断が生じ、そのために商人が新しい取引をもっとあとでなければ始められないとすれば⁸⁾、⁹⁾貨幣は彼にとってはただ蓄蔵貨幣を表わし、遊休¹⁰⁾資本を表わしているだけである。しかし、同時にそれは直接に貸付可能な「¹¹⁾貨幣資本」¹¹⁾〔loanable „monied Capital“〕の蓄積を表わしている。一方の¹²⁾場合には、貨幣資本〔monied Capital〕のこの¹³⁾蓄積が表現しているのは、^④より有利な諸条件のもとでの再生産過程の反復であり、それ以前は拘束されていた資本の一部分が現実には遊離することであり、つまり、^⑤同じ資金〔Geldmittel〕での再生産過程の拡張の力〔Power〕¹⁴⁾である。¹⁵⁾他方の場合には、〔それは〕たんなる取引の流れの中断〔を表現している〕。しかしどちらの形態¹⁶⁾にも、その貨幣は¹⁷⁾貨幣資本〔monied Capital〕に転化し、この資本の蓄積を表わし、ひとしく貨幣市場、利子率¹⁸⁾に影響を与える。といっても、現実の蓄積過程へのその関係は対立的な性質のものなのではあるが¹⁹⁾。最後に、貨幣資本〔monied Capital〕の蓄積は、一財産を作って再生産から引退する連中の量によって規定される²⁰⁾。産業循環のなかでの²¹⁾利潤が多ければ多いほど、これらの「引退する〔retiring〕」greengrocer²²⁾の数はそれだけ大きくなる。それゆえ²³⁾、²⁴⁾貨幣資本〔monied capital〕のこうした蓄積が表現するものは、一方では現実の蓄積であり^⑥（その相対的な大きさから見れば）、他方ではつねに²⁵⁾「ただ、再生産的資本家が²⁶⁾貨幣資本家〔monied capitalist〕に転化する範囲だけである。」¹⁾ |

①〔異文〕「貸付可能な」——あとから書き加えられている。

②〔異文〕はじめ、ここにピリオドを打って文を終えたが、それをコンマに変

更して、以下の部分を書き継いだ。

- ③〔異文〕「商品の価格に加えられた」←「商品の価値に加えられた」←「商品に加えられた」
- ④〔異文〕ここに、「現実の蓄積」[wirkliche Ac[cumulation]]と書いたのち消している。
- ⑤〔異文〕ここに、「現実の拡大」[wirkliche Er[weiterung]]と書いたのち消し、さらに「現実の可能性」と書いたのち消している。
- ⑥〔異文〕「(その相対的な大きさから見れば)」——あとから書き加えられている。
- ⑦〔異文〕「ただ、再生産的資本家が貨幣資本家に転化する範囲だけである」
←「たんなる〔……〕転化である」

- 1) 「{ } および 「 」 」——削除。
- 2) 「資本(使命から見て)への収入の再転化とはさらに区別されるべき、貨幣資本の蓄積の二つの形態。」→「貨幣資本の蓄積については、このほかにもいくつかの特殊の形態を挙げることができる。」
- 3) 「原料やその他の生産要素」→「原料などのような生産要素」
- 4) 「「 」 および 「 」 」——削除。
- 5) 「資本家」→「産業家」
- 6) 「循環のなかでのその機能から遊離して」→「余分なものとして循環から突き離されて」
- 7) 「第2に、たとえばことに商人の場合には、金または銀での還流は彼にとって最悪の種類のものであって、というのも、彼は商品での還流の場合にはさらに商品の価格に加えられた利潤をあげることができるのであって、第1に最初の商品の販売のところで、次には返荷商品(Returnware)の販売のところでそうできるのだが、他方金または銀は、国内貨幣の材料となっている商品であって、いつでもただその価値を実現するだけであり、ただ、一定分量(それ自身の価値の大きさによって規定されている分量)の国内貨幣に転化できるだけだからである。」→「第2に、事業に中断が生じれば、ことに商人の場合には、資本が貨幣形態で遊離させられる。」
- 8) 「ところで、中断が生じ、そのために商人が新しい取引をもっとあとでなければ始められないとすれば」→「商人がすでに一連の取引をすませていて、新しい取引はこのような中断のためにもっとあとでなければ始められないとすれば」
- 9) 挿入——「実現された」

- 10) 「遊休」→「余分な」
- 11) 「「」および「」」——削除。
- 12) 「一方の」→「第1の」
- 13) 「この」——削除。
- 14) 「拡張の力〔Power〕」→「拡張の能力付与〔Befähigung〕」
- 15) 挿入——「これに反して、」
- 16) 「形態」→「場合」
- 17) 挿入——「貸付可能な」
- 18) 「貨幣市場，利子率」→「貨幣市場および利子率」
- 19) 「といっても，現実の蓄積過程へのその関係は対立的な性質のものなので
はがあるが」→「といっても，それは一方の場合には現実の蓄積過程の促進を表
現し，他方の場合にはその阻止を表現しているのではあるが」
- 20) 「連中〔Kerl〕の量によって規定される」→「人びとの数によってもたらさ
れる」
- 21) 「産業循環のなかでの」→「産業循環の経過中の」
- 22) 「「引退する〔retiring〕greengrocer」→「彼ら」 マルクスはここで，また
のちにも（本稿 277 ページ），生産・商業から引退した資本家を greengrocer
と呼んでいるが，文字どおり「八百屋」を意味しているのではないことは明らか
である。しかし，マルクスが彼らをなぜこのように呼ぶのか，筆者にはまった
く見当がつかないので，原語を掲げておく。ご存知の方のご教示を得たい。
- 23) 「それゆえ」→「ここでは」
- 24) 挿入——「貸付可能な」
- 25) 「つねに」——削除。
- 26) 挿入——「たんなる」

「354 上」ところで，利潤のもう一つの部分，すなわち収入として消費
されるものとして予定されていない部分について言えば，それが貨幣資本
〔moneyed Capital〕に転化するの，ただ，それが直接に，それを生み
だした生産部面での事業の拡張に充用されない場合だけである。このよう
なことは二つの原因から生じうる。一つの原因は，この部面¹⁾が必要な²⁾
資本で飽和状態にある〔saturated〕ということである。もう一つの原因
は，資本として機能できるようになるまえに³⁾，蓄積がまずもって，この
特定の〔586〕事業での新たな資本の充用の量的関係に規定された⁴⁾ 或る程

度の大きさに達していなければならない、ということである。だから、蓄積はさしあたりまず⁵⁾ 貨幣資本〔moneyed Capital〕に転化して、他の諸部面での生産の拡張に役立つのである。⁶⁾ 諸事情がすべて変わらないものと仮定すれば、資本への再転化に予定される利潤の量は、得られる利潤の¹⁾量によって、したがってまた、諸事情がすべて変わらないものと前提すれば、⁷⁾ 現実の⁸⁾ 再生産過程⁹⁾の拡張によって、左右されるであろう。しかし、もしこの新たな蓄積がその充用にさいして投下部面の不足から生じる困難に¹⁰⁾ ぶつかる¹¹⁾ (したがって、その結果さらに¹²⁾、充用中の再生産的資本が支払う利子が低下することになる)¹³⁾ とすれば、このような¹⁴⁾ 貨幣資本〔moneyed Capital〕のプレトラが証明するものは、資本主義的¹⁵⁾ 生産過程¹⁶⁾の諸制限以外のなにものでもない。そのあとにくる信用詐欺は、この剰余資本¹⁷⁾の充用にたいする積極的な障害がない、ということを証明している。とはいえ、資本の価値増殖の諸法則〔Verwerthungsgesetze〕への¹⁸⁾ 障害、つまり資本が資本として価値増殖できる諸限界への¹⁹⁾ 障害があるのである。²⁾ 貨幣資本〔moneyed capital〕そのもののプレトラは必ずしも過剰生産を、あるいは²⁰⁾ 資本の充用場面の不足を²¹⁾ 表現するものではない。

① 〔異文〕「量〔Masse〕」←「大きさ〔Grösse〕」〔MEGA 編集部はこの Grösse を「確実な解説ではない」としている。〕

② 〔異文〕この一文はあとから書き加えられている。

1) 「この部面〔diese Sphäre〕」——草稿では、dieser Sphäre と誤記されている。MEGA では、訂正目録への記載なしに、訂正している。

2) 「必要な」——削除。

3) 「機能〔functioniren〕できるようになるまえに」→「機能〔fungieren〕できるようになるためには」

4) 「に規定された」→「に応じて、」

5) 挿入——「貸付可能な」

6) 挿入——「他の」

7) 「諸事情がすべて変わらないものと前提すれば、」——削除。

- 8) 「現実の」——削除。
- 9) 挿入——「そのもの」
- 10) 「投下部面の不足から生じる困難に [auf Schwierigkeiten; aus Mangel an sphere of employment]」→「困難に，投下部面の不足に [auf Schwierigkeiten, auf Mangel an Anlagesphären]」草稿での aus Mangel の aus が auf の誤記であった可能性もある。
- 11) 「ぶつかる」→「ぶつかり，したがって諸生産部門の過度充満や貸付資本の過剰供給が生じる」
- 12) 「さらに [nun]」——MEGA は nur と読んでおり，そうであれば，「ただ，充用中の再生産的資本が支払う利子が低下することになるだけである」という意味になるが，誤りであろう。
- 13) 「(したがって，その結果さらに，充用中の再生産的資本が支払う利子が低下することになる)」——削除。
- 14) 挿入——「貸付可能な」
- 15) 「資本主義的」——エンゲルス版でも強調されている。
- 16) 「生産過程」→「生産」
- 17) 「剰余資本 [surplus Capital]」→「過剰な資本」
- 18) 「への [an]」→「による [vermöge]」
- 19) 「への [an]」→「による [vermöge]」
- 20) 「あるいは」——削除。
- 21) 挿入——「さえも」

ちなみに次のことを考えるならば，すなわち，¹⁾ 貨幣資本 [moneyed Capital]²⁾ の蓄積とは，ただたんに，貨幣が ¹⁾ 貸付可能な貨幣 [verleihbares Geld] として沈殿する（あるいは貸付可能な貨幣 [verleihbares Geld] という形態をとる）³⁾ ことであって，⁴⁾ この過程は，貨幣の⁵⁾ 資本への現実の転化とは非常に違うものである（⁶⁾ それはただ，貨幣が資本に，それ自体としては自由に処理できない資本に，⁷⁾ 転化されうのような形態での，貨幣の蓄積にすぎない）⁶⁾ こと，⁸⁾ この蓄積は，すでに指摘したように，現実の蓄積とは非常に違った諸契機を表現していることがありうること，⁹⁾ ——こうしたことを考えるなら，¹⁰⁾ 現実の蓄積がたえず拡張されている場合に，¹¹⁾ 貨幣資本の蓄積の¹¹⁾ 拡張は，一部は現実の蓄積の拡張の結果でも

ありうるし、一部は現実の蓄積の拡張に伴ってはいるがそれとはまったく違った諸契機の結果でもありうる(〔両者の〕対立〔の場合〕は度外視するとしても)¹²⁾〔ということになる〕。現実の蓄積からは独立していながらしかも¹³⁾それに随伴するそのような諸契機によって、貨幣資本〔monied Capital〕¹⁴⁾の蓄積が膨張させられる¹⁵⁾、という理由からだけでも、循環の一定の諸局面ではつねにこの¹⁵⁾貨幣資本〔monied Capital〕のプレトラが生ぜざるをえないのであり、また、信用制度〔Creditwesen〕の発展¹⁶⁾につれて、このプレトラが発展せざるをえないのであり、したがって同時に¹⁷⁾、生産過程をその資本主義的諸制限を乗り越えて駆り立てることの必然性が——過剰取引〔Overtrading〕、過剰生産〔Overproducing〕、過剰信用〔Overcrediting〕が——発展せざるをえないのである。しかも¹⁸⁾このことは、つねに、跳ね返り¹⁹⁾を呼び起こすような諸形態で起こらざるをえないのである。

- ①〔異文〕「貸付可能な貨幣として沈殿する」←「貸し付けられる」
- ②〔異文〕ここに、「この蓄積からは独立した蓄積のこうした拡張」と書いたのち消している。
- ③〔異文〕「、という理由からだけでも〔Schon weil〕」←「のだから〔Da〕」
- 1)「ちなみに次のことを考えるならば、すなわち、」——削除。
- 2)「貨幣資本〔moneyed Capital〕」→「貸付資本」
- 3)「(あるいは貸付可能な貨幣〔verleihbares Geld〕という形態をとる)」——削除。
- 4)「であって、」→「である。」
- 5)「貨幣の」——削除。
- 6)「(「および」)」——削除。
- 7)「それ自体としては自由に処理できない資本〔an und für sich nicht disponibles Capital〕に、」——削除。草稿でのこの句は、もしかすると、nichtが誤記であって、「それ自体として自由に処理できる資本」と読むべきところかもしれない。
- 8)「すぎないこと、」→「すぎない。しかし、」
- 9)「ありうること、」→「ありうる。」

- 10) 「——こうしたことを考えるなら、」——削除。
- 11) 挿入——「この」
- 12) 「ありうる（〔両者の〕対立〔の場合〕は度外視するとしても）」→「ありうるし、最後にまた一部は現実の蓄積の停滞の結果でさえもありうる。」
- 13) 「しかも」—— doch → dennoch
- 14) 「貨幣資本〔monied Capital〕」→「貸付資本」
- 15) 「この」——削除。
- 16) 「信用制度〔Creditwesen〕の発展」→「信用の発達〔Ausbildung〕」
- 17) 「えないのであり、したがって同時に」→「えない。そこで、また同時に信用の発達につれて」
- 18) 「しかも」→「それと同時に」
- 19) 「跳ね返り〔rebound〕」→「反動〔Rückschlag〕」

地代、労賃、等々からの貨幣資本の蓄積について言えば、ここでそれに立ち入るのは余計なことである。ただ次の契機だけは強調しておかなければならない。すなわち、現実の節約や禁欲の仕事（貨幣蓄藏者たちの）は、それが蓄積の諸要素を供給するかぎりでは、資本主義的生産様式¹⁾の進展に伴う分業によって、それらのうちの²⁾極小のものを受け取る人びと、すなわち、労働者等々³⁾のように、銀行の破産のさいには⁴⁾自分が貯蓄してきたものさえもなく 587 してしまうような人びとにゆだねられる、ということである。一方では、⁵⁾生産的資本家⁵⁾の資本は彼自身によって「貯蓄」されるのではなくて、彼は自分の資本の大きさに比例して他人の貯蓄を自由にするのであり、他方では、貨幣資本家〔monied Capitalist〕は他人の貯蓄を自分の「⁶⁾資本」⁶⁾にし、また、再生産的資本家たちが互いに与え合う信用や公衆が彼らに与える信用を自分の私的な致富源泉にするのである。資本は節儉と労働と⁷⁾の生みの子だという⁸⁾資本主義的システムの⁹⁾最後の幻想も、これでだめになってしまう⁹⁾。利潤が他人の労働の取得であるばかりではなくて、この他人の労働を¹⁰⁾搾取するための資本も「¹¹⁾他人の」¹¹⁾所有物からなっているのであって、この他人の所有物を貨幣資本家〔monied Capitalist〕が生産的資本家¹²⁾に自由に使わせ、そのか

わりに前者がこれはまたこれで後者を搾取するのである。

- ① [異文] 「生産的」——あとから書き加えられている。
- ② [訂正] 「最後の [letzte]」——手稿では「後者の [letztre]」となっている。
 - 1) 「資本主義的生産様式」→「資本主義的生産」
 - 2) 「それらのうちの」→「それらの要素のうちの」
 - 3) 「等々」——削除。
 - 4) 挿入——「非常にしばしば」
 - 5) 「生産的資本家」→「産業資本家」
 - 6) 「「」および「」」——削除。
 - 7) 「節儉と労働と」→「自己の労働と節儉と」
 - 8) 「だという」→「であるかのように思う」
 - 9) 「だめになってしまう [flötengehen]」→「砕かれてしまう [in die Brüche gehen]」
 - 10) 挿入——「動かし」
 - 11) 「「」および「」」——削除。
 - 12) 「生産的資本家」→「産業資本家」

なおもう少し信用資本について述べておかねばならない。

{¹⁾ 同じ貨幣片が何度貨幣資本 [monied Capital]²⁾ として役立ち [fungiren] うるかは、つまり、どれだけの額になるかは、^{3) 4)} まったく ⁴⁾ 次のことにかかっている。⁵⁾ (1) 同じ貨幣片が ²⁾ 販売あるいは支払で何度商品価値を実現するか、⁶⁾ また⁷⁾、何度それが収入を実現するか、ということにかかっている。この収入そのものが商品価値の || 355 上 | 一部分でしかないこともありうるのであって、この部分が労賃に ³⁾ (不生産的または生産的に) 投下されるのであろうと、あるいは、売り手自身または第3の人物が(貨幣貸付業者 [moneylender] または地主または国家がかわるがわる) 支出しなければならない剰余価値を実現するのであろうと、そうである。⁸⁾ それだから、それが実現された価値として (⁹⁾ 資本であれ収入であれ⁹⁾ 何度持ち手を取り替えるかは、明らかに、現実の諸取引の規模と量とにかかっているのである。¹⁰⁾ しかし、(2) ¹¹⁾ 諸支払の節約に、信用制度

〔Creditwesen〕の発展および組織化〔Organisation〕に、かかっている。
¹²⁾しかし、(3)信用の連鎖の速さ¹³⁾に⁽¹⁴⁾したがって、それがあつた点で預金
 として沈殿しても、それが¹⁵⁾すぐにまた貸付として出て行くということ、
 等々¹⁶⁾に^{④)}¹⁴⁾かかっている。^{⑤)}¹⁾

① 〔異文〕ここに、「〔諸支払の節約等々のような他のすべての事情が同じまま
 であるとすれば〕」と書いたのち消している。

② 〔異文〕「販売」←「購買」

③ 〔異文〕「(不生産的または生産的に)」——あとから書き加えられている。

④ 〔訂正〕「)」——手稿では欠けている。

⑤ 〔訂正〕「}」——手稿では欠けている。

1) 「{」および「}」——削除。

2) 「貨幣資本〔monied Capital〕」→「貸付資本」

3) 「つまり、どれだけの額になるかは、」——削除。

4) 挿入——「すでに述べたように、」

5) エンゲルス版ではここで改行されている。

6) 挿入——「したがって何度資本を移転するか」

7) 挿入——「さらに」

8) 「この収入そのものが商品価値の一部分でしかないこともありうるのであつて、この部分が労賃に(不生産的または生産的に)投下されるのであつたと、あるいは、売り手自身または第3の人物が(貨幣貸付業者〔moneylender〕または地主または国家がかわるがわる)支出しなければならない剰余価値を実現するのであつたと、そうである。」——削除。

9) 「(」および「)」——削除。

10) エンゲルス版ではここで改行されている。

11) 挿入——「これは、」

12) エンゲルス版ではここで改行されている。

13) 「連鎖の速さ〔d. rasche Verkettung〕」→「連鎖と作用速度」

14) 「(」および「)」——削除。

15) 挿入——「他の点では」

16) 「、等々」——削除。

貨幣資本〔monied Capital〕¹⁾が存在する形態が、^①ただ、²⁾貨幣の(3)金

銀の、すなわち⁴⁾ 自己の材料⁵⁾ が価値の尺度として役立つ商品の)³⁾ 形態だけだと仮定しても、この貨幣資本〔monied Capital〕の大きな一部分は、つねに必然的にたんに架空なものである、すなわち価値への権原〔Titel〕である(6) 価値章標と⁷⁾ 同様に⁸⁾。A は彼の商品または彼の労働を売り、それと引き換えに G を、貨幣〔money〕を受け取る。⁸⁾ この⁹⁾ 貨幣〔money〕が資本の変態¹⁰⁾ のなかで機能し¹¹⁾ なければならないかぎり、¹²⁾ それは¹³⁾ 貨幣資本〔monied Capital〕に転化するのではなく、²⁾ その所持者によって¹⁴⁾ 再生産¹⁵⁾ の諸要素と交換される。それがただちに収入の実現のために役立つかぎりでは、それは通貨〔currency〕として支払われてしまうのであり、したがってまた、貨幣資本〔monied Capital〕に転化することはできない(少なくともその所持者にとってはできない)。¹⁶⁾ しかし、それが貨幣資本〔monied Capital〕¹⁷⁾ に転化して、同じ貨幣が繰り返して貨幣資本〔monied Capital〕¹⁸⁾ を表わすかぎりでは、明らかに、それはただ一つの¹⁹⁾ 点で金属貨幣〔metallic money〕として存在するだけであって、他のすべての点では、それはただ資本への請求権〔claim〕というかたちで存在するだけである。これらの請求権〔claim〕の蓄積は、前提によれば、現実の蓄積から、すなわち商品資本等々の価値が貨幣に転⁵⁸⁸ 化することから、生じる。とはいえ、これらの請求権〔claim〕²⁰⁾ そのものの蓄積は、その源泉である現実の蓄積とも違うし、貨幣の貸出によって媒介される将来の蓄積(²¹⁾ 生産過程)とも違うのである。

① 〔異文〕「ただ〔blos〕」←「まったく〔ganz〕」

② 〔異文〕「その所持者によって」——あとから書き加えられている。

1) 「貨幣資本〔monied Capital〕」→「貸付資本」

2) 挿入——「現実の」

3) 「(」および「)」——削除。

4) 「すなわち」——削除。

5) 「材料〔Material〕」→「素材〔Stoff〕」

6) 「(」および「)」——削除。

- 7) 挿入——「まったく」
- 8) 「A は彼の商品または彼の労働を売り、それと引き換えに G を、貨幣 [money] を受け取る。」——削除。
- 9) 「この」——削除。
- 10) 「変態」→「循環」
- 11) 「機能し」—— functioniren → fungieren
- 12) 挿入——「それはある期間は貨幣資本を形成するが、しかし、」
- 13) 挿入——「貸付可能な」
- 14) 「その所持者によって」——削除。
- 15) 「再生産」→「生産的資本」
- 16) 「交換される。それがただちに収入の実現のために役立つかぎりでは、それは通貨 [currency] として支払われてしまうのであり、したがってまた、貨幣資本 [monied Capital] に転化することはできない（少なくともその所持者にとってはできない）。」→「交換されるか、または収入が実現されるときに流通手段 [Umlaufsmittel] として支払われてしまうのであり、その所持者のために貸付資本に転化することはできない。」
- 17) 「貨幣資本 [monied Capital]」→「貸付資本」
- 18) 「貨幣資本 [monied Capital]」→「貸付資本」
- 19) 「一つの」——エンゲルス版では強調されている。
- 20) 挿入——「または名義」
- 21) 挿入——「新たな」

一見したところ [prima facie], 貨幣資本 [moneyed Capital]¹¹⁾ はつねに貨幣 [money] の形態で存在する a)²⁾。(3) のちには貨幣への請求権 [claim upon money] として存在する。というのは、その最初の存在形態である貨幣 [money] は、貸付けられれば、⁴⁾⁵⁾ 今では借り手の手のなかで資本の現実の貨幣形態、貨幣資本 [money Capital] として機能する⁶⁾ からである。貸し手にとってはそれは貨幣への請求権 [claim upon money] に、あるいは⁷⁾ 所有権原に、転化してしまっている。それゆえ、同じ量の⁸⁾ 貨幣 [money] でも、非常に違った量の貨幣資本 [monied Capital] を表わすことができるのである。⁹⁾ また、⁹⁾ たんなる貨幣 [money] が、それ¹⁰⁾ が実現された資本であろうと実現された収入であろうと、たん

なる貸出の行為によって、預金へのその転化によって¹¹⁾〔貨幣資本〔monied Capital〕に〕なるのである。{¹²⁾発展した信用システム〔Credit-system〕のもとでの一般的な形態を考察する場合には、また商業的貸付〔d. commerciale loan〕が考察されるかぎりでは¹³⁾〔そうである〕}¹²⁾ ¹⁴⁾預金は預金者にとっては貨幣資本〔monied Capital〕である。しかしそれは、銀行業者の手のなかでは、その所持者¹⁵⁾の金庫のなかではなくて銀行業者の金庫のなかで遊休しているだけの、ただ可能的な貨幣資本〔potentielles monied Capital〕でしかないかもしれない。¹⁶⁾ b) ¹⁷⁾/

- 1) 「貨幣資本〔moneyed Capital〕」→「貸付資本」
- 2) ここにつけられた原注は、エンゲルス版でもそのまま脚注として収められている。原注 a) を見よ。
- 3) 「() および 「 」」——削除。
- 4) 「貸付けられれば、」——削除。
- 5) 「その最初の存在形態である貨幣〔money〕は、貸付けられれば、〔d. money, worin es zuerst, sobald es verliehn wird, existirt〕」——この原文は、d. money, worin es zuerst existirt, sobald es verliehn wird とあるべきところである。
- 6) 「資本の現実の貨幣形態、貨幣資本〔money Capital〕として機能する」→「現実の貨幣形態で存在している」
- 7) 「あるいは」——削除。
- 8) 挿入——「現実の」
- 9) 「また、」——削除。
- 10) 挿入——「の表わすもの」
- 11) 挿入——「貸付資本に」
- 12) 「{ } および 「 」」——削除。
- 13) 「、また商業的貸付が考察されるかぎりでは」——削除。
- 14) 「}」——草稿にはここにこの閉じ括弧があるが、MEGA では無視されている。
- 15) 「所持者〔Besitzer〕」→「所有者〔Eigentümer〕」
- 16) 草稿ではここに「) 」という閉じ括弧があり、MEGA はこれを、さきの「{ 」に対応する「} 」だと見ている。
- 17) ここにつけられた原注は、エンゲルス版でもそのまま脚注として収められて

いる。原注 b) を見よ。

【原注】 | 355 下 | a)¹⁾『〔銀行法特別〕委員会〔報告〕』, 1857 年, を見よ²⁾。

- 1) 以下の原注は、エンゲルス版でも脚注とされている。
- 2) 「を見よ」→「銀行業者トウエルズの証言」

「第 4516 号。銀行業者として、あなたが取引されている〔deal in〕のは資本ですか、それとも貨幣ですか？——私どもが取引しているのは貨幣です。第 4517 号。預金はどのようにして貴行に払い込まれるのですか？——貨幣です。第 4518 号。それはどのようにして払い出されるのですか。——貨幣です。第 4519 号。¹⁾では、預金は貨幣とは別のなにかだと言ってもよろしいのですか？——いいえ。」(銀行家トウエルズ), 『〔銀行法特別〕委員会〔報告〕』, 1857 年。²⁾

- 1) 「第 4519 号。」——エンゲルス版では落ちているが、MEW 版で補われている。
- 2) 「(銀行家トウエルズ), 『〔銀行法特別〕委員会〔報告〕』, 1857 年。」——削除。

オウヴェストンは¹⁾、「資本」と「貨幣〔money〕」とのあいだでたえず混乱におちいつている²⁾。利子とは、彼にとっては、³⁾ 貨幣〔money〕の価値⁴⁾ のことで ⁵⁾ もあるが、それは貨幣の量によって規定されているのであり⁵⁾、また彼は、その利子は生産的資本の利潤によって、あるいは生産的資本への需要によって⁶⁾ 規定されているのだから⁷⁾、それは資本の価値なのだ、と言う。⁸⁾

- ① 【異文】「も」——あとから書き加えられている。

- 1) 挿入——「(第 26 章を見よ)」
- 2) 「混乱におちいつている」—— sich confundiren → sich verwirren

- 3) 挿入——「[」
- 4) 挿入——「」」
- 5) 「のであり」→「かぎりでのことであり」
- 6) 「生産的資本の利潤によって、あるいは生産的資本への需要によって」→
「生産的資本にたいする需要によって、また生産的資本があげる利潤によって」
- 7) 「のだから」→「かぎりでは」
- 8) エンゲルス版ではここで改行されていない。

^{1)①}「第4140号。「²⁾資本」²⁾という言葉を使うのは非常に危険です。」

²⁾「第4148号。この国からの地金の輸出はわが国にある貨幣の量の減少でして、この国にある貨幣の量の減少は、もちろん、貨幣市場〔〕{ここでは³⁾つまり資本市場〔Capital market〕ではないのである}{〔〕一般への圧迫をつくりだすにちがいません。}」³⁾「第4112号。貨幣が国外に出て行くのにつれて、国内にある量は減らされて行きます。国内に残っている量のこのような減少は、この貨幣の価値の増加を生みだします。〔〕{このことは、もともと彼の理論では、⁴⁾諸商品の価値と比べての貨幣としての貨幣の相対的⁵⁾価値を⁶⁾増大させる⁶⁾のである(通貨〔Circulation〕の収縮によって)⁷⁾。つまり、この場合、貨幣の価値のこうした増加は、諸商品の価値の減少にイコールなのである。ところが、その間に、流通する貨幣の量が諸価格を規定するのではない⁸⁾ということが、彼にとってさえ反駁できないように論証されたので、そこで今度は、通貨〔currency〕⁹⁾としての貨幣の減少が、利子生み資本としての、貨幣資本〔monied Capital〕としての¹⁰⁾貨幣の価値を増大させ、したがってまた利子率を増大させるのだ、と言うのである。}{〔〕そして、残っているものの価値のこのような増加は、貨幣の国外流出を停止させ、そしてそれが均衡を回復するのに必要なだけの量の貨幣を取り戻してしまうまで続くのです。}」^{11) ⑤}【原注a) 終り】

①〔注解〕この引用での強調はマルクスによるもの。〔MEGAでは、「588.27」とあるべきこの箇所の指示が「588.26」と誤記されている。〕

②〔注解〕この引用での強調はマルクスによるもの。

- ③〔注解〕この引用での強調はマルクスによるもの。〔MEGA では、「588.31-32」とあるべきこの箇所の指示が「588.30-31」と誤記されている。〕
- ④〔異文〕「増大させる」——あとから書き加えられている。
- ⑤〔異文〕脚注 a) は「+ (下方に続く。) {オウヴェーストン}」という指示で終わっている。このページの末尾にマルクスは次のようにメモした。——「+ 次のページの、チャプマンからの引用の後での、オウヴェーストンの諸矛盾の続きを見よ。」〔ここで 355 ページの下半部が終わる。〕

- 1) 挿入——「彼は次のように言う。」
- 2) 「「」および「」」——削除。
- 3) 「ここでは」→「これによれば」
- 4) 挿入——「通貨の収縮によって」
- 5) 「相対的」——削除。
- 6) 挿入——「ことを意味する」
- 7) 「(通貨 [Circulation] の収縮によって)」——削除。
- 8) 「のではない」——エンゲルス版でも強調されている。
- 9) 「通貨 [currency]」→「流通手段 [Umlaufsmittel]」
- 10) 「, 貨幣資本 [monied Capital] としての」——削除。
- 11) 挿入——「——オウヴェーストンのもろもろの矛盾の続きは下方でさらに述べる。」(エンゲルスのこの挿入は、上の異文注⑤に記載されているマルクスの指示によるものである。)

【原注】b)¹⁾ 今度は、このどちらも、つまり預金も^①貸付けられた預金も「貨幣 [Money]」なのだ、という混乱 [がやってくる]。²⁾³⁾

- ①〔異文〕ここに、「現実の」と書いたのち消している。

- 1) 以下の原注は、エンゲルス版でも脚注とされている。
- 2) 「今度は、このどちらも、つまり預金も貸付けられた預金も「貨幣 [Money]」なのだ、という混乱 [がやってくる]。」→「ここに今度は、銀行業者の側からの支払にたいする請求権としての預金も、預金されて銀行業者の手にある貨幣も、両方とも「貨幣」だという混乱がはいってくる。
- 3) エンゲルス版ではここで改行されていない。

¹⁾「第 4531 号。あなたはご自分の 5000 ポンド・スターリングの銀行券

をだれか別の人に手放されたのですね?——そうです。第4532号。すると、その人は5000ポンド・スターリングの預金をもっているのですね?——そうです。第4533号。そしてあなたは、残された5000ポンド・スターリングの預金をもっておられる?——そのとおりです。第4534号。その人は5000ポンド・スターリングの貨幣をもっており、あなたは5000ポンド・スターリングの貨幣をもっておられる?——そうです。第4535号。しかし、結局それは貨幣にほかならないのでしょうか?——そうではありません。」(銀行家トウェルズ),『〔銀行法特別〕委員会〔報告〕』,1857年。²⁾混乱は、一部分は次のことから生じている。——5000ポンド・スターリングを預金したAは、³⁾小切手を振り出すことができる⁴⁾ ⁵⁾彼がその5000ポンド・スターリングを〔現金で〕もっていた場合と同じにそれを自由に処分することができる〔⁶⁾〕。そのかぎりでは、5000ポンド・スターリングは彼にとって、可能的な貨幣〔money potentialiter〕として機能する⁷⁾。^①しかしいずれにせよ、⁸⁾彼は^②〔589〕それだけ自分の預金をなくすわけである。彼が現実の貨幣を引き出すとすれば、そして彼の貨幣は⁹⁾貸付けられているのだとすれば、彼は自分の¹⁰⁾貨幣で支払を受けるのではなく、他人が預金した貨幣で支払を受けるのである。^③彼が取引銀行業者あての小切手でBに¹¹⁾支払い、Bはこの小切手を取引銀行業者に預金し、そしてAの取引銀行業者もまたBの取引銀行業者あての小切手をもっており、そしていま、この二人の銀行業者がこれらの小切手を交換する¹²⁾なら、Aが預金した貨幣は2度貨幣機能を果たしたわけである。第1には、Aが預金した貨幣を受け取った人の手で。第2には、A自身の手で。第2の機能では、それは、貨幣の介入なしに行なわれる、債権の(Aが取引銀行業者にたいしてもっている債権とこの銀行業者がBの取引銀行業者にたいしてもっている債権との)相殺である。この場合には、預金は2度貨幣として、すなわち、現実の貨幣として、そして¹³⁾貨幣への請求権〔claim〕として、働くのである。預金が貨幣(それ自身がこれまた他人の現預金から¹⁴⁾実現される、というのではない貨幣)へのたんなる請求

権〔claim〕として働くことができるのは、ただ債権の相殺によってのみなのである。¹⁵⁾【原注 b) 終り】/¹⁶⁾

- ① 【異文】 ここに、「彼が現実の貨幣を引き出すとすれば、彼はつま〔り〕〔als[o〕〕〔……〕なくす」と書いたのち消している。
 - ② 【異文】 ここに、「たいていは〔meistens〕」と書いたのち消している。
 - ③ 【異文】 ここに、「彼が小切手を振り出して xxxxxx」〔xxxxxx は解読できていない部分〕と書いたのち消している。
- 1) 挿入——「銀行業者トウェルズは、1857 年の銀行法委員会で次のような例を挙げている。「私は自分の事業を 10,000 ポンド・スターリングで始めるとします。私は 5000 ポンド・スターリングで商品を買って、それを私の倉庫に入れます。残りの 5000 ポンド・スターリングは銀行業者のもとに預金しておいて、必要に応じて小切手を振り出すことにします。けれども私は、全部をやはり私の資本とみなします。といっても、そのうちの 5000 ポンド・スターリングは預金または貨幣の形態をとっているのですが。」(第 5428 号。)ここから今度は次のようなおかしい議論が繰り広げられる。」
 - 2) 「(銀行家トウェルズ),『(銀行法特別) 委員会(報告)』, 1857 年。」——削除。
 - 3) 挿入——「これにたいして」
 - 4) 挿入——「のであって、」
 - 5) 「(」——削除。
 - 6) 「〔 〕」——MEGA では、先行の「(」に対応する「)」が欠けている。
 - 7) 「機能する」—— functioniren → fungieren
 - 8) 挿入——「彼がそれにたいして小切手を振り出すときには、」
 - 9) 挿入——「すでによそに」
 - 10) 「自分の」→「彼自身の」
 - 11) 挿入——「債務を」
 - 12) 「いま〔nun〕, この二人の銀行業者がこれらの小切手を交換する」→「この二人の銀行業者がこれらの小切手を交換するだけ〔nur〕」 この違いは、エンゲルスが nun を nur と読んだことから生じたものである。
 - 13) 挿入——「次には」
 - 14) 「他人の現預金から〔aus andrem actuellem Deposit〕」——MEGA では、訂正目録に記載せずに、actuellem を actuellen に変更している。文法的には actuellem も可能であり、訂正が必要であったとは思われない。

- 15) 「預金が貨幣(それ自身がこれまた他人の現〔actuell〕預金から実現される、
 というのではない貨幣)へのたんなる請求権〔claim〕として働くことができる
 のは、ただ債権の相殺によってのみなのである。」→「たんなる貨幣請求権
 は、ただ諸債権の相殺によってのみ、貨幣の代わりをすることができるのであ
 る。」
- 16) このあとに、本稿 274 ページの異文注⑤に記されたメモがくる。

/355 上/¹⁾ さて、二つの問題に答えなければならない。第1に、貨幣資本〔monied Capital〕の相〔589〕対的な増大または減少は、要するにそれの一時的な、またはもっと継続的な蓄積は、生産的資本の蓄積とどのような関係にあるのか？ そして第2に、それは、なんらかの形態で国内にある貨幣量²⁾とはどのような関係にあるのか？³⁾

- 1) MEGA はここで改行していない。草稿ではパラグラフが続いているようにも見えるが、内容的には改行と考えるべきところであろう。
- 2) 「貨幣量」——草稿では、「貨幣量の量〔Masse der ... Geldmasse〕」となっている。
- 3) 「さて、二つの問題に答えなければならない。第1に、貨幣資本〔monied Capital〕の相対的な増大または減少は、要するにそれの一時的な、またはもっと継続的な蓄積は、生産的資本の蓄積とどのような関係にあるのか？ そして第2に、それは、なんらかの形態で国内にある貨幣量とはどのような関係にあるのか？」——削除。

まず第1に、もっと長い目で見れば、¹⁾ 実体的〔real〕²⁾ 富の増大につれて、貨幣資本家〔monied Capitalist〕の階級が増大する。というのは、³⁾ 利子で生活する引退した greengrocer⁴⁾ の数⁵⁾ が増加し、⁶⁾ 第2には、信用システム〔Creditsystem〕の発展⁷⁾ 〔が見られ〕、それとともにまた銀行業者⁸⁾、等々〔が増加する〕からである⁹⁾。{また金融業者〔financier〕も。だが、われわれは公信用〔public credit〕は度外視する。}^{10) 11)}

- 1) 「まず第1に、もっと長い目で見れば、」——削除。
- 2) 「実体的〔real〕」→「素材的」

- 3) 「というのは、」 → 「一方では」
- 4) 「利子で生活する引退した greengrocer」 → 「引退した資本家、金利生活者」
- 5) 挿入——「と富と」
- 6) 挿入——「そして」
- 7) 挿入——「が促進され」
- 8) 挿入——「や貨幣貸付業者や金融業者」
- 9) 「〔が増加する〕からである」 → 「が増加する。」
- 10) 「〔また金融業者〔financier〕も。だが、われわれは公信用〔public credit〕は度外視する。〕」——削除。
- 11) エンゲルス版ではここで改行されていない。

¹⁾ (注意せよ。²⁾³⁾ 貨幣資本〔monied Capital〕の発展につれて、国債証券〔public effects〕や⁴⁾ その他の利子生み証券の量が増大することは、まえに述べたとおりである。しかし、それと同時に、⁵⁾ 貨幣資本〔monied Capital〕にたいする需要〔も増大する〕。というのは、投機のためにこれらの証券を買う⁶⁾ 証券仲買業者〔jobber〕たちが貨幣市場で一つの主役を演じるからである。もしもこれらの証券の売買がすべて真正な〔bona fide〕取引である⁷⁾とすれば、これらの売買が貨幣資本〔monied Capital〕⁸⁾に影響することはありえないと言うのは正しいであろう。というのも、Aが自分の証券を売るときには、彼はBがこの証券につきこむのと同じの⁹⁾ 貨幣を引き出すのだからである。ところが、証券はたしかに存在するが、それが元来表わしている資本は存在しない（少なくとも貨幣資本〔monied Capital〕としては）、という場合でさえも、¹⁰⁾ つねに、そのような貨幣資本〔monied Capital〕にたいする¹¹⁾ 新たな需要が形成されている¹²⁾ のである。しかしいづれにせよ、その場合、以前にBが利用できる、いまはAが利用できるものは、貨幣資本〔monied Capital〕なのである。〔 〕¹³⁾

- 1) 挿入——「——」（このダッシュは、前の部分からちょっと区切るという意味で挿入されたのであろう。）
- 2) 「(注意せよ。)」——削除。

- 3) 挿入——「自由に利用できる」
- 4) 挿入——「株式や」
- 5) 挿入——「自由に利用できる」
- 6) 「投機のためにこれらの証券を買う」→「これらの証券で投機取引をする」
- 7) 「真正な〔bona fide〕取引である」→「ただ現実の資本投下の表現でしかない」
- 8) 「貨幣資本〔monied Capital〕」→「貸付資本への需要」
- 9) 「同一の」→「ちょうど同じ額の」
- 10) 挿入——「その証券は」
- 11) 挿入——「それだけの」
- 12) 「が形成されている」→「を生みだす」
- 13) 「〔 〕」——草稿でも MEGA でも、このパラグラフの冒頭の「〔 〕」に対応する閉じ括弧がない。一応ここに補っておく。

¹⁾ 第 4886 号。「割引率は、他種の有価証券とは区別される商業手形の割引に当てることのできる、市場にある資本の量によって決定される、と言え、それは、あなたのご意見では、割引率を規定する諸原因について正しく説明したことになるでしょうか?——²⁾いいえ、私の考えるところでは、利子の問題は、流動性をもつ〔of a current character〕すべての〔貨幣に〕転換可能な〔convertible〕有価証券によって影響されます。それをただ手形割引だけにかぎるのは正しくないでしょう。なぜならば、コンソル公債を、さらに国庫証券〔Exchequer bills〕さえも担保にする、³⁾ しかも近ごろきわめてしばしばそうであったように、商業レートよりもはるかに高いレートでの大きな貨幣需要がある場合には、それによってわれわれの商業界が影響を受けないなど言うのは不合理であろうからです。商業界はこれによって非常に大きく影響されるのです。」⁴⁾

- 1) 挿入——「『銀行法委員会報告』, 1857 年。」
- 2) 「——」→「」{チャップマン}「」
- 3) 「担保にする,」→「」{の預託}「による,」
- 4) エンゲルス版ではここで改行されていない。

「356 上」「第 4890 号。銀行業者もそういうものとして認[590]めるような¹⁾ 優良で流動的な有価証券が市場にあって、これを担保に貨幣を借りようとする人たちがいれば、それはたしかに商業手形に影響を及ぼします。たとえば、ある人が、コンソル公債またはそのほかのなんであれ、それを担保にとって自分の貨幣を 6% で貸し出すことができるときに、その人が私に商業手形にたいして 5% で貸してくれようとは期待できません。それは私たちにも同じように影響するのです。私が自分の貨幣を 6% で貸し出すことができるなら、だれも私に、その手形を 5 1/2% で割引するように期待することはとてもできません。』²⁾

- 1) 「銀行業者もそういうものとして認めるような [such as bankers acknowledge to be so]」——このなかの as bankers の部分は、手稿では大きなインクのしみによってまったく見えなくなっている。
- 2) エンゲルス版ではここで改行されていない。

「第 4892 号。私たちは、2000 ポンド・スターリングとか 5000 ポンド・スターリングとか 10,000 ポンド・スターリングとか〔の証券〕を買う投資者たちについて、この人たちが貨幣市場に著しい影響を及ぼすと言っているではありません。あなたがコンソル公債担保のさいの¹⁾ 利率について尋ねられるなら、私が示唆するのは、何 10 万ポンド²⁾ という取引をする人びと、つまりいわゆる証券仲買業者 [jobber] でありまして、彼らは、多額の公債に応募するとか市場で買い入れるとかしておいて、やがて公衆がこの債券を彼らの手から有利に買い取ってくれるようになるまで、それを持っていなければなりません。こういうわけでこの人たちは貨幣を必要とするのです。」⁽³⁾ チャップマン、オーヴァレンド・ガーニ商会の業務執行社員。『〔銀行法特別〕委員会〔報告〕』, 1857 年。^{4) 5)} 信用制度 [Creditwesen] の発展につれて、ロンドンのような⁶⁾ 集中された貨幣市場 [money markets] が創造され、それが同時に、これらの証券の取引の中心地にもなる。銀行業者はこれらの最もいまわしい詐欺師ども⁷⁾ に公衆の

貨幣資本〔monied Capital〕を大規模に用立てるのであって、こうしてこの相場師のやからが増大するのである。)^{3) 8)}

- 1) 「担保のさいの」→「」{の預託}「にたいする」
- 2) 「何10万ポンド〔hundreds of thousands of pounds〕」——MEGAでは、はじめのofがorと誤植されている。
- 3) 「(」および「)」——削除。
- 4) 「チャップマン、オーヴァレンド・ガーニ商会の業務執行社員。『〔銀行法特別〕委員会〔報告〕』、1857年。」——削除。
- 5) エンゲルス版ではここで改行されている。
- 6) 挿入——「大きな」
- 7) 「これらの最もいましい詐欺師ども」→「これらの商人たちの仲間」
- 8) エンゲルス版では、ここに、草稿のここから6パラグラフあとの、「第2に」で始まるパラグラフの末尾につけられた原注a)(本稿、285ページ3-7行)の内容が挿入されている。

オウヴァストン氏の言葉遣いの混乱〔jumble of phrases〕は、^①もっとあとで見ることになろう。¹⁾

- ① 〔注解〕「もっとあとで」——〔MEGA〕592-593ページ〔本稿、289-294ページ〕を見よ。

- 1) 「オウヴァストン氏の言葉遣いの混乱〔jumble of phrases〕は、もっとあとで見ることになろう。」——削除。

平均利子(かなり長い年数についての)¹⁾が、他のすべての事情が変わらないとすれば、^①平均利潤率によって⁽²⁾それ自身が利潤マイナス利子にはかならない企業利得³⁾によってではなく)²⁾規定されている、ということは、すでに²⁾利子を生む資本〔das Zins tragende Capital〕⁴⁾を考察したさいに述べた。

- ① 〔異文〕「平均」——あとから書き加えられている。

- ② 〔注解〕「利子を生む資本を考察したさいに」——〔MEGA〕431ページ12

行以下〔拙稿「利潤の分割」の草稿について〕、『経済志林』第56巻第4号、1989年、6ページ以下〕を見よ。

- 1) 「平均利子（かなり長い年数についての）」→「かなり長い年数についての平均利子」
- 2) 「（ ）および（ ）」——削除。
- 3) 「企業利得」→「企業者利得」
- 4) 「利子を生む資本〔das Zins tragende Capital〕」→「利子生み資本」

産業循環のさまざまな局面における¹⁾ 商業的利子（²⁾ 商業事業〔commercial business〕の内部で³⁾ 行なわれる割引や貸付にたいして貨幣貸付業者〔money lenders〕が請求する利子⁴⁾ の変動について見ても、一方では、利子が⁵⁾最低限を越えて上昇するような局面が生じるが、他方では、それが中位的な平均高度に到達するような局面（それが中位的水準を越えて上昇する直前の利子率）——ここではそれは利潤の上昇の結果である——が生じる⁶⁾ ということは、すでに述べたところであり、またもっと詳しく⁷⁾ 研究するであろう。

①〔異文〕「最低限を越えて」——あとから書き加えられている。

- 1) 「さまざまな局面における」→「経過中の」
- 2) 「（ ）および（ ）」→「——」
- 3) 「商業事業〔commercial business〕の内部で」→「商業世界の圏内で」
- 4) 「一方では、利子が最低限を越えて上昇するような局面が生じるが、他方では、それが中位的な平均高度に到達するような局面（それが中位的水準を越えて上昇する直前の利子率）——ここではそれは利潤の上昇の結果である——が生じる」→「利子が最低限を越えて中位的な平均高度に到達する（その後また利子率はこの高さを越える）ような局面が生じ、しかもこの運動は利潤の上昇の結果である」
- 5) 「もっと詳しく」—— noch näher → noch weiter

とはいえ、ここで二つのことを述べておかなければならない。

第1に。¹⁾ 利子率がかなり長い期間にわたって高どまりしている場合に

は {²⁾ ここで言っているのは、イギリスのような、中位の利子率がかかなり長い期間にわたって与えられている (³⁾ ⁴⁾ それが比較的長期の投資 [mehr fixed investments] に支払われる利子にも、つまり ⁵⁾ 私的利子と呼ぶことのできるものにも現われている ¹⁾ } ある一国の利子率のことである ²⁾ ²⁾、それは、一見して明らかに [Prima Facie]、利潤率が {⁶⁾ この局面をつうじて} ⁶⁾ 高いことの証拠ではあるが、しかし必ずしも企業利得⁷⁾ の率が高いことを証明するものではない。{⁸⁾ より多く自己資本で事業をしている資本家は⁹⁾ 高い利潤率を実現する。というのも、彼らが自分 [591] 自身に支払う利子はたんに計算上の問題にすぎない¹⁰⁾ } のだからである。}⁸⁾ 高い利子¹¹⁾ が比較的長く続く可能性 {¹²⁾ ここで言っているのは本来の逼迫 [pressure] の局面のことではない} ¹²⁾ は、利潤率が高いということと同時に生じているものである。しかし、この高い利潤率から高い利子率を引き去れば ³⁾ 低い企業利得¹³⁾ 率しか残らないということもありうる。企業利得¹⁴⁾ は、高い利潤率が続いていても、収縮することがありうるのである。このようなことがありうるのは、ひとたび着手された企業は続けられなければならないのだからである。この局面では、たんなる信用資本(他人の資本)で盛んに事業が行なわれるのであって、高い利潤率はむしろ¹⁵⁾ 投機的、見込的なものかもしれないのであって、高い利子はとりあえずは他人の資本に頼って支払われるかもしれない¹⁶⁾。高い利子率を支払うことは高い利潤率によってできるが、しかし企業利得の減少によってもできる。高い利子率が、利潤からではなく、借り入れた¹⁷⁾ 資本そのものから支払われることがありうる、¹⁸⁾そしてこのようなことはつねに¹⁹⁾ ⁴⁾ 一部は投機の時期に見られることである²⁰⁾ } のであって、またこのようなことがしばらく続くこともありうるのである。

① [訂正] 「」——手稿では欠けている。

② [訂正] 「」——手稿では欠けている。[この「」]は手稿に書かれており、この「訂正」注は誤りである。]

③ [訂正] 「低い」——手稿では「高い」となっている。[エンゲルスの]印刷

用原稿に従って訂正。

④〔異文〕「一部は」——あとから書き加えられている。

- 1) 「第1に。」——エンゲルス版でも強調されている。
- 2) 「{」および「}」→「(」および「)」
- 3) 「(」——削除。
- 4) 挿入——「, そして」
- 5) 「つまり」——削除。
- 6) 「{」および「}」——削除。
- 7) 「企業利得」→「企業者利得」
- 8) 「{」および「}」——削除。
- 9) 「より多く自己資本で事業をしている資本家は」→「このあとのほうの区別
は, おもに自己資本で事業をしている資本家にとっては, 多かれ少なかれな
くなってしまふ。彼らは」
- 10) 「彼らが自分自身に支払う利子はたんに計算上の問題にすぎない」→「彼ら
は自分で自分に利子を支払う」
- 11) 「利子」→「利子率」
- 12) 「{」および「}」→「——」
- 13) 「企業利得」→「企業者利得」
- 14) 「企業利得」→「企業者利得率」
- 15) 「むしろ」→「あちこちで」
- 16) 「のであって, 高い利子はとりあえずは他人の資本に頼って支払われるかも
しれない」——削除。
- 17) 挿入——「他人の」
- 18) 挿入——「——」
- 19) 「つねに」——削除。
- 20) 挿入——「——」

第2に。¹⁾ 利潤率が高いので貨幣資本〔moneyed Capital〕にたいする
需要が増大し, だからまた利子率が高くなる, という表現は, (生産) 資
本²⁾にたいする需要が増大し, だからまた利子率が高い, という表現と同
じではない。a)³⁾ |

1) 「第2に。」——エンゲルス版でも強調されている。

- 2) 「(生産)資本」→「産業資本」
- 3) 「a)」——削除。

【原注】 | 356 下 | a) ¹⁾ 第 219 号。²⁾ ^{(3) (4)} 当時のイングランド銀行総裁 [James Morris] は⁵⁾ 言う。³⁾ 「大まかに言えば、株式取引所では貨幣はほかのどこでよりも安い。」(『(商業的) 窮境の原因 [の究明……] のための上院秘密委員会報告』, 1847-1848 年の会期, 1857 年再刷。)(証言)⁶⁾

【原注 a) 終り】 |

- 1) 以下の引用は、エンゲルス版では、本文の少し前の箇所に挿入されている。
(本稿, 281 ページ注 8) を見よ。)
- 2) 「第 219 号。」——削除。
- 3) 「(」および「)」——削除。
- 4) 挿入——「1848 年に」
- 5) 挿入——「上院の秘密委員会で」
- 6) 「(『(商業的) 窮境の原因 [の究明……] のための上院秘密委員会報告』, 1847-1848 年の会期, 1857 年再刷。)(証言)」→「(『(商業的) 窮境……』, 1848 年, 1857 年印刷。第 219 号。)(なお, 1894 年版では、この部分の最後の閉じ括弧はあるが、それに対応する開き括弧が欠落している。)

| 357 上 | ¹⁾ 貨幣資本 [moneyed Capital] が、支払うために +a) ¹⁾ {この点は特別に考察されなければならない。というのは、この点は、貨幣資本 [moneyed Capital] の価値の上昇にとって最も重要な点だからである} ²⁾ ではなく、買うために、そして ²⁾ 貨幣資本 [moneyed Capital] を生産的資本に転化させるために要求されるかぎりでは、³⁾ それを要求するのは生産的資本家⁴⁾ か商人である。生産的資本家⁵⁾ はそれを労働手段 {原料⁶⁾, 補助材料および機械}⁶⁾ および労働能力⁷⁾ に投下するのである。/

① 【異文】「貨幣」——あとから書き加えられている。[MEGA の「異文目録」では、「貨幣」というこの挿入部分を指示するのに „das |: moneyed: | “ とし、すぐ次の (異文注②) で同じく「貨幣」という挿入部分を指示するのにたんに

„|: moneyed:|“ としているが、これは逆にされなければならない。なぜなら、同じ行のうちに2度 moneyed が出てくるためにどちらかを指示しなければならないのは、この行ではなくて、次の行だからである。]

②〔異文〕「貨幣」——あとから書き加えられている。〔前出の「異文」注への筆者の付記を見よ。〕

③〔異文〕「補助材料」——あとから書き加えられている。

1)「+a)」——削除。

2)「{この点は特別に考察されなければならない。というのは、この点は、貨幣資本[moneyed Capital]の価値の上昇にとって最も重要な点だからである}」——削除。

3)「貨幣資本[moneyed Capital]が、支払うためにではなく、買うために、そして貨幣資本[moneyed Capital]を生産的資本に転化させるために要求されるかぎりでは、」→「恐慌時には貸付資本にたいする需要、したがってまた利子率は最高限度に達する。利潤率は、またそれとともに産業資本にたいする需要も、なくなったも同然である。このような時期には、だれでも、借金をするのは、ただ支払をするためでしかなく、すでに背負っている債務を果たすためでしかない。これに反して、恐慌のあとの回復期には、貸付資本が要求されるのは、買うためであり、そして貨幣資本を生産的資本や商業資本に転化させるためである。そしてその場合には、」

4)「生産的資本家」→「産業資本家」

5)「生産的資本家」→「産業資本家」

6)「労働手段{原料、補助材料および機械}」→「生産手段」

7)「労働能力」→「労働力」

【補足】 | 357 下 | ¹⁾ ①+a) 恐慌の時期に物価が膨張する[inflate]のは、大部分、信用の肥大[exaggeration]の結果生じる投機によるものである。²⁾この場合には、これらの商品の保有者を、あるいはそれらへの投機を支えることによってこの物価を維持することは不可能である。この汚物は破裂しないわけにはいかない。[Die Scheisse muß platzen.] 【補足+a)終り】 |

①〔異文〕以下の補足は357ページの下方にある。

②〔異文〕「この場合には、」——あとから書き加えられている。

1) エンゲルス版では、この原注は削除されている。

/357 上/ 労働¹⁾にたいする需要の増大は、それ自体としてはけっして利子率の上昇の原因ではありえない(利子率は利潤率によって決定されているのだから)²⁾。労賃の上昇は、けっして利潤の上昇の原因ではない。といっても、それは利潤の上昇の一結果でありうるのではあるが(産業循環の特殊的諸局面を見るなら)³⁾。だから、このことはまずもって問題外である。⁴⁾⁵⁾ 労働⁶⁾にたいする需要の増大が可能なのは、労働の搾取が特別に有利な事情のもとで行なわれるからであるが、しかし、労働⁷⁾にたいする需要、したがってまた可変資本にたいする需要のたんなる⁸⁾ 増大は、それ自体としては利潤を増加させるのではなく、むしろそれだけ〔pro tanto〕利潤を減少させるのである。とはいえ、労働にたいする需要の増大につれて、可変資本にたいする需要、したがって貨幣資本〔moneyed Capital〕にたいする需要も増加することはありうるのであって、これが利子率を高くすることもありうる。その場合には労働⁵⁹² 働能力⁹⁾の市場価格はそれの平均価値¹⁰⁾よりも高くなり、¹¹⁾ またそれと同時に、それにつれて¹²⁾ 貨幣資本〔moneyed Capital〕にたいする需要が増大するので、利子率も上がる。労働¹³⁾にたいする需要の増大は、この商品を、その他のどの商品とも同じく、高いものにすが、つまりその価格を高くするが、しかし利潤を高くするわけではない¹⁴⁾ {¹⁵⁾ 利潤はまさに¹⁶⁾、主要には、¹⁷⁾ この商品が相対的に安いということにもとづいているのである¹⁵⁾。……¹⁸⁾ しかし、労働にたいする需要の増大は同時に、この想定では、¹⁹⁾ 貨幣資本〔moneyed Capital〕にたいする需要を大きくするので、利子率を高くする。かりに貨幣資本家〔moneyed Capitalist〕が、貨幣を貸し出すことをやめて生産的資本家²⁰⁾に転化したとすれば、彼が労働により高く支払わなければならないという事情は、それ自体としては、彼の利潤を、高くはしないでそれだけ〔pro tanto〕減らすであろう。商況によっては、それにもか

かわらず彼の利潤がふえることもあるかもしれないが、それはけっして彼が労働により高く支払うからではない。しかし、このあとのほうの事情は、それが貨幣資本〔monied Capital〕にたいする需要を増加させるかぎりでは、利子率を高くするのに十分である。ほかの点では商況がよくない場合になんらかの事情から労賃の水準²¹⁾が上昇したとすれば、労賃の上昇は利潤率を低下させるであろうが、しかし、その上昇が貨幣資本〔moneyed Capital〕にたいする需要を大きくするかぎり²²⁾は、利子率を高くするであろう。

- 1) 「労働」→「労働力」
- 2) 「それ自体としてはけっして利子率の上昇の原因ではありえない（利子率は利潤率によって決定されているのだから）」→「利子率が利潤率によって規定されるかぎりでは、それ自体としてはけっして利子率の上昇の原因ではありえない」
- 3) 「それは利潤の上昇の一結果でありうるのではあるが〔産業循環の特殊的諸局面を見るなら〕」→「産業循環の特殊的諸局面を見るなら、それは利潤の上昇の一結果でありうるのではあるが」
- 4) 「だから、このことはまずもって問題外である。」——削除。
- 5) エンゲルス版ではここで改行されている。
- 6) 「労働」→「労働力」
- 7) 「労働」→「労働力」
- 8) 「たんなる」——削除。
- 9) 「労働能力」→「労働力」
- 10) 「平均価値」→「平均」
- 11) 挿入——「平均よりも多数の労働者が雇用され、」
- 12) 「それにつれて」→「このような事情につれて」
- 13) 「労働」→「労働力」
- 14) 挿入——「。」
- 15) 「{ } および { } 」——削除。
- 16) 「まさに」——削除。
- 17) 挿入——「まさに」
- 18) 「……」——削除。
- 19) 「この想定では、」→「——前提された事情のもとでは——」

- 20) 「生産的資本家」→「産業家」
- 21) 「の水準」——削除。
- 22) 「かぎり」→「のと同じ度合いで」

労働のことを度外視すれば、¹⁾オウヴェストンが「資本にたいする需要」と呼ぶものは、商品にたいする需要のことではない。商品にたいする需要は、それらの価格を高くする {供給が平均よりも²⁾下がる場合でも、需要が平均よりも上がる場合でも}³⁾。もし生産的資本家²⁾ または商人が、これまでは³⁾ 自分が 100 ポンド・スターリングを支払っていたのと同じ商品量に⁴⁾ たたとえば 150 ポンド・スターリングを支払わなければならないとすれば、彼は、そうでなければ 100 ポンド・スターリングでよかったのに、150 ポンド・スターリング借りなければならなくなり、したがってまた、利子が 5% ならば、そうでなければ 5 ポンド・スターリング⁵⁾ 支払えばよかったのに 7 1/2 ポンド・スターリング⁶⁾ 支払わなければならないであろう。彼が支払わなければならない利子の量は、借り入れる資本の量が大きくなるので、大きくなるであろう。しかし、利子率それ自体は、借りられた資本の大きさには左右されない。というのは、どの瞬間にもそうであるように、利子率が与えられていれば、10 万ポンド・スターリングを借りる人は、1000 ポンド・スターリングを借りる人よりも高い利子を支払わない (おそらくはそれよりも低いであろう) からである。たとえ、前者が 1 年について 5000 ポンド・スターリングを支払い、後者がたった 50 ポンド・スターリングしか支払わないにしても。⁷⁾

① [異文] ここに、「需要は」と書いたのち消している。

② [異文] 「下がる」——あとから書き加えられている。

1) 「それらの価格を高くする {供給が平均よりも下がる場合でも、需要が平均よりも上がる場合でも}」→「需要が平均よりも上がる場合でも、供給が平均よりも下がる場合でも、それらの価格を高くする」

2) 「生産的資本家」→「産業資本家」

3) 「これまでは」→「以前は」

- 4) 挿入——「今では」
- 5) 「ポンド・スターリング」——草稿では、「パーセント [%]」となっている。
MEGA は、訂正目録に記載することなしに、「ポンド・スターリング [£]」に訂正している。
- 6) 「ポンド・スターリング」——草稿では、「パーセント [p.c.]」となっている。
MEGA は、訂正目録に記載することなしに、「ポンド・スターリング [£]」に訂正している。
- 7) 「しかし、利率それ自体は、借りられた資本の大きさには左右されない。
というのは、どの瞬間にもそうであるように、利率が与えられていれば、10
万ポンド・スターリングを借りる人は、1000 ポンド・スターリングを借りる
人よりも高い利子を支払わない（おそらくはそれよりも低いであろう）からで
ある。たとえ、前者が1年について5000 ポンド・スターリングを支払い、後
者がたった50 ポンド・スターリングしか支払わないにしても。」——削除。

(¹) オウヴァストン²⁾ の試みは、貨幣的利害 [das moneyed interest]³⁾
と生産的利害 [das productive interest]⁴⁾ とを同じものとして描こうと
することに尽きるのであるが、他方、彼の^①法律⁵⁾ は、まさに、これらの
利害の衝突を^②貨幣的利害 [das monied interest]⁶⁾ に有利に利用するこ
とをあてにしているのである。)¹⁾

① [注解] 「法律」—— [MEGA] 473 ページ 32 行への注解をみよ。[ここで
指示されている注解は、1844 年の銀行法についてのものであって、そこでは、
「[1844 年の法律]——銀行券の発行を調節するための法律……， ロンドン，
1844 年」，としたのち，「この銀行法について，エンゲルスは次のように書い
ている」，として，エンゲルス版第 34 章「通貨主義と 1844 年のイギリスの銀
行立法」のなかでこの銀行法についてエンゲルスが書き込んだ部分 (MEW,
Bd. 25, S. 569-571) を引用している。]

② [異文] ここに，「[……] の負担で」と書いたのち消している。

- 1) 「(」および「)」——削除。
- 2) 挿入——「氏」
- 3) 「貨幣的利害 [das moneyed interest]」(das moneyed interest は「金融
界」という意味をもつ。) → 「貸付資本の利益」
- 4) 「生産的利害 [das productive interest]」(das productive interest は「産

業界」という意味をもつ。) → 「産業資本の利益」

5) 「法律〔Act〕」 → 「銀行法」

6) 「貨幣的利害〔das monied interest〕」 → 「貨幣資本」

諸商品にたいする需要が¹⁾商品の供給が平均よりも下がっている場合¹⁾、以前よりも多くの貨幣資本〔monied Capital〕を吸収しない、ということもありうる。²⁾総価値にたいして同じ金額³⁾もしかするとそれよりも少ない金額³⁾が支払われなければならないが、しかし同じ金額で手にはいる使用価値の分量は少なくなる。このような場合には、商品(たとえば綿花)⁴⁾にたいする需要はそれの供給に比べて大きくなり、593したがってまた商品の価格は上がっているにもかかわらず、⁵⁾貨幣資本〔monied Capital〕にたいする需要は同じままでであろうし、したがって¹⁾利子率も上がらないであろう。利子率への影響がありうるのは、ただ貨幣資本〔monied Capital〕⁶⁾にたいする²⁾総需要が増大する場合だけである。供給が減少してもこのことが必ずしも生じないことは、いま見たばかりである。⁷⁾

① 〔異文〕「利子率」←「利子」

② 〔異文〕「総需要」←「需要」

1) 「()および「)」——削除。

2) 挿入——「諸商品の」

3) 「()および「)」——削除。

4) 「(たとえば綿花)」——削除。

5) 挿入——「貸付可能な」

6) 「貨幣資本〔monied Capital〕」 → 「貸付資本」

7) 「である。供給が減少してもこのことが必ずしも生じないことは、いま見たばかりである。」 → 「であって、前述のような前提のもとではそうはならないのである。」

しかし、なんらかの財貨の供給が平均よりも減りながら¹⁾穀物や綿花などの不足の場合のように¹⁾、しかも貨幣資本〔monied Capital〕²⁾にた

いする需要が増大する、ということもありうる。なぜなら、価格がもっと高くなることに賭けて投機が行なわれるからであり、そして価格を高くする³⁾ 手段はなによりもまず⁴⁾、供給の一部分を一時的に⁵⁾ 市場から引き上げておくことだからである。だが、商品と引き換えに約した債務を、その商品を売らないで返済する⁶⁾ ために、手形操作〔Wechselwirtschaft〕⁷⁾ によって貨幣を調達することが行なわれる。この場合には、市場への商品の供給を人為的に減少させるために、貨幣資本〔monied capital〕⁸⁾ にたいする需要が増大し、利子率が上昇するのである（そうならないこともよくある）⁹⁾。利子率の上昇は、この場合には、商品資本の供給の人為的な減少を表現している。|

- 1) 「(」および「)」——削除。
- 2) 「貨幣資本〔monied Capital〕」→「貸付資本」
- 3) 挿入——「最も手近な」
- 4) 「なによりもまず」——削除。
- 5) 「一時的に」→「しばらくのあいだ」
- 6) 「商品と引き換えに約した債務を返済する」→「買った商品の代価を支払う」
- 7) 「手形操作〔Wechselwirtschaft〕」→「商業的な「手形操作」」
- 8) 「貨幣資本〔monied capital〕」→「貸付資本」
- 9) 「利子率が上昇するのである（そうならないこともよくある）」→「利子率は、このように市場への商品の供給を人為的に妨げようとする試みによって、高くなることありうる。」

| 358 上 | 他方では、なんらかの財貨の供給が増大してそれが平均価格よりも安くなっているために、その財貨にたいする需要が増大する、ということもありうる。¹⁾ このような場合には、同じ貨幣額でより多くの商品が手にはいるので、貨幣資本〔moneyed Capital〕²⁾ にたいする需要は変わらないこともありうるし、また減ること³⁾ もありうる。しかしまた、一部は、この⁴⁾ 瞬間を生産的な目的⁵⁾ に利用するために、一部は、のちに起こりうる⁶⁾ 価格上昇を見込んで、投機的な在庫形成⁷⁾ が行なわれることも

ありうるであろう。このような場合には貨幣資本〔moneyed Capital〕⁸⁾にたいする需要が増大するであろうし、またその場合には、この需要は、生産的資本の諸要素の過剰な供給の表現であろう⁹⁾。¹⁰⁾

- 1) エンゲルス版ではここで改行されている。
- 2) 「貨幣資本〔moneyed Capital〕」→「貸付資本」
- 3) 挿入——「さえ」
- 4) 挿入——「恵まれた」
- 5) 「生産的な目的〔productive purposes〕」→「生産目的〔Produktionszwecke〕」
- 6) 「のちに起こりうる」→「のちの」
- 7) 「在庫形成」——草稿では Tilgung of stocks となっており、MEGA でもそのままにされているが、Tilgung は Bildung の誤記であろう。エンゲルス版では、「在庫形成〔Vorratbildung〕」となっている。
- 8) 「貨幣資本〔moneyed Capital〕」→「貸付資本」
- 9) 「この需要は、生産的資本の諸要素の過剰な供給の表現であろう」→「高くなった利子率は、生産的資本の諸要素の過剰な在庫形成に資本が投下されたことの表現であろう」
- 10) エンゲルス版ではここで改行されていない。

{¹⁾ ここで考察しているのは、ただ、²⁾商品資本の需要供給に関しての²⁾貨幣資本〔moneyed Capital〕³⁾への需要だけである。⁴⁾②再生産過程の⁵⁾状態が貨幣資本〔moneyed capital〕⁶⁾の供給にどのように作用するかは、すでに以前に論じた。}¹⁾⁷⁾

- ①〔異文〕「商品資本」←「実物資〔本〕〔real cap[ital]〕」
- ②〔異文〕「再生産過程の状態」←「再生産過程」

- 1) 「{ } および { } 」——削除。
- 2) 「に関しての〔in respect to〕」→「によって影響される」
- 3) 「貨幣資本〔moneyed Capital〕」→「貸付資本」
- 4) 挿入——「産業循環のもろもろの局面で」
- 5) 挿入——「変化する〔wechselnd〕」
- 6) 「貨幣資本〔moneyed capital〕」→「貸付資本」

7) エンゲルス版ではここで改行されていない。

オウヴァストンは、市場利子率が（貨幣）資本 [(monied) capital]¹⁾の需要供給によって規定されているという平凡な命題を、また貨幣資本 [monied Capital] を、資本一般 [Capital überhaupt] と²⁾ 抜け目なくごちゃまぜに³⁾ することによって、高利貸を唯一の「⁴⁾ 資本家」に転化させ、彼の資本を唯一の資本に転化させようと努めているのである。

- 1) 「（貨幣）資本 [(monied) capital]」→「（貸付）資本」
- 2) 「また貨幣資本 [monied Capital] を、資本一般 [Capital überhaupt] と」
→「貸付資本は資本一般と同じだという彼自身の仮定と」
- 3) 挿入——「し、そう」
- 4) 「「」および「」」——削除。

逼迫 [pressure] の場合には¹⁾、貨幣資本 [monied capital]²⁾にたいする需要は支払手段にたいする需要であって、それ以外のなにものでもない（³⁾ 購買手段としての貨幣にたいする需要ではない³⁾）のであり、また⁴⁾ そのさい利子率は、実物資本 [reales Capital]⁵⁾が過剰であろうと⁶⁾ 欠乏していようと、非常に高くなることがありうる。⁷⁾ 支払手段にたいする需要は、商人や生産者の有価証券が優良なものである⁸⁾ かぎりでは、貨幣⁹⁾ への転換可能性 [convertibility] にたいする需要でしかない。この連中 [die Kerls] が支払のための真正の出どころ [bona fide Quelle] をもっていないかぎりでは¹⁰⁾、つまり、支払手段の前貸が彼らに貨幣形態を与えるだけではなく、どんな形態であろうと、彼らに不足している支払のための等価物を与えるかぎりでは、それは貨幣資本 [monied Capital]¹¹⁾ にたいする需要である。この点こそは、逼迫の時期にどちらの [594] 側も¹²⁾ 正しくもあり間違っている点である。この時期に、ただ支払手段の欠乏が存在するだけで、と言う人々は、¹³⁾ 1) ただ真正の [bona fide] 有価証券¹³⁾ の所持者を眼中においているだけか、そうでなければ、紙片によってすべ

ての破産した山師たちを支払能力のある人々¹⁴⁾に転化することが銀行の義務ないし力〔Macht〕だ¹⁵⁾と信じている愚か者であるか、このどちらかである。この時期に、ただ資本の欠乏が存在するだけだ、と言う人々は、ただ屁理屈¹⁶⁾を言っているだけか——というのは、¹⁷⁾このような時期には〔貨幣に〕転換不可能な〔inconvertible〕¹⁸⁾資本が(¹⁹⁾過剰輸入や過剰生産の結果)¹⁹⁾大量にあるのだから——、そうでなければ、ただ信用騎乗者のことを、つまり、²⁰⁾実際にもはや他人の資本でやり繰りする²¹⁾ことができない状態になっていて、いまでは、銀行が自分たちのなくしてしまった資本の支払を助けてくれるだけではなく、引き続き詐欺を続けることができるように²²⁾してくれることを願っているような信用騎乗者たちのことをほめかしている²³⁾だけなのである。} ⁷⁾

①〔異文〕「ただ……だけ」——あとから書き加えられている。

- 1) 「場合には」→「時期には」
- 2) 「貨幣資本〔monied capital〕」→「貸付資本」
- 3) 「() および 「 」」——削除。
- 4) 「のであり、また」→「。」
- 5) 挿入——「——生産的資本および商品資本——」
- 6) 「過剰であろうと」→「過剰に存在しよう」と
- 7) 「{ } および 「 」」——削除。
- 8) 「商人や生産者の有価証券が優良なものである」→「商人や生産者が確実な担保を提供することができる」
- 9) 「貨幣」——エンゲルス版では強調されている。
- 10) 「この連中〔die Kerls〕が支払のための真正の出どころ〔bona fide Quelle〕をもっていないかぎりでは」→「そうでないかぎりでは」
- 11) 「貨幣資本」——エンゲルス版では Geldkapital であるが、草稿と同じく強調されている。
- 12) 「逼迫の時期にどちらの側も」→「普通に行なわれている説の両方の側が恐慌の判断において」
- 13) 「有価証券〔securities〕」→「担保〔Sicherheiten〕」
- 14) 「人々」→「堅実な資本家」
- 15) 「ないし力〔Macht〕だ」→「であり、銀行にできることだ」

- 16) 「屁理屈〔quibble〕」→「語句の穿鑿」
- 17) 挿入——「じっさい〔ja〕」
- 18) 「転換不可能な」——エンゲルス版でも強調されている。
- 19) 「() および ()」——削除。
- 20) 挿入——「今では」
- 21) 「でやり繰りする」→「を手に入れる」
- 22) 挿入——「も」
- 23) 「ほのめかしている」→「言っている」

{¹⁾ 貨幣が価値の自立的な形態として商品に相対しているということ、または、交換価値が自立的な形態を貨幣において受け取らなければならないということは、ブルジョアの生産過程²⁾の基礎であって、このことが可能であるのは、ただ、一定の商品が材料となってその価値で他のすべての商品が尺度されるようになり、また、³⁾ まさにそうなることによって、この商品が一般の商品になり、他のすべての商品に対立するとりわけすぐれた意味での商品〔die Waare par excellence〕になる、ということによってである。このことは二つの点に現われざるをえないのであって、ことに、一方ではもろもろの信用操作に、他方では⁴⁾ 信用貨幣に、大きな度合いで貨幣の代わりをさせている資本主義的に発展した諸国のもとでは、そうである。〔第1に、〕信用がとどえるか収縮させられる⁵⁾ 逼迫〔pressure〕期には、⁶⁾ 貨幣が、⁷⁾ 支払手段および価値の真の定在として絶対的に諸商品に対立するようになる。そこから、商品を貨幣に、すなわち商品の純粹に空想的な形態に転化させるために、商品の一般的な減価が現われる⁸⁾。しかし第2に、信用貨幣そのものが貨幣であるのは、ただ、それがその価値について⁹⁾、絶対的に現実の貨幣を代表しているかぎりでのことである。地金¹⁰⁾が流出するにつれて、信用貨幣の貨幣への転換可能性〔Convertibilität〕、すなわちそれと¹¹⁾ 金との同一性は疑わしくなってくる。そこから、この転換可能性¹²⁾を確保するために、利子率の引き上げ等々の強行処置が行なわれる。このことは、もろもろのまちがった貨幣理論に基づいて、貨幣商人たち〔dealers in money〕（オウヴァーストン）¹³⁾の利害に

よって国民に押しつけられるまちがった立法によって多かれ少なかれ激化させられる¹³⁾ こともありうる。しかし、その基礎は生産様式そのものの基礎とともに与えられているのである。信用貨幣の減価(ちなみに、ただ仮構[imaginär]でしかないようなその非貨幣化のことではけっしてない)が生じれば、それはすべての既存の関係を動揺させるであろう。それだから、商品¹⁴⁾の価値は、貨幣のかたちでのこの価値の空想的かつ自立的な定在を確保するために、犠牲にされるのである。そもそも商品の価値が貨幣価値として確実であるのは、ただ貨幣が確実であるかぎりでのことでしかない。それだからこそ、わずか数百万の貨幣のために何百万もの商品がいけにえにされ¹⁵⁾なければならぬのである。これはブルジョア的¹⁶⁾生産では不可避であって、この生産の美点の一つをなすものである。それ以前の生産諸様式ではこういうことは存在しない¹⁷⁾。なぜならば、それらの生産様式が運動する狭隘な土台のもとでは、595信用も信用貨幣も発展しない¹⁸⁾からである。²⁾ || 359 上 | 労働の社会的¹⁹⁾性格が商品の貨幣定在²⁰⁾として現われ、したがってまた³⁾現実の生産の外にある一つの物²¹⁾として現われるかぎり、⁴⁾貨幣恐慌は、現実の恐慌にはかかわりなく、またはその激化²²⁾として、不可避である。他方で明らかなことは、銀行の信用が動揺していないかぎり、銀行はこのような場合には、信用貨幣をふやすことによってパニックを緩和し、信用貨幣を収縮させる²³⁾ことによって²⁴⁾パニックを助長するということである。近代産業のすべての歴史が示しているのは、もし国内の生産が組織化されていれば、地金²⁵⁾は、事実上、ただ、国際貿易の均衡が動揺した²⁶⁾ときに、その清算のために必要なだけであろうということである⁵⁾(国内は金貨幣を必要としないということである。それだから、非常の場合には正貨支払停止が行なわれるのである)²⁷⁾。} ¹⁾

- ① [異文] ここに、「紙幣に」と書いたのち消している。
- ② [異文] ここに、「}」と書いたのち消している。
- ③ [異文] 「現実の生産の外にある」——あとから書き加えられている。
- ④ [異文] ここに、「本来の[eigentliche]」と書いたのち消している。

⑤ 〔異文〕 はじめ、ここにピリオドを打って文を終えたのち、「それだから、〔……〕の後と〔……〕には」と書いたが、これらを消して、コンマを打ち、次の部分を書き継いだ。

- 1) 「{ } および { }」——削除。
- 2) 「ブルジョアの生産過程」→「資本主義的生産」
- 3) 「また、」——削除。
- 4) 「と与えるか収縮させられる」→「収縮するかまたは完全にとまってしまう」
- 5) 挿入——「突然」
- 6) 挿入——「唯一の」
- 7) 「商品を貨幣に、すなわち商品の純粋に空想的な形態に転化させるために、商品の一般的な減価が現われる」→「商品の一般的な減価が現われ、商品を貨幣に転化させること、すなわち商品自身の純粋に空想的な形態に転化させることが困難になり、それどころか不可能にさえもなる」
- 8) 「その価値について [as to its value]」→「その名目価値の額によって」
- 9) 「地金」→「金」
- 10) 挿入——「現実の」
- 11) 挿入——「の諸条件」
- 12) 「貨幣商人たち [dealers in money] (オウヴァストン)」→「オウヴァストンやその仲間の貨幣商人 [Geldhändler]」
- 13) 「激化させられる [exaggerirt]」→「極端までおし進められる」
- 14) 「商品」(単数)→「諸商品」
- 15) 「いけにえにされ [sacrificirt]」→「犠牲にされ」
- 16) 「ブルジョアの」→「資本主義的」
- 17) 「存在しない」→「現われない」
- 18) 「発展しない」→「発展するにいたらない」
- 19) 「社会的」——エンゲルス版でも強調されている。
- 20) 「貨幣定在」——エンゲルス版でも強調されている。
- 21) 「物」——エンゲルス版でも強調されている。
- 22) 「激化」—— Aggravation → Verschärfung
- 23) 「収縮させる」→「引き上げる」
- 24) 挿入——「かえて」
- 25) 「地金」→「金属」
- 26) 「動揺した」→「一時的に変調をきたした」
- 27) 「(国内は金貨幣を必要としないということである。それだから、非常の場

合には正貨支払停止が行なわれるのである)」→「。国内では今日すでに金属貨幣は必要でないということは、いつでも非常の場合にはいわゆる国立銀行の正貨支払停止が唯一の応急手段としてとられるということによって、証明されている」

{¹⁾ 二人の個人の場合には、²⁾ どちらにとっても支払差額がマイナスだと言うのは、滑稽であろう。彼らが互いに相手の債務者でもあれば債権者でもあるという場合には、もし彼らの債権が相互に等しいのでなければ、その分だけ [pro tanto]³⁾ 一方の人は他方の人の債務者でなければならないということは、明らかである。国と国とのあいだではけっしてそうではないのであって、⁴⁾ そうでないということは、すべての経済学者によって次の命題において承認されているのである。すなわち、支払差額は一国にとって順か逆かでありうるが、一国の貿易差額は結局は均衡ししなければならない、⁵⁾ という命題である。支払差額は、それが一定の時期に期限のくる貿易差額だということによって、貿易差額とは区別されるのである。ところで、恐慌がもたらすのは、支払差額と貿易差額とのあいだの差を短期間のうちに圧縮するということである。そして、恐慌に見舞われ、したがってまっさきに^{6) 7)} 期限がくる国民のもとで展開されるような一定の状態は、⁸⁾ すでにこのような⁹⁾ 決済期間の短縮を伴うのである。まず地金¹⁰⁾ が送り出される。¹¹⁾ 委託販売に出された商品が投げ売りされる。投げ売りするために(同時に国内で貨幣を調達するために)¹²⁾ 商品が輸出される。利子¹³⁾ は上がり、有価証券は下落し、信用は解約を通告され¹⁴⁾、^①外国有価証券は投げ売りされ、この減価した有価証券への投下に外国資本が引き寄せられ²⁾、外国商品の輸入が減少す¹⁵⁾る、等々¹⁶⁾。最後に破産がやってきてそれが大量の債権を清算する。^{3) (17)} また¹⁸⁾ 破産した国¹⁹⁾ に向けて金属が送られるもする。なぜなら、^④その国あての手形は不確実であり、したがって支払は金属するのが最も確実だからである。)^{17) (5) a)}²⁰⁾ そのうえ、諸国民は数百万から成っているものであり、したがって一方の側に打撃を与えるのが他方の側には打撃とはならない、等々のことが加わる。²¹⁾ そのさい、アジ

アに関してはすべての国²²⁾がたいい同時に、直接または間接に、アジアの債務者である、という事情が加わる。このようなさまざまな事情が他の国²³⁾に²⁴⁾作用を及ぼすと、この国で²⁵⁾地金輸出²⁶⁾が始まり、要するに支払期限がやってきて、同じ現象が繰り返されるのである。⁶⁾1)

- ①〔異文〕「外国」——あとから書き加えられている。
- ②〔異文〕「れ、外国商品の輸入が減少す」——あとから書き加えられている。
- ③〔異文〕以下の〔本稿4行あとの「加わる。」までの〕部分は、このパラグラフの文のあとにある。この部分は、「I」という組み込み記号によって、この箇所に入れるように指示されている。
- ④〔異文〕「その国あての」——あとから書き加えられている。
- ⑤〔注解〕この箇所につけられた脚注a)をマルクスは仕上げなかった。
- ⑥〔訂正〕「}」——この閉じ括弧は、一つ前の文の末尾につけられている。
〔これは、前出の「異文」注③に記載されているマルクスの指示によって、この文のあとに書かれていた部分をこの文の前に組み込んだことに対応する訂正である。〕

- 1) 「{ } および「}」——削除。
- 2) 挿入——「相互間の取引で」
- 3) 「その分だけ〔pro tanto〕」→「残高については」
- 4) 「そうではないのであって、」→「そうではない。そして、」
- 5) 「支払差額は一国にとって順か逆かでありうるが、一国の貿易差額は結局は均衡しなければならない、」→「一国の貿易差額は結局は均衡しなければならないといえ、支払差額はその国にとって順か逆かでありうる」
- 6) 「まっさきに」→「いま」
- 7) 挿入——「支払」
- 8) 「状態は、」→「状態、——このような状態は」
- 9) 「このような」→「そのような」
- 10) 「地金」→「貴金属」
- 11) 挿入——「次には」
- 12) 「(同時に国内で貨幣を調達するために)」→「、または国内で輸出に対する前貸貨幣を調達するために、」
- 13) 「利子」→「利子率」
- 14) 「有価証券は下落し、信用は解約を通告され」→「信用は解約を通告され、

有価証券は下落し」

- 15) 「れ、外国商品の輸入が減少す」——削除。
- 16) 「, 等々」——削除。
- 17) 「(」および「)」——削除。
- 18) 「また」→「そのさい,」
- 19) 「破産した国」→「恐慌の起きた国」
- 20) 「a)」——削除。(上の注解注⑤を見よ。)
- 21) 「そのうえ, 諸国民は数百万から成っているものであり, したがって一方の側に打撃を与えるものが他方の側には打撃とはならない, 等々のことが加わる。」——削除。
- 22) 「国」→「資本主義国」
- 23) 「国」→「関係国」
- 24) 挿入——「十分な」
- 25) 挿入——「も」
- 26) 「地金輸出」→「金銀の輸出」

商業信用の場合に利子が⁽¹⁾信用 [596] 価格と現金価格との差額として^{1) 2)}はいってくるのは、ただ、手形の期間が普通のそれよりも長い場合だけである(長期手形)³⁾。普通は⁴⁾そうはならない。そしてこのことは、各人が一方の手ではこの信用を受け他方の手ではそれを与えるということで説明がつく。⁵⁾しかしこの場合にこうした形態で〔すなわち利子の形態で〕割引料がはいってくるかぎりでは、それはこの商業信用によってではなく、貨幣市場 [money market] によって規制されるのである。

- 1) 「(」および「)」——削除。
- 2) 挿入——「商品価格に」
- 3) 「(長期手形)」——削除。
- 4) 「普通は [sonst]」→「そうでない場合には [anderfalls]」
- 5) エンゲルス版では、ここに、エンゲルスによるものであることを明記して、次の文が挿入されている。——「これは私の経験とは一致しない。——F. エンゲルス」

{1) かりに貨幣資本 [monied Capital] への需要(利子率)と商品の供

給（その相対的供給）とが²⁾ 同じものだとすれば、考えている³⁾ 商品が違えば、または同じ商品でも考えている段階が違えば⁴⁾、利子は⁵⁾ 低かったり高かったりするはずである。¹⁾1844年にはイングランド銀行の利子率は、4%（1月から9月まで）と、11月から年末までの2 1/2%および3%⁶⁾とのあいだを動揺していた。1845年には、1月から10月までは2 1/2%、2 3/4%、3%で、最後の数か月は3%と5%とのあいだだった。綿花（フェア・オーリアンズ）⁷⁾の平均価格は、1844年には6 1/4ペンスで、1845年には4 7/8ペンスだった。1844年3月3日にはリヴァプールの⁸⁾在庫は627,042梱で、1845年3月3日にはそれは773,800梱だった。綿花⁹⁾から推定するのであれば、利子率は¹⁰⁾低かったはずであり、また実際この期間の大部分をつうじて低かった。しかし、糸から推定するのであれば、利子率は高かったはずである。というのも、その価格は相対的に高く、利潤は絶対的に高かったのだからである。¹¹⁾「1845年には、……良質で手ごろな綿花を重量ポンド当たり4ペンスで買うことができ、このような綿花から40番手優良2号ミュール撚糸が、ほぼ同様の額を超えないような支出で、たとえば紡績業者にとって重量ポンド当たり総計8ペンスの費用で紡がれました。この撚糸は大いに売れまして、1845年の9月と10月には重量ポンドあたり10 1/2ペンスまたは11 1/2ペンスで約定されました。そして若干の場合、紡績業者たちは、綿花の仕入価格に匹敵するような利潤を実現したのです。」（第1994号。『〔商業的〕窮境〔の原因の究明……のための〕上院秘密委員会〔報告〕』、1848年。）〔 〕¹²⁾ |

①〔注解〕 マルクスは以下の〔四つの〕文での数字を、『商業的窮境の原因の究明……のための上院秘密委員会報告書。……1848年7月28日。（1858年再刷）』、232ページから取った。

1) 「{ }」——削除。

2) 「貨幣資本〔monied Capital〕への需要（利子率）と商品の供給（その相対的供給）とが」→「利子率を規定する、貨幣資本の需要供給が、オウヴェーストンの主張するように、現実資本の需要供給と」

- 3) 「考えている」→「考察する」
- 4) 「考えている段階が違えば」→「違った段階(原料, 半製品, 完成生産物)で考察すれば」
- 5) 挿入——「同じときに」
- 6) 草稿では, ここに, もう一つ「%」が書かれている。
- 7) 「綿花(フェア・オーリアンズ)」→「フェア・オーリアンズ綿花」
- 8) 挿入——「綿花」
- 9) 挿入——「の低い価格」
- 10) 挿入——「1845年には」
- 11) エンゲルス版では, 以下のワイリからの引用を削除して, 次の文章を置いている。——「1845年には, 重量ポンド当たり4ペンスの綿花から4ペンスの紡績費用で糸(40番手優良2号ミュール撚糸)を紡ぐことができ, したがってこの糸は紡績業者にとっては8ペンスかかったのであるが, 彼はこれを1845年の9月と10月には重量ポンド当たり10 1/2 ペンスまたは11 1/2 ペンスで売ることができたのである。(あとに出てくるワイリの証言を見よ。)」ここで「あとで出てくるワイリの証言」というのは, エンゲルス版「第34章 通貨主義と1844年のイギリスの銀行立法」での引用(MEW版568ページ)を指すものであろう。そこでの引用は, 抜萃録「混乱」の352gページから取られている。
- 12) 草稿でもMEGAでも, このパラグラフの冒頭の「{」に対応する閉じ括弧がないが, 一応ここに挿入しておく。

| 360 上 | {¹⁾事柄の全体〔die ganze Geschichte〕は次のことによって試験すること〔ができる〕。²⁾——

かりに, 貨幣貸付業者〔moneylenders〕がいなくて, ³⁾ 現実に機械, 原料, 等々が貸付業者〔lenders〕のものであり⁴⁾, 彼らがこれらを(今日では家屋をそうしているように), 自分でもこれらの物の一部を所有している生産的資本家に貸し付ける, と想定するなら,⁵⁾ 貸付可能な「資本」〔loanable „Capital“〕⁶⁾ の需要供給は資本一般〔Capital überhaupt〕への需要供給と同じものであろう。{⁷⁾ といっても〔資本一般への需要供給という〕この⁸⁾ 文句は不合理なものではあるが。生産者⁹⁾ または商人にとって商品は彼の資本の一形態ではあるけれども¹⁰⁾, 彼が商品を需要すると

き,¹¹⁾ 彼はけっして資本としての資本を需要するのではない。そうではなくて、彼は¹²⁾ 商品それ自体を需要するのであり、それが彼の資本の運動のなかで資本としてどんな役割を果たすかにはかわりなく¹³⁾, ¹⁴⁾ 商品としてそれを買ひ、それに支払うのである。} ¹⁵⁾ このような事情のもとでなら、貸付可能な資本 [loanable Capital]¹⁶⁾ の供給は、生産的資本家¹⁷⁾ にとっては生産諸要素の供給と同じものであり、商人にとっては商品の供給と同じものであろう。だが明らかであるのは、¹⁸⁾ 利潤の分割がなによりもまず、この資本のうちのどれだけが貸付可能なもの [loanable]¹⁹⁾ であり、どれだけがこの資本の充用者の所有物なのか、という割合にまったくかかっている、ということである。} ¹⁹⁾

1) 「{ } および { }」——削除。

2) 「事柄の全体 [die ganze Geschichte] は、次のことによって試験すること [to bring to test] [ができる]。」→「事柄の全体 [die ganze Sache] は次のことによって決着させられる [zur Entscheidung gebracht werden] ことができる。」

3) 挿入——「その代わりに」

4) 「現実に機械、原料、等々が貸付業者 [lenders] のものであり」→「貸付資本家たちが機械、原料、等々をもっていて」

5) 「彼らがこれらを（今日では家屋をそうしているように）、自分でもこれらの物の一部を所有している生産的資本家に貸し付ける、と想定するなら、」→「彼らがこれらの物を、自分でもこれらの物の一部を所有している産業資本家に貸し出すとか、または今日の家屋の場合のように賃貸しをするとすれば、」

6) 「貸付可能な「資本」 [loanable „Capital“]」→「貸付資本」

7) 「{ } および { }」→「() および ()」

8) 挿入——「あの方の」

9) 「生産者」→「産業家」

10) 「ではあるけれども」→「であるが」

11) 「彼が商品を需要するとき、」→「それでも」

12) 挿入——「この独自の」

13) 「それが彼の資本の運動のなかで資本としてどんな役割を果たすかにはかわりなく」→「この商品が彼の資本の循環のなかで果たすべき役割にはかわりなく」

- 14) 挿入——「穀物とか綿花とかいう」
- 15) 「このような」→「そのような」
- 16) 「貸付可能な資本 [loanable Capital]」→「貸付資本」
- 17) 「生産的資本家」→「産業資本家」
- 18) 挿入——「このような場合には貸し手と借り手とのあいだの」
- 19) 「貸付可能なもの [loanable]」→「貸付けられたもの」

| 360 下 | ^①ウェゲリン氏 (^②イングランド銀行総裁)^{①②}によれば、利子率は次のものによって規定されている。^③

[597] すなわち、「遊休資本の量」によって (第 252 号, 1857 年^④)。「利子率はただ、投下を求めている遊休資本の量の一指標にすぎません」(同前,^⑤ 第 271 号)。のちには、この「遊休資本」^⑥は「浮動資本 [floating capital]」(第 485 号)と呼ばれるようになり、また次のものであることがわかるのである [turn out to be]^⑦。すなわち、「イングランド銀行券 {準備の状態にある [in reserve]}^⑧, ……地方銀行の通貨 [country banks circulation], 国内にある鑄貨の量^{⑨⑩}」(第 502^{⑪⑫} 号)であり、また後には「地金」(同前) {銀行のなかにある} もこれにはいる^⑬。^⑭こうして同じウェゲリンは、「われわれ^⑭が事実上遊休資本の大部分の所持者である」(第 1198 号) 時期には、イングランド銀行は利子率に大きな影響を及ぼす、と言うのである。^(⑮) 他方、前ロイド氏によれば [どうなのかについては], 前述を見よ。)([オウヴァストンによれば]^⑯ イングランド銀行は資本のための場所ではない、のである。)^⑰ さらに、第 1258 号 (同じウェゲリン)^⑰。「私の思うところでは、割引率は国内にある遊休資本の量によって規制されます。遊休資本の量はイングランド銀行の準備によって代表されていますが、これは事実上地金の準備です。ですから、もし地金引き上げられれば、それは国内の遊休資本の量を減らし、その結果として、残っているものの価値を高くします。」^⑱

① [異文] 以下の〔本稿 307 ページ 9 行までの〕部分は、〔この草稿 360〕ページの終りの、脚注 b) の前にある。マルクスは、「++）」というしるしでこの箇所を指示している。

- ②〔異文〕「イングランド」——あとから書き加えられている。
- ③〔注解〕このパラグラフの以下の部分の引用のなかの強調はすべてマルクスによるもの。
- 1) 「(イングランド銀行総裁)」——削除。
 - 2) 挿入——「(『銀行法委員会報告』, 1857 年)」
 - 3) エンゲルス版では改行されていない。
 - 4) 「, 1857 年」——削除。
 - 5) 「同前,」——削除。
 - 6) 「「遊休資本 [unemployed Capital]」」→「遊休資本 [unbeschäftigtes Kapital]」
 - 7) 「また次のものであることがわかるのである [turn out to be]」→「それを彼は次のようなものと考えている。」
 - 8) 「{準備の状態にある [in reserve]}」→「やその他の国内の流通手段」
 - 9) 「……地方銀行の通貨 [country banks circulation], 国内にある鑄貨の量」→「たとえば地方銀行の銀行券や国内の現存鑄貨」
 - 10) 挿入——「……私は浮動資本のうちに諸銀行の準備をも含めて考えます」
 - 11) 「502」——草稿では「501」と誤記されている。MEGA は、訂正目録に記載することなしに、訂正している。
 - 12) 挿入——「, 503」
 - 13) 「「地金」(同前){銀行のなかにある} もこれにはいる」→「金地金もこれにはいる (第 503 号)」
 - 14) 挿入——「」{イングランド銀行}「」
 - 15) 「(「および「」)」——削除。
 - 16) 「前ロイド氏によれば〔どうなのかについては〕, 前述を見よ。)([オウヴァストンによれば])」→「オウヴァストン氏の証言によれば,」
 - 17) 「第 1258 号 (同じウェゲリン)」→「ウェゲリンは次のように言う」
 - 18) 挿入——「(第 1258 号)」

¹⁾ これらの「変動(割引率の)は, 1844 年以来, 60 回ばかりありましたが, 1844 年までは, この変動は確かに, 同じ長さの期間に 12 回ほどしかありません。」(ニューマーチ, 第 1358 号, 同前。)²⁾ 「イングランド銀行がその銀行部の支払能力を維持するのに頼らざるをえないのは, この部にある準備を補充するために同行がなにをできるかということです。ですか

ら、イングランド銀行は、流出が進み始めたことを知ると、同行の準備の安全に目を配らなければならず、割引を引き締めるとか有価証券を売るとかし始めなければなりません。」(^①第2102号。ミル。)^③ {^④ 準備は、銀行部だけを見るかぎりでは、預金に比例するだけである^⑤。ところで^⑥ オウヴァストンたちによれば、銀行部は、「自動的な」〔銀行券〕発行を顧慮することなく、ただ銀行業者としてだけ行動しなければならない。ところが、ほんとうの逼迫〔pressure〕^⑦のときには、この機関〔イングランド銀行〕は、^⑧ 準備にはかわりなしに、地金^⑨に^⑩ 目を向けるのである。^⑪ }^⑫ }^⑬ /

① 〔訂正〕「第2102号」——手稿では「第1102号」となっている。〔1894年版でも「第1102号」となっていた。MEW版では訂正されている。〕

1) 次のニューマーチからの引用は、エンゲルス版では、ここから「第34章 通貨主義と1844年の銀行立法」のなかに移されている (MEW版573ページ)。

2) 挿入——「ジョン・ステュアート・ミルは次のように言う。第2102号。」

3) 「(第2102号。ミル。)」——削除。

4) 「{ } および { } 」——削除。

5) 「預金に比例するだけである」→「預金のためだけの準備である」

6) 「ところで」——削除。

7) 挿入——「の時期」

8) 挿入——「銀行部の」

9) 「地金」→「金属準備」

10) 挿入——「鋭い」

11) 「である。」→「であって、」

12) 挿入——「支払不能に陥るまいと思えば、そうせざるをえないのである。なぜならば、金属準備がなくなると同じ度合いで、銀行券での準備もなくなるからである。そして、このような仕組みをまさに1844年の彼の銀行法によってあの賢明につくっておいたオウヴァストン氏よりもこのことをよく知っている人は、だれもないはずである。」

正 誤 表

「利子生み資本」の草稿について（本誌第 56 巻第 3 号，1998 年）

27 ページ下から 8 行目 「より古風なもの」→「古風なもの」

28 ページ上から 7 行目 「より古風なもの」→「古風なもの」

「利潤の分割」の草稿について（本誌第 56 巻第 4 号，1989 年）

9 ページ下から 5 行目 「利潤の平均」→「利子の平均」

13 ページ上から 9 行目 「活気の増大」→「が活気の増大」

28 ページ下から 10 行目 「rektifiziren」→「rectificiren」

「利子と企業者利得」の草稿について（本誌第 57 巻第 1 号，1989 年）

59 ページ下から 3 行目 「誤語」→「訳語」

70 ページ上から 12-13 行目 「なお，gross はもともと net とすべきところだったであろう。」——削除

「流通手段と資本」の草稿について（本誌第 61 巻第 3 号，1994 年）

210 ページ上から 6 行目 「505 ページ 3 行目」→「505 ページ 33 行目」

『資本論』第 3 部第 1 稿の MEGA 版について（本誌第 62 巻第 2 号，1994 年）

245 ページ上から 1 行目 「of Karl Marx」→「by KarlMarx」

266 ページ下から 8 行目 「第 25～27 章」→「第 25～26 章」

270 ページ下から 2 行目 「194」→「294」

「銀行資本の構成部分」の草稿について（本誌第 63 巻第 1 号，1995 年）

4 ページ下から 6 行目 「「Ⅱ」以降の」→「「Ⅲ」以降の」

17 ページ上から 5 行目 「〔mortgages〕」→「〔mortgages〕」

52 ページ下から 7 行目 「57 ページ」→「59 ページ」